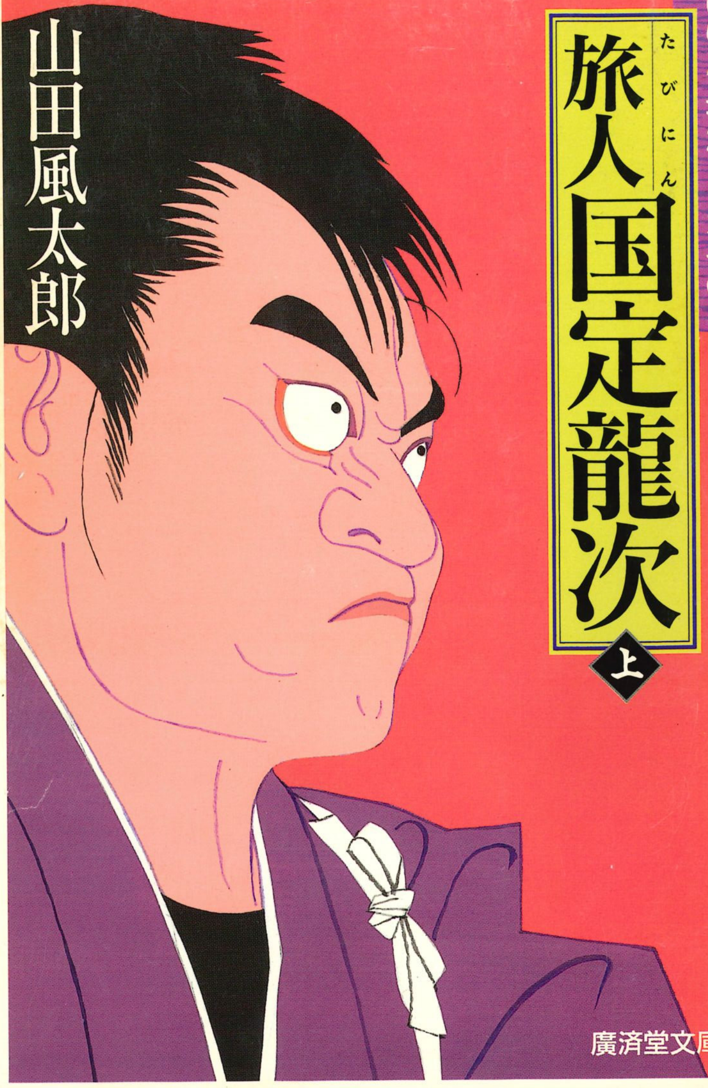
山田風太郎傑作大全⑮

旅人（たびにん）国定龍次

上

山田風太郎

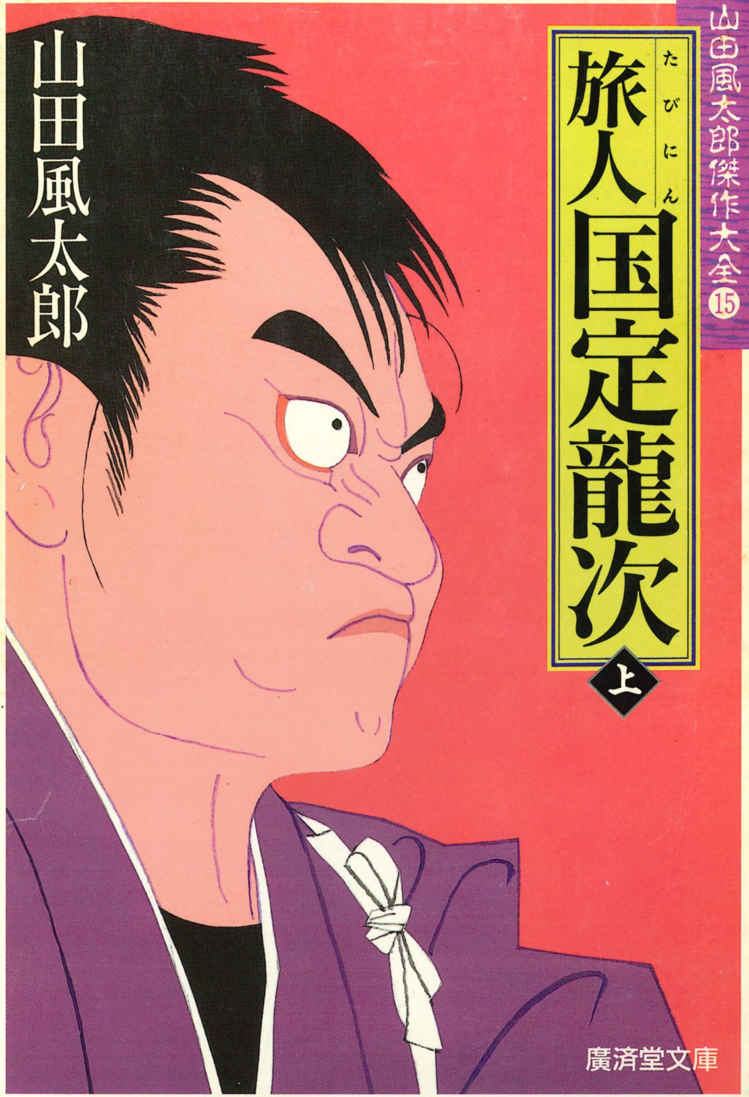


廣済堂文庫

廣済堂文庫絶賛発売中！

妖異金瓶梅――山田風太郎傑作大全①
十三角関係――山田風太郎傑作大全②
修羅維新牢――山田風太郎傑作大全③
誰にもできる殺人―山田風太郎傑作大全④
売色使徒行伝――山田風太郎傑作大全⑤
天国荘奇譚――山田風太郎傑作大全⑥
叛旗兵――山田風太郎傑作大全⑦
夜よりほかに聴くものもなし―山田風太郎傑作大全⑧
剣鬼と遊女――山田風太郎傑作大全⑨
青春探偵団――山田風太郎傑作大全⑩
切腹禁止令――山田風太郎傑作大全⑪
赤い蠟人形――山田風太郎傑作大会⑫
いだ天百里――山田風太郎傑作大全⑬
長脇差枯野抄――山田風太郎傑作大全⑭
旅人 国定龍次㊤―山田風太郎傑作大全⑮
旅人 国定龍次㊦―山田風太郎傑作大全⑯
死なない剣豪――山田風太郎傑作大全⑰
魔群の通過――山田風太郎傑作大全⑱
ヤマトフの逃亡――山田風太郎傑作大全⑲
八犬傳㊤――山田風太郎傑作大全⑳
八犬傳㊦――山田風太郎傑作大全㉑
江戸にいる私――山田風太郎傑作大全㉒
神曲崩壊――山田風太郎傑作大全㉓
太陽黒点――山田風太郎傑作大全㉔

カバーイラスト＝安里英晴
カバーデザイン＝原田幸生



山田風太郎

山田風太郎傑作大全⑮

旅人（たびにん）国定龍次 上

廣済堂文庫

606
や7-15
667

山田風太郎

旅人（たびにん） 国定龍次㊤

山田風太郎傑作大全⑮

廣済堂文庫

特選時代小説

9784331606070

ISBN4-331-60607-4

C0193 ¥667E

1920193006674

定価 本体667円 ＋税

上州大前田村の栄五郎親分に育てられた国定忠治の遺児・龍次。八州取締出役を斬り渡世人修業の旅へ。江戸一の大親分町火消し新門辰五郎の元に草鞋をぬごうとして、旗本青木弥太郎一味とのいざこざに巻きこまれる。そこで意気投合したヒゲ万こと草堂万千代を用心棒として甲州へ旅立ち、黒駒の勝造を訪ねたものの彼に利用され、たった二人で清水の次郎長一家に立ち向かうはめになる。果たして龍次の運命は…。

特選時代小説
廣済堂文庫

山田風太郎
やまだ ふうたろう

大正11年兵庫県生まれ。東京医科大学卒業。昭和22年『宝石』新人募集に応募した「達磨峠の事件」がデビュー作。昭和23年「眼中の悪魔」で第2回探偵作家クラブ賞短篇賞を受賞。昭和30年代以降は一連の忍法帖シリーズで一世を風靡し、昭和40年代には『明治断頭台』『明治波濤歌』など明治ものの作品が続き、以後は室町ものに新境地を示す。近年、若い読者の間で人気復活。

旅人 国定龍次㊤
定価 本体667円 ＋税
平成9年10月1日 初版
平成10年10月30日 2刷
著者 山田風太郎
発行所 廣済堂出版

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 15

旅人 国定龍次(上)

山田風太郎

廣済堂文庫

特選
時代小説

山田風太郎

旅人 国定龍次(上)

廣済堂文庫

特選
時代小説

2230①

廣済堂文庫売上カード

廣済堂文庫	山田風太郎
山田風太郎傑作大全 15 旅人(たびにん) 国定龍次(上)	
606	や－7－15

☆本カード一〇〇枚を一口として貴店様印を押し、小社までお送り下さい。貴店様の売上資料にさせて頂きます。

廣済堂出版
〒105 東京都港区芝3-4-12
営業 03(5445)1202
関西支社 06(4444)5911

ISBN4-331-60607-4 C0193 ¥667E

廣済堂文庫注文カード

特選 時代小説

書店・取次店

部数

700

<606>や－7－15

山田風太郎傑作大全 15

旅人(たびにん) 国定龍次(上)

廣済堂出版

山田風太郎

定価 本体667円＋税

ISBN4-331-60607-4 C0193 ¥667E

山田風太郎　旅人　国定龍次㊤

山田風太郎

風にまかせた定めゆえ旅は死ぬまで
股旅の旅人国定龍次はどこへゆく。

特選時代小説　廣済堂文庫

廣済堂文庫

特選時代小説

山田風太郎傑作大全

好評発売中!!

妖異金瓶梅
十三角関係
修羅維新牢
誰にもできる殺人
売色使徒行伝
天国荘奇譚
叛旗兵
夜よりほかに聴くものもなし
剣鬼と遊女
青春探偵団
切腹禁止令
赤い蠟人形
いだ天百里
長脇差枯野抄

特選
時代小説

山田風太郎傑作大全 15

旅人 国定龍次(上)

山田風太郎

廣済堂文庫

目次

野州 6
上州 36
江戸 84
総州 174
甲州 206
駿・遠・参 324

旅人（たびにん） 国定龍次（くにさだりゅうじ）（上）

野州

一

元治元年春、筑波山に攘夷の旗あげをしたいわゆる水戸天狗党は、討伐にきた幕府の大軍と戦いをはじめた。

いくさはやがて那珂湊に移ったが、攻防半歳、ようやく敗勢におちいった天狗党の生き残り約一千は、いったんは常陸北端の大子村までのがれたが、そこで玉砕するよりは、いっそ長駆上洛して、いま禁裏守衛総督として京にある水戸出身の一橋慶喜公に、われわれの旗あげの志をきいていただこう、と軍議を決し、十月末、決死の上洛を開始した。

決死の——というのは、当然幕軍の追撃はあるだろうし、道程の諸藩もむろん無事に通さないだろうと予想したからだが、これが意外にもたいした支障はなかった。幕軍に追跡の余力はなく、諸藩もまた恐慌状態におちいって、この叛乱軍の通過を見まもるばかりであった。ところどころ散発的に、見てくれだけの抵抗の気勢を見せた藩もあったが、たちまち一撃のもとに蹴ちらされた。

敗れたりとはいえ、なにしろ一千の天狗党なのである。これが鉢金をつけた鉢巻をしめ、陣羽織、どんすのはかまに朱鞘をぶちこみ、鉄砲を持ち槍を持ち、十数流の旗をひるがえし、百数十頭の馬をともない、十数門の大砲を車にのせて行軍する。当時の北関東に、これに刃向かえる者はちょっとない。

事実、天狗党は歌った。——

「水戸の天狗に刃向かうやつは
出らば出てみろ、ぶっ殺す」

無用の殺人掠奪は禁じられていたが、それでも戦闘態勢にある男たちの荒あらしい集団心理から、また実際上の補給の必要から、ゆくところどころで禁制が破られたことはいうまでもない。

彼らは野州——いまの栃木県——を、北東から、南西へななめに横切って、無人の境をゆくがごとく進んできた。

天狗党が、その野州南西端にちかい葛生という山中の宿駅に着いたのが十一月十日のことだ。

明日は渡良瀬川をわたっていよいよ上州へはいるが、さてどの道を通るか、と、その夕刻、幹部たちが軍議をひらいていると、村はずれに歩哨に出ていた隊士の一人がかけてきて、上州からきた二人の男が、嘆願のことがある、と申しておりますが、と伝えた。

「なんでも、上州大前田の栄五郎とやら申す爺で、もう一人はつきそいらしい若い男です。追い返しましょうか」

「なに、大前田の栄五郎？」

村でいちばん大きな農家の、家族はみんな一室に追いこんで、前庭に面した広い部屋に、総大将の武田耕雲斎、副将の田丸稲之衛門、軍師山国兵部をはじめ、十人ばかりが円坐を組んだ中の一人が、その名をきいて首をかしげたのだ。

「草堂さん」

と、呼びかけたのは、若いが事実上の天狗党の中心人物藤田小四郎であった。藤田東湖の子で、このとしまだ二十二歳だ。

「上州大前田村の栄五郎なる男をご存知なのか」

「有名なばくち打ちの親分だときいちょりもすが」

「ばくち打ちが何のためにきたものか。――そんなものに会ってもしかたがない」

「しかし、天狗党の中にも少なからずばくち打ちがまじっちょるが、これがそこらの浪人隊士諸君より、けっこう働くじゃごわせんか」

と、草堂は笑いながらいった。

年は三十なかばだろう。みな陣羽織をつけている中に、この男だけ、さかやきをのばし、黒紋付によれよれのはかまをはいて、いかにも浪人然とした姿だ。口ひげをはやし、みるからに豪快濶達の風貌の持ち主であった。

この天狗党はむろん水戸侍が主軸だが、三分の一くらいは浪人や農民や博徒などがまじっている。

「そこらの浪人隊士よりやくざのほうがよく働く」といったけれど、この草堂万千代という男

自身が浪人なのであった。言葉でもわかるように、薩摩の人間だという。

彼はいった。

「上州で有名なばくち打ちの親分が、どうやら乾分一人だけをつれて、殺気みなぎる天狗党の本陣に何のために乗りこんできたのか、とにかく話をきいてやってもよかごわせんか」

「草堂さんがそういうなら、会ってやろう。つれてこい」

と、藤田が庭の隊士にいった。隊士はかけ去った。

まもなく、七、八人の天狗党にかこまれて、その二人の男がやってきた。

二

草堂が立って、少しひらいていた障子を大きくあけた。

往来をへだてる数本のけやきの大木の葉はすべて落ちつくして、それでも風があるので枝はみなゆれて、あかあかとななめにさした夕日も、その中にひしめいている隊士たちの剣光槍影も、ことごとく砂けぶりにけむっている。

老若二人だが、この季節にどっちもあいみじんの袷だけで、羽織はおろかじゅばんもつけていないようだ。それどころか、素足にわらじをはいただけだ。若いほうは尻っからげしている。こっちは長脇差を右手に持っているが、老人のほうは無腰である。

老人のほうが大きかった。背丈は六尺にあまり、巨木といった感じがする。年は七十をこえているだろう。白髪まじりだが、やや長目のあから顔に、尻あがりのふとい眉、大きな眼――

造作からいえばおっかない容貌のはずだが、ふしぎにおだやかな印象を与える。何にしても一見しただけでただ者ではない。

　これが縁先の地べたに坐った。——

「龍」

と、ふりかえって、乾分(こぶん)の若い者に、

「おめえも土下座しろ」

と、いった。

　龍と呼ばれた乾分は何かいいかけたが、老人の眼におさえられて、同じように地べたに坐った。

　が、老人が平伏しても、彼は横をむいているだけであった。——いま老人のほうが背が高いといったが、この若者がふつうより背が低いのだ。が、力士のようにふとって、しかも筋肉質で、童子みたいにあどけない顔だちなのに、常人の倍くらいある大眼玉からは、殺気のようなものがかがやいていた。

　老人が顔をあげて、

「お目通りおゆるし下すって、ありがとう存じます。手前、上州勢多郡(せたごおり)大前田村に住む栄五郎と申す爺でござえますが、天狗さまにおねがいのことがあって参上した次第でござえます」

と、あいさつしたとき、縁側に立っていた草堂万千代が、ふいに、

「ちょっと待て、それよりおはんのつれてきた乾分はなんちゅうやつじゃ？」

と、妙な問いを投げかけた。

「へえ、龍次と申しやすが——」

　栄五郎がめんくらった顔で答えると、草堂は、

「おいっ、千乗坊はそこらにおらんか」

と、けやきの向こうをながめやって、さけんだ。

「おらなんだら、だれか探して、千乗坊をここへ呼んできてくれ。——」

　龍次は狐につままれたような表情で、

「お、おれが、どうしたってんでえ？」

と、つぶやいた。

「さて、大前田の栄五郎親分。……お前の願いとは何じゃね？」

　草堂万千代はむきなおって、あらためてきいた。

「ええ、それでは申しあげます」

　栄五郎は口をきった。

「つかぬことをおうかがいいたしまするが、これから天狗さまはどちらへおゆきでござえましょうか？」

「むろん、上州へはいる」

「上州といっても、この葛生(くずう)村の先の田沼から道は二つござえます。一つは西へいって足利、一つはちょっと南の梁田(やなだ)の方角へ——そのどちらをお通りでござえましょうか？」

実は、そのことについて先刻から軍議中であったのだ。

「それをきいて、どうしようっちゅうのか」

「まことに怖れいったお願いでごぜえますが、足利をお通りになることはなんとかごかんべん願いてえんで。——」

「たわけっ」

と、怒号したのは、栄五郎のすぐうしろに棒を持って立っていた陣羽織の侍であった。下総(しもうさ)浪人の笠原彦十郎という、天狗党中でも矯激(きょうげき)できこえた男だ。

「尊皇攘夷の旗をかかげて西上しつつある天狗党の進撃路を、虫ケラのような博徒ふぜいが指図しようというのか！」

「指図なんて、大それた……ただ、お願いに参ったので……」

「うぬはそれを足利藩からたのまれたのか」

「いえ」

栄五郎の顔に、ちょっと狼狽(ろうばい)の波が立った。

「そうでなければ、一介のばくち打ちがそんなことを申しこんでくるはずがない」

と、笠原はいいつのった。

「そんなことを、ばくち打ちに申しこませる足利藩とはなんだ。天狗党を何と考えておる。そうか、思うに足利藩は、天狗党への献金をおしんで、うぬのようなばくち打ちに依頼したものにちがいない」

実はいままでの道程、ゆくさきざきの諸藩は、天狗党に抵抗するどころか、何千両かの軍資金を提供して、自分の藩を通らないように哀願したのである。

「即刻帰って、足利藩にいえ。足利を通ってもらいたくなければ、重役みずから一万両持ってこいと。そうでなければ、明日、天狗党は足利をまかり通る。——下郎、帰れっ」

と、わめくと、棒をふりかぶって、老人の肩をなぐりつけた。

いや、なぐりつけようとした。そのとたん、ばすっという凄まじい音がその脇腹から立って、笠原彦十郎はのけぞりかえった。

ねじまわすようにした胴から滝みたいに血がしぶいて、彼はあおむけにころがった。

地上に坐ったままの乾分、龍次という男が斬ったのだ。坐ったまま——いや、片ひざたてて、うしろになぎはらった長脇差に、夕日が真っ赤な光をはねていた。

数瞬、一帯はしいんとした。庭のまわりにひしめいていた天狗党たちも、まるでフィルムをとめたように静止した。

あろうことか、千人を数える天狗党の本陣で、その隊士をぶった斬るやつがあろうとは。

まっさきに動いたのは、その張本人であった。

ぱっと鞠(まり)みたいにおどりあがると、独楽(こま)みたいに一回転して、

「上州一の大親分、大前田栄五郎を棒でぶんなぐろうたァ、と、とんでもねえモグラ野郎だ。モグラだから斬った！」

と、絶叫した。

「さっ、くるなら、き、きやがれ、モグラ天狗ども！」
そして、大地に両足をふんばり、長脇差を八双にかまえた。
はじめてわれわれにかえり、八方の天狗党が地鳴りのようなうめきをあげ、どっと動き出そうとした。

三

そのとき、
「ま、待てっ」
と、大音声でさけんだ者がある。縁側に立っていた草堂万千代であった。片手をあげて、
「おう、千乗坊か。こっちへこい！」
と、さしまねいた。
さっき隊士が呼びにいったのはその男か。――坊主あたまにねじり鉢巻をしている。墨染めの衣のそでを背にまわして結んでいる。そして刀を腰に横たえ、おまけに槍までついている。まるで僧兵だ。
が、この場に及んで天狗党たちが、「――お！」と眼を奪われたのは、その千乗坊といま凶行をほしいままにした無法者が、姿こそちがえ、まるで金剛童子みたいな顔と体形がそっくりなことであった。
もっとも、年は五つ六つ、千乗坊のほうが上のようだが、それでも二十代のなかば。これが、

ぐるっと大眼玉をむいて、
「はてな？」
と、首をかしげた。
一方、これははたち前後の龍次のほうも、同じようにぐるっと大眼玉をむいて、
「て、てめえはなんでえ？」
と、狐につままれたような声を出した。おたがいに相似を認めたのだ。
が、
「何にしても、うぬはわが同志を殺しおったな」
と、僧兵が槍をとりなおすと、
「おうっ、親分にむかってかんべんならねえまねをしやがったから、た、たたッ斬った。て、てめえも斬られてえなら、さあ、きやがれ！」
と、龍次のほうも刀をふりかぶった。この若者はすこしドモリのくせがあるらしい。
「待て待て」
草堂万千代が声をかけた。
「千乗坊待て。おはんは国定忠治の子じゃげな。そのおはんと、これほどよく似た男があかの他人であるはずはなか。そりゃおはんの弟じゃなかか！」
それに気づいたから、さっき千乗坊を呼んだのだろう。
「栄五郎どん」

と、草堂が眼を移した。いつのまにやら、薩摩弁で殿をつけている。
「その龍次とやらいう男は、国定忠治どんの子じゃなかか！」
こっちにも、どんをつけた。
この騒動のあいだ、地べたに悠然と坐ったままであった大前田の栄五郎は、このときはじめてしぶい笑いを浮かべて、
「おっしゃる通りでごぜえます」
と、いった。草堂はうなずいた。
「やっぱり、そうか」
千乗坊は立ちすくんで、ためつすがめつ相手をながめていたが、
「わしに腹ちがいの弟がある――あったことはきいていた。名まで知らなんだが、お前、龍次というのか。わしは坊主になる前、虎次と呼ばれていたんだ。顔かたちもそっくり……まちがいない、お前はわしの弟じゃ！」
と、さけぶと、千乗坊は槍を投げ出し、走りよって龍次を抱きしめた。
そのふとい腕の中で、ぐらぐらゆすられながら、
「へーっ？　お、おいらが国定忠治の子？」
茫然として、龍次はつぶやいた。こっちは、いまはじめてそのことを知ったらしい。
そこにころがっている屍骸などどこへやら、といったあんばいになったが、まわりの天狗党たちもしばし気勢をそがれてざわめき合った。

というのは――この千乗坊という僧は、ほんの三日ほど前、天狗党が鹿沼まで進んできたとき本陣にかけこんできて、かねてから攘夷の志あり、是非とも一党に加えてくれと申しこんできたもので、下野都賀郡の出流山千手院満願寺の僧だという。出家の身で血なまぐさい武装集団に加わるとは、と、首をひねる党幹部に、いや、私は国定忠治の子で、と素性を打ちあけたので、たちまちその名が知れわたったのだ。
いま大前田の栄五郎と聞いてもその名を知らない人間でも、国定忠治という名は――もう十何年も前に死んだはずなのに――上州はおろか、関東一円で知らない者はない。天狗党の侍のめんめんでさえ、みな知っていた。千乗坊は参加を許された。
そこにまた、その弟がここに出現したとは。――
混乱している天狗党をよそに、はじめて兄弟と知ったらしい兄弟は何やら会話している。
「栄五郎、さっきのおはんの話のつづきじゃが」
と草堂万千代がきいた。
「もし、われらが足利藩を通るといったら、どげんするな？」
「足利藩のほうでは、かなわぬまでも面目にかけてひといくさする、とのことで。――」
「あはは、たかが一万一千石の小藩、天狗党の前にゃひとひねりじゃろうが」
「さようでごぜえましょうな」
栄五郎は落ちつきはらっていった。
「しかし、そのあと――」

「そのあと？」
「上州じゃ、口はばったいいいぐさでござんすが、この栄五郎の口ひとつで、火の中、水の中へでも飛びこむ渡世人が、八万騎とはいわねえが、八千人くれえはおります。これが天狗さまが上州へお通りになるあいだ、怖れながら、死に物狂いにお手向かいいたします」
天狗党のあいだに、波が打った。せせら笑いと怒りの波であった。
「静かにせい。いま軍議中じゃ。これも軍議だ」
と、草堂は一喝して、
「山国軍師、どげんしましょうかな」
と、ふりかえってきいた。

四

「いやだっ」
という大声がひびいた。
座敷の幹部連の中からではなく、庭の栄五郎の乾分の口からである。
「おいら、て、天狗党なんかにゃ、はいらねえよっ」
「兄弟でありながら、尊皇攘夷の義軍に参加せんというのか」
と、千乗坊がいった。
どうやら二人の問答のあげくのはてのやりとりらしい。

「おいら、さ、侍ってえ野郎がだいっきれえなんだ。百姓や町人にゃそっくりかえりゃがってよ、自分より強えのがくると、米つきバッタみてえに降参しやがる。そ、それもこんどみてえに渡世人を使ってよ」
吐き出すように龍次がいう。おや、彼はいま足利藩からそういう役目を頼まれた親分についてきたのではなかったのか。
「だから天狗党は義軍だといっているではないか」
「義軍が一万両よこせというのか。いまここにころがってるモ、モグラ野郎がそういいやがったぞ」
千乗坊は絶句した。
天狗党がまたどよめいたときに、座敷の山国兵部、藤田小四郎らと数語やりとりしていた草堂が庭をむいて、
「栄五郎、では足利を通らず、ほかの道なら上州を通って、ええのか」
「それはお心のままで」
「それじゃ、足利を避けて梁田から太田のほうへ出よう」
天狗党の中から、どなる声があがった。
「ばかなっ、味方を一人殺されたというのに――」
「天狗党が、やくざふぜいをこわがるのか。天狗党の恥ではないか」
「軍師っ、その草堂氏は外から来た浪人ではござらぬか。その人物にかようなとりひきをさせ

て、それでよいのでござるかっ」
四、五人、縁側のほうへかけよろうとしたのを、
「ひかえおれ」
と、草堂万千代は大喝して、刀を鞘のまま縁にとんとついて、
「軍議で決したことだ！」
と、叱咤した。
「天狗党の大目的は上洛にある。そのために道程なるべく無用の犠牲をふせぎ、一日一刻も早く京へ近づくことにある。そのこともわきまえぬ馬鹿者は天狗党から去れ」
一息おいて、
「なおまた笠原は、一万両強請など、天狗党の軍律に反した」
と、つづけ、庭を見下ろして、
「大前田の親分、ご苦労。これでおはんの顔は立ったろう」
と、微笑した。
「ありがとうごぜえます」
と、栄五郎はまたひれ伏して、
「では、ごめんなすって」
と、立ちあがり、眼で龍次をうながした。
龍次は、それまでぶら下げていた血まみれの抜身を、尻っからげのきもののすそでぬぐって、

はじめて鞘におさめたが、なお殺気にみちた大眼玉で、まわりの天狗党をにらみまわした。
五、六歩いったとき、
「おい、弟、待て」
と、千乗坊が呼びかけた。
ふりかえると、墨染めの腰にさしていた刀を鞘のままぬきあげて、
「これをやろう」
と、ほうってよこした。
あやうくそれを受けとめた龍次に、
「そいつはおやじのかたみだ。はじめてめぐりあって、このまま一生別れる弟に、兄としてやるものがない。それをやろう。備前長船――小松五郎義兼という刀だそうだ」
と、いった。
龍次はめんくらった顔でその刀を眼の前にかざして、
「こりゃ長脇差だね」
とつぶやき、相手を見つめて、
「お、おめえさんはいらねえのか」
「わしは遠からず、この行軍の果てで死ぬことになろう。どことも知れぬ山や野でその刀を朽ちさせるのは惜しい。おまえにやっておいたほうが、おやじの心にかなうだろう。――わしにはこれがある」

と、地に落ちていた槍をひろいあげて、大地につきなおした。

「お前は拒絶したが、もういちどいっておく。おやじの心にかなう――といったが、龍次、もはややくざで一生を終わってよい時勢ではないぞ。世は一変するのだ。――さらばだ、ゆけ」

日は落ちて、葛生村は蒼茫の色をおびた寒風に吹きとがれている。このさわぎをまだ知らない天狗たちが、村の要所要所にかがり火を焚き出し、風に炎がなびいて、凄壮な景観を呈していた。

この天狗党の行営の景をえがいた幕府側の記録が残っている。

「……賊徒ども、村内数百ヵ所、かがり火を焚き、番人とおぼしき者、切火縄に鉄砲相かかえ、または白刃、槍等を持ち、厳重に出口出口を相かため、ときどき騎馬武者見まわり……」

これはもっと先の、上州から信州にはいったばかりのある村での描写だが、むろん葛生村でも同様で、それどころかまだ戦闘や行軍の疲労をかさねていない野州でのことだから、もっとあらあらしい猛気にみちていたにちがいない。

その中を、たった二人で乗りこんできた上州の遊侠の、乾分は天狗を一人たたッ斬り、親分は談判の目的を達して、悠々と立ち去ってゆく。

五

「いやあ、お、驚きやしたねえ」

「驚いたのはおれのほうだ。てめえ、人を斬ったのははじめてだろう?」

「親分をぶんなぐろうとしたんで、かっとのぼせあがってね。しかし、うまく斬れたようです。ま、馬庭念流の稽古はむだじゃあなかった」

「なにを感心してやがる。天狗党の本陣で天狗を斬るとは、ムチャにもほどがある。てめえがついてくるといい出したときから心配はしてたんだが、まさかあんなまねをしようたア……寿命が十年はちぢんだぜ」

「だ、だって親分は死ぬことを覚悟してたといったじゃありませんか」

「それとこれとは別だ」

「しかし親分は、ばかにおちついてましたよ」

「腰をぬかしてたんだ。とにかく、こんなに胆をつぶしたことアねえ。とんでもねえ野郎だ」

葛生から田沼への道であった。大前田の栄五郎と龍次はタッタと歩きながら話した。

寒風の空に金の鎌みたいな三日月はあるが、道はむろん暗い。しかし二人はそれを苦にするようすもない。

「いや、な、何より驚いたのア、おれが国定忠治の息子だってことです」

と、龍次が息はずませていう。夜目にも、その大きな眼がキラリとひかった。

「変なものが出て来たおかげだ」

栄五郎がにが笑いした。

「変なものって、お、おれの兄貴のことですか。あの浪人みたいな男のことですか」

「どっちもだ。あの浪人がいなけりゃ、おめえの兄貴も出てこなかったろう。いや、変なもの

といっちゃあ悪いが。……」

「さっききいたんだが、おやじにゃ、お、お妾が二人あったんですってね。その一人の子があの千乗坊とかいう坊主で、も、もう一人がおれだそうで。……」

「そうだ。国定のが死んで、そのときたしか九つだった一人は下野の出流山の寺にあずけられ、四つだったもう一人は、まだあんまり小さくって坊主にするわけにゃゆかねえから、おれが——おれというより、おれの妹がひきとった。つまり、おめえだ」

三年前に死んだ栄五郎の妹というひとに育てられたことは龍次も知っている。栄五郎には終世女房がなかった。自分がもらい子だということは知っていたが、しかし龍次は四つ以前のことは忘却のかなたにあった。

栄五郎はことし七十二、龍次は十九。

「出流山にあずけられたその小坊主が、あんなに大きくなって、槍をかかえてあらわれたのにはめんくらった。腹ちげえってえのに、よくあれだけ似たもんだ。あの浪人がおめえを見て、あれを呼び出して見くらべる気になったのはむりもねえ」

「親分」

「なんだ」

「おいらが国定忠治のせがれだってことを、ど、どうしていままで教えてくれなかったんです？」

栄五郎は答えず、しばらく黙って歩いた。七十二というのに、たいへんな健脚だ。

「はたちにでもなったら、教えてやろうと思ってたんだ」

ややあって、彼はいった。

そして、横目でちらっと龍次のほうを見た。龍次は一本の長脇差をかついで歩いている。さっき兄の千乗坊にもらったやつだ。

あれが国定のが持っていた小松五郎義兼か。その刀で忠治は何人ひとを斬ったろう。えらいものをくれやがった。

それにしても、あの兄貴もそうだが、この龍次の野郎、この二、三年、気味わるいほどおやじの忠治に似てきたじゃねえか。しかも、さっきのバッサリのやり具合、その気のみじけえところ、気性までおやじに似てきたようだ。

「おめえ、国定忠治の子とわかってうれしいかえ？」

「そ、そりゃうれしいです」

と、龍次は答えた。白い歯をむき出して、

「なんか、い、い、生き甲斐が出てきやがった」

「馬鹿野郎」

栄五郎は一喝した。

「おやじは天下の御大法にそむいてお仕置を受けた男だってえことを知らねえか」

「大戸の関所破りでござんすか」

「そうよ」

「そ、そりゃ、百姓にむげえ岩鼻の悪代官を斬って信州へ落ちてゆくときのことでござんしょうが」

栄五郎はまた黙った。

どういうわけか、国定忠治ってえ男は、やくざの世界で、死んでからだんだん評判がよくなってきた。それをいちいち訂正するのもおとなげなく――というより、こっちもうれしくなって口を出さないでいたら、嘘ばなしが次から次へと上塗りされて、いつのまにやら百姓のために立ちあがった大遊侠みてえな案配になってきた、と苦笑のほかはない。

「とにかく、はりつけで死んだ男だ。そのせがれだってえことを、おめえもあんまりいばって口にしねえほうがいい」

「親分が、おいらを忠治のせがれだってことを黙っていなすったのは、そ、そのせいですか」

「まあ、そうさ」

「親分はよく昔ばなしをしなさるんだが、い、いっぺんも国定忠治の話が出ねえのをふしぎに思ってたんだが、それもおいらのためですか」

「まあ……そうさ」

「そりゃとんだ取り越し苦労だ。おいらはもともと、大前田の栄五郎より、く、く、国定忠治のほうがよっぽどエレエと考えてたんだから」

「あはは、そうかい。……お、田沼だ」

と、栄五郎がいった。べつに怒ったようすはない。

田沼の町から西への道を、なお二人は急行しつづける。

明日天狗党が葛生を出発する前に、足利に報告しなければならない人があるのだ。天狗党は足利を通らない、と。

六

上州の大侠客と呼ばれる大前田の栄五郎が老骨をひっさげて、野州を進撃してくる天狗党に、彼らが足利を通るか通らないか、通ってもらいたくないという、偵察と要求をかねた使者となったのは、次のようなわけがある。

足利藩に、田崎草雲という御用絵師があった。

後世にも画人として名を残したほどの人だが、若いころ江戸で梁川星巌（やながわせいがん）の教えを受けたせいか、熱情的な勤皇家であった。

そこに天狗党が足利に近づいてくると知り、藩をあげてなすところもなくうろたえているのを見て、べつに重役ではないが、勤皇家であるところから特別に心痛して、当惑のあまり近くの大前田村の貸元栄五郎に助けを求めた。

というのは――。

草雲はもと足軽という軽輩だったのだが、若いころ足軽で絵に志があるという環境の煩悶と、家庭でのいざこざでとうとう藩を飛び出し、諸国を放浪してまわったことがあったのだ。

一方、彼は武芸にも通じた六尺ゆたかな豪傑で、当時、あばれ草雲とか、けんか草雲とか呼

ばれたような一面があった。で、その漂泊時代に、好んで諸国の俠客のところにわらじをぬいだ。

そのあげく、同じ上州の——足利はいま栃木県にあるが、このころは上州の中にはいっていた——自分の藩の近くの大前田の栄五郎が、日本じゅうでいちばんえらい親分だということを知った。またウマも合った。

それで、その後帰藩して士分にとりあげられ、御用絵師の身分になっても、何かといえば栄五郎を呼んでともに酒をくみかわすという仲になっていたのである。

で、こんどの天狗党迫るという難儀に際して、栄五郎を呼んで、手をついて頼んだ。

「もし天狗党が足利にくるなら、無抵抗で通すわけにはゆかないが、わが足利藩にはとうてい戦う力はない。また私個人としても戦いたくない。というのは、私は天狗党の行動そのものに共鳴があるからだ。しかもこの苦衷を、私が足利藩士として天狗党に訴えにゆくこともできない。また、事は秘密を要する。……かかる大事に一介の遊俠たるおぬしの手をかろうというのは、まことに異例のことだが、この進退両難の窮地を、何とか救ってくれまいか」

栄五郎は腕ぐみして考えていたのち、決然とうなずいた。

「ようがす、栄五郎、ひとつ身体を張ってみやしょう」

こうして彼は、一人、葛生へむかったのであった。

むろん、彼は死を覚悟していた。

ところが、足利から葛生へ歩いてゆく途中、うしろから砂けぶりをたてて追っかけてきた者

がある。

乾分の龍次であった。

彼は親分の栄五郎が、足利からの迎えの早かごにのせられて大前田村を出ていったのを、これはふだんの足利ゆきとようすがちがう、と感じて、心配のあまり追ってきたのである。

百中百、天狗党に斬られることを覚悟していた栄五郎は、事情を打ちあけて、龍次についてくること無用といった。

ところが、龍次のほうは猛然とふるい立った。それをきいた以上、親分を一人見殺しにするわけにゃゆかねえ、と、りきみ出した。

押し問答の末、結局栄五郎は、龍次をつれて天狗党の本陣へのりこむ次第になったのである。

七

彼らが足利の田崎草雲の家の戸をたたいたのは、真夜中に近い時刻であった。

まだ眠らず、首尾の如何を待っていた草雲は、この吉報をきいて、

「やれ、うれしや、天は足利藩を救った！」

と、狂喜し、

「いや、救ってくれたのは天ではない。おぬし、大前田の親分じゃ。ああ、私の眼力は狂わなんだ！」

と、栄五郎の手をおしいただいて落涙した。

栄五郎が天狗党本陣でのなりゆきを話すと、そのときはじめて草雲は、うしろの灯影にひざっ小僧をそろえている乾分に眼を移して、

「――おや？」

といった顔をした。実はきょうまで、考えるところがあって栄五郎は、この足利へくるとき龍次をお供にしたことがなかったのである。

が、むろんそれより草雲は栄五郎の話につられて、

「ふうむ。しかしよくまあ、命あって帰ってこられたものじゃ」

と、感心した。

「いや、その妙な男――どうやら本来の天狗党じゃなく、外からきた浪人のような案配でごぜえましたが、そのくせ本陣でなかなかの顔になっているらしい――そいつが、どうやらあっしの名を知っていてくれたようで、それがいなかったら、どうなったかわかりません」

栄五郎は首をなでて、

「ですが、草雲先生、天狗党はいったいこれから、無事京へ上れるもんでござんしょうか？」

「私はそれはむずかしいと見とる。どこの藩もわが藩同様ヒョロヒョロじゃが、なんといっても京まで百何十里か、どこを通るか知らんが、この冬の季節に幾山河。……どこかで力尽きて消滅しやせんか」

と、草雲はむしろ暗然と嘆息したが、

「しかし、いまきいたような融通むげの男が軍師役になっているとすりゃ、あるいは何とかう

まく上洛するかも知れんぞ。是非そうあって欲しいが。……」

と、ふとまた龍次のほうを見て、

「ところで、さっきから気にかかっておるが、あれはおぬしの乾分か。……はてな、どこかで見たことがあるぞ。――」

と、妙な顔をした。

「お気づきでござんしたか」

と、栄五郎は笑った。

「先生が昔、おかきになった画像のやくざ。――」

「おおっ、国定忠治！」

「そのせがれで」

「そうか！」

と、草雲はひざをたたき、

「なるほど、そっくりじゃ！」

と、大声でさけんで、あらためてまじまじと龍次に見いった。――

草雲は昔、忠治に会ったことがある。そのときの印象を彼自身筆にしている。

「余、かつて上毛にあそび、道にこれに会う。気勢凛然、人をして寒からざるに慄せしむ。真に一個の侠漢なり」

そして、大刀ひっつかみ、片ひざたててきっとにらみつけている忠治の像をえがき、その画

像はいまも佐波郡東村の養寿寺という寺に残されている。――

のみならず、上州一円における忠治伝説の美化にも、草雲は少なからず貢献している。

そういうことがあったから栄五郎は、いままで草雲に龍次を会わせなかったのだが、龍次にその出生を知られてしまった上は、もうかくしてもしかたがない、と、いまここにつれてきたのである。

「わしはお前のおやじを知っておる。いや、たいしたやつじゃった」

それまで居心地悪そうに、むっつりしていた龍次は、このときは相好をくずして、

「そ、そうでござんしたか」

と、ひざをのり出した。

「あれは天保の末、忠治が三十を少し越えたころであったか――」

と、草雲は恍惚といいかけたが、すぐにはっとわれにかえって、

「おお、今夜はそんな昔ばなしをしているときではない。とにかく、天狗党についての吉報、夜中とはいえ一刻も早く御家老にお伝えせねば。――」

と、起ちあがった。

八

草雲は壮年のころの貧乏時代に、窮迫のあまり妻を狂死させてから独り暮らしであった。で、下女にいそぎ酒サカナを出すように指図してから、自分はいそいで家老の邸へ出かけていった。

二人はご馳走になり、ぐっすり眠り、草雲の帰宅も知らなかったが、あくる日、さきに起きた栄五郎は、下女に草雲を起こさないようにいって、龍次をうながして、まだ暗い外へ出た。

「このまま大前田に帰(けえ)るのでござんすか」

眼をこすりながら、少し物足りなさそうに龍次がいう。相変わらず小松五郎をかついでいる。

「いや、ちょっと用がある。伊勢崎のほうへ回ろう」

その日の午後、たどりついた伊勢崎の善応寺という寺に、龍次はつれてゆかれた。

寺の前の店で、線香と付け木を求め、水をいれた桶をもらう。

墓地にはいって、おもてに念仏百万遍供養(くよう)塔と刻んだ小さな石塔を探し出した。あちらこちら欠けた石のてっぺんにとまっていた一羽の寒ガラスが、ぱっと飛び立った。

「うしろを見ろい」

と、栄五郎がいった。

けげんな顔で裏にまわると、

「遊道花楽居士(ゆうどうからくこじ)」

と、刻んであった。

それくらいは龍次にも読める。が、国定忠治という名はどこにもない。

栄五郎は、火打石でもやした付け木で線香に火をつけながら、

「大罪人だから俗名はかけねえ。遊道花楽居士、とあるだろう、それがおめえのおやじの戒名だ。大戸ではりつけになったあと、おめえのおふくろが、屍骸の右腕を切ってもらって、ここ

にそれを埋めて建てたのさ。――」
「へへえ、おふくろが……それで、おふくろは？」
と、龍次はくぐもった声を出した。
「それほど気丈な女だったが、自分が育てりゃ、はりつけにかかった国定忠治の子となる。子にとっては忠治と無縁の人間になったほうがしあわせだろうとおれにあずけて、涙をながしながら別れて、それっきり会ったことがねえ。しかしきくところによると、三年ほどのちに、三十になるやならずの若さで病気で死んだという。名は、おとく、といった。――」
栄五郎は線香を半分そなえて、
「しかし、女にしてはうめえ戒名をつけやがったなあ」
と、笑いながらいった。
「おれの知ってる忠治どんの生涯は遊道花楽といった感じじゃなかったが、惚れた女にはそう見えたんだろうなあ。――いまじゃあ、世間みんながそう思ってるかも知れねえ。あっちこっち石が欠けてるのは、諸国の渡世人がお詣りにきて、遊道花楽にあやかりてえと、墓を欠いて持ってゆくからさ。――龍、こっちへきて、お線香をあげろ」
龍次は墓の裏から出てきた。そして栄五郎の手に半分残ってくすぼっている線香をちらっと見たが、それには手を出さず、
「いや、線香より」
といって、自分の腰にさしていた長脇差（ながどす）を鞘（さや）のままぬきあげて、

「これをそなえてやろう」
と、墓の前に立てかけ、腰には例の小松五郎義兼（よしかね）をぶちこんだ。
「おやじ、あ、改めておめえさんからこの長脇差をもらう。おれにとって何よりのかたみだ。礼をいうぜ、な、なむあみだぶつ」
龍次の頰は涙に洗われていた。
からっ風に渦をまいて飛ぶ枯葉の中に、立ったまま手を合わせた龍次の姿に、大前田栄五郎は、自分がつれてきたくせに、ふっといまそのことを悔いた。

上州

一

足利をさけて、上州と武州の境をぬうように進んで、天狗党は信州に消えた。

それから彼らはどうなったか。——

それは人のうわさで、ときどき思い出したように消息を知るよりほかはなかったが、天狗党の惨烈きわまる最後が大前田村にも伝わってきたのは、翌年の春になってからであった。

和田峠で諏訪高島藩、松本藩などと戦い、これを撃破したあと、伊那路を南下して、木曾から美濃にはいった天狗党は、ここで京から一橋(ひとつばし)慶喜公が彼らを討伐するために出撃してくるという情報に愕然とした。

彼らはその慶喜公を頼って上洛しようとしているのに、禁裏守衛総督慶喜公は、彼らを叛乱軍と認めて討伐しようというのだ。

天狗党の幹部連は苦悩したあげく、慶喜公を避けて、なんと美濃を北上し、越前へ出るという道をえらんだのである。

時あたかも十二月、厳寒の季節であった。彼らは山岳万丈の雪と苦闘し、からくも越前に越

えたときにはすでに全軍消耗しきっていた。しかもゆくてには、慶喜公の命令を受けて出動した金沢藩その他三万の敵兵が待ち受けていたのだ。

常陸(ひたち)から万里の長征もむなしく、天狗党は降伏した。

そして、士分の者七百人ばかりのうち、三百五十二人は敦賀で処刑された。年を越えてこの二月のことである。あとは遠島ないし水戸佐幕党にひきわたされた。

——実はこの話を、龍次は、田崎草雲の口からきいたのである。

大前田の栄五郎が、足利の大難を救ってから、栄五郎と草雲の交わりはいよいよ親密になっていたが、赤城の山の春色がふかくなった三月なかば——一日、草雲がかごでやってきた。彼のほうから大前田村にやってきたのは、若き日の放浪時代以来久しぶりだ。

そして、栄五郎の家の奥座敷でこの話をしたのを、そばで龍次もきく羽目になったのだ。

「——す、す、するってえと……」

と、心配そうに彼は口を出した。

「お前の兄貴じゃが」

と、草雲はいった。

「処刑された者の名まではわからんが、しかし僧とあっては助けられたかも知れんぞ」

「いや、あの元気者だと……」

と、栄五郎が首をふった。草雲がきく。

「その、お前さんがかけ合ったという浪人者、あれはどうなったろう?」

「さあ?」
「浪人とはいえ、どうやら天狗党の参謀級であったらしいが」
「やっぱり斬られたんじゃあねえでしょうかね」
三人はふっと沈黙した。
栄五郎と龍次はあの日の天狗党本陣の勇壮な光景を思い出していたのだが、そういう記憶を持たない田崎草雲が、いちばんいたましい顔をしていた。尊皇の志を持つ彼は、天狗党に深い同情を感じていたのである。
「けっ」
と、龍次が天井をむいた。
「あんな馬鹿野郎、ど、どうなったって、自業自得だ」
「おめえ、兄貴が死んでも、悲しくはねえのかえ?」
「そりゃ、うれしかアねえが……く、国定忠治のせがれが、侍にまじって、あんな旗をかついで京へいって、いってえ何しようってんです?」
龍次は口をとがらせた。
「忠治のせがれなら、と、渡世人として生きりゃよかったんだ」
栄五郎はとりあわず、草雲のほうをふりむいて、
「それより、天狗党はせっかく美濃までゆきながら、なぜ越前なんかへいって自滅してしまったんでごぜえます?」

「それはいまいった通り、慶喜公と戦いたくなかったからだろう。侍として忠の道にかけてな」
「しかし、天狗党はその慶喜さまを頼って、かんなん辛苦の旅をつづけたのでごぜえましょうが……なぜ慶喜公は、天狗党の方がたの言い分を、とにかくきいてやる気におなりにならなかったのでごぜえましょう?」
「さ、そのいきさつはわからん。慶喜公には慶喜公の事情がおありになったんじゃろ」
草雲は嘆息した。
「そのこととは別に、侍の世界には、私などから見てもばかばかしいような、もってまわった順逆や面目やらのしがらみがあってな。……」
「つまるところ、みんな、ば、ば、馬鹿野郎ってえことです」
と、龍次がいったので、二人は笑い出した。
そのとき、一人の娘が代わりの駄菓子を持ってはいってきた。
年は十七、八か。はっと息をのむほど可愛らしくピチピチしているのが、神妙にかしこまってお茶をいれかえたあと、龍次の耳に口をよせて、何やらささやいて出ていった。
「親分、おいら、ちょっと」
と、龍次がすぐに立とうとする。
「なんだ」
「タケノコを掘ってくれってんで」

栄五郎が笑い出した。草雲は今夜泊まってゆくので、夕飯の御馳走の一つにするつもりらしい。

龍次が去ったあと、それを見送って草雲が笑顔でいう。

「さっき、お前さんの姪とかきいたが、いい娘さんじゃな」

「おそれいります。いえ、手前の姪じゃあなく、妹の孫で——まあ、いまは手前の養女、ってことになっている娘でござえますが」

栄五郎も、こわい顔を溶けるように崩していた。

「なんという名かな」

「おりんと申します」

「親分の前だが、いま、ちらっと見ただけじゃが、あの二人、いい仲だぞ」

「それは、どっちも同じ——手前の妹に育てられましたから、兄妹同様で」

「ああそうか。……いや、しかし、それだけとは思えんが」

「ははは、御眼力でござえますな。いや、年ごろとは面白いもので、仰せの通り、どうやら二人、兄妹とはちがう仲になったようでござえますね」

「やっぱり、そうか。ではさきざき、夫婦にしてあとをつがせる気か」

「いや、いっときはそう考えたこともござえますが、このごろ急に気がかりなことが生じましたんで」

と、栄五郎はいった。

「何が？」

「手前は、龍次が百姓にでもなってくれることを望んでおったのでござえますが……あれの母親もそう望んでおったでござえましょう」

「ふうん」

「ところが、どうもいけねえ。狼の子はやっぱり狼だ……と思わせられることが多かったところへ、去年のあの件で、あれが国定のせがれだってえことがばれちまって以来、いよいよ変になっちまったようで」

「と、いうと？」

「親の忠治を気どって、何かといえばそのまねをしたがる。なに、その親の行状ってえのも、半分は嘘でござんすが」

栄五郎は苦笑した。草雲はしかし大まじめで、

「しかし、忠治はたしかに侠漢じゃった。それにならうとは、お前さんのあとつぎとして結構じゃないか」

「忠治は最期ははりつけになりました。そのまねをすりゃァ、あいつも同じ運命をたどる心配がござえます」

草雲は黙りこんだ。

三月なかばというと、後年の四月なかばだ。

二人はしばらく、あけはなった障子の間から、鮮やかな新緑の赤城山をながめながら、それ

それ国定忠治の面影を頭によみがえらせていた。

二

ただいちどだけ忠治に会ったことのある草雲とちがって、むろん栄五郎のほうが想い出は多い。

しかし、考えてみると、へんな仲ではあった。

大前田村は上州勢多郡、国定村は上州佐波郡とはいうものの、そう遠くもない土地で同じばくち打ち稼業をやっていて、いちども喧嘩などしたこともなかった代わり、特に親密につき合ったわけでもない。

実は栄五郎のほうで敬遠の気味があったのである。

それは、ばくち打ちの貸元という渡世についての考えがちがったからであった。

貸元とは、旦那衆の手なぐさみの世話役以上のものでも以下のものでもなく、この世の裏側で、いわば盆ゴザのアカをなめて生きているようなもので、旦那方はもとよりのこと、まっとうに働いている百姓衆にも頭のあがらない稼業だ、と考え、だいぶ前から長脇差さえ捨て無腰で暮らしている栄五郎から見れば、縄張りをひろげるために腕っぷしで、かたっぱしから同業の親分をたおし、はてはお役人にさえ手向かうという忠治のやりかたは、まったくやくざの世界でも無法者としか思えなかった。

それでは忠治がきらいか、こわいか、というとそうではない。

いまは「天下の和合人」などと呼ばれている大前田の栄五郎だが、二十代のはじめごろまでは相当以上のあばれもので、賭場の争いからやくざ仲間を三人斬って、いっとき佐渡へ流されたこともある。

それを何年かのち、島抜けをした。

そのときちょうど真冬で、越後にただよいついてから雪の野山を何十里も走ったものだから凍傷にかかって、栄五郎の左足の指はいまでも三本しかない。

それから大いにかえりみるところがあって、だんだん「和合人」への道をたどってきたのだが、忠治の凄絶無比の生き方を見ていて、実はあっぱれと感心し、いや、あれでなくっちゃ一生やくざの道をえらんだ甲斐がねえかも知れねえ、と内心一種の羨望を感じる心も持っていたのである。とはいえ、このままじゃあ、あぶないな、と、ひとごとならず心配していたのだ。

一方、忠治のほうでも、どういうわけか、ひどく栄五郎を立てた。上のやつには何者にでもつっかかる忠治が、栄五郎だけには頭を下げた。

もっとも、栄五郎のほうが忠治より十七も年長で、だいいち上州における侠客としての格がちがったが、まれにひらいた親分同士の会合でも、すすんで忠治は栄五郎からおながれをもらい、「大前田のとっつぁん、大前田のとっつぁん」と、なつかしそうに呼んだ。

天保十三年、笹川の繁蔵が大花会をもよおしたとき、諸国の親分たちが雲のごとく参会したが、ちかくの大親分飯岡の助五郎が、虚勢を張って乾分を名代によこした。このとき忠治が、

「助ァどうした。いいか、大前田のとっつぁんでさえ何十里のさきから、わざわざお出ましに

なってるんだ。目と鼻のさきにいる助アどうしてこねえ」

と、満座の中で助五郎の名代を面罵した話は有名だ。

のちに忠治に御用の声がかかって、赤城山にこもったとき、栄五郎は大胆にも、包囲している捕方の眼をくぐって、忠治を訪ねたことがある。

酒や米、魚などの慰問品を乾分にかつがせて持参したことはむろんだが、べつに忠治を慰問するのが目的ではなく、賭場についての事務的な用件であったというのが栄五郎らしい。

赤城山の幕岩というところのほらあなに住んでいた忠治は、大前田の親分が山を上ってきたときいて飛び出してきて、いままで自分が坐っていた熊の皮の敷物に栄五郎を坐らせようとした。

「いやなに、きょうはお前さんに頼みごとがあってきたんだ。ものを頼むほうがそんなものに坐る法はねえ」

と、栄五郎は辞退し、実は自分の乾分が忠治どんの縄張りで賭場をひらきてえといっているんだが、ひとつ許してやってくれめえか、と用件を持ち出した。

これに対して忠治は、

「おれの縄張りといったって、いまはごらんのようなていたらくで、だれが賭場をひらいたって文句のつけられる立場じゃあねえ。それなのに、あぶないのを承知で、大前田のとっつぁんにわざわざあいさつに出向いてもらって、もったいねえことでござんす。どうぞ随意に使っておくんなせえ」

と、むしろうれし涙をこぼしたという。

さて、その忠治が、やがて赤城山を下り、妾お町のところに潜伏中、中風を発した。

それをきいた栄五郎は、ひそかに人をやって、死に恥かかぬように自決することをすすめたが、中風のせいか忠治がふんぎりをつけないうちに捕方にふみこまれて、とうとう御用弁になってしまった。

そして、彼がかつて破った大戸の関所の外ではりつけになったのが、嘉永三年十二月二十一日のこと。ときに国定忠治四十一歳。

で、そのあと、お町の生んだ男の子は、下野出流山の寺にあずけられて、千乗坊という小僧になり、もう一人の妾おとくの生んだ男の子は栄五郎がひきとってやったわけだ。

おたがいに好意は持っていたとはいうものの、それほど親密ではなかった——とくに栄五郎のほうからはいささか敬遠気味であった忠治の子を、あえてひきとって育てたのはいかにも栄五郎らしい所業であったが。——

三

しかし彼はじかに自分では育てず、妹にあずけた。どっちにせよ、やくざにするつもりはなかった。それが国定忠治の子であることは、本人にも他人にもないしょにした。

もっとも、妹にあずけたのは、栄五郎に女房のなかったせいもあった。彼は生涯独身だったのである。

面白いことに、彼には要吉という七つ年上の長兄があって、いまも同じ大前田に健在だが、これも独身だ。――健在も健在、実はこの大前田村一帯の親分は、栄五郎ではなく、ことし八十歳になる要吉爺さんなのであった。

思うに、大前田の栄五郎ほどふしぎな侠客はあるまい。

道で農民にあえば、はしに寄ってだれにでもおじぎをし、中年になってからは長脇差を木刀に変え、初老以後は無腰となったというような日常のつつしみぶりもその例だが、それでいて上州一はおろか天下一の大侠客と呼ばれ、しかも、地元に自分の縄張りというものを持っていないのである。親分は兄の田島要吉で、この老人が、なんと盲目なのだ。

これが、この世にあり得ないほど、兄弟、仲がよかった。要吉が盲目になったのも、若い弟の栄五郎が佐渡に島送りになったとき、悲嘆のあまり泣きつづけて、それで眼がつぶれてしまったといわれているくらいである。

島抜けをして帰ってきた栄五郎を、ほとぼりのさめるまで、ついにかくまい通したのは要吉であった。

そして、それ以後、盲目の兄を立て、背後にあってその縄張りを守りつづけてきたのは栄五郎であった。この一帯は、博徒の世界で、ほかにちょっと例のない桃源郷といえた。

では、栄五郎自身の縄張りはないのかというと、ある。ただしそれはこの大前田村かいわいではなく、日本じゅうにある。

ばくち打ちのいわゆる貸元の縄張りとは、要するにその土地で賭場をひらくショバ権のこと

だが、これが栄五郎には諸国に二百二十四ヵ所あった。

こんな貸元はほかにない。

兄要吉のうしろにあって――とはいうものの「大前田の」とつけばまず栄五郎、そして彼が「天下の和合人」――つまり日本じゅうの博徒の総フィクサーとして認められたゆえんだ。

この兄の要吉も、盲目でありながら貸元をつづけたという変わり者だが、これが、

「やくざはしょせん女房に歎きを見せる。まあ、持たねえほうがいい」

といって、生涯女房を持たなかったが、それに同感するところがあったのか、弟の栄五郎もそれにならったのである。

こういうわけで、栄五郎は、龍次を妹にあずけて育てさせたのだが。――

「やくざとは無縁に育てようと思っていたのでごぜえますが、いざとなってみるとそうもゆかず……いつのまにやら、手前のところにいりびたって、一の乾分づらをするようになり。――」

猫がやってきて、栄五郎のひざにはいのぼりかけたが、あまりそれが高いので、すべってころがりおちた。それを大きな手でひろいあげながら、

「そこへ、あの件でござんす。このままほうっておけば、二代目大前田の栄五郎どころか、二代目国定忠治になっちまうことは必定」

と、この遊侠の世界の王様も、田崎草雲に当惑した顔を見せた。

「もともとが、おやじそっくりの頭の荒っぽいのぼせ性の若僧で、こちらが縛っておかなきゃ

どうなるかわからず、といってとうてい縛り切れないやつと思われ、これからどうしたもんでござんしょうなあ？」

四

「あにさん、あにさん」

と、おりんが呼んだ。

「ごらんよ、いま掘ったばかりだというのに、タケノコに花びらが、もう雪のよう」

「わかってらい、春だもん」

と、ふりかえりもせず、龍次は鍬(くわ)をふりあげた。

栄五郎の家の裏手にあたる大竹藪の中であった。竹藪の中に桜の花びらが、ありふれた形容だが吹雪のように散りこんでくるのだ。

竹林を通して、北に赤城山が浮かんで見える。その赤城山が南へ、雄大きわまるすそ野をななめにひくところ、その中に点在する村々の一つが大前田村であった。

秋から冬へ、また早春にかけては、いわゆる赤城おろしが吹きおろし、毎日砂ぼこりにつつまれている土地だが、それだけに春たけなわのいまの季節の美しさはたとえがたいものがある。

「タケノコは朝掘りにかぎるんだが。……」

「だって、お客さんがさっきいらしたんだもん」

おりんは、そばにきていた。タケノコを掘るじゃまになるので、龍次の長脇差(ながどす)をそでで胸に

かかえている。龍次はしりっからげに向こう鉢巻で、夢中になって鍬をふり下ろしている。

「あにさん、もういいよ」

「待て待て、こいつァ、あしたになったらもう食えねえんだ。タ、タケノコってやつは、土がこうモックリわれたところじゃあねえと。……」

おりんは、くつくつ笑い出した。

「な、何がおかしいんだ」

「あにさん、まるでお百姓さんみたい」

「へっ」

しかし、野の匂いは、おりんからもたちのぼっていた。草雲が見とれて、ほめたが、一目見て、だれでもが眼を見はる、生き生きした野性的な美しさが、十七歳のおりんから、かげろうのように透明に燃えあがっていた。

しばらくたって、おりんがまたいった。

「あにさん、お百姓さんにならない？」

「なぜ？」

「おとっつぁんは、あにさんをお百姓にしたがってるもん」

「そいつァわかってるが。……」

「おとっつぁんのいうことをきかないと、あたし、あにさんの……」

と、いいかけて、おりんの頬がリンゴのようにあからんだ。あにさんのお嫁になれないわ、

といおうとしたことは龍次にもわかった。
「おめえ……お、おれが百姓になってもいいのかえ？」
と、龍次はいった。これもやや顔をあかくしている。百姓の女房になってもいいのか、という意味であった。
兄妹のように育てられた二人が、それとはちがう感情をけぶらせはじめたのは、ほんのここ一、二年のことにすぎない。
しかし、いま、はじらいながらこんな問答を交わせるのも、やはりものごころついてから兄妹のように育てられたせいであったろう。
ふいにおりんは、ひたと龍次を見つめて、
「あにさんのお嫁になれるなら！」
と、さけんだ。
あやうく龍次は、鍬をほうり出して、おりんを抱きしめるところであった。が、彼は鍬を地面に打ちこみ、それを支えにして両足を踏んばった。
「おれはいやだ」
と、いった。
「だいいち、おれが百姓になったら……お、大前田一家のゆくすえはどうするんだ？」
まるで自分が栄五郎のあとをつぐのは自然の理みたいなせりふであったが、それをいい気なものだ、という自覚は彼にない。

「おとっつぁんは、大前田一家は自分一代でつぶしたっていいと、考えていらっしゃるようよ」
「大前田一家をつぶす。……」
龍次は何ともいえない変な顔をした。
「な、何てえたわごとだい。親分はどうかしていなさる」
と、吐き出すようにいい、
「しかし、大前田一家など、どうでもいい」
と、うなったあと、
「おれは国定忠治の子だ！」
と、鍬から手をはなして、そっくりかえった。
「だいたいおいら、親分のやることが変だと思ってたんだ。村役人はもとより、道であうだれにも、こ、米つきバッタみてえにペコペコ頭を下げてばかりいてよ、なんのための長脇差だ。——おっと、そ、その長脇差さえささねえ、それじゃなんのためにやくざ渡世をやっていなさるんだ。おい、おりん坊、そ、その刀をよこせ」
腕をのばして、おりんの抱いていた長脇差をひったくって、
「こいつァ国定忠治の愛刀、こ、小松五郎義兼（よしかね）だぞ！」
と、ひっこぬいて、空中にかざし、赤城山をにらんで、
「赤城の山もこよいかぎり……と、こ、これをこうやって、おやじはあの山から下りて、か、

風にまかせたさだめゆえ、旅は死ぬまで股旅の……と、股旅へ出かけたんだ」
ミエを切って、恍惚状態にある龍次を、おりんは小さな口をあけて見ていたが、
「あにさん、あにさんは股旅へ出かけたいの？」
と、きいた。
「ああ、ゆきたい！」
「それじゃ、あたいはどうなるの？」
龍次はおりんをながめ、困惑した顔をした。
おりんはいった。
「それに、おとっつぁんのおゆるしがなきゃ、どこへ旅に出かけたって、だれも一人前の渡世人と見てくれないわよ。だいいち、無断で股旅へなんか出かけられないわよ！」

五

それから二十日あまりたった、四月のある日の午後。
村のまんなかの辻に、何やら高札が立ったというので、龍次はそれを見にいった。その前に、七、八人の百姓が群れている。
それへ近づこうとして、龍次はふと往来の向こうを見た。北のほうから一ちょうの山かごと、そのあとに四、五人の大前田一家の連中がやってくるのが見えたからだ。
「やあ、大親分」

と、龍次はさけんだ。
山かごにのっているのは、頭に黒い折頭巾をかぶり、雪のような白いひげをはやした黄門さまみたいな老人で——これが、栄五郎親分の兄で、大前田の正規の大親分、田島要吉老であった。
「かごで、ど、どこへ？」
「ひゅうひは」
と、白いひげがゆれた。
龍次か、といったのだ。八十歳のこの老人は、高齢のためにろれつがまわらなくなっている上に、歯が一本もなくてヨダレがもれるために不要のハ行、ラ行の発音がまじるので、意味をききわけられるのは、ごく身のまわりの人間だけだ。
「やあへ、れろれろ、つついへんふつひ、いてひひゃ」
山へつつじ見物にいってきた、といったのである。赤城は、つつじ——いわゆる赤城つつじの名所だ。
「し、しかし……大親分が……」
龍次はまじまじとかごの中の老人をながめやった。
要吉のしわだらけのくぼみの中の眼は、とじられている。この大親分は盲目なのである。
「うん、いははみほろぎゃ、られ、おはえもはよいてひい」
——うん、いまは見ごろじゃ、お前も早ういって見い。

と、老人が澄ましていったとき、
「ありゃなんだい」
と、かごについていた乾分の一人が、高札のほうへ、あごをしゃくった。
「山へゆくときゃ、あんな高札は見かけなかったぜ――」
「おいらもそれを見にきたんだ」
と、龍次が答えて、あらためてそっちへひき返すと、こんどは反対の方角から、娘がひとりかけてくるのが見えた。おりんだ。
「あにさん、たいへん――」
と、さけんだ。
「いま、八州さまが――」
「なに、八州？」
八州とは八州回り、正確には八州取締出役のことだ。それが栄五郎の家にきたというのだろう。
「あにさんをつかまえに」
「なんだと？」
龍次は眼をパチクリさせた。
「八州さまが、な、なぜおれを？」
「いいえ、なんでも、去年の天狗党の一人、出流山の千乗坊とかいうひとが大前田にかくれてる

はずだ、といって、おとっつぁんが、そんなひとはいないといったら、ではその弟とやらがいるはずだ、そいつを出せって。――」
そうきいても、とっさには何のことだかわからなかった。わからないなりに、
「よしっ、いってやる」
と、龍次がうなずいて、かけ出そうとすると、
「待って――そうじゃないの」
と、おりんはかぶりをふって、
「おとっつぁんは、だから龍次に姿を見せるな、どこかへ身をかくしておれって――あたい、それをいいにきたのよ！」
と、いった。
龍次はますますとまどった顔をしたが、
「そうときいちゃあ、いよいよ、し、知らねえ顔はしていられねえ。おいら、帰るぜ――」
と、地を蹴ろうとした。すると、
「はへ、はへ」
と、要吉老人が声をかけた。――「待て待て」
「なんひゅうほうはつふあ、れろ、よんへふへ」――「何ちゅう高札か、読んでくれ」
何を、ゆうちょうな、と思ったが、村でイランのホメイニ師のごとく尊崇されている要吉老だから黙殺はできない。

ようやく龍次は、高札を見あげたが——さて、これが読めない。ろくに字を知らないのだ。それで高札を見にくるとは、盲目で赤城山へつつじ見物に出かけた要吉大親分を笑えない。

「何て書いてあるんだ」

と、龍次はおりんをふりむいた。おりんは、ちらっと見あげて、

「ええと……元治二年四月七日から、慶応になるんですって……そう書いてあるようよ」

「なんだ、そ、そんなことか。……元治二年四月七日、あらっ、きょ、きょうじゃあねえか」

と、龍次はとんきょうな声をあげたが、そのまま、

「大親分、おききでござんしたか。そうだそうでござんす。——そ、それじゃ、おいらは——ごめんなすって！」

と、さけぶと、韋駄天のように砂けぶりをあげてかけ去った。

あとを見送って、要吉大親分の乾分たちは、

「八州が……栄五郎親分を調べにくるたァ」

「何用にしろ、へんてこりんなやつだな」

「そりゃ、モグリの八州じゃあねえか」

と、顔見合わせたが、すぐに一人が、

「ああそうだ。こんどこのあたりの八州回りは新規のやつになったときいたぞ！」

と、さけんだ。

六

——ここ三、四十年来のことだが、諸国——とくに関東に無宿渡世のやからが、おびただしく発生した。

とくに関東にいちじるしかったのは、ここには大藩が少ない上、天領や旗本の知行所が多かったからだ。げんにこの大前田村も七百石の旗本小笠原六五郎の知行所だ。

それは幕府の崩壊期にはいった何よりのあかしであったが、そうと見きわめた者はまだ少ない。

関東に無頼の徒がふえつづけている、ということは、取り締りの手が及ばないということで、それは捕らえようにも小藩、天領、旗本知行所がいりまじって、こっちへつかまえにゆけばあっちへ逃げ、あっちへつかまえにゆけばこっちへ逃げる、といったあんばいで、手におえないからであった。

そこで幕府が苦慮のあげくひねり出したのが八州取締出役だ。八州とは関八州の意味である。

これが、原則として八州を分担し、その中を巡回している。無法者があれば、天領だろうが藩領だろうが知行所だろうが、さらに他州だろうが、どこへ逃げても追いかけて逮捕し、抵抗すれば討ちすててかまわない、という権限を与えられた。いわば、関東の広域警察だ。

ここに新しく上州担当の八州回りに任ぜられた久保軍蔵という男が、ふと例の天狗党の一味

の件について耳よりな情報をききこんだ。天狗党はこの二月に全滅したのだが、なお逃亡したやつらが若干ある。

その中に、野州出流山の千乗坊という坊主が——これは、十五年ほど前はりつけになった国定忠治の子で、こんども信州などで大あばれして天狗党中でも勇名をとどろかせた男だということだが——天狗党が越前で降伏したとき、その中にいなかった、という。途中で戦死した、という話もない。あとで出流山の寺を調べたが、舞いもどった形跡もない。

その男が、かねてから上州大前田の栄五郎と知り合いで、げんにその男の弟が栄五郎の乾分になっている、ということを、久保軍蔵がききこんだのだ。水戸へ送られた天狗党の残党のだれかが白状した話らしい。

何にせよ、大凶国定忠治の子で、天下を騒がせた叛乱軍の残党。——これは見のがしてはおけぬ！

八州取締出役といばったところで、その土地土地の顔役になじみがなければ何もできない、というのが実状で、とくに上州では大前田の栄五郎という大親分のおめがねにかなわなければでくのぼう同然になる、ということは、それまでの八州回りからこんこんときかされたのだが。

しかるにこの久保軍蔵という男は、何を、しゃらくさい、やくざを取り締るのにやくざの親分の鼻息をうかがって何になる、そんなやつならこの際、あえてこちらから一撃をくらわして、こんどの八州取締出役はちとちがうぞ、と思い知らせておくべきだ、と意気ごんだ。

そして、その日、槍をかついだ五、六人の足軽小者をひきい、みずからは裏金の陣笠、ぶっさき羽織、馬に打ちのって大前田の栄五郎の家にのりこみ、天狗党に加わった出流山の千乗坊という天下のお尋ね者をかくまっておらぬか、と問いただした。

「そんなものはおりません」

と、栄五郎は答えた。

「しかし、そやつの弟がうぬの乾分になっておるというではないか」

「いても、天狗党騒ぎたァ関係ごぜえません」

おだやかな人柄で、とくに役人に対してはふだんひれ伏さんばかりの栄五郎だが、のっけから高飛車な新・八州取締出役にへそをまげたか、この日ばかりは木で鼻をくくったような応対をした。

家の前で、しばらく押問答をつづけたあと、

「とにかく、その弟とやらをここへ出せ、そやつが往年の凶賊国定忠治のせがれだということも、当方ではつかんでおるのだ！」

と、久保軍蔵はわめいた。

「そいつァ、けさ赤城の山へのぼりやした」

「なに、赤城山へ？　いつ下山してくる？」

「なんでもおやじの忠治の命日の、十二月二十一日までほらあなにこもるといってましたがね」

からかわれていると知って、久保軍蔵は満面を朱に染めた。

「やあ、八州取締出役を愚弄するか。それなら代わりにうぬをしょっぴく。前橋の陣屋へこい」

「へえ、どうぞお気にめすまま、ふん縛っておくんなさい」

売り言葉に買い言葉で、

「それ、栄五郎を縛れ！」

と、久保軍蔵は鞭でさしたが、お供の手下たちはかたまって、鼻白んでいる。

かえって栄五郎の乾分たちが、血相かえてどよめくのに、栄五郎はおちつきはらって、

「おめえら、ここで決してお手向かいをするんじゃあねえぞ。いいか？」

と、見わたした。

「これ、何をしておる、栄五郎を縛らぬか！」

と、久保軍蔵が逆上した声で鞭をふりまわすのに、やっと足軽たちが動き出して、おっかなびっくりで栄五郎に縄をかけたとき——往来の向こうから鉄砲玉みたいに龍次がかけつけてきた。

七

「あっ……親分を縛りゃがったな」

いったん棒立ちになったが、すぐに、

「おれが千乗坊の弟です。な、何か御用でござんすか」

と、久保軍蔵のほうへすすんだ。

その姿から何を読んだか、栄五郎がはじめて狼狽の相になって、

「龍次——ひかえろ、相手は八州さまだぞ。ばかなまねをすると、大前田一家は破滅だぞ。——」

と、縛られた身体をもみながら制した。それも聞こえない風で、

「ええ八州さま、親分のお縄をといて下せえ。縛るなら、おいらを縛っておくんなせえ」

龍次はなおも歩み寄る。六尺の距離になった。

その狂的な顔から本能的に恐怖の風を受けたとみえて、

「おいっ、こやつを縛れ、下郎、それ以上寄るなっ」

と、わめきつつ、久保軍蔵はいきなり手にしていた鞭で、ぴしいっと真正面から龍次の顔を打ちすえた。

龍次はかわしもしなかったが、立ちどまった。

ずんぐりむっくり、といっていい身体が、いっそうふくれあがったように見えた。その面上、ひたいから鼻ばしらにかけて、むらさき色のすじが、すうっと浮かびあがってきた。

「む、鞭でなぐったな八州、おれは馬じゃあねえ、く、国定忠治の子だぞ」

と、彼はうめいた。

そして、何事もないかのようにまた足を踏み出した。——三尺。

突然、久保軍蔵が鞭をほうり出し、背を見せた。

「おれァ代官を斬った忠治の子だっ」

上半身が前のめりになり、龍次の腰がやや回転すると、長脇差（ながどす）がほとばしって、逃げようとする相手の左のわきから右肩へ——鍔（つば）は背中をこすらんばかりに——斬りあげていた。

どん、ぎゃっ、というような音がした。

それはのどから出た声であったか、肉と骨から発した音であったか。まるで大空から落ちてきたように大地にたたきつけられた久保軍蔵の身体は、上下二つに切り離されたかと見えるような凄まじさであった。

しばらく周囲は真空状態になった。

「ああ。……またやりゃがった！」

最初に声をもらしたのは栄五郎であった。

「とにかくこの縄をといてくれ」

と、いったが、さすがに蒼ざめた顔色だ。

乾分（こぶん）が二、三人かけよって、栄五郎を縛っていた縄を切りほどきにかかった。それを見ながら久保軍蔵についてきた足軽たちは、とめるどころか、うつろな眼つきになって、みんな崩折れそうなていたらくだ。

「相手もあろうに、御公儀の八州さまを斬るたァ……こりァ、ただじゃあすまねえぞ」

と、栄五郎はうめいた。

彼としては、この新・八州取締（とりしまり）出役（しゅつやく）を一目見たときから、いやこいつはまともに弁解したって通じる相手じゃあねえ、と見て、縛られようとどうしようと、自分のほうから前橋の陣屋へいって、よく知っている代官に話したほうが早い、と覚悟をきめていたのだ。

それなのに、江戸の勘定奉行直属の役人を斬ってしまうとは。——

栄五郎は歩み寄って、

「親子二代のはりつけか、龍次」

「親分、す、すまねえ」

龍次はどっかと地上にあぐらをかくと、血あぶらにぬれている長脇差をさかさにして、そでつかんだ。

「おわびに、は、腹を切りやす」

「馬鹿野郎、そんなことですむと思うか」

栄五郎はその刀を蹴っとばした。

「あっ……小松五郎を！」

あわてて手をさしのばす龍次に、

「コマツゴローよりコマッタヤローはてめえだ。てめえがここで死にゃ、こんどはこっちがはりつけだ！」

栄五郎がこれほど怒るのは珍しいが、それもあたりまえだ。ここで龍次が死のうと生きようと、どっちにしろ大前田一家が破滅する運命はまぬがれまい。

そのとき。——
「はへはへ」
という声がした。

八

待て待て、と呼んで山かごでやってきたのは要吉老であった。
「ひふぉひおいふぁふる」——血の匂いがする。
地に下ろされたかごの中で、老人は鼻をひくひくさせた。
「ひっふぁふぁ」——斬ったか。
「斬りゃがった。龍次が、八州を」
憮然として、栄五郎が答える。
「ひえっ、そやあ、ふぁふぁ」
ひえっというのは驚きの声で、こういう発音は変わらないと見える。あとは、そりゃあ、まあ、といったのだ。さっき高札のところでおりんと龍次の問答をきいていたようだ。
首をのばして、
「ひゅう、はいわへんひゅうは、ふぉうひゃ？」——龍、馬庭念流はどうじゃ？
と、きいた。
この場合に、龍次はにやっとして、

「うまくいったようです」
と、そばに二つにならんばかりになってころがっている屍骸を横目で見た。
「ふぉうひゃろ、ふぉうひゃろ、れろれろ、ふぉっ、ふぉっ、ふぉっ、ふぉっ」
そうじゃろ、そうじゃろ、と笑ったあと、老人はけろりとして、
「そやあ、わいふぁ、ひっふぁほとい、ひよう、れろ」——そりゃあ、わしが斬ったことにしよう。
と、いい出した。れろは余分だ。
「何を、途方もない！」
と、栄五郎は大眼玉をむいたが、要吉老は手をあげて制して、自分の思いつきを説明し出した。
そのれろれろ調を常態の言葉に翻訳すると——この役人、八十のわしに斬られたとすると、恥の上塗り、かえって公けの問題にしがたいことになるとわしは考える。かりにわしがお仕置になっても、八十ではむしろいい死にどきと思う——というのであった。
「だって、あにさん、いくらなんでもこの八州取締出役が、眼のつぶれたじいさんに斬られたなんて、だれがきいたって、あはははのは、だ」
と、栄五郎が手をふると、
「はいふぁ、ふおふぁひい」——何がおかしい？
と、要吉老は叱咤（しった）した。
「わひふぁ、ほほひゅうふぉ、ひひょうひゃひょ！」わしは、この龍の師匠だぞ！

栄五郎は絶句した。

実は、この田島要吉老は、中年で盲目になる前は、馬庭念流の使い手として知られたことがある。

馬庭念流はこの上州の、ここから遠くない前橋のすぐ近くの馬庭村に古くから棲む樋口一門のあみ出した剣法で、いまもそこに入門する弟子が絶えない。その弟子に、近隣の農民や遊侠の徒が多いので、世には馬庭の百姓剣法と呼ばれている。これは尊称だ。

要吉は、やくざながらそこの師範代までつとめた人間であったのだ。名人と呼ぶ人もあったという。

もっともこの要吉が人を斬ったという話はないから、ほんとに名人という名に値するものであったかどうか不明だが、しかしとにかく盲目で大親分の座を守り通したのは、やはりこの経歴があずかって力あったにちがいない。

で、弟とちがって、この盲目の兄はいまでも長脇差(ながどす)をさしている。

そして、二、三年前から、どういう話のなりゆきか——龍次はこの老人に剣法の指南を受けていたのであった。御本人が往来を歩くにもいつも山かごを必要とするくらいなのだから、いったいどうやっているのだと龍次にきくと、ときに師匠が乾分に支えられながら型を見せるが、だいたいはれろれろ調の講義だけだということで、栄五郎は苦笑しただけでのぞいたこともなかったが。——

なんと龍次は、その馬庭念流で、さきに天狗党を、こんどは八州回りを、大根みたいに斬っ

ちまいやがった！

そしていま、八十歳の老師匠は、弟子の身代わりにその罪をひき受けようとするのだ。

「そんなことが通りますかねえ？」

栄五郎は首をひねり、あちらにふぬけのように立っている足軽や小者たちを見やった。だいいち、あいつらがいまの始末を見ているのだ。

「あへは、わいふぁきっふぉほ、れろ、いえふぉいえ」——あれか。わしが斬ったと言えと言え。

老人はひげをゆすって、あごをふった。自分が八州を斬ったと代官に報告しろ、とあの足軽たちに命じろ、というのだ。

そして、

「れろ！」

と、弟を一喝した。

栄五郎は、首をすくめた。彼はこの兄に、いままでそむいたことがない。

それに——ひょっとすると、この身代わりは有効かも知れないぞ、と考えた。八十のじじいにぶッた斬られたとあっては、代官も表沙汰にしにくかろう、といま本人がいったが、それ以上に前橋の代官は以前から、この要吉をむしろ尊敬しているきみがあるからだ。

もっとも、このれろれろ爺さんでは、取り調べも大変だろう、と栄五郎はこの場合に可笑(おか)しくなった。

何にしても、いったんいい出したらきかないじいさんだということは、承知している。
「これ」
と、栄五郎は足軽たちに近づいて、
「八州さまを手にかけたのァ、おれのあにさんだ。そういうことにしたから、てめえらもそのつもりでいろ。わかったな？」
と、いった。
「きかなきゃ、おめえらも手にかけるぞ」
足軽たちはがくがくとうなずいた。彼らはみなこの土地のやとい足軽や道案内で、最初からへっぴり腰でついてきただけで、大前田栄五郎の威名は充分承知していたからだ。
「そえはらな、ひゅうふぁ、すふ、わらひをはらへろ」
——それからな、龍はすぐわらじをはかせろ。
と、老人はいった。
それまで口あんぐりとこの場のなりゆきを見ていた龍次に、栄五郎はいった。
「おい、龍次、すぐに旅立ちの支度をしろい」
「へーえっ、おいらが旅に」
龍次はめんくらった顔で、
「こんな騒ぎをあとに、そ、そりゃ申しわけねえ」
「てめえにおられちゃ、かえってまずいんだ。おさまるものもおさまらねえ。おりん、旅装束一式を出してやれ」
おりんも驚愕した表情で立ちすくんでいたが、栄五郎のぎょろっとした眼に追いたてられるように家の中へかけこんでいった。
まもなく、戸板が運ばれて、久保軍蔵の屍骸がのせられる。要吉老人は山かごにのり、軍蔵がのってきた馬をひき、足軽たちや乾分たちにかこまれて、老人はまるで物見遊山にゆくようなニコニコ顔でゆられていった。前橋の陣屋へゆくのだ。

九

それを、地べたへ両手をついて見送った龍次はそのあと旅支度にかかった。
栄五郎のところに仁義を切りにくる渡世人はおびただしいものがある。それで、彼らのために、いつも代わりの着物、手甲、脚絆、合羽、三度笠、わらじなどが何十組も用意してあって、その一組——龍次の身に合うものをおりんが持ち出したのだ。おまけに旅の代え着などをいれた振り分け荷物から、しまの財布に金までいれて。
それを身につけると龍次は、例の長脇差小松五郎を、キリリとしめた帯にぶちこんで、何思ったか、往来のまんなかで、左手に笠をかかえ、腰をかがめ、右手をつき出して、
「ええ手前発しますところは上州にござんす。上州といってもひろうござんす。上州は勢多郡大前田村でござんす。大前田の栄五郎一の乾分。……」
と、やり出した。

「おきやがれ、のうてんきな野郎だ」
と、栄五郎はにが笑いして、
「龍、てめえにわらじをはかせるのァこんな事情からだが、もう一つ、この際てめえに渡世人たァどんなものか、その眼と身体で知ってもれえてえためもある。だから大前田は持ち出すな」
「へっ」
「おれの名を持ち出すと、ほんとの修行にゃならねえ。いいか、てめえ、一羽がらすで旅をしろ、国定龍次という一人の旅にんとしてな」
「へーっ、一人の旅にん、国定龍次。……」
にこっとして、
「承知いたしましてござんす」
「二年か三年、股旅して歩きゃ自分でも納得できるものがあるはずだ。一人前の渡世人になったと思ったら帰ってこい」
「に、二年か三年」
「それまでおれが生きてりゃ、の話だが」
栄五郎は苦笑して、ふとへんな話をして、
「生きてるっていや、おめえの兄貴、どうやら死なずにすんだらしいじゃあねえか」
龍次も首をかしげて、

「ど、どうやらそのようでござんすね」
「おかげでこっちはえれえ目にあった」
「申しわけござんせん。兄とはいうものの、あ、あんまり関係はねえと思ってたんだが、あいつのせいで、こんな、と、と、とんでもねえ騒ぎをひき起こすたァ。……」
そんなことをいいながら、また相好をくずして、
「おかげで旅ができることになったのァ、あ、ありがてえといっていいんだか、悪いんだか。――」
「あにさん」
おりんが呼んだ。
「旅ができて、うれしいのかい？」
思いつめたようなその顔を、龍次はたいして気にもかけない風で、
「親分にゃ申しわけねえが、そ、そりゃ、うれしいねえ」
と、鼻の穴をひろげた。面上になおお鞭のあとをとどめているのに、浮かれきった表情だ。
「それでどこへゆくのさ？」
「に、日本じゅうの親分衆の名はみんな知ってらい。それに会うのがたのしみだなあ。――じゃあ、親分、みなの衆、こ、これから出かけやす。ごめんなすって」
と、おじぎをして背を見せた。
躍るような足どりの下に、小さな砂つむじが立つ。十歩ばかり歩いてから、三度笠をかぶり

ながら、鼻唄のようなものを口ずさむのが聞えた。

「風にまかせたさだめゆえ、旅は死ぬまで股旅の、国定龍次はどこへゆく……かね。えへへへへ」

この日、慶応元年四月七日。もう龍次の念頭にもなかったろうが、彼は慶応となった最初の日に旅立ったことになる。

十

あと見送って——残った乾分たちは、われに返ったように顔見合わせて、

「たったいま、八州さまを斬るなんて大それたことをしたなんて、もう忘れてるんじゃあねえか」

「前橋へ大親分がゆきなすったことなんかも、まるで頭にねえようだ」

「ああそうだ、その始末がどうなるか、まだわからねえというのに」

「旅にん姿になったら、急に笑ってばかりいやがってよ、呆れた野郎だ」

と、ざわめいた。

思案に沈みながら、栄五郎が家にはいろうとすると、

「おとっつぁん」

と、おりんが呼んだ。ただならぬ顔色だ。

「あのひとは、死ぬよ。——」

「あん？」

栄五郎はめんくらって、

「なぜ龍次が死ぬんだ」

「おとっつぁんはあにさんに、一羽がらすで旅をしろといったけれど……ひとりでほうっときゃ、あのひとはきっと死ぬ。——」

「それほど弱えやつじゃあねえ」

「そんな意味じゃあなく、渡世人の世界で……あのひとの気性じゃあ、ひとり旅にんに出せば、きっとどこかで何かがあって、そのあげく死んじまうにきまってるわ。……」

おりんの眼に涙がキラキラひかってきた。

栄五郎は虚をつかれた顔で、モゴモゴと、

「だって、ここにおいときゃ、あいつが無事にはすまねえから、思い切って旅に出したんだが……じいさんもそう考えたから、わらじをはかせろといったんだろ」

「旅はいいんです。ひとりがあぶないんです」

と、おりんはさけぶようにいった。

「なんだと？」

「だから、あたいが追っかけてゆきます」

栄五郎は眼をむいた。

「でも、いっしょに旅はしません。おとっつぁんにああいわれたんだから、それはあにさんの

ほうでことわるでしょう。だいいち、あたいが貸元衆のところに泊まれないんだもん。男と女、まさか二人ならんで仁義を切る旅にんなんて世の中にないでしょ」

「うん。……そりゃ、まあ、そうだ」

「ですから、離れて、でも離れないように、あのひとを見ています」

「おめえが見ていて、どうするんだ」

「どうしていいかわからないけど……あたいがついていなけりゃ、あたいがついていなけりゃ。……」

うわごとのようにいって、おりんはまた家の中へかけこんでいった。

それを旅支度のためだと知りながら、栄五郎は棒立ちになったままであった。

なんとも無鉄砲なやつだ、ということは承知しているが、それだけでなく、「遊侠の美学」――そんな言葉を栄五郎が知るわけはないが、龍次という若者がまさしくそれにあたる生き方を夢みていることを、彼も認めないわけにはゆかなかった。

やくざ渡世は、そんな、絵にかいたようなもんじゃあねえ、ということを思い知らせるためにも旅に出したつもりであったが。――

考えてみれば、あいつ、ほうっておけばおやじの忠治の二の舞いをするとは、前々からおれが心配していたことじゃあなかったか？

「親分、おとめにならねえんですか」

乾分の鍋割の長助が寄ってきて、オロオロ声でいった。

「おりんか」

「へえ、いくら気丈だって、十七の娘さんが。……」

実はおりんは、ふだん裸馬を乗りまわすような一面を持つ娘であったが。――

栄五郎は、しかし何か決心したように首をふって、

「いや……あれもいい出したら、なかなかきかねえ気性だ。どうなるか、まあ出してやろうよ。龍次もいることだ」

「だって、二人は離れ離れで……」

栄五郎は破顔した。

「なに、いつまでもそうしていられめえよ。うん、あの二人、合わせて一人前の旅と考えてやりゃあよかろう」

ふいに、きっとして栄五郎は長助に命じた。

「おい、紙と墨を持ってきてくれ。それから、何か足をのせるような台を」

まごつきながら、長助ともう一人が、それらをそろえて持ってくると、何思ったか栄五郎は、墨をたっぷりすらせ、自分の左足の裏にぬりたくり、台の上においた白紙にその足をペタリとのせた。

やがて、おりんが出てきた。手甲、脚絆に何やら細長い包みさえななめに背にしょった旅姿だ。片手に赤い緒の編笠を持っている。

「おとっつぁん」

と、おりんはおじぎした。

「こんなあわただしい旅立ちで、かんにんして」

「おう」

栄五郎はただまじまじと、かげろうの中に、まるで別人のようにりりしく、しかもおとなびて見えるおりんの姿に目を見張っている。

「ただひとつ、おねがい――」

「な、なんだ」

「二年か三年たって……もし、あにさんとあたいが無事に帰ってきたら……」

おりんの頬が染まった。

「めおとにしてくれってんだろ。わかった、わかった」

栄五郎は可憐の思いにたえず、ちょっと涙をにじませながら笑ってうなずき、それから一枚の紙をつき出した。

「これを持ってけ」

その紙には、大きな――常人の一倍半くらいはありそうな足の裏が墨くろぐろと印せられていた。が、そのうち、第二指、第三指が欠けて、三本しかない。

それはかつて佐渡から島抜けをしたとき、凍傷にかかって指をおとした大前田の栄五郎の足型にまぎれもなかった。

のみならず、金釘（かなくぎ）流ながら、文字が書きそえてある。

「これをもつものは
おれの娘おりん
よろしくたのむぜ
　上州　大前田の栄五郎」

栄五郎はいった。

「ときによっちゃ、おめえのお守りになるかも知れねえ。いや、ときによっちゃ、じゃねえ。金が入用になったら、日本じゅうの貸元、だれにでもこれを見せろ」

十一

「あれっ？」

煮しめの一皿とたくあんだけで、五杯目の飯にかかったところで、龍次はふと眼をむいた。縄のれんを通して往来をゆききする人影の中に、いまちらっと一人の女の姿が見えたのだ。

――あれは、おりん坊じゃあねえか！

あわてて箸と茶碗をほうり出し、笠と荷をとるより早く、縄のれんをかきのけて出ようとすると、

「あっ、食い逃げだ！」

と、一膳飯屋のばあさんが金切り声をあげて、しゃもじを持ったまま奥から飛び出してきた。
「く、食い逃げじゃあねえ。知り合いを見つけたんだ。そらよっ」
大急ぎで、多目の飯代を投げかえすと、龍次は外へかけ出した。
中仙道熊谷の宿だ。
はたごが三十軒、旅びと相手の店だけでも百軒はある大きな宿場町で、しかもいい季節のおひるどきだから、南へ北へ織るようなゆききの中に、キョロキョロしながら歩いていたおりんは、うしろから呼ぶ声をきき、ふりかえって、息せききって走ってくる龍次を見ると、ぱっと顔をかがやかせて、自分のほうからかけもどり、しがみついた。
「ひどい、ひどい!」
と、身をもんで、
「なぜ、あたいから見えなくなるのさ!」
「見えなくなるって……」
おりんを抱いたまま、龍次は口をとがらせて、
「お前が追っかけてくるなんて、お、おいら、いまのいままで知るわけがねえじゃねえか。いや、お、おったまげたぜ」
と、いったあと、やさしく、
「な、何か用かい」
と、きいた。

おりんもわれにかえった。同時に、逆に口がきけなくなった。
用というのはお前さんを追っかけることだ、などいえたものではない。
すげ笠の赤い緒をむすんだ白いあごだけふるえているのを、龍次はのぞきこんで、
「おい、前橋の陣屋から、な、何かいってきたのかえ?」
——あれから三日たっている。気楽坊主の龍次だが、八州斬りのなりゆきは気にせずにはいられないのだ。
「いえ、知らない、あたい、あにさんのすぐあと、家を出てきたんだもの」
と、おりんは首をふった。
いや、龍次を追っかけるのには苦労した。
恐ろしい早足かと思うと、大前田村から外の世界に出て、珍しいのかうれしいのか、街道のあっちこっち、何かといえばひっかかる。しかも彼は、この二晩、ふつうのはたごには泊まらず、地蔵堂の縁などで、合羽をかぶって野宿したようだ。
それに遠くからつきあって、こっちは見つからないようにしなければならず、それやこれやでおりんは三日間でヘトヘトになり、とうとうけさから目的物を見失っていたところへ、いまそっちから声をかけられて、われ知らず幼女みたいにしがみついたのだが、われにかえると、自分のとりみだしようを残念に思わないではいられない。
「な、なんだ、おれのすぐあと? そ、それじゃお前は、おれといっしょに旅をするつもりかえ?」

龍次は当惑した顔をした。

往来を通りかかった若い男二、三人が、

「ようよう御両人！」

と、からかいの笑い声を投げてきたが、龍次のにらみつけた眼があんまり大きいので、首をすくめて早足でいってしまった。

「そ、そりゃ困る。そりゃ困るよ、女連れの股旅なんて聞いたことがねえ、……それとも、おとっつぁんがいいといいなすったのかえ？」

おりんはふいに相手の胸から離れて、

「ちがうよ！」

と、さけんだ。

「あたいは、あたいの旅に出てきたんだよ！」

「あたいの旅？」

龍次は狐につままれたような表情で、

「いったい、ど、どこへゆくんだ」

「お伊勢さままいりだよ」

おりんは上気した顔でいった。彼女はいま龍次に「ひどい、ひどい、なぜ見えなくなるのさ？」など口走ったことに腹さえたてていた。

「あたいだけの願かけがあって、お伊勢さまにおまいりにゆくのさ！」

お伊勢さままいりをする女は、村でも毎年何人かある。どういうわけかここ数年目立ってふえてきたようだ。しかし、それは必ず男たちと同伴か、女だけなら集団にかぎっている。

龍次はややたじろいだ眼で、

「お伊勢まいりだってどこだって、女ひとりの旅はあぶねえっていうぞ」

と、いった。

女のひとり旅は、街道筋の雲助やごろつきのエサになるのが落ちだ、というくらいのことは彼もきいている。

「といって、おいらがついてってやるわけにゃゆかねえぞ。おいらは渡世人として、修行の旅に出てきたんだ。そのことァ、親分から、と、と、とくといいきかされたんだ」

「それはあたいもきいてたよ」

と、おりんはさけんだ。

「だから、あたいはあたいの旅だっていってるじゃないか。あにさんはあにさんで、好きなように股旅しなよ。あたいはかんけいないよ」

「わ、悪いことァいわねえ、帰んな」

「帰らない！」

子供みたいに地だんだふんで、かぶりをふるおりんに、龍次もとうとうかんしゃくを起こした顔で、

「それじゃ、か、勝手にしろ。……おいらはゆくぜ！」

いいすてると、背をかえし、スタスタと大股に歩き出した。

いちどふりかえったら、風に蝶が舞っているかなたをけんめいに追ってくるおりんの姿が見えた。

龍次の胸に、苦悶のさざなみが立った。

が、眼をつぶってまた歩きつづけ——やがて数里、鴻ノ巣の宿場にはいろうとして、ふとそこから出てきた三人のやくざ風の男たちとすれちがった。昼日中というのに、三人とも赤い顔をして、熟柿のような息が風に残った。

鴻ノ巣を通りぬけて、しばらくいってから、ふと虫の知らせのようなものをおぼえて、龍次は立ちどまり、それからもときた道をかけもどっていった。

果たせるかな——宿場のむこうで、おりんをとりかこんで、何やらわめいているいまの三人が見えた。

龍次は土ぼこりをまいてはせ寄り、何もきかず、いきなりその一人の背中を蹴りあげ、仰天してふりかえったあとの二人の顔をなぐりつけた。

背中を蹴られたやつは、路傍の水田へすっとんで盛大な水けぶりをあげ、一人は路上にひっくりかえってそのまま悶絶し、あとの一人も凄まじい鼻血をふいて尻もちをついた。

それには眼もくれず、

「だ、だから、いわねえことじゃあねえ」

真っ赤な顔をして龍次はいった。怒っている相手は、三人の無頼漢ばかりではなかった。

「帰んな！」

「帰らない」

「またこういう目にあってもいいのか。もうこの次、おいらは助けてやらねえぞ」

「だれも助けてくれといってやしないよ。大きなお世話！」

おりんは、イイーダ、という顔をした。

これほど気の強い娘だとは思いもよらなかった——と、龍次は心中にあきれはてた。どうしていいのかわからない。

「それより、あにさん、渡世人修行の旅だなんていって、どこへゆくの？　ここからのゆく先はお江戸しかないけれど——」

おりんはふしぎにたえないといった眼で首をかしげて、

「江戸には渡世人の大親分なんてないじゃない？」

「それがあるんだ」

と、龍次はふいに胸を張った。

「だれ？」

「新門辰五郎親分。——」

と答えてから、龍次は、しまった、という顔になり、

「いいか、これ以上ついてきて、男・国定龍次に恥をかかせるんじゃねえぞ！」

と、にらみつけ、こんどこそはあとをふりかえらず、疾風のように遠ざかっていった。

江戸

一

「おひけえなすって、おひけえなすって」

花のお江戸で、ずんぐりむっくりの体形ながら、絵にかいたような渡世人姿が、絵にかいたような旅にん作法で仁義を切り出した。

荷物をのせた笠を入口の外におき、敷居をまたいで小腰をかがめ、左足からはいること三歩、ここでいちど立ちどまり、また左足から三歩、いったん九尺の土間を進み切ってから半歩さがって、ひざをおりかがめ、親指をおりまげた右手をあがりかまちについて、

「早速おひかえ下すってありがとうございます。御当家の親分さん、ならびにオアネエさん、かげながらお許しをこうむります。したがいまして、手前生国は上州にござんす。上州といっても広うござんす。……」

そこの吹き通しの大広間には、十数人の若い衆がいたが、みんなキョトンとしている。

これが旅にん作法とは知っているが、よくいえば名調子、悪くいえばあんまり芝居がかって

いて、一同あっけにとられ、中にはこんな仁義をはじめて見ききする者もあった。

江戸浅草馬道の新門辰五郎の家だ。

横の土間の広さは広大なもので、そこの壁にはおびただしいちょうちん、鳶口(とびぐち)、掛矢(かけや)、はしご、手桶などがずらっとならべられていて、下の土間には竜吐水(りゅうどすい)が十数台勢ぞろいしている。座敷の壁には「を組」と染めたはんてんがいくつかかけられ、正面には、やはり「を」の組文字を大書した芥子(からし)に甲羅流しの美々しいマトイがうやうやしくかざってある。

これらの道具の異風さはもとより、そもそも座敷、土間そのものが、上州あたりの貸元の家とはくらべものにならない豪壮さをそなえていて、最初はいったときから気押されるものを感じながら、けんめいに負けん気をふるいおこし、龍次はさらに声をはりあげて、

「上州は佐波ごおり、国定村。……」

と、やったが、よく耳にとめなかったと見えて、クスクス笑い出したやつもある。

「ゆえあって親分を持ちませず、国定龍次と申すただの一羽の渡り鳥でござんす。お見かけ通りのしがねえ若年者でござんす。以後お見知りおかれて、ごじっこんにお願えつかまつります」

「なに、なんといった？」

やっとききとがめたのは、新門一家のマトイ持ちの卯之助という男であった。

「おめえさんの名よ」

「国定龍次と発します。……」

「――するってえと？」

首をひねって、

「話にきいた、あの国定忠治どんと、何か……」

「不肖ながら、せ、せがれでござんす」

「ほう？」

卯之助は眼を見ひらき、穴のあくほど見あげ、見下ろしたのち、

「ちょっと待ってくんな」

と、奥へかけこんでいった。

やがて卯之助とともに、奥から、はでなはんてんを羽織った六十なかばの男が、たばこ盆をぶら下げてあらわれた。

一見して頭領と見える貫禄と、老名優のようなりっぱな容貌の持ち主だ。

「おいらが辰五郎だ」

と、彼はいった。

「なんだって？　おめえさん、国定忠治どんの息子だって？」

新門辰五郎は、しげしげと見いって、

「いや、忠治どんとァ、かけちがって会ったこともねえが、なるほどうわさに聞いた忠治どんとそっくりだわねえ。どうやらニセモノじゃあねえようだ」

と、笑顔でいった。

龍次は有頂天になって、

「へえ、へえ」

と、いまにもあがりかまちをはねあがって、抱きつかんばかりの顔になった。

「しかしな、若え衆」

辰五郎は少し困ったように、

「お前さん、いまやくざの仁義を切ったたってことだが、おれんとこは町火消しで、やくざじゃねえんだ、きのどくだが、お門ちがいというやつで、その仁義を受けるわけにゃゆかねえ」

と、いった。

龍次はきつねにつままれたような表情になった。

卯之助が辰五郎の顔を見て、

「頭取、しかし、ともかくも国定忠治どんの息子といえば。……」

と口を出すと、

「うん、まあな」

辰五郎もちょっと迷った眼色をしたが、すぐにまたむずかしい顔になって、

「いや、いけねえ。ありゃ何しろ御大法にそむいてはりつけになった男だ。その息子を、いまの新門一家に客人としていれるわけにゃゆかねえよ」

といった。

しかし、もういちど龍次を見た眼はいかにも好意的な笑いにみち、「それじゃあ」と背を見

せた。そのとき卯之助にひとつ、あごをしゃくった。
あがりかまちに手をついたまま、龍次は顔を伏せていた。
それから黙って身を起こし、シオシオと歩き出した。
戸口まで卯之助が追ってきて、
「すまねえ、国定の若え衆。これをはたご代にでもしてくんねえ」
と、紙づつみをさし出した。
いわゆるわらじ銭というやつだ。さっき辰五郎が卯之助にあごをしゃくったのはこのことだろう。あれは旅にん作法を受けた場合のならいだ。
「あ、ありがとうござんす」
龍次はしかし首をふって、
「実は御当家で渡世人の修行をさせていただくつもりで参上しましたが、た、ただいまうけたまわったようなわけで、それが叶えられねえこととなっては、いわば、む、む、無縁の仲、それは頂戴するわけには参りません。おゆるしになっておくんなせえまし」
と、龍次はひくく頭を下げた。
そして、戸外においた笠と荷をとりあげたとき、外から四、五人の女たちにとりかこまれて、一ちょうのかごが近づいてきた。
「や、お嬢さまだ」
「お嬢さまのお帰りだ」

新門一家の乾分（こぶん）たちは、いっせいにざわめきたった。
戸外に下ろされたかごから出てきた女を見て、龍次は口をポカンとあけた。
髪も着物も、御守殿風というのか——むろんそんな形容を龍次が知るわけはないが、何かのはずみで見た絵草紙の姫君か御殿女中のようだと思い、それよりその濃艶無比のあでやかさに眼を見張ったのだ。とにかく、いかに親方にしろ、町火消しの家に出はいりすべき女人ではない。
もっともそれをかこんでいるのは、町の女房風の女たちだが、みな手にじゅずをかけているところをみると、お寺まいりの帰りかも知れない。
「やいやい、そんなところに棒みたいに立ってやがって、どきな、どきな」
その一団がシトシトとはいってこようとして。——
かけ出してきた新門の乾分たちに、龍次はかきのけられた。
いっせいにおじぎしている男たちに迎えられて、女連れは家の中へ消えていった。

二

「な、なんだ、ありゃあ？」
龍次は白日夢でも見たように、まだボンヤリそこに立っていたが、やがてトボトボと往来を歩き出した。
——お嬢さまといったっけ。……すると、いまの女は、ありゃ新門の娘か。まさか？

と、首をひねる。

いくら親分の娘だって、町火消しの娘をお嬢さまと呼ぶのはおかしい。どこかのあずかりびとにちがいない。

が、思い出すとあの女、どこか辰五郎に似ているようだ。辰五郎親分は実にりっぱないい顔をしてたから、あんな美しい娘が生まれてもふしぎではないようにも思う。

それはそれとして、あの新門辰五郎に、いまわらじをぬぐことをことわられたのは、龍次にとって意外であり、衝撃でもあった。

おりんが、江戸に渡世人の大親分なんてないじゃないか、といったっけが、それに対して新門辰五郎がいると答えたが、なるほど新門はばくち打ちではない。町火消しの親分にちがいない。

しかし江戸に、いろは四十何組かある町火消しの頭取の中で、新門辰五郎だけは日本じゅうのばくち打ちの親分とつき合いがあって、げんに大前田の栄五郎のところへくる親分衆の回状に、新門辰五郎の名もつらねてあるのを何度か見たことがあるのだ。

それどころか、大前田一家の鍋割(なべわり)の長助兄貴から、こんな話をきいたことがある。

もうだいぶ前のことになるが、栄五郎親分が長助をつれて江戸見物に出かけ、新門辰五郎のところにわらじをぬいだ。そして浅草寺へ案内されたが、奥山の人混みの中で辰五郎たちとはぐれてしまった。

それにはかまわず栄五郎は、大道に大刀売りの縁台を出していた香具師(やし)を相手にいろいろ品

定めをしていた。思うに栄五郎が長脇差(ながどす)を木刀に替えたのは、その前後からのことであった。

このとき香具師が、栄五郎を田舎出のじじいとみて、小馬鹿にしたような口をきいた。それを長助が怒っていきなりなぐりつけたことから、まわりの香具師たちがわらわらと集まってきて、あわや血の雨がふろうとする雲ゆきになった。

そのときうまい具合に辰五郎が探しあててくれて、事情をきくと香具師たちにむかって、

「おい、てめえら香具師は、日本じゅうで商売してるんだろう。それが上州の大前田の栄五郎親分を知らねえのか、このひょうろくだま」

と、一喝した。

「えっ、これが、あ、あ、あの大前田の親分で？」

新門辰五郎が浅草の王様であることはいうまでもないが、それ以上に、その名をきいて香具師たちはいっせいに仰天し、尻もちをついてしまった。

――と、鍋割の長助の自慢ばなしをきいて、龍次もりゅういんを下げたものだが、それとはべつに、古くからの栄五郎親分と辰五郎親分のまじわりぶりがよくわかり、そんな想い出からも新門というひとに他人ではない親近感を持ってやってきたのだが。――

「大前田のおとっつぁんの名を出しゃ、何でもねえことなんだろうが」

堀ぞいの道を歩きながら、龍次はひとりごとをいった。新門の家のある馬道は浅草寺のすぐ横っちょなので、堀は浅草寺の堀だ。

「いや、そいつをいっちゃ、修行にならねえといわれたんだ」

と、首をふり、さらにまた、

「それにしても、新門一家ってのはばくち打ち一家じゃねえにしても、やっぱり変わってるぜ、ありゃ」

と、あらためて考えた。

それほど詳しくは知らないが、大前田での一家のいろり話に、全国各地の親分衆の評判が何かと出て、それを少年のころからまるで昔の武将の武辺ばなしでもきくようにきいた中に、新門について記憶に残っている逸話がいくつかある。

辰五郎は、浅草、下谷一帯の町火消し「を組」の頭取だが、伝法院が新門を作ったとき、その警衛をまかされたので、「新門」と呼ばれるようになった。

さて江戸の消防には、大名火消しと、旗本の定火消しと、町民の町火消しがあって、それぞれ自分の区域の消火にあたる。

しかし火事は区域の中にとどまらないから、場合によってその二者ないし三者が混じり合うことがあり、修羅場の中で殺気立って、おたがいに角つき合うこともある。このときもっとも威張って横ぐるまを押すのは大名火消しで、彼らは特に、鳶人足を主体とする町火消しを虫ケラあつかいにした。

辰五郎の壮年のころの話だが、「を組」の人足たちが下谷に藩邸のある筑後立花藩の大名火消しに、火事場で大々的に暴行を受ける事件があって、かねてから立花家の火消しの横暴ぶりに腹にすえかねるものがあった辰五郎はついにがまんの緒を切った。

それから日をへだてず、立花火消しの出動することがあったとき、急行する彼らへ、待ち受けていた「を組」のめんめんは、途中の両側の家の屋根から、瓦を投げ、はしごを落とし、さらには手かぎをふり下ろして通行を妨害した。ために立花火消しは十数人の怪我人を出して退却した。

そのあと辰五郎は、町奉行所に自訴して出て、江戸十里外追放の裁きを受けた。

その後しばらくして彼は、夜になると江戸にもどってきて、あるいは自宅に、あるいは妾宅に平気で泊まるという大胆な行為を平気でくりかえし、ふたたび町奉行所につかまる羽目になった。

ところが彼は、そんなことはやったことがない、とシラをきり、拷問まで受けたが、知らぬ存ぜぬで押し通した。ついにはその妻と妾までが白洲に召喚され、それが事実であることを証言したが、辰五郎は、

「この女衆、いままで見たこともきいたこともねえ。どこのどなたか、あっしは存じませんねえ」

と、そっぽをむくふてぶてしさを見せた。

白状しないままとうとう佃島の牢に送られたが、のち下町に大火が発生し、危険が佃島にも及んだとき、彼はとくに申し出て囚人たちを指図し、ついに防火に成功するという働きを見せて赦免された。

思えば新門辰五郎が、江戸の町火消しの頭取の中で、彼ひとり「俠客」の名を得たのは、火

消しの仕事のみならず、浅草一帯の町の実力者として、香具師や大道芸人などを取り締まり、そのカスリをとるというやくざの親分同様の地位を占めたこともあるが、それより右のような挿話で明らかな通り、もともとが博徒の親分たちにまさるとも劣らぬ、遊侠としての度胸の持ち主だったせいにちがいない。

——以上の知識や感想は、龍次の場合もっとザッパクなものであったが、とにかく自分とまったく同じ世界の大先輩と信じ切ってやってきたのに、それを追い出されて龍次はめんくらい、途方にくれたのだ。

それにしても、大前田村の栄五郎親分の家がただの農家風なのにくらべて、新門の家の豪勢さはどうだろう。

そうだ。思い出したことがまだある。

三年ほど前か、例の一橋(ひとつばし)慶喜公が禁裏守衛総督とやらで上洛されたとき、なんと新門一家を二、三百人つれてゆかれたということだ。京の御所と二条城の防火、慶喜公の身辺護衛という役目のためとかいうけれど、どういうまわりあわせで慶喜公がそんな役を新門一家に命じたのかよくわからない。

そのうわさは大前田村にもつたわってきて、

「江戸のやくざが京の御所をお護りするたァ、変な世の中になりゃがったもんだな」

と、栄五郎親分が大目玉をむいてにが笑いしたのをおぼえている。

事情はよくわからないけれど、なにしろ前代未聞のことにはちがいない。

その後、ずっと京に詰めているわけにもゆかなくて、辰五郎が江戸に帰ってきたのはいま見た通りだが、あの町火消しらしからぬ豪勢さは、そういう盛事以来のことかも知れない。

三

それはともかく、その新門から追いかえされて、さて弱った。

旅にん修行が最初からつまずいたこともさることながら、現実の問題として路銀(ろぎん)があやしくなったのだ。

おりんがわたしてくれた荷の中には、五両いれてあった。大前田の家では、旅にんに出すわらじ銭が紙袋にいれて何種類かとりそろえてあるが、その中でいちばん多い分をとっさにいれてくれたにちがいない。

だいたい渡世人は、各地の親分のところを、いわゆる一宿一飯で、去るときは涙ほどのわらじ銭をもらってわたり歩くのがならいで、多少のこづかいが欲しければ賭場でかせぐよりほかはない。かせげなければからっけつなのがあたりまえで、その苦労も旅にん修行の一つといっていい。

五両の金は過分なくらいだ。上州から江戸まで、わらじをぬぎたいような親分はいない、と考えて、どこの貸元にもわらじをぬがなかった代わり、龍次は野宿した。

自分では倹約したつもりなのだが、はじめて外の世界に出た物珍しさで、あっちこっち見物して歩いたので、かえってふつうの道中よりついえがかかり、そして江戸へ出てからは、もう

物珍しさを越えて、見るもの聞くもの驚異のたねだ。ただ、それにはいちいち金がかかる。
　馬道からほんの少し南へ下って西へまがると、急に往来がにぎやかになった。
　それにつられて歩いて——
「おっとっとっと！」
　と龍次は立ちどまった。
　人々のながれが雷門へむかっていることに気がついたからだ。浅草寺には、あらゆる見世物、あらゆる食い物屋がならんでいる奥山がある。
　実は龍次は、新門一家にわらじをぬいだら、当分身の自由はきかないものと考えて、ここ数日間きちん宿に泊まって、浅草かいわいを見物して歩いたのだ。なかでもまるで酔っぱらったように気にいったのが、その奥山であった。
　そこで龍次は、彼としては思わざる大散財をしてしまったのだ。
　足を反対にむけて、広小路へ出た。
　江戸から出ようか。それなら、どこへゆこう。
　いや、せっかくだから、もう少し江戸を見たい。しかし、きちん宿だって、もう四、五晩しか泊まる金はないが。——
　あれこれと思案にくれながら、トボトボと歩く龍次の鼻に、ぷうんといいにおいがながれてきた。
　天然自然に鼻をそのほうへまわすと、「うなぎめし」と書いた看板が見えた。

「あっ、いけねえ！」
　江戸へきてからの彼の散財の最大の元凶は、なんと江戸前のこのうなぎめしなのであった。
　最初に食ったのは奥山であったが、とにかくへその緒切ってから、こんなうめえものを食ったことァねえ、というのが龍次の実感だ。
　上州にもうなぎはあるけれど、ただ煮たものか、焼いても醤油をつけて食うだけで、身も皮も土みたいにかたい。それがこの江戸じゃあ、とろけるようにやわらかくて、それが醤油とみりんと、さらにえもいわれぬ香ばしい味の溶けたタレで焼いて、飯の上にのせてある。この飯そのものがうまいが、うなぎと飯が口の中でまじり合ううまさというものは、舌ものども胃ぶくろも極楽世界へ飛ぶようだ。
　それが大どんぶりにはいっているのだが、どうしても二杯食わずにはいられない。ときには三杯食うこともある。それでも実は、まだ食い足りないように感じる。
　こういうわけで、このうなぎめし代が、彼にとっては苦しみのたねとなった。
「うなぎめしが腹いっぺえ、毎日食えるような身分になったら、渡世人なんか捨てたっていい」
　と、ふと考えた。
　気がつくと、初夏のひかりの下で、浅草寺かいわいをさんざめいている江戸の下町の男女の中を、三度笠をかかえ、長脇差（ながどす）をつっぱらせて歩いているこの自分が、山国からきた猿のように思われないでもない。

「江戸を離れたら、もうあんなうめえうなぎめしは食えねえかも知れねえな」
とも考えた。
そして、
「おっとっとっと！　いけねえ、いけねえ」
と、われにかえって、ぶるぶると首をふった。
「おいらはなんのために上州から出てきたんだ。おいらは国定忠治の子だ。おいらにゃおいらの道があるんだ！」
と、歯をくいしばって、蒼い空を見あげた。龍次は、まるで青雲の志を立てて都へ出てきた剣士か書生のようなつもりでいる。——とはいえ、おさきまっくらとはこのことだ。
龍次はとうとううなぎめしを食わず、ここ数日泊まっている下谷山崎町のきちん宿近くのそばやで、かけ二杯ですませて、宿に帰って寝た。
その夜だ。
彼は半鐘の音で眼をさました。
ついで、二階の相部屋で寝ていた行商人や人足たちも起き出して、だれか窓の雨戸をあけた。すると北の方角の夜空が真っ赤に染まっているのが見えた。
「やあ、燃えてらあ、燃えてらあ」
「ありゃ車坂あたりか」
龍次は身支度して、はしご段をかけ下り、宿をかけ出した。

いつのまにか、少し風が出てきたようだ。往来を、赤い空を見あげながら、何十人かのやじ馬がかけてゆく。それにまじって龍次も走った。
火事は車坂の町家で、もう三軒くらいが燃えあがっていた。
驚いたことに、もう町火消しが出動していた。みんないせいのいい股引にはんてん、それにとんびのくちばしのように三角に折った手拭いをかぶり、その上からキリキリ向こう鉢巻をしめるという独特の姿をし、そのはんてんにも鉢巻にも、ことごとく「を」の字が浮かんでいる。
水と火の粉をあびて逃げまどう群集の中で、
「どけどけ！　新門一家のお出ましだぞ、じゃまするると踏み殺すぞ！」
と、さけぶ声がきこえた。
水道もなければポンプもない当時のこととて、いったんボヤが天水桶など及ばない火事にまでひろがったら、隣近所の家をぶっこわす破壊消防よりほかに手はない。鳶人足から成る町火消しが生まれたゆえんだ。後世のポンプの御先祖さまのような竜吐水なるものはあったが、これはせいぜい、火の中へ飛びこんでゆく鳶の連中に水をあびせるだけの用しか果たさない。
その竜吐水の水をあびて、鳶人足たちは鳶口をふるって、いま風下の家二、三軒をぶっこわすのにかかり、またその中の家財道具を運び出すのに、獅子奮迅の働きを見せていた。
その家を破壊するひびきをつんざいて、
「そっちだい、そっちの荒物屋をこわせ！」
と、空で声がきこえた。

「あっ、こっちの八百屋の二階にばばあがいるぞ。はしごだ。はしご持ちっ、いそいで八百屋の裏へゆけっ」

龍次はふりあおいだ。火炎の吹きつける一軒の大屋根の上でほえたて、指図している男の姿が見えた。彼はその右手に「を組」のマトイをふりたてていた。

名は知らないが、その顔に龍次は見おぼえがある。きょう新門の家を訪れたとき、辰五郎親分を呼びにいってくれた男だ。――それはまるで別人のように見えるが、「を組」のマトイ持ち卯之助の勇ましい姿であった。

「いや、ひ、火消しも恰好いいもんだなあ……」

ウットリとして、龍次はつぶやいた。

四

三日後、夕暮ちかい下谷長者町あたりを、ふらふらと龍次は歩いていた。

嚢中（のうちゅう）はいよいよあやしくなり、大ぐらいの彼にとっては、今夜の晩飯か、きちん宿の泊まりか、どちらか一方をえらべば一方は犠牲にしなければならないという段階に立ちいたった。

おまけに、お天気まで悪い。三度笠には、さっきから細い雨の音が鳴っている。

――と、その雨あしが、急にさあっと早くなって、龍次はあわてて手ぢかの店の軒下へかけこんだ。

そこには、もう三、四人の男女が雨やどりしていたが、その中の一人の女が、ふと笠をあげて、

「あにさん」

と、呼んだ。龍次は仰天した。

おりんであった。

「あっ、おめえか。――」

思わず、馬鹿みたいな笑顔をむけたが、

「あにさん、江戸の新門辰五郎ってえひとのところへゆくってたけど、何してるの？」

と、きかれて、うっと詰まった顔になった。同時に、いつか大前田村で、「おとっつぁんのおゆるしがなきゃ、どこへ旅に出かけてもだれも一人前の渡世人と見てくれないわよ」と、おりんがいった言葉を思い出した。

旅に出ることはゆるされたが、大前田一家を名乗ることはゆるされていない。そのために、まんまと新門一家から肘鉄砲をくらってしまった――なんて、国定の名にかけて、とてもおりんに白状できるものではない。

「なにか、修行してるの？」

「してるさ」

龍次の顔が、かっと赤くなった。

「よけいなおせっかいはよして、村へ帰んな」

「あたいはお伊勢さまへゆくんだよ」

「伊勢へゆくのが、なぜ江戸をぶらぶらしてるんだ」
「その前に、観音さまへも願かけしてるのさ。それより、あにさんこそ江戸をぶらぶらして
――お金、もうないでしょ」
「金はあらい！」
龍次は大声を出した。
そのとたんに、ひろがった鼻の穴に、ぷうんと香ばしいにおいがからまりついた。
その雨やどりした店ののれんに、大きく「うなぎ」と染め出してあるのに龍次は気がついた。
それから、ならんで雨やどりしている人々が、ふいにはじまったこちらのロゲンカに、みんな首をつき出してのぞきこんでいるのにも気がついた。
「おりん坊」
急に声をひそめて、
「おめえ、江戸へきて、うなぎめしってえやつを食ったかえ？」
「とつぜん、なにさ？」
「江戸前のうなぎは、上州のうなぎとァちがうぜ、そりゃ、ほっぺたがとろけるくれえなんだから。……久しぶりに会ったんだ。ついでだから、うなぎをごちそうしてやろう。――さ、こい」
といって、龍次はいばって、先に立ってのれんをくぐった。
小座敷もあるが、飯台に腰掛もある。夕刻ちかいので、店はけっこう混んでいた。

ちょうど奥の腰掛から二人立ってきたので、その一つに龍次はすわり、
「うなぎめし二人前。一人いまくるんだ」
と、注文した。
――あとはもう、水を飲む金もない。
まず茶が二つはこばれる。が、おりんははいってこない。
立っていって、のれんから首を出した。雨はやまず、雨やどりの連中の中に、おりんはまだ立っている。
「おい、はいらないか」
「あたいにはかまわないで！」
と、おりんはさけんだ。
龍次は鼻白んで、ひきかえした。もうかまってやるものか。
やがて、うなぎめしが二人前はこばれてきた。ふたをあけて、焼けたうなぎの色を見、においをかぐと、龍次の頭からはおりんのことなどけしとんでしまった。腹もへっていたことではあり、夢中になってくらいつく。
すると、ふと、
「札差の花札あそびに眼をつけるとァ、さすが青木だ」
「しかし、貸元が新門一家とあっては、こりゃ相当あざやかにやらねえと血を見ますぜ」
という声がきこえた。

龍次はぴくっと耳を動かせた。
左側は一段高い小座敷になっていて、低いついたてが立ててある。声はそのむこう側からながれてくる。
「いくら青木弥太郎でも、ちょっと相手が手ごわいわな。ま、お手並み拝見とゆこう。あははは」
酔っている上に、まわりの客の喧騒のせいで、つい声が高くなったらしい。
「場所は蔵前の水月(すいげつ)だって？」
「開帳は暮六ツときいた。――どうだ、われわれもちょっと見物にゆこうか」
「修羅場になりゃァ、とんだひろい物もあるかも知れませんぜ」
「あはは、どりゃ」
やがて、ついたてのむこうからあらわれたのは、浪人風二人と、やくざ風一人の男たちであった。つまようじをくわえ、かるい千鳥足で三人はのれんをかきわけて外へ出てゆく。
龍次はうなぎめしの自分のぶんを食いおえたところで、彼らのあとを追うように、戸口まで出て、外をのぞいた。
雨は小降りになっていて、雨やどりの人々はもう見えなかった。おりんの姿も消えていた。
そのあと、おりんのことは彼の頭からも消えた。
いまきいた話はなんだ？
これが素人なら、何のことか見当もつかなかったろう。さすがに渡世人のはしくれで、龍次

はけんめいにいまの話を頭の中でもういちどたどり、おぼろげながらも話の輪廓をつかんだ。
今夕六ツ、蔵前のたしか水月――おそらく料理屋だろう――というところで、札差の旦那衆が花札ばくちをひらく。開帳を仕切るのは新門一家だ。それに青木弥太郎という男が、賭場荒らしをかけるらしい。……いまの男たちは、じゃの道はへびで、内々事前にそのうわさをきいた町の無頼漢たちのようだ。
「よしっ」
ひとりでうなずくと、彼は二杯目のうなぎめしにむしゃぶりつきはじめた。……

五

賭博はむろん御禁制だが、それを好むのは人間の本能の一つだから、いつの世でもいかにきびしく取り締まっても、とうていふせぎきれるものではない。とくに崩れかかった幕末では、げんにばくち打ちが天下に横行している。
とはいえ、岡っ引手先のたぐいが、その気になってしょっぴけば、むろんぶじではすまない。まして、天下の米をとりあつかい、金持ばかりの蔵前の札差の旦那衆がばくちであげられたとなると、目もあてられないことになる。
で、この花札あそびは、新門一家が胴元として仕切ることになった。この一家なら岡っ引手先たちににらみをきかせ、さらに上の役人たちにもふだんから鼻ぐすりをきかせてあることにぬかりはない。

いまさらのことではなく、昔からの定例だが――そうはいうものの、頭取の辰五郎が、ちかごろとみに、ばくちなどにあまりいい顔をしないようになったので、しばらくとだえていたのだが、マトイ持ちの卯之助が札差の旦那衆にたのまれて、辰五郎にはないしょでこの世話をすることになった。ないしょ、といっても、知られたところでにがい顔をされるくらいでオチとなることは承知の上だ。

で、当日、蔵前の大料亭水月を借りきり、玄関には十人くらいの乾分たちを見張りに詰めさせた。

すると、その日のひるすぎ、はたちなかばの馬鹿にあだっぽい内儀風の女が、お供の女一人をつれて、アンポツかごでやってきて、

「観音さまへお詣りにきたのだけれど、その前にちょっと待ち合わせるおひとがあるから、しばらく座敷を貸しておくれでないか」

と、たのみこんだ。

いえ、実はきょうは、うちは貸しきりになっておりまして、と亭主がいうと、相手は当惑したように、でも、前もってことわりもしなくて相すまないが、このうちがこのあたりでいちばん上等な料理屋ときいて、ここを約束してしまったので、と女はいう。それが、なおむげにことわることができないほど美しい。おまけに、とにかく茶代に、といってお供の女に二十五両の切餅を出させた。途方もない茶代だ。

女ののってきたのは、左右に青いたたみおもてをたれたアンポツというかごで、これには御

用達商人がよくのる。これはどこかの御用達の内儀にちがいない、と亭主は見て、ともかくも裏座敷のほうへ通した。

やがて夕刻となり、申しあわせにしたがって、札差の旦那衆があつまってきて、まず酒宴となる。

その最中に、こんどは四十ちかい、角頭巾をかぶった、あごの青い、りっぱな顔だちの御用達商人と見える男が、やはりアンポツかごでのりつけて、御婦人を待たせてあるはずだが、という。人目をはばかるような調子だ。

このときは玄関に詰めていた新門の鳶の者たちが、きょうはここは貸しきりだ、と追いかえそうとしているところへ、あわてて亭主が出てきて、

「ああ、それならわかっております。この方は、わたくし存じよりの方で」

と弁解して、いそいそと奥へ案内した。

こちらにも酒肴をはこばせる。客すじに眼のきく亭主は、てっきりこれは御用達の男と、べつの御用達の内儀の密会だろう、と判断したのである。

さて、二階の表座敷では、やがて大燭台をつらねて、花札ばくちがはじまった。

夜もふけて、それが最高潮に達したころ――その大広間に、つかつかと一人の女がはいってきた。

「こんばんは」

しっとりとした、なまめかしい大家の御内儀風の姿で、まずそう声をかけ、

「まあ蔵前の旦那方、おたのしみでござんすねえ、どうぞあたしもひとつ、お仲間にいれておくんなさいましな」

見まわして、艶然と笑った。

みな、驚きさわぎ、「亭主、亭主っ、これは何としたことだ」「きょうはほかの客はことわってあるはずではないか」というような声が、むらがり起こった。

外からの客はことわったが、すでにはいりこんでいる客がいまこんなところにあらわれようとは思いのほかの亭主は、アングリと口をあけたままだ。

と。――

「あっ、うぬは……雲霧（くもきり）お辰じゃあねえか！」

と、新門一家の中で、だれかさけんだ者がある。

そうときくや、女はにっと笑い、すそさばきもあざやかに歩いてきて、座にちらばっていた花札を、さらに足で蹴ちらした。

「あいよ、いまごろわかったかえ。あたしゃ、いかにも世間じゃそう呼ばれている女だよ。そうと知れたからは、持ってまわった御談義は無用だろ。おめえさんたちの鼻っさきに飯つぶで花札一枚ずつくっつけて、お奉行所につき出すか、それとも――」

いいながら、床の間につみあげてある千両箱三つを、ちらっと横目で見た。

「水月」の亭主は、半分気を失った態で坐りこんでしまったが、その座にいた七、八人の新門一家の男たちは、

「このあまっ」

「今夜のことを知ってきたらしいが、胴元はだれか知ってきたのか」

「新門一家をゆすろうってえのか？」

と、わめきながら、逆上して、かけよった。

雲霧お辰は蛙のつらに水といった顔で、

「へん、蔵前の札差の手なぐさみに、仲間にいれてくれといったのが何がユスリだい。あたしゃこれでも、直参の旗本青木弥太郎の奥さまだよ、そっちにとっちゃ、土下座してお迎えしてもいいはずじゃないか」

「ええ、えらそうなごたくをならべやがって――女とはいえ、かんべんならねえ」

と、卯之助があごをしゃくった。

「青木弥太郎がなんだ。ふんじばって、さるぐつわをかませて、そこらにころがしておきな」

乾分たちがつかみかかろうとしたとき、むこうのふすまがまたひらいて、こんどは男があらわれた。

「おれが御存知青木弥太郎だ」

さびのある声でいった。

御用達風の姿だが、さっき見たやわらかな男前が、まったく別人のような凄味のある顔に変わっている――と見ただけで、こんどは亭主は腰をぬかしてしまった。

そのとき、どどっと階段をかけのぼる音がして、またも十人ほどの新門の乾分たちが乱入し

てきた。玄関に詰めていた連中が、急報をきいて、すわとばかりにかけつけてきたのだ。

それをじろっと見て、

「天下の風雲は急、内外に国難は迫っておるというのに、御公儀のお米を一手にあずからせていただいているお札差どもが、かようなところで千両箱をつんで、かくも盛大にばくちにうつつをぬかしておるとァ、時勢、分際をわきまえぬたわけ者ども、これでも攘夷に志ある青木がただちに天誅を下してもいいが……しかしまあ、この青木に軍資金として献金したほうが、世のため、お前たちのためだろう」

と、青木弥太郎はいった。

「な、なにをえらそうな口をききゃがる」

「強盗旗本の悪名高え野郎が」

「ここは蔵前だ。天下の火消し新門辰五郎の縄張りだってことを知らねえか」

彼らはいっせいにあいくちをぬいた。部屋のどこかに具えてあった鳶口をひっつかんだ連中もある。

青木弥太郎、彼はまさしく悪名において幕末期第一の旗本であった。

禄は二百石、旗本としては最低の身分で、そのうえ勤め方よろしからずとのことで、無役の小普請入りを仰せつかったあと、完全に町の悪党と化して、富商相手に、おどし、ゆすり、たかりをほしいままにした。

なにしろ、人の手首や指を斬りおとすくらいは朝飯前の所業で、それをめざす家に投げこん

だり、直接持参して強談におよぶのだから、相手は歯の根もあわなくなってしまう。はては浮浪の浪士たちを集めて、攘夷のための軍資金を出せといって堂々と押し込みにはいる。

そして彼の相棒は、女郎あがりの妾お辰、これが背中いっぱいに雲霧の刺青をしていたところから、雲霧お辰と呼ばれた。

こんど蔵前の札差たちが花札賭博を開帳するときききこんで、これは獲物が大きいと見こんで一芝居打ったわけだが——いま、二十人ちかい新門一家にかこまれながら、眉も動かさず、

「天下の火消しが、御禁制のばくちの胴元をやるのか。何が新門の縄張りだ。おれは直参だぞ、しかも剣聖の評判高い男谷下総どのの門で相当いいところまでいった男だぞ。そのつもりでかかってこい！」

と、青木はうそぶいた。

「やっちまえ！」

と、卯之助がさけんだとき、また階段に嵐のような足音がして、七、八人の男たちがかけのぼってきた。

「大将、うまくいったか」

先頭の一人がほえる。

みな、うすよごれた浪人風だ。往来でようすをうかがっていて、玄関の見張りがどよめきわたって内へかけこんでいったので、それはじまったと見て、いっせいに乱入してきた青木の一味であった。

「ごらんの通りだ」
青木弥太郎は一笑して、
「あれを持ってゆけ」
と、床の間の三つの千両箱にあごをしゃくった。
「あっ、こりゃたいしたもんだ」
「大将のおめがね通りじゃ」
「では」
三人ばかりどやどやとそちらへ近づくのを、この新手の敵にさすがの新門一家もひるんだと見えて、とっさに動くものもなかった。
そのとき、どこかで、
「ま、待ちやがれ」
と、声がかかった。

六

どこかで、ではない。
いま新しく闖入してきた浪人たちの中に、はじめて気がついたのだが、一人妙なものがまじっていたのである。
どうやらいっしょに往来からなだれこんできたらしいが、三度笠をかぶっている。その笠を

前に伏せて——声はそこからきこえてきたのだ。
「新門の衆」
と、そいつはいった。
「新門一家はやくざじゃねえそうだが、やっぱりばくちの貸元はおやんなさるようだね。そ、それなら御同業だ。御同業のよしみで、す、助ッ人を買って出やしょう」
笠をあげて、
「やいっ、江戸の悪党めら、上州の、く、く、国定龍次が相手になってやる。こいっ」
と、わめいた。
つらなる燭台の光を八方から受けて、三度笠をかぶった金太郎のようなつらだましいであった。
まさしく龍次は、やはり「水月」のようすを外からうかがっていて、ふいに往来から浪人集団がかけこんでいったので、そら賭場荒らしがはじまった、と見て、いっしょになって階段をかけのぼってきたのだ。
その顔を、三日ほど前やってきて、門前ばらいをくわせた渡世人の若者だと知って、新門の鳶の者たちは、この場合あっけにとられていたが、
「な、何ぼんやりしてるんだ。とにかくそこにある千両箱を持って早く逃げねえか」
と、その渡世人にあごをしゃくられて、やっとわれにかえり、あわてて床の間のほうへかけ出した。

と見て、これまたわれにかえった浪人たちも、それを制止しようと、どっと動き出したところへ、
「くわ、くわーっ」
と、野の怪鳥みたいな声をあげ、躍りかかる龍次の腰から長脇差（ながどす）がきらめいた。
血しぶきがはね、一人の浪人の片腕がたたみの上にとんで落ちた。自分の血の海の中へ、相ついで身体がつんのめって、はいつくばったその男はもう一方の手でたたみをかきむしっている。
助ッ人とはいったが、こんな荒っぽい助ッ人もあまりなかろう。――
あまりの剽悍（ひょうかん）さに、浪人たちも数瞬棒立ちになったが、
「何してるのさ、千両箱持ってゆかれちゃうじゃないか。いえ、その前に早くその男を斬っちまいな！」
と、こんどは雲霧（くもきり）お辰が地だんだふんで叱りつけたのに鞭打たれて、ふたたび馬群みたいに動きかけると、その前に一人が立ちふさがり、大手をひろげて、
「待て、待ってくれ！」
と、さけんだ。
驚いたことに、これが浪人の一人だ。
「青木先生、まことに申しわけないが、きょうのこと中止してくれませんか！」
と、彼は蒼白な顔をそっちにむけた。

「私はきょうのこの賭博が、新門一家の息がかかったものとは、いまのいままで知らなかったのだ！」
気がついてみれば、その男だけ、この凶暴な浪人群に混じっているのがふしぎなような、頬はこけているけれど、まっとうな顔をした若い侍であった。
「河合、貴公は新門と何か関係があるのか」
と、青木がきいた。
「は、その、縁といえば妙な縁が……攘夷の軍資金が必要なことはわかりますが、それが新門一家に害をなすとなると、拙者何とも黙視しがたく、きょうは何とぞ、私に免じて」
けんめいな哀願を浪人たちのほうへもむけて、
「どうしてもというなら、私を斬ってからにしてくれ、同志の方々、たのむ、たのむ。――」
と、おじぎをくりかえした。
「な、なんだか、変なことになっちゃったな」
と、国定龍次がつぶやいた。
「どうやら千両箱は消えちまったようだ。それじゃ、す、助ッ人はひきあげるとするぜ。――」
背を見せようとするのを、
「下郎、待て」
と、青木弥太郎は呼びかけた。

いかにも三つの千両箱は、事がもたついている間に、新門一家の連中がかついでいってしまった。札差の旦那衆もあらかた逃げ失せている。――はじめあざやかにゆきかけた賭場荒らしは、思いがけないじゃま者が敵味方に出現したために、しくじったのである。

つかつかと出てきた青木弥太郎は、怒りのために青い炎にふちどられているような凶相となり、

「河合にはあとできくことがある。そこのならず者、無礼討ちにしてくれる」

と、脇差をぬいた。相手をならず者と呼び、無礼討ちにする、とは、強盗にきた人間のせりふではないが、本人はその可笑しさに気づかないほど逆上している。

「――やるかっ」

龍次は喜色満面といった顔でむきなおった。

と。――

「青木さん、あぶなか」

と、だれかが声をかけた。

「なに？」

青木弥太郎は猛然とそっちをむいた。――やはり最初に乱入した浪人たちの一人だが、その男だけ、しきいの上に立ちどまって、つくねんとこれまでの光景をながめていた案配であった。なんと、黒羽二重の着ながしに、ふところ手のままなのである。――見て、龍次は奇声をあげかけ、しかも声が出なかった。

弥太郎はかみつくように、

「何があぶない」

「相手は国定忠治ゆずりの人斬り剣法でごわす。いかに男谷下総直伝の直心影流のあんたじゃとて、そうのぼせあがっちょっては、ひょっとしたら、あんたのほうがやられる」

笑いながら出てきた。ゆっくりふところ手を出して、

「おいは、あんたの用心棒じゃて、おいにまかせたほうがよか」

といって、龍次の前に立った。

龍次はさっきから、かっと眼をむいたままだ。

「お、お、お、おめえさんは。……」

やっと、声が出た。

思いきや、彼はそこに、去年秋、野州葛生の天狗党本陣で見た――見たのみならず、それまで知らなかった兄をひきあわせて、自分が国定忠治の子だということを知らせてくれ、また天狗党の迂回というこちらの願いをききとどけてくれた――天狗党の軍師らしい男を見いだしたのである。

その天狗党はことし二月に全滅したというのに、その軍師らしき男が、いまここ江戸の強盗団の中に、忽然と姿をあらわそうとは。――

「それにしても、国定忠治のせがれとやら、妙なところでまた会ったな。――そのことに、さっきから感心して、おはんだけを見ておった」

と、彼はおかしげな笑いを浮かべた。
「おれは感心しねえが、驚いた。ど、ど、どうしておめえさんがこんなところに……」
「そりゃ、おいもおんなじじゃ。どげんしておはんがこげなところに出てきたか、ちょっとききたかような気もするが――きいても、無用じゃろ。おいはこれからおはんを斬ってしまうのじゃから」
「な、な、何を――」
「なんだか、物語のはじまったところで主人公を斬ってしまうような気がせんでもなかが、こっちも賭場荒らしの用心棒としてやとわれた身じゃからの、用心棒としてのつとめがある。やむを得ん」
豪快な口ひげの下で、白い歯を見せて、人をくったことをいい、
「死ぬまぎわで知ってもせんなかことじゃが、やくざ剣法とほんものの剣法とどれだけちがうか、せめて冥土のみやげに知っておけ。……さあ、こい！」
はじめて一刀をぬきはらった。
「こ、こ、この天狗の亡者野郎――負けるもんか！」
龍次は、まっかにふくれあがって、小松五郎義兼をふりかぶった。
いや、ふりかぶろうとした。――が、その刀があがらない。
六尺ばかりをへだてて悠然と立っている相手の、うす笑いした眼が見えたのも一瞬、ただその剣尖の光芒のみが瞳孔につき刺さってくるようで、全身は見えない縄でくくりあげられたように動かない。

龍次ははじめて髪がそそけ立ち、毛穴が冷たいねばっこい汗にふさがれるのを感じた。
「青木の大将、よく見ておいて下さい。これが薩摩示現流。――」
声がきこえた。
恐怖の突風につつまれ、反射的に龍次は、
「くわーっ」
ひっさけるような声をあげ、緊縛をひきちぎるように躍りあがり、斬りこんでいった。
空中三尺で、彼は熱鉄を右脇腹に感じた。
――それだけだ。
それっきり国定龍次は黒闇々たるあの世へ沈みこんでしまった。……

七

――国定龍次は、黒闇々たるあの世から浮かびあがってきた。……
同時に、右脇腹の熱鉄の痛みもよみがえってきた。ズキン、ズキン……呼吸とともに、その痛みが脈打ちはじめ、その呼吸をとめようとする。
それで、うなり声をあげた。
「やあ、気がついたか」
声がきこえた。

だれか、のぞきこんでいる、と感じて、がばとはね起きようとして、龍次はまた脇腹の痛みに息をとめた。——数秒後、やっといった。

「おれは、ど、どうしたんだ？」

「草堂氏にみね打ちをくわされて、いままで気を失っていたのだ」

「あっ……ち、畜生！」

さけんで、こんどは起きなおった。あの料理屋の大広間での決闘が、稲妻のように頭によみがえったのだ。

「あの野郎……あん畜生は、ど、どこへいった？」

反射的に腰のまわりをさぐったが、長脇差はない。

見まわすと、まわりはうす暗い。壁のたかいところに網を張った小窓があり、壁ぎわに長持やたんすや古道具などがならんでいるようだが、すべてがほこりっぽく、もうろうとしていて、あのはなやかな「水月」の二階とは似ても似つかぬ変わりようだ。

「ここはどこだ？」

相手を見て、

「お前さんはだれだ？」

と、きいたとたんに、自分の前にいる人間を若い侍と認め、同時にどこかで見たような気がした。

ああ、そうだ、これは「水月」の二階で、青木弥太郎一味の浪人たちに賭場荒らしをやめてくれるように哀願していた侍だ、と思い出した。

「お前は一応草堂氏に助けられたのだ。……一応、というのは、どうせ殺されるからだ」

と、相手は陰々滅々たる声でいった。

「ここは青木先生の一党で、昨晩もわれわれといっしょに水月になだれこんだ連中の中にいた小倉庵の長次郎という男の家の土蔵だ」

そういわれても狐につままれたようだが、それより、

「さ、昨晩？」

と、龍次はききとがめた。

「いまは、きょうの、さあ、ひるすぎだろう」

と、相手は答え、

「お前が一応草堂さんに助けられたというのは、あの斬り合いで、てっきりお前が斬られたと思ったが、もんどり打って倒されたお前の身体から血が出ないということがすぐにわかった。草堂さんはみね打ちをくわせたのだ」

「…………」

「むろん、虫みたいにころがってしまったお前を、なぜみね打ちにしたと青木先生はふしんがられ、みずから成敗なさろうとした。——」

「…………」

「それをとめて草堂氏は、こいつはちょっと知ってる面白い若僧だから、殺すのはやめにした。

これは国定忠治のせがれで、上州の大侠客大前田の栄五郎の乾分だ、と申された。——いまここで殺すより、生かして使ったほうがよろしかろうと」

「へへえ！」

「で、気を失ったお前をかごにのせて、ここへ運んできたわけだ。しかし私の見るところでは、しょせんお前は助からんな。なにしろ同志の一人を斬り、結局あの賭場荒らしを失敗させたのだから。——草堂さんだから一応その場は草堂さんのいう通りにされたが、あの雲霧のお辰が承知せん。息を吹きかえしたら一寸だめし五分だめしにしてやるといって、気絶したお前をここに運ばせた。しょせん成敗はかくごしておいたほうがいい。実は拙者も、あのとき賭場荒らしのじゃまをした裏切り者として、お前といっしょにここへ放りこまれた。やがてお前といっしょに斬られるものと思う」

龍次は、ふしぎそうに、あらためてきいた。

「お前さまは、どなたで？」

しばし、ためらったのち、

「どうせまもなくひき出されて処刑されるのだから、かくしたって無用だろう、拙者は河合宗之助という浪人者だが。——」

と、若い侍はうなだれたままいった。

「そ、それがどうして賭場荒らしのじゃまをしたんです」

「新門一家と知り合いだったからだ。で、その新門がやっておる賭場が荒らされるのを黙って

見てはおれなんだ」

そういえば、あのときもこの侍は、そんなことを口走っていたようだ。

「賭場荒らしってえのは、やくざの縄張り争いで、ねえことじゃあねえが……お、お侍がばくち打ちの賭場荒らしをするってえのは、きいたことがねえ。ありゃ、ま、まぎれもねえ強盗ですぜ」

龍次は口をとがらせた。

「新門がやろうとやるめえと、お前さまは賭場荒らし……いや、ご、強盗の手伝いをしようとしたんだ。なんでまた、そんなことを……」

見たところ、若いが分別のありそうな顔をした侍なので、龍次はそうたずねた。

「いや、強盗ではない。少々荒っぽいが、あれは攘夷の軍資金集めの手段で、それだからこそ拙者は青木先生の一党に参加したのだ」

「青木先生って……あ、青木弥太郎ってえ人のことでござんすか」

「左様、かりにも直参の旗本が、ただの強盗行為をなさるはずがない」

といったが、河合という若侍の顔には、あきらかに動揺があった。

「ただ、ついておる雲霧お辰、小倉庵の長次郎などは感心せん。どうしてあんな手合いを身辺においておかれるのか、拙者慨嘆にたえんのだが。……」

そんな者の名は、龍次は知らない。実はあの場で、凄味をおびた雲霧お辰の登場ぶりも、彼は見ていないのだ。それどころか、青木弥太郎という人物さえ、それが旗本だということをは

じめて知った。
「へーっ、青木という人は、旗本でござんすか。あ、あの強盗が……」
と、首をひねって、あらためて相手をながめ、
「しかし、お前さんも、し、新門一家とお知り合いだとか——」
「おう、お前、あんな殴りこみをかけてきたが、お前、辰五郎どのとじっこんか」
龍次はにが笑いした。
「いえなに、あっしゃア、ただばくち打ちのよしみで、ひ、ひとつ助けてやらざあ、と思い立っただけで。——」
「拙者も、辰五郎どのは、ちらっちらっと見かけたことはあるが、話したことはないのだ」
「そ、それがどうして、新門仕切りの盆ゴザ荒らしに、あんなに身を張って——」
数瞬のためらいのあと、
「実は拙者、辰五郎どのの娘御と恋をしたのだ。……」
と、河合宗之助はつぶやいた。
「へへえ？　コイを？」
龍次は眼をパチクリさせた。
「娘御は、一橋家の奥向きに仕え、拙者はやはり一橋家で、奥向きとの連絡役を勤める職にあった。それでいつしか想いを通じる仲になった。……」
はてな、一橋とはどこかできいたことがあるぞ。どこかの大名らしいが。——

「し、新門の親分の娘が、一橋家ってえのの奥へ奉公していたんでござんすか」
と、けげんな顔できいたとたん、龍次はある女の姿を思い出した。
——あれか。あれじゃあねえか？
「まことに異例のことだが、あまり美人なので、新門を知っておる伝法院の和尚が、親しくしている一橋家にすいせんしたとのことだ。名はお鳥どのという」
「…………」
「しかるにお鳥どのを妻に申し受けたい、と拙者が意向を内々にもらしたところ、さて先方が何といっても町火消しの娘ということに、親戚の老人二、三の間に難色を示す者があった。それに愚かや困惑して拙者がモタついておる間に——なんとお鳥どのに殿のお手がついた。そうなって気がついてみれば、なるほどわが殿は甚だ御英明にましましながら、腰元にはかたっぱしから手を出されるお方」
「…………」
「が、それからまもなく、お心に叶わぬとして拙者が一橋家を放逐になったのは、よほどお鳥への御寵愛が深かったのだろう。以来、お鳥はお鳥の方となった。——三年ほど前のことだ」
河合の声がふるえた。
「ふうん」
と、いったとたんに龍次は、もう一つあることを思い出した。
辰五郎親分が三年ほど前、一橋慶喜公のお供をして京へ上ったことがあるときいて首をひね

ったものだが、一橋の殿さまとはその慶喜公にちがいない。
そんな娘からの縁で、新門がお供をしたのか、それともお供を命じるような縁があったから娘を妾にしたのか。
「その後、拙者は自分を見失った生活におちいり、浪々の末、やっと攘夷運動の道に生甲斐を得ようとして青木先生の門下につらなったが、あげくの果てが、こんなわけのわからぬ始末で処刑される運命を迎えようとはなあ」
「ま、まったくわけがわからねえひとだね」
龍次も嘆声を発した。
「あ、あっちが町火消しの娘だってんで迷ったり、いまになってその新門一家のために身体を張ったり……いや、そりゃやっぱりみれんがあったからだろう」
彼は河合を見つめていった。
「お侍さん……そ、その新門の娘さんは、いま浅草馬道の実家——新門の家に帰っていますぜ」
「なに？」
河合宗之助は大きな声を出した。
「いつからだ？　なぜお前はそんなことを知っている？」
「三日前、し、新門親分のところへ仁義を切りにいったとき、ちょ、ちょいとお見かけいたしやした。あれが一橋さまの御愛妾。……なあるほど」

といったのは、あのときの新門の娘の凄艶さを思い出したからだ。
ものもいわず、河合宗之助は土蔵の入口のほうへいって、板戸をあけようとした。が戸はびくとも動かなかった。
「そ、それが町火消しの実家に帰りゃあ、お嬢さまか。……けっ」
河合はしおしおとひきかえしてきた。
「あの戸がひらくわけはない。なんどもたしかめたことだ。それに、その外側には厚い土戸がしめてある。……」
とつぶやいて、崩れるように坐った。
「お大名のお妾が実家に帰るなんてことがあるんですかい？　……あ、ありゃ御用済みになってお払い箱になったのかも知れませんぜ」
河合はこちらをむいて、ぼんやり答えた。
「なにしろ殿は、三年前から京へゆかれたままなのだ。……」
「へへえ、そ、それじゃ……お妾にしてすぐお留守ってえことですか。そりゃ殿様、しょ、少々自分勝手だな。……すると？」
と、いったが、それ以上龍次にはなんの判断もつかない。
「もうひとつ、きてえことがござんす。……あ、あのソードーってえ侍だが。……」
語をあらためて、龍次はきいた。
「ソードー、何てんです」

「草堂万千代、といわれる」
「ありゃ、いつごろから、ご、強盗旗本の用心棒になったんですかい？」
「たしか一と月ほど前からだが」
「みんな、あいつの素性を知ってるんですかい？」
「素性？　知らん。少なくとも私は知らん。青木先生はどうか知らんが……しかし、先生はひどく御信頼のようだ。……あのひとの素性をお前は知っているのか」
「いや。……お、おれもよく知らねえんですが」
ごまかしたわけではない。考えてみると、龍次だって草堂という男については、天狗党の中にいたということ以外は何も知らないのだ。
とにかくえたいの知れない男で――しかも、なんという強い男だろう。
みね打ちされた脇腹が、ずきんとまた痛むのをおぼえ、あのときまるででくのぼうみたいにやられた自分を思い出すと、屈辱感のために龍次は、頭がかっと熱くなるのを感じた。
畜生、こんど会ったら。……
また手が腰にゆき、長脇差（ながどす）がないのをもういちどたしかめて、こんどは頭から血のひくのをおぼえる。
「おれの刀がねえが……ど、ど、どうしたか知りませんか」
と、うなるようにきいた。
「さ、それは……私もとりあげられた。お前の刀も同様だろう」

父忠治の愛刀小松五郎義兼（よしかね）がなくなってしまった！
「ああ」
河合は刀のことなどうわのそらで、身もだえせんばかりに、
「お鳥どのに会いたい。……実家に帰っているとあれば、一目だけでも会いたい。……」
しばらくたつと、また同じ言葉をくりかえす。
龍次は頭をかかえてうずくまったままであったが、いちど、
「会って、そ、それからどうしようってんです？」
と、きいた。
「会ってどうするか……拙者にもわからんが……ただ、いちどあのひとの気持ちをききたい。……」
「へっ、ほ、惚れた女がひとの妾になって、それから三年たってからまだ気持ちをききてえなんて――なんだか、シ、シマらねえ話だなあ」
と、肩をすくめた。
「いや、一目会えさえしたら、死んでもいいのだ。……しかし、ここを出なければ会えない。が、ここを出るときは、殺されるときだ。まもなく、処刑にやってくる。……」
こんなつぶやきが、断続的にいつまでもつづき、とうとう龍次はカンシャクを起こして、
「うるせえ、いいかげんにしねえか！」
と、どなりつけた。

「な、何が起こったって、こうなりゃマナイタの上の鯉だ。男なら、かくごしろい！」

——と、数刻ののち——土蔵の外で何やら、重い、ぶきみな音がした。

八

土戸をあける音だ、と気づき、さすがに二人とも毛穴をしめて、そのほうを見つめた。

が、次にひらくべき内側の板戸はひらかない。代わりに、その外で、コトリ、となにやらひびいた。

それっきりだ。

数分たって、たまりかねて龍次がとんでいって、その板戸を横にひいた。

さっき河合がひいたとき、びくとも動かなかった板戸は、かるくひらいた。

その外の土戸も観音びらきにあいていて、まぶしいような光が、さっと土蔵の中にさした。

それより龍次は、板戸をひらいたとたんに、音たてて倒れこんできた三本の刀の中の一本の長脇差(ながどす)に眼をうばわれている。

夢中でひろいあげて、

「小松五郎だ！」

と、さけんだ。

何者かが土戸をあけ、板戸のかきがねをはずし、その三本の刀を外から立てかけておいたらしい。

あとの二本は、河合の差し料であった。

その人間の姿は見えず——あたりにだれの影も見えず——ただ蓬々(ほうほう)とおいしげった夏草が、風にはげしく吹きなびいているばかりであった。

河合宗之助も出てきて、

「はてな」

と、いった。

彼は、草のむこうの母屋のほうを見ている。

「だれもいないようだが」

「だれがいたって、こ、こいつがありゃあ。……」

と、龍次は長脇差をなでさすった。

さっき外光をまぶしいように感じたが、それは錯覚で、空を見ると、もう夕方ちかい光であった。おまけに雲がドンヨリとたれて、風がある。

まわりは草に埋めつくされているけれど、どうやらかつてはちょっとした庭であったらしいあんばいだ。そのむこうに、これまた荒れはててはいるが、料亭風の母屋があった。

「ここは、どこですって？」

あらためて龍次はきいた。

「ここは入谷の小倉庵という家だ。先代までは相当な料理屋だったそうだが、息子の長次郎の代になってからは商売をやめて……いまは青木一党の会合場所になっている。昨晩も蔵前の水(すい)

月からひきあげてきたあと、みんな集まっていたんだ」

と、河合は答えた。

草の中を、龍次は長脇差のつかをおさえ、そのあとを河合はおそるおそる、母屋のほうへ近づいた。

だれもいない。

が、縁側から座敷にあがりこんでみると、杯盤狼藉――ほんのさっきまで、十数人くらいが酒盛りしていたらしいようすがそのまま残って、しかしだれの姿も見えなかった。

「ど、どっかへいっちまったようだね」

と、龍次はつぶやき、それから飯びつのそばにどっかと坐って、残飯を茶わんに盛り、膳に残ったサカナをおかずにムシャムシャ食いはじめた。

ものもいわず、五杯くらいかきこんで、

「河合さん、そ、それじゃ新門の家へゆきやしょうか」

と、いった。

「えっ、新門の家へ？」

「あそこを出られたら、お、お鳥さんに会いにゆきたい、といったでしょうが」

「そ、そうはいったが」

と、河合宗之助は狼狽のていだ。

「もし、お鳥さんがお払い箱になったとしたら、あ、あんたの望みがかなえられるかも知れねえ。さ、ゆきやしょう」

「しかし――」

「ええ、に、にえきらねえひとだね」

龍次はかんしゃくを起こしたように、

「な、何にしても、おいらは、一人でもこれから新門の家にゆきますぜ」

と、立ちあがった。

先日、新門はやくざじゃあねえ、と門前ばらいをくわされた。そのやくざじゃあねえ新門一家が、ばくちの胴元をやってたのァどういうわけだ？　と文句をつけにゆくわけではない。いや、単純な龍次にもちょっぴり皮肉な気持ちがないわけではないが、それより彼は、親分大前田の栄五郎と肝胆相照らしたらしい新門辰五郎にまだ親愛感を禁じ得ないでいる。

そのゆえに、その新門の賭場荒らしをたくらんだやつらを征伐するために乗りこんだのだ。

恩にきせるつもりは毛頭ねえが、もういちどいったら、こんどは門前ばらいをくわさねえだろう。渡世人としての修行をさせてくれるだろう。

「あ、待ってくれ。――」

出てゆく龍次を、あわてて河合宗之助は追っかけた。

外はもう日暮れちかく、入谷の水田の早苗は、いよいよ強くなった風に吹きなびいている。

九

入谷から浅草へ、歩いてゆくと、雨さえポツポツふり出した。

馬道の新門の家までやってくると、見おぼえのある新門のはっぴを着た男たちが十数人集まって、小雨の中に何やらさわいでいるのが見えた。

「はてな、何か起こったようだね」

二人が首をかしげながら、近づくと、

「だれだっ？」

「くるんじゃあねえ！」

と、かみつくような声がとんできた。

が、それにつづいて、

「おやっ……おめえは、水月に助ッ人にきてくれたあの若い衆じゃあねえか」

と、さけんだ者がある。

「を組」マトイ持ちの卯之助であった。そういったあと、眼をむいて、

「あれれ、おめえ、あのあとで青木弥太郎に斬り殺されたってきいて、そりゃとんだ目にあわせたと気の毒がってたんだが、なんだ、生きてるじゃあねえか、いってえどうしたんだ？」

「そ、それより、何か騒ぎがあるようだが。——」

卯之助は困惑した顔になり、まわりを見まわして、

「いや、とんだことが起こってね。おかまいもできねえが、ま、ちょっくら家の中で休んでいてくんな。おいっ、みんな、これァ昨晩、おいらたちを助けてくれたあにさんだ。だれか茶でもあげてくれ。——」

と、家の中へむかって手をあげてから、ふと気づいたように、

「このお侍さんは？」

と、河合宗之助をのぞきこんだ。

「これァ、きのう青木弥太郎とかの浪人たちをとめたひとだ」

と、龍次がいうと、

「あっ、思い出した。あのひとか。何だかわからねえが、とにかくそれも恩人だ。いっしょにはいっておくんなせえ」

と、卯之助はいったが、実は心ここにない、といったありさまであった。

ふらふらと家の中にはいった龍次と河合は、土間を二、三歩歩いて、ぎょっとして立ちどまった。

ここにも新門の乾分たちが右往左往していたが、そこの座敷にぬうと立っている辰五郎の姿を見たのだ。もうほの暗いのに灯もつけず——しかし決してそのせいではなく、辰五郎の顔は灰色であった。

あらためて仁義を切ろうと思っていた龍次は気勢をそがれ、しかもこちらをじろっと見た怖ろしい辰五郎の眼に、何かいわなければ、とうろたえて、

「ええ、このお侍は、なんでも一橋家で、こちらのお嬢さんといい仲だったそうで……」
と、やった。
「あ、これ」
と河合は狼狽して袖をひっぱったが、やおら気をとりなおして、
「拙者、一橋家の元家来、河合宗之助と申す。三年ほど前、当家のお鳥どのとはごじっこんに願っておりました」
と、あいさつした。
「河合――」
辰五郎が変な声を出した。
「その名はお鳥からきいたことがありやす。お鳥はあなたさまのことをいって、殿さまのおそばめになることをかんべんしてくれと泣きやした。娘がそんなものになることを、べつにあっしもうれしがったわけじゃあねえが、とにかく殿さまのお心にそむくわけにゃゆかねえから、それをあっしは説得したんだが……どうやらバチがあたったようでござんすね」
「とは？」
「三年前、一橋の殿さまは京へゆかれたきり、お国のために御苦労なすってたんだが、このところひとまずおらくになられたのか、鳥を京へよこせとの仰せで、ちかく京へゆくことになったのでござんす。その用意で、お鳥はしばらく宿下りしてたんだが、きょういよいよお屋敷へ戻ることになり、さっきかごで出ていったところ――途中、何者かにさらわれちまったんでご

ざんす」
「なんだって？」
二人は仰天した。

十

辰五郎はいう。
むろんお鳥は、一人でかごに乗っていったわけではない。一橋のお屋敷から迎えにきた供侍、女中、四、五人がついていった。新門一家の者たちは、身分をはばかって、わざと供をしなかった、ところが、一行がお厩河岸を通りかかったとき、十人を越える覆面をし、抜刀を下げた男たちがふいに大川の舟から上がってきて、あっというまにそのかごをひっさらってゆくえをくらましてしまった。
供侍たちが、狂気のごとく逃げ帰ってきて。――
「この騒ぎでござんす」
辰五郎は歯をかみ鳴らした。
「ただ、かどわかされたのが、おれの娘というだけじゃあねえ。ありゃ、いま一橋家のお部屋さま、それをさらわれたとあっちゃあ。……」
「その覆面した野郎どもは？」
と龍次がきいた。

「わからねえ。……こういっちゃなんだが、御時勢がら一橋の殿さまも敵の多いお方で……」
「あいつだ！」
と、突然、河合宗之助がただならぬ声をあげた。
「青木弥太郎だ！」
「なに、青木？」
「昨夜、水月（すいげつ）から帰ってから、なぜじゃまをしたと拙者査問され、とうとう新門の娘御が、拙者がかつて思いをかけた女人であるゆえ――と答えてしまったのだ。そこで青木は、新門の娘、という存在に気がついたに相違ない。そのときは拙者、お鳥どのがいま当家に帰っておられることは知らなんだからそれは申さなかったが、手下のだれか、そういえば――と、こちらに娘御がお帰りであることを知っているやつがあったのかも知れぬ」
河合宗之助の顔色は、辰五郎よりも土気色（つちけいろ）になっていた。
「そして、物見の結果、お鳥どのがきょう一橋家に帰ることをかぎつけたのだ。われわれを蔵の中に残したまま、杯盤狼藉（はいばんろうぜき）といったていで急ぎ出ていったのは、誘拐を思いついて、急遽（きゅうきょ）出動したものにちがいない」
彼は、土間にヘタヘタと崩折れて、頭をかきむしった。
「ああ、責められてのこととはいいながら、拙者いらざることをしゃべったあまり、お鳥どのに災難を招いてしまった！」
「青木弥太郎が悪旗本だってえことはおれも承知しておりやす」

と、辰五郎はうめいた。
「が、かりにも旗本が、御三卿の一橋家のお部屋さまをさらうなんて――」
「いや、青木という男ならやります。昨夜も賭場荒らしにしくじってひきあげたあと、このしっぺ返しは必ずやる、とりそこねた金の倍も三倍も吐き出させてやると、歯がみして申しておった」
と、河合はいった。
「拙者は青木の悪行も、攘夷の軍資金集めと考えておりましたが、いまにして思うと、あれはやはり徹頭徹尾、強盗旗本にちがいない。明日にも、必ず人質とひきかえに、眼の玉のとび出るような金を強談して参るに相違ない」
「明日までほうっておけねえ。今夜だって何をされるかわかったもんじゃあねえ」
と、さけんだ者がある。いつのまにか、土間にはいってきていた卯之助であった。不安と怒りのために唇がワナワナとふるえている。
「まだよくいきさつがわからねえところもあるが、それをきいてるひまもねえ。青木一派のねじろはどこだ？」
「入谷の小倉庵という元料理屋だが――」
「そうか、よしっ」
顔を朱に染めてかけ出そうとする卯之助を、
「ま、待て」

と、辰五郎がとめた。
「どうしようってんだ？」
「むろん、を組の鳶ぜんぶでおしかけて、お嬢さんをとり返すんでさあ」
「それで青木がおそれいって、やすやすと娘を返すと思っているのか」
卯之助の顔に動揺の波がわたった。
「これほど途方もねえことをしかけたやつだ。娘にけがもなくすんなり返すとは思われねえ。騒ぎを起こして、お鳥に万一のことがあったら何とする？」
辰五郎はうめいた。
「おれの娘だから心配するんじゃあねえんだ。あれが一橋家のお部屋さまだからだ。……おれァな、この騒ぎに一橋や新門の名が出ることさえふせぎてえと思ってるんだ。さすがは青木弥太郎、おれの何よりの弱味を狙いやがった！」
さしもの新門辰五郎が夢遊病みたいな顔色で、
「お、おれがいって話をつけてくる。その入谷の小倉庵とやらへ案内してくれ」
といって、座敷から土間へ下りかけた。
「待った！」
声がかかった。
「親分、し、新門の親分がいって、どうなさる？」
いままで黙って、以上のやりとりをきいていた龍次であった。

辰五郎は苦悶にねじれるような声で、
「土下座をしても、娘をもらい受けてくる」
「そ、そんなにうまくゆきますかねえ？」
龍次は首をかしげた。
「いろいろきくと、あの青木弥太郎ってえ野郎、ひとすじ縄でもふたすじ縄でもゆかねえ、た、た、たいへんな悪党だね。それが、度胸をすえて乗り出したかどわかしだ、そ、そうかんたんに取引の手は打たねえでしょう。また、へたな取引をやりゃ、やっぱり新門の恥になる」
その大眼玉がらんとひかって、
「の、のりかかった舟だ。おいらにもいちど助ッ人をさせておくんなせえ。おれが必ず娘さんを連れてくる」
「どうするつもりだ？」
「さっきからきいてるんだが、と、とどのつまり、一橋や新門一家に恥をかかせねえように、娘さんをとり返しゃいいんですね？」
辰五郎は大きくうなずいた。
「そうだ。それで、どうする？」
「娘さんを、く、く、首にしてくる！」
言いも言ったり。――こんなせりふを吐きながら、この若者の天性と見える一種の可笑しみはどこか消えないのだから、いっそう凄味がある。

河合、卯之助はもとより、辰五郎も全身総毛立ったような表情になったが、やがて辰五郎はまたうなずいて、
「よくぞ、いいやがった」
と、うめき、
「この仕事は、おめえにまかせた！」
と、さけんだ。
「えれえ、やっぱり新門辰五郎親分だ！」
龍次はまっ白な歯を見せて、
「お、親分がそのかくごなら、おいらもやり易い。……なに、娘さんはぶじに助けてきまさ」
「なに、どうするんだ？」
「親分は、どうか知らねえ顔しておくんなさい。その代わり、このマトイ持ちのあにさんとお侍さんの力をかりなきゃならねえが。……」
と、卯之助と河合をかえりみて、
「ちょっと外へ」
と、さそい出した。
いま禁裏守衛総督、次の将軍さまとの声も高い一橋慶喜公の愛妾をさらう――ムチャクチャとしかいいようがないが、それだけ凶暴無残といえる悪旗本青木弥太郎一味を相手に、上州から出てきた国定龍次はどう立ち向かおうというのか。その敵の中には、昨夜彼を一撃のもとにたおしたあの薩摩浪人もいるはずだ。しかも、事は一刻をも争うのだ。
娘をさらわれながら、江戸一の大親分新門辰五郎でさえ立往生させたこの大難に対して、あまり頭もいいほうとはいえなさそうな彼に、どんな知恵が浮かんだのか。
戸口の外で何やら談合している三人の中で、
「えっ……この風の中で？」
と、おったまげた声があがった。卯之助の声であった。雨は小雨だが、ふりあおいだ空は暗く、たしかに風の声がある。

十一

それから一刻ばかりのち。――
風は入谷の小倉庵の空にも吹いていた。雨はそれほど強くはないが、風のせいで雨戸にあられみたいな音をたてている。
その音も耳にはいらないほど、小倉庵の広間には蛮声と狂笑がどよもしていた。
「しかし、慶喜さんのお姿を、こうもやすやすさらえるとは思わなんだ。考えてみりゃ、不用心なことさ。あはは」
「まさか、そんな大胆なやつが世の中にあるとは思いもよらなんだのじゃろ。そもそも、われわれが、新門の娘が慶喜さんのおそばめになっていることは知っていながら、そんなことは思いもつかなかったんじゃからな」

「そりゃ大将の、例の稲妻のようなひらめきだ。さすがは、と、あらためて敬意を表します」

これはただのおべんちゃらとも思えない首領への讃辞であったが、それにつづいて、

「まったく悪の天才でごわすな」

と、つぶやいた声があった。盃を持ったままの草堂万千代だ。

むろん、誘拐前までの酒の席のつづきである。床の間を背に、あぐらをかいて雲霧お辰に酌をさせながら、大満悦のていであった青木弥太郎は、ちょっとにがい顔をした。

この草堂は、先刻の誘拐前にふっと姿を消してその犯行には加わらなかった。——が、さしもの青木が、いつのころから飄然と仲間に加わったこの薩摩浪人には、どこか歯が立たない感じがあって、ほかの連中に対するようにあたまからどなりつけられない。

「で、青木どん、これから新門へ脅迫状を出すわけでごわすか」

「そうよ、明日な」

「要求する身代金はいかほどかな」

「まず、十万両」

さすがに草堂は眼をむき、一座の浪人や遊び人たちもうなり声を発して、あらためて「十万両」のいけにえを見まもる。

円陣をくんだ酒盛りのまんなかに、縛られて坐らせられているのは一橋慶喜の愛妾お鳥の方であった。

高島田はくずれ、さるぐつわをかまされて、凍りついているのではないかと思われるほど動

かないが、それでも、なるほどこれが慶喜公のお部屋さまか、と感にうたれ、また、どうしてこんな女人があの新門辰五郎などという町火消しの親分の娘として生まれたのか、と、ふしぎにたえない気品と濃艶さは失われず——とにかく先刻から、何よりの一同の酒のサカナ、酔眼のなぶりものになっていたのだ。

「いくら新門辰五郎でも、十万両とはちと吹っかけすぎじゃごわせんかな」

「おれのあてにしているのは一橋家だ」

「あ、なるほど。——」

草堂は感心したようにうなずいたが、すぐに、

「十万両もとりあげる以上、人質は返さなきゃならんが——」

「まあな」

「人質を返しゃ、こっちの正体もばれることになるが、それでようごわすか」

「かまわん。きのうのきょうだ。どうせ誘拐は青木のしわざと見るにきまっとる。ただ、むこうが騒いでことが大っぴらになりゃ、慶喜公の御愛妾が一晩青木のところにいたということも公けになる。それでも騒ぎたてるほど、むこうは馬鹿じゃあるめえ」

「あっ、なるほど——これはますます悪の天才でごわすな！」

と、草堂は大声をはりあげた。

「草堂さん、その悪の天才ってえのはやめてくれねえか」

と、青木がふきげんそうにいったとき、

「お前さん、それじゃあそのお部屋さまを、手つかずでお返し申すつもりかえ？」
と、雲霧お辰が口を出した。
「おや、おめえ、おれに手をつけろってえのか」
「いえ、そんなことはあたしゃ承知しないけど——何だかもったいないからさ。とにかくそうして縛って置いとくだけじゃ、あんまり芸がなさすぎるじゃないか。もっとみなに眼の法楽をさせておやりよ。あとでいうにいえない目にあわせてやりゃやるほど、もっとむこうを黙らせることになると思うよ。……とりあえず——」
お辰も少し酔っているらしく、トロリとした眼にこの女特有の残酷なひかりが浮かんで、
「あたしゃ、どういう身体ならお大名のお部屋さまになれるんだか、いちど勉強のために拝観したいんだよう」
と、いった。
「ふうん、裸か」
青木弥太郎も妖しい眼つきになって、
「じゃ、ひとつ慶喜公御部屋さまの裸を拝ませてもらうとするか。だれか縄をとけ」
と、あごをしゃくった。
そのとき、配下の一人がかけこんできて、
「おいっ……土蔵にとじこめておいたあの二人がおらんぞ！」
と、さけんだ。

彼らは眼前の獲物の華麗さにのぼせあがって、それまですっかり二人の囚人のことは忘れていたのだ。
「いま、小便をしてて、ふと土蔵の土戸がひらいているのに気がついて、はてなとのぞきにいったら、二人とも姿がないのだ」
「二重の戸になっておるのに、はてな、どうして逃げた？」
と、草堂万千代が首をかしげたとき、どこかでただならぬ音響がした。
水でもたたきつけたような音だ。風雨の夜だ、とは知っているが、雨の音にしても変だ、と首をひねるいとまもない、一瞬に南側の障子が、雨戸があるのにくわっと赤くなった。
「火事だ！」
「火事だ！」
一同は仰天して総立ちになった。

十二

この元料理屋「小倉庵」であった建物は、奥庭こそ深いが、表はむろん往来に面して、左右ともすぐ近く家がたちならんでいる。しかしここが悪党の巣となって以来、日夜ぶっそうな連中が出入りし、傍若無人な放歌高吟をやるので、両隣とも逃げ出して、いまは空き家になっている。
火事はその南隣から発した。——と、知ったときは、その火はたちまちこちらの雨戸へ、つ

いで縁をこえて障子へ吹きつけていた。燃えひろがる、などという時間的経過はない。最初から隣一軒ぜんぶがいっぺんに炎上したような凄まじさであり、はげしい南風がその炎のかたまりをこちらへたたきつけてきた案配であった。

新門一家の連中が、今夜の誘拐者は青木一派だとかぎつけて、あるいは今夜にもおしかけてくるかも知れぬ、その場合は逆になで斬りに――と考えていためんめんも、これには仰天して、なだれを打って玄関のほうへ逃げた。

そのあいだにも、つまずき、伏しまろび、

「熱っ、熱っ」

と、火の粉をはらうていたらくだ。

さすがの青木弥太郎も、雲霧（くもきり）お辰と手をとって逃げ出したが、からくも弥太郎は、座敷にまだ縛られたまま残された女人に気がついて、ひき返して、これを横抱きにした。

そのとき、燃えている障子を蹴破って、二人の男が飛びこんできた。

「野郎、逃げるなっ」

すでに長脇差（ながどす）をぬきはらった国定龍次であった。

「うぬか！」

と、弥太郎がさけんだのは、この火事は放火で、その火つけ人がその男であったか、ということを知っての驚愕と怒りの声であった。

彼は女のからだをほうり出し、抜刀して迎え撃った。

その女のからだを、もう一人の男が抱きかかえて逃げるのを見ても、かえりみるいとまもない。

「悪党、くたばれ！」

真一文字に若者は斬りこんできた。

あやうくこれをかわしたのは、青木弥太郎なればこそだ。男谷下総（おだにしもうさ）直伝の腕におぼえがある。

つんのめる相手を、猛然と追い打とうとした弥太郎に、ざあーっと火の粉が吹きつけた。

「熱っ」

思わず片手で顔をおおって立ちすくむのに、独楽（こま）みたいに回った龍次が、

「くわっ、くわーっ」

怪声を発し、これは熱さには無感覚のごとく、また襲いかかってきた。

右肩に一撃を受け、青木は刀を投げ出した。もう無念も怒りもあらばこそ、飛びめぐる炎の旗の中に彼は背を見せた。

こけつまろびつ逃げるのを、

「待ちゃがれ」

追おうとして、龍次は立ちどまった。

すぐ横のほうに、ぬうと立っている影を見たのだ。

一目見て、髪を逆立て、

「てめえか！」

と、龍次はさけんだ。

もうふすまもたたみも燃えあがっている中に、ふところ手をしてこちらを見ているひげの浪人であった。

「やはり、やったのう」

と、口ひげの下で白い歯を見せた。

反射的に龍次はぱっとうしろへはねとんで、

「こんどは負けねえぞ、き、きやがれ！」

と、わめいた。

「おまえの目的は達したろう。それなのに、ここで焼け死ぬのは馬鹿げちょる」

と、草堂万千代はいった。

「それより、早く火を消せ。火つけは、火あぶりだぞ」

といって、彼は火光の中を玄関のほうへ出ていった。

まわりを見まわすと、お鳥の方と、それを抱いた河合宗之助の姿はない。ぶじに逃げたらしい。

——この火事は、無人の南隣の家に、卯之助たち鳶の者とともに十数樽のあぶら樽を運びこんで、それをぶちまけたあと放火したものであった。

龍次は北隣側の障子や雨戸にまだ燃えていない一画があるのを見て、そこにからだをたたきつけて外へころがり出した。

それでも、もうたもとに火がついているありさまであったが、さいわい吹きなぐる雨がそれを消してくれた。

外は雨のみならず、嵐に近い風になっていた。その風ゆえのこの猛火であったのだ。

往来には数十人の鳶の者がかけまわっている。

路上にたおれている影がいくつかあるので、かけよってみると、それは青木一派の浪人や遊び人らしかった。——青木一党は、新門一家のなぐりこみなら防戦に自信があったのだが、突然の火事には胆をつぶし、なすすべもなく逃げ出したのだ。

外に出て、新門一家に気づき、さてはとふるい立って争闘にかかってきたやつもあったが、背後の炎に恐怖にかられたのと、刀さえ捨ててきた者が多かったのと、そこに大将の青木弥太郎が大怪我をしてよろめき出てきたので、たまらずみんな逃走してしまったのだ。逃げおくれたやつは、鳶口や掛矢に打ちたおされて、その始末だ。

が、それよりも火事がおおごとになった。

「あっ、いけねえ」

「もうここはだめだ！」

「あっちへかかれ！」

火はもう北隣にかかっている。

そこはあきらめて、さらに二、三軒向こうの家の打ちこわしにかかろうとする鳶の者たちのさけび声であった。

その家々には、人が住んでいる。――
「いのちにゃかえられねえ。みんな追い出せ！」
往来にマトイをふりかざして、卯之助が声はりあげていた。
そこへ龍次はかけてゆくと、そのマトイをひったくった。
「あっ、何しやがるんだ」
卯之助は尻もちをついた。
「火事は隣でとめるんだ。見てろっ」
龍次はマトイをかつぐと、悪鬼のごとくかけ去った。
すると、火光に彩られた闇のどこからか、澄んだ女の声がながれた。
「あぶない！　あにさん、よして！」
しかし、すぐに北隣の家の屋根に、そのマトイをふりかざしている影が立った。
「火事はここでとめる。死んでも消すんだ！」
その足の下の家の一部はもう炎をあげて、バリバリと轟音（ごうおん）をたてている。雨をおとす空は真っ赤だ。そのマトイは烈風にたわみ、吹きなびいているが、男の両足は瓦に根をはやしたように動かなかった。
いつのまにか龍次は、新門のはっぴを着、頭に江戸の町火消し独特の三角の手拭いをかぶっている。
「みんな、逃げるなっ、を組の名にかけて火を消せ！」

空で彼は笑っていた。――実は、こいつをいちどやって見てえ、と夢みていたふるまいであったのだ。
火はその一軒を半焼しただけでくいとめた。
国定龍次がぶじでその屋根から下りてきたのを見て、音にきこえた「を組」の鳶たちも口をアングリあけたきりであった。……

十三

あくる日のひるごろだ。
浅草馬道の家で、新門辰五郎が龍次にいった。
「まだ足りねえかね」
「いや、きょうのところは、もうけっこう」
龍次は手の甲で口をぬぐった。彼はいまうなぎ飯を三人前たいらげたところであった。
実は昨晩、お鳥の方をぶじ連れもどしたあと、辰五郎は狂喜し、あらためて龍次に頭を下げ、さてお礼に何をしよう、ときいたら、とにかくうなぎ飯を食わしてくれ、それだけでいい、という返事であったので、あきれながら食わせた。すると、たちまち五人前たいらげて、そしてきょうの三人前だ。
「ところで、国定の」
と、辰五郎はいい出した。

「おめえさん、ばくち打ちにしておくにゃもったいねえ。このまま、江戸の町火消しにならねえかえ？」
「町火消し……いや、あんな熱い稼業はごめんなすっておくんなせえ」
この返答には、辰五郎も破顔した。
「しかし、おめえさん、おれんところに仁義を切りにきたじゃあねえか」
「そりゃ新門の親分を……上州大前田の栄五郎親分などと同じ格の貸元だと思ったからで」
「おめえさん、同じ上州だが、大前田のを知ってるのか。いや、それほどばくち打ちが好きなら、むろん知ってるだろうな」
「そりゃ……、いや、あわわ」
と、龍次は口に手をやって、
「お、大前田の親分はね、きくところによると長脇差(ながどす)もささねえ、仏のような和合人とかいわれてるそうで、そ、そんなのはおれの歯に合わねえから、はじめから願い下げにいたしやした」
と、いったが、また、
「ところで親分、お、大前田の親分について、な、何かおききになってることはござんせんか？」
と、心配そうにきいた。
「何かとは、何だ」

「ええ、その八州取締のお役人と何かあったとか、そ、それでつかまったとか……」
そのことだけは、龍次のいちばん気がかりなことであった。
「別に何もきいたことァねえな」
辰五郎は首をかしげて、
「おめえ、いま大前田のとは何のかかわりもねえようなことをいったが、何かあるのかい」
「いえ、あわわ」
龍次はまた口をおさえ、
「なに、同じ上州の人だから、ふっと思い出しただけで……せ、せっかくばくち打ちの大親分になりながら、和合人なんて呼ばれるようになっちゃあしょうがねえ」
「おめえ、ばくち打ちじゃ、だれがいちばんえらいと考えてるんだ」
「そ、そりゃ、おやじの忠治でさあ」
辰五郎はにが笑いした。あれを見本にされちゃあかなわないが、しかし昨晩と一昨晩の、忠治ならかくもあらんと思わせる龍次の働きぶりを思い出すと文句はいえない。
「ところで、親分、や、やっぱり京へおゆきですか」
と、龍次はいった。
きょうこれから、あらためて娘を一橋家にとどける。こんどはまちがいのないように、辰五郎自身が送ってゆく、そして数日後、お鳥の方が京へゆくとき、それも辰五郎が何十人かの乾分(こぶん)とともに護衛してゆくことにした、とは、さっき聞いたことだ。

「しょうがねえ」
「いや、江戸一番の大親分新門辰五郎が、自分の娘をお大名のオメカケにして、そ、そのお供をして東海道五十三次をやろうたァ、ナ、ナ、ナサケねえ話でござんすねえ。昔、大名火消し相手に大ゲンカしたってえおひとが……どこで、そう一生が狂っちまったんだか……」
――これは無遠慮というより、悪罵にちかい。
が、この上州からきた若者の眼があまり真率なので、さしもの辰五郎が怒る勇気を失っている。
「おれはばくち打ちの親分じゃねえつもりなんだが……」
辰五郎は憮然とした顔で、
「とにかくおめえさんにゃ、かなわねえよ、あはは」
と、むりに笑いすてたとき、卯之助が呼びにきた。
「頭取、支度しておくんなさい」
娘を一橋家へ送ってゆく支度のことだ。辰五郎はほっとしたように、
「それじゃ、おれは出かけるぜ。ま、ゆっくりしていてくんな」
と、立ちあがって、部屋を出ていった。
龍次が黙って、手近の笠や荷をひきよせるのを見て、
「おや、国定のあにい、どこへゆくんだ」
と、卯之助がけげんな顔をした。

「旅へさ」
「へーっ、うちにいねえのか」
「辰五郎親分は近いうち京へゆきなさる。そ、それにだいいち、渡世人じゃあねえうちに、わらじをぬいだってしょうがねえ」
「そりゃいけねえ、あれほど働いてもらって、このままおさらばするなんて……」
卯之助はあわてふためき、
「龍次兄い、江戸の町火消しにならねえか？ けさからみんなと話してたんだ。おめえさんがやってくれるなら、音にきこえた新門のマトイを、おりゃすぐにわたしたっていいといってたんだ」
「いや、おいらは、と、渡世人の修行に出て来たんだ。あの助ッ人も、おいらとしちゃあ、渡世人仲間としてやったんだ」
「そういわれると困るが、しかし、このままじゃあ、こっちの気がすまねえ」
「なに、シロウト衆相手の助ッ人なら、いま頂戴したうなぎめしで充分でござんす」
龍次は皮肉をいっているのではない。大まじめな、残念無念の顔つきであった。

十四

ウロウロする卯之助をしりめに家を出る。
家の前には、すでにかごが置かれ、そのまわりや道の両側には、新門一家の鳶(とび)の者たち、女

たちがうやうやしく地面にひざをついていた。女たちには近所の女房連も加わっているらしい。
笠を小わきに、合羽を肩にかけて出ていった龍次は、その中に河合宗之助の姿を見つけた。彼もまたひざをついていた。
龍次はそのうしろにいって、腰をかがめて、
「河合さん、娘さんがいっちまうようだが」
と、小声で話しかけた。
「黙ってお見送りするつもりですかい？」
宗之助は答えず、ただ顔をあげて戸口のほうを見た。
入り口から、お鳥の方と、辰五郎が出てきた。
初夏の白い光をあびてお鳥の方は、昨夜あんなことがあったとは思われない――あのむざんな姿など嘘のような高貴な美しさにかがやいていた。
「河合さん、さらって、か、かけ落ちしねえか」
と、龍次はささやいた。
河合宗之助は答えず――魂を奪われたようにそっちに見とれている。
昨夜、いのちがけで炎の中からお鳥の方を救い出し、用意のかごでこの家に連れもどしてから、宗之助がその昔の恋人ともいちども会ったことがないことは龍次も知っている。
龍次はふしぎにぶじであったが、河合のほうは、せっかくの男前が、髪も焼け、顔の左半分に赤いまだらがひろがっている。のちの言葉でいえば第一度火傷というやつだろう。

「そんなにまでつくして、タダ働きとァ間尺に合わねえ。河合さんがさらうなら、こ、こんどはおいらも手伝ってやるぜ」
と、龍次はけしかけた。半分は冗談だが、半分は本気だ。
お鳥の方が、ちらっとこちらを見た。足がとまった。
が――それだけだ。
気のせいか、目礼したようにも見えたが、表情になんの変化もなく、そのまま彼女はかごのほうへ歩み寄る。
河合宗之助のほうがかえって頭をひくく下げて、それっきり石のように動かなかった。
やがてかごは、父親の辰五郎以下新門一家に護られて、しずしずといってしまった。
見送りの人々が、やっとがやがやと散りはじめた中に、
「けっ、どっちもどっち、な、なに考えてるんだかさっぱりわからねえ」
と、龍次の嘆声がきこえた。
「お、男が女に惚れたら、ちゃんとそういってやったらどうだい。女は、よろこぶぜ。――」
「何をえらそうなことをいうのさ！」
どこかで、声がした。
龍次はふりむいた。
散ってゆく近所の女房連の中に立ちどまって、じっとこちらをにらんでいる笠の下の顔をおりんと認めて、

「たはっ」
と、龍次はさけんだ。
同時に三尺もとびあがって、一目散に逃げ出した。——
あとで考えると、べつに逃げ出す理由はない。
それどころか、おりんに礼をいわなければならないことがある。
きのうの晩——龍次が卯之助から「を組」のマトイをひったくって火事場のほうへかけ出したとき、どこかで、「あぶない！　あにさん、よして！」という、きぬを裂くような声がした。のみならず、燃える家にはしごをかけてかけのぼろうとする彼に、走り寄って頭から、ざぶっと手桶の水をあびせてくれた者がある。
雨はふっていたけれど、あの一杯がなかったら、屋根の上で、もろに炎を受けて、全身燃えあがっていたかも知れないと思う。——むろん、それはおりんであった。
そのことを思い出したのは、一町も走ってからのことで、なぜ逃げ出したのか、自分でもわけがわからない。
「男が女に惚れたら、ちゃんとそういってやったらどうだい」とタンカを切った鼻ッ先に、「何をえらそうなことをいうのさ！」とやられて、あっと虚をつかれた思いで飛び上がって走り出したのだろうが——自分でも、よくわからない。

十五

あくる日の昼すぎ。——
三度笠をかぶった龍次は、九十六間の両国橋のまんなかあたりのらんかんに両ひじついて、ボンヤリと河を見下ろしていた。
隅田川の流れに興味を持ったわけではない。そこで動けなくなってしまったのだ。彼の胃ぶくろはからっぽであった。
新門一家のためにあれだけいのち知らずの大あばれをやって、結局彼は一文の助ッ人代（すけっと）ももらっていない。何もなければ、あとで卯之助がわらじ銭でもおしつけたかも知れないが、あんな事情ですっ飛んで逃げてしまった。いやいやその前に、「シロウト衆相手の助ッ人なら、いま頂戴したうなぎめしで充分でござんす」なあんて、ばかに恰好いいせりふを吐いた手前、とうていわらじ銭などもらえたものではない。
これが江戸以外なら、その土地土地に大小のばくち打ちの貸元がいて、そこに仁義を切りにゆけば一飯にありつけるけれど、この江戸では新門辰五郎以外にこれといった親分が思い浮かばないので、こうなると立往生のほかはない。
実は昨晩も彼は、浅草の、店をとじた茶屋の裏手の軒下に、合羽（かっぱ）をかぶって寝た始末だ。
「こらこら」
ふいに肩をたたかれた。
ふりむいて、
「野郎！」

龍次はのけぞって、らんかんから落ちんばかりになり、反動で前に飛ぼうとし、前にその男がいるので、らんかん沿いに一間も横へすべって、長脇差に手をかけた。

「よすがよか、この人混みの中じゃて」

相手は笑っている。

片一方の手は黒紋付のふところへいれたまま、色あせたそのそでと、よれよれのはかまと、そして豪快な口ひげを河風にそよがせているのは例の浪人草堂万千代であった。

「おいは青木一派の用心棒はやめにしたよ。で、もうお前の敵じゃなか」

ケロリとしてそんなことをいわれても、おととい、きのう、この浪人と対決し、いちどめはもののみごとにやっつけられた龍次としては、髪の毛も逆立つのを禁じ得ない。

とっさに次の言葉も出ず、ただ長脇差のつかをひっつかんで、

「かっ……かっ……かっ！」

と龍次は、大目玉をむいて、のどのおくから異様な声を発している。

「いや、はじめからお前の敵じゃなか。水月でお前を気絶させたのは相すまんが、ありゃああせんけりゃ、お前が青木弥太郎にやられたからじゃ。おいはああやって、お前の命を助けてやったんじゃよ」

「な、何を――」

「それからな、お前とあの河合が土蔵にとじこめられたあと、土戸をあけて、とりあげた二人の刀を返しておいてやったのもおいじゃ」

「あっ……」

龍次は大声をあげ、じぶんの長脇差に眼をやった。

――そうか！　あのときだれがそんなことをしてくれたんだろう、と首をひねったが、それはこの男のしわざであったのか。

「な、なぜ、おめえさんがそんなことを？」

「お前を、国定忠治の子――加えて、どうも面白かやつじゃと思ったからよ」

草堂はまた白い歯を見せた。

「ああやってお前を逃がせば、きっと人質のお部屋さまを助けにくると見ちょったが、なるほど、やった！　しかし火消しの新門一家を使って放火するとは、思い切った兵法じゃな。いや感心した」

「そ、それほど思うなら、おめえさん、どうして自分であの人質を助けてやらねえんです？」

「おいは、青木の用心棒じゃからな」

「青木の用心棒が、ど、どうしておいらを助けてくれたんですかい？」

「そりゃお前を、面白かやつじゃと思ったからよ。……なんじゃや、どうどうめぐりで、同じことをいっちょるな」

のどをあげて、哄笑した。

いつのまにか、龍次は敵愾心を失っている。

彼は長脇差から手をはなし、草堂万千代のほうへ歩みよった。

何より龍次をとらえたのは、この人物についての不審と好奇心であった。

「草堂……さん、とか、いいやしたね」

「おや、お前、おいの名を知っちょるのか」

「へえ、河合さんからきいたんで……お前さんはいつか、て、天狗党の本陣にいなすったようだが……あの節は、どうもありがとうござんした。おかげで大前田の栄五郎親分の顔が立ちやした」

「いや、なに」

「あの天狗党にいたひとが、ど、どうしていま江戸で、青木弥太郎なんてえ悪党の用心棒になっていなすったんで？」

「おいは用心棒を稼業とする男じゃ。面白かと思や、どこのどげなやつのところでも用心棒となる」

また、からからと破顔した。

「その用心棒が、て、天狗党をお見捨てなすったんでござんすか」

「うん、ありゃあな、せっかく美濃までいったっちゅうのに、天狗党にとって主人筋の一橋(ひとつばし)慶喜公が出てきたら、急に混乱して、それを避けて越前に向かうっちゅう無意味な愚行に出た。真冬の山々を美濃から越前に越えるなんて、凍えて自滅のほかはなか。そこまではつき合えんから、おいは用心棒を辞退してスタコラ逃げ出したんじゃ」

「へへえ。……」

龍次は相手を見つめて、

「おいらの兄貴はどうしましたえ？」

「あ」

草堂万千代は、ふいに思い出した眼つきになって、

「そうじゃったな。あの千乗坊はお前の兄貴じゃったな。いや、おいは千乗坊にも無駄死はよすがよかと説いて、そのほか三、四人と逃げ出したのよ。で、中仙道を途中までいっしょにきたが、木曾路で別れて、それっきりあとは知らん」

と、首をふり、

「しかし、お前の兄貴は生きちょるぞ」

と、いった。

「そ、その兄貴のおかげで、おいら江戸へ出てくることになりやした」

と、龍次がつぶやくと、

「おう、それそれ、おいも、下野の山中で会った大前田の栄五郎親分の乾分(こぶん)が——しかも大侠客国定忠治の子と知った男が、突然江戸のまんなかの料理屋で、こっちの賭場荒らしをじゃまする助ッ人として出現したのには驚いた」

と、草堂も好奇心にもえた眼でのぞきこんだ。

「そりゃ、どげんしたことじゃ？」

で、龍次は、兄の千乗坊を捜索にきた八州取締出役(とりしまりしゅつやく)を斬ったことから自分が上州から江戸

へ出てきたてんまつを話した。

両国橋の上で立ち話というかたちの二人のまわりを、しきりにつばめが流れとぶ。

「ほほう。……」

さすがに、草堂は眼をまるくして、

「幕府の八州取締をぶった斬るとは、ムチャなことをしたもんじゃなあ。いや、呆れたやつじゃ。……しかしいままでのところ、上州でそんな事件が起こり、大前田の栄五郎親分とか、その要吉老とかがお仕置になったというような話はきいたことがなかぞ」

「そ、そうでござんすか。それなら、いいんだが――」

「そりゃ要吉老の狙い通り、八州の件は闇から闇へ、っちゅうことになったんじゃ。だいいち八州斬りの下手人のお前が、江戸へ出てあの通り大きなつらをして大あばれしちょるじゃなかか」

「そ、そうでござんすね」

「お前がまっすぐに江戸へきたのがよかったのかも知れん。江戸市中にゃ八州取締の手は及ばんことになっちょるんじゃ。江戸は町奉行所の所管じゃが、その江戸が――あの青木一派の横行を見てもわかるように、治安の上でいまや末期症状のていたらくじゃからな」

「へえ……？」

「あの青木弥太郎も、実は面白かやつと思っておしかけ用心棒になってやったが、その行状を見ちょると、あれもやけくその自滅寸前じゃな。そう見て、こっちも用心棒を願い下げにする

ことにした」

草堂はあらためて龍次をながめやって、にやっとして、

「で、これからは、お前の用心棒になっちゃる」

十六

「――ト、ト、ト」

龍次は奇声を発した。

「せ、先生が、おいらの用心棒に――」

いつのまにやら、相手を先生呼ばわりしている。

「おいらは、いまいったように、こ、これをしおに渡世人の修行に出てきた者でござんすから、よ、よ、用心棒なんかいりませんよ」

手をふって、

「貸元の旅なら知らず、おいらみてえな若え旅がらすで、よ、用心棒つれて歩いてるなんてきいたことがねえ」

「いや、お前はほうっとくと、何をするかわからん。無鉄砲なお前にゃ絶対に用心棒が必要じゃ」

草堂万千代はひとりのみこんだ顔で、

「さ、ゆこう」

「ど、どこへ?」
と、笑ってから、ふと気づいたように、
「どこへって、お前のゆくところへじゃ」
「いや、これからはお前さんが親分、おいはその用心棒なんじゃから、お前呼ばわりはいかんな。で、親分、これからどこへゆこうとしていなされたのじゃ」
「ま、下総あたりへいってみるつもりでござんしたが——」
「おう、下総か。あそこは遊侠で名高か土地でごわすな。笹川の繁蔵とか平手造酒、勢力富五郎とか飯岡の助五郎など、その名はおいもきいたことがごわすぞ」
「そ、そんな衆は、みんなとっくの昔に死んじまいやした。が、まあ、それぞれの跡目をついだ親分衆はおるでござんしょうが」
「親分が用心棒に敬語を使われる必要はなか。それはこっちが使わんけりゃならん。いざ、親分、お供つかまつる」
先に立って歩き出した草堂万千代につられて、フラフラ龍次も泳ぎ出したが、先刻から彼をとらえていた空腹がどっとよみがえった。
「いや、こ、困るなあ、先生」
龍次は青い息をついて、
「自分より、つ、つ、強え用心棒をかかえて歩く渡世人なんてありませんよ」
「そんなことはごわせん。平手造酒は笹川の繁蔵より強うごわした。だから用心棒なのでごわ

す」
「何にしても、おりゃ用心棒なんかいらねえんですよ、かんべんしておくんなさい、先生、せ、せ、先生ったら!」
横目で見て、
「泣くことはごわすまい。赤城山のからすじゃあるまいし、国定忠治のせがれが泣いちゃおかしか。——それに、その先生はやめてもらいたか。草堂の万とか何とか——何ならヒゲ万でもよか。ちょうど下総へゆくんじゃが、あそこは醤油の本場で、そげな名の醤油がなかったかな、さよう、ヒゲ万と呼んで下され。ただし、ちと濃口でごわすぞ。——」
ふと、龍次の鼻に、ぷうんと醤油のかおりがながれてきた。
錯覚ではない。醤油にみりん、それに何より香ばしいうなぎのにおいが。——
そこは両国橋を本所に渡ってしばらくいったところで、そこにも「うなぎめし」ののれんがひるがえり、それどころか店先でうなぎを焼いている光景さえ見える。うちわで炭火をバタバタあおいでいるから、いっそうにおいがもろに吹きつけてくるのだ。
龍次の足は動かなくなった。
四、五歩ゆきすぎて、ふりむいた草堂が、いぶかしそうに龍次のようすを見あげ、見下ろし、にやっとした。
立ち戻ってきて、
「親分、うなぎを食いもそか」

「食う銭がねえんだ！」
龍次は悲痛な声をはりあげた。
「銭がない？　あれほど新門一家のために奮戦死闘したのに、ありゃただ働きでごわしたか。それじゃ間尺に合わんが」
きのう龍次が、河合にいったことをいわれている。
「新門一家は、と、渡世人じゃあねえといいやがった。渡世人じゃねえやつから、わ、わらじ銭がもらえるか……」
草堂はちょっと感心した顔で、
「……なるほど、国定忠治――いや、龍次親分らしか」
「おいが、おごりもす」
「馬鹿野郎、よ、用心棒にうなぎをおごられる親分があるか」
「ほ、それじゃ、おいを用心棒とお認め下さったか。いや、親分のためとあらば、女房を質に入れても貢ぐのが渡世人の仁義――とは、親分も御存知のことじゃごわせんか」
「そ、そりゃ……そうだが……それにしても、用心棒にうなぎをおごられるたア、ナ、ナ、情けねえよ！」
龍次はほんとに涙をこぼしていた。
ほんとうにくやしくて、地だんだ踏みたいところだが、地だんだ踏む力さえない。
「なに、そういや、おいも食いたか。あのとろけるうなぎ、まっ白な飯にしみこんだ

タレ、それにかけたさんしょうの風味……ありゃ、江戸料理の第一でごわすなあ」
しゃべられている間も、胃ぶくろがかきむしられるような気がする。
「サ、サ、サ、いざまずあれへ――国定の親分！」
肩をかかえられて、うなぎめしののれんをくぐるのに、龍次はもう抵抗できなかった。

十七

約半刻後。
ぱっと裂くようにのれんをはねのけて、龍次が現れた。
「やい！　どいつでもこいつでもかかってこい！」
さっき抱きかかえられるようにして、息たえだえにはいっていった男が、えらい変わりようだ。もっとも、一本つけてもらって、ほっぺたはまっかにひかっている。
彼は、うなぎめしを五人前たいらげたのである。
「……と、いいたいところでさあ、ヒゲ万先生！」
つづいて出てきた草堂が、
「先生はやめることにしたはずじゃごわせんか、ウーイ」
と、これもいい顔色だ。
「それじゃヒゲ万――やっぱり呼びすてじゃ申しわけねえ、せめてヒゲ万先生と呼ばせてくんな――し、しかし、やっぱり人間の用心棒は荷になるよ、いっそうなぎでねじり鉢巻して歩い

たほうが、おいらにゃ力になるんだが。……」
　首をひねって、
「しかし、こ、こうなりゃそれこそ一飯の恩義ができた。お前さんの言い分もことわるわけにもゆかんしなあ。……」
　草堂は破顔した。一飯の恩義で用心棒になる、という論法ならわかるが。——
　と、龍次はふと両国橋の方角を見て、
「あっ——まだついてきやがる」
　と、あわてた表情になった。
　草堂もそっちに眼をやったが、明るい初夏の日ざしの下に波のようにゆきかう町の人々だけだ。
「何がついてくるのでごわす」
「お、女なんだが——」
　と、龍次は当惑したようにつぶやいたが、ふと手を打って、
「そうだ、ヒゲ万先生、や、やっぱり用心棒になってもらおう」
　と、さけんだ。
　そして、その娘がおりんといい、大前田栄五郎の養女であること、自分がさっきいったような事情で股旅に出たあと、おっかけてきたこと、渡世人修行に出た自分がそれとベタベタラ同行するわけにはゆかないこと、またおりんのほうもそれは充分承知で、だからあんなに離れ

てついてくること——などをしゃべった。
「ほほう。……あれが、でごわすか。とんだ安珍清姫じゃが、しかし見たところ、なかなかよか娘さんじゃごわせんか」
　ヒゲ万先生はしげしげと遠方を見すかして、
「なるほど、立ちどまって、近づいてきもさんな。……もっともおはんの無鉄砲ぶりは心配じゃ、あっちのきもちもよくわかる」
「ね、ヒゲ万先生、おいらの用心棒はいらねえ、あ、あっちの用心棒になってやってくんな」
「ほ、あっちの——？」
「どうか、お願えだ。お、おいらはそのことだけがちょっぴり気がかりだったんだ」
　草堂はちょっと考えて、
「承知してごわす。もっとも、おはんの用心棒になるっちゅう方針は不動のものでごわすが、それじゃ、ゆきつもどりつ向こうの用心棒も相勤めよう。……しかし、おかしな仲でごわすな。いったいこれからあの娘さんをどうするつもりでごわすかな」
「ど、どうするつもりか、おいらにもわからねえ。ただ、いまんところはおいら、それどころじゃあねえんだ。さ、ゆこうぜ！」
　龍次は颯爽（さっそう）と歩き出した。

総州

一

　ギョギョ、シー……、ギョギョ、シー……

　芦のなかで、数羽のヨシキリがまた鳴き出した。——そこにさっききた人間がいなくなったと思ったらしい。

　しかし、その二人の人間はすぐ近くの河原にまだいた。

　しかも二人は、武器を持って相対している。一方は刀、一方は青竹だが——この炎天の下に、まるで凍りついたように動かない。息さえしていないように見える。それでヨシキリが鳴き出したのだ。

　長脇差（ながどす）をかまえているのは、龍次であった。物干竿ほどの太さだが、竹の棒で向かい合っているのは、草堂（そうどう）万千代であった。

　凍りついたように見えるばかりでなく、その通りに感じているのは龍次だ。しかし、顔はもとより、全身、金太郎みたいにまっかになっている。

　その対決の姿がどれほどつづいたであろうか。龍次には、半刻ほどにも感じられたが——。

　ヒゲ万先生のヒゲがそよいだ。河風のせいか、それとも笑ったせいか。

「ゆうどう……」

　肩で息をして、はじめて龍次がうなり声を発した。

　ヨシキリが驚いて、ぱっと飛び立った。

「からくっ」

　鞠（まり）のように跳躍して、まっこうから斬り下ろす。

　戞然（かつぜん）！

　あたかも、はがねとはがねが打ち合ったようなひびきがして、空中に飛んだのは龍次の長脇差小松五郎のほうであった。

　地に落ちるまでに、相手の青竹は彼の胴をなぎはらっている。

　なぎはらう、というより、かるくあてた程度であったが、まるで刀身のみね打ちでも受けたように、龍次は河原の上に落ちて、そのままへたばっていた。

「よかよか、ここのところ太刀風に、だいぶ凄味がついてきもしたよ」

　草堂が、なぐさめるように声をかけた。

　——いつか、江戸の料亭でみね打ちを受けて悶絶したときとおんなじだ。あれから全然変わっていねえ、まるで空にほうり投げた西瓜でも切るようなもんだ。

　龍次は身を起こし、じいっとあらぬ宙を見つめていたが、くやし涙のにじんだ眼を、ぎらっとあげて、

「ヒゲ先生……いちど、せ、先生のほうも、抜身でやってくれねえかね」

と、いった。

「そっちが青竹なんかだと、ど、どうしても本気になれねえや」

「そ、それでもいいんだ」

「どうも負けん気の人でごわすな……親分はまだはたち、型だけの馬庭念流を学んだからといって、薩摩でいちばん強かといわれたおいに、五年や七年で叶うわけがなか。くやしがるのはまだ早すぎる」

ヒゲ万先生は笑いながら、飛んだ長脇差をひろってやって、龍次に手わたす。

大利根河原の夏のまひるであった。

ここで龍次はヒゲ万先生に稽古をつけてもらったのだ。

いまがはじめてのことではない。――江戸を出てから幾十日か、下総（しもうさ）にはいってから二人は、猿島、結城あたりをへめぐり、やがてまた利根川沿いに、川を南北に縫うようにして股旅をつづけてきたのだが、その間、いくたびか龍次はヒゲ万先生に挑んでは、こういう目にあわされている。

しかも、こっちは真剣、向こうは路上でひろった棒きれや、手近の藪から切りとった竹で相手をして、まるで、子供あつかいなのだ。

この剣術修行のあいだ、龍次が、

「ゆうどう……からくっ」

という掛け声を出しはじめたのは、おやじの忠治の戒名「遊道花楽居士」を唱えて、その念力を受けたいと思いついてのことであったが、いままでのところ、何の効験もない。

「だいいち、渡世人がそげに強くなったら、侍が困る。――」

と、いいながら、ヒゲ万先生は背を見せて、芦のむこうにまんまんとながれる大利根川を見わたして、

「さっき通ったのが笹川村じゃとすると、例の平手造酒（みき）などが死んだっちゅう――笹川一家と飯岡一家の大デイリのあった河原は、ここらあたりじゃなかか？」

と、ふりかえった。

「飯岡一家は何そうかの船でこぎのぼってきてなぐりこみをかけたっちゅう。――ところで、そのころはまだおはんのおやじ忠治どんも生きとったんじゃなかか」

「生きてるも何も、そ、そのころおいらを生んだんだ」

悄然としていた龍次は、急に元気を回復して、夢みるような眼を、利根に白い影をおとす雲のむれにさまよわせて、

「思えば、そのころは、ゆ、遊侠の世界もハデなもんだったんだなあ。……」

と、嘆声を発した。

二

龍次がいまそんな嘆声を発したのには、この下総(しもうさ)一帯を歩きまわって見て、あちこちにばくち打ちの貸元はあるけれど、どこもここもお話にならないわびしさ、粒の小ささが感じられたからだ。

そこに一宿一飯のわらじをぬぐ。

はじめ、おことわりの表情を見せていた貸元たちも、龍次の仁義の切り方があんまり威勢がよくて、芝居のようにメリハリがきいているのと、それにくっついている用心棒と名乗る浪人が、色あせた黒紋付によれよれのはかま姿ながら、人品骨柄いやしからず、りっぱな口ひげをそよがせているのとで、みんな、ほほっと気をのまれて泊めてしまう。

決して宿屋のような待遇ではない。

飯は一食二杯ときまっている。出されたものは、一物も残さず食べなければならない。皿に残った醤油でさえきれいになめてしまわなくてはならない。魚の小骨などは紙につつんでふところにいれ、あとでそっと捨てる。

寝るのも自分の着ている下着のまま、それも夜中いかなる大事が起こっても間に合うように、手甲脚絆(てっこうきゃはん)はつけたままの姿で、ただ一枚のふとんに柏もちのようにくるまって寝る。しかもかならずうつ伏せに寝るのが定法で、あおむけになって寝ていると、見回りの若い衆に木刀でなぐられることがある。

そんな旅にん作法は、龍次も大前田村にいたころから承知している。それどころか、自分が股旅に出た意味はそんな修行をするためだと覚悟している。

だから、作法は守った。

面白いのはその用心棒たる侍の草堂万千代で、この豪快な人物も龍次にならって、同様の作法に従っている。

どう見たってこっちがりっぱなので、泊めた貸元一家では彼のほうを主客扱いにしようとするが、万千代はあくまでも若い親分を立てて自分はへりくだるのである。しかも大まじめだ。

龍次からすれば可笑(おか)しくってたまらないが——彼は自分自身の天性の可笑しみを知らない——草堂のほうは、この旅にん作法に大いに感服しているらしい。

「いや、えらかもんじゃ。当節は武士といえどもこげな厳粛な行儀を守るやつは珍しか」

と、いう。

この一宿一飯の恩義のために、なぐりこみをかける場合、かけられた場合、渡世人はいのちをかけて助(すけ)ッ人(と)にならなければならないのだが、龍次はこれを馬鹿馬鹿しいとは思わない。むしろそんな機会のあることを切願しているくらいだ。

が、さすがにそんなことはめったにあるものではなく、ふつうは野天ばくちの見張り番とか、あるいはばくちの貸金——これをホシという——の取り立てとかをたのまれるのがオチで、たのまれたらそれもことわれないのが一宿一飯の仁義だ。それは承知しているが、もしそういう依頼があったら大弱りだと、龍次はそれだけは心配のたねであった。

ところで残念ながらなぐりこみの機会はなかったけれど、それでもあまりに威風堂々たる草堂万千代を見て、しばしば、

「先生は相当ヤットウのほうはおやりで？」

と、向こうからきかれることが多い。そんな場合、

「まあな」

と、草堂がまんざらでもない顔をしてひげをなでるものだから、それなら乾分(こぶん)に稽古をつけてやってくれとたのまれることがある。

それで何日も一つところにとどまることが何度かあり、江戸を出てからまだこの下総あたりをいままでうろついていたのは、主としてそのためであった。

奇妙なことに鍬(くわ)のひとふりもいやがりそうな三下どもが、この裏庭での剣術教室には甚だ出席率がいい。

龍次から見ると、ふざけ半分、面白半分としか思われないが、

「いや、馬鹿にしちゃいかん。このごろの江戸の御家人なぞ、三味線なら知らず剣術修行というととうていこれほどは集まらん」

と、ヒゲ万先生は感心したようだ。

それはそれとして、この一帯のやくざ一家は、どこも甚だ冴えない印象だ。——中には、出された食事が飯にたくあん二切れなどというところもあった。

この笹川にも、めぼしい親分はいない。笹川のやくざの花の時代は笹川の繁蔵で終わったらしい。

——で、その村を何ということもなく通りすぎて、さびしい河原でまたヒゲ万先生に稽古をつけてもらったわけだ。

あちこちのやくざに教えるときは、「親分」の面目もあるから、龍次はそっくりかえって「検分」しているだけだが、街道の道すがら、適当なところでこういうトレーニングを受ける。

龍次は、その下総の旅はそれだけに意味があるような気がしてきた。

で、いまここが、その昔の笹川一家と飯岡一家の古戦場のあとではないかと思われるにつけて、彼は俳句なんか知らないけれど、「夏草やつわものどもが夢のあと」の感慨をもよおさないわけにはゆかなかった。

三

やがて、街道にもどって利根川沿いに歩きながら、

「それにしても先生も、も、物好きだなあ！」

と龍次はいった。

「何が？」

「先生みてえなゴーケツがよ、浪人してるのさえもってえねえのに、何が好きでおいらみてえな若僧にくっついて、こんな田舎をほっつき歩いているのさ」

「何が好きで、というが、その通り、龍次親分が大好きじゃからでごわすよ」

そういわれると龍次もうれしくなる。それにこの風来坊のようなヒゲ万先生は、自分の用心棒になる前に、天狗党や青木一派の用心棒をやっていたのだ。
そういえばいつか、おいは用心棒を家業とする男じゃ、面白かと思や、どこのどんなやつのところでも用心棒になる、とかいってたが、よほど用心棒が好きな男にちがいない。
白帆の船がゆききするまんまんたる流れに沿って、一見のんきそうな二人の旅はつづく。まぶしいばかりの入道雲を背景に、ユラユラとゆく渡世人の三度笠と、浪人の深編笠は、大利根ののどかな風物詩の一点景に見える。
いちど、あるところで、龍次はふりむいて、
「あ、まだついてきやがら」
と、つぶやいた。
おりんだ。
「ふしぎでごわすな」
と、草堂が首をかしげた。
「上州を出てから、もう三ヵ月か、四ヵ月たつのでごわしょう？」
「そ、そうなるかな」
「そのあいだ、ずっとおはんを追いかけ歩いて——たとえきちん宿にしろ、旅のついえはかかるはず。女の身で何百両という金が身につけられるわけでなし、よくつづくもんでごわすな」
「そ、そういや、そうだな」

と、龍次も首をひねった。
「おいらにも、よくわからねえがね」
おりんの用心棒になってやってくれ——と頼まれて、あれから草堂はなんどかひきかえして、おりんに話しかけたのだが、はじめおりんはめんくらった顔をし、用心棒のことは、そんなものはあたいにいらないよ、と、はねつけた。
はねつけられても、またノコノコとやってきて話しかける、ものにこだわらない浪人に、おりんは次第に心を解いてきたようだが、といって、龍次といっしょに旅をしようとはしない。
が、いちど龍次が赤面したことがあった。
あるとき利根の河原で、龍次とヒゲ万先生は、着ているものをぜんぶ洗い、衣類は河原にひろげて石をのせ、ふんどしは水辺の木の枝にかけて、その木陰でひる寝をしたことがあった。二人とも、それこそ一糸まとわぬ丸裸になって、大の字になって寝たのである。
ふと河風が強くなって眼ざめて起きあがったのだが、枝にかけたふんどしを取ろうとして、はっと気がついた。
そのふんどしのはしが風に飛ばないように枝に結んであったのだ。
そんなことをしたおぼえはない。——だれがやってくれたんだろう。
おりんだ！　おりんのほかにそんなことをしてくれる人間はいない、と気がつくと同時に、その下に丸裸で寝ていた自分たちに想到して龍次は真っ赤になったのだ。
それはともかく草堂のほうもおりんにくっついてばかりいるわけにいかないから、依然、つ

かずはなれずの奇妙な三人旅がつづいているのだが、そういうわけでおりんが、どういう風にして路銀を工面しているのか、二人にとっては一つの謎であった。

いや、ひとの路銀のことなど首をひねっていられない事態になった。――

その翌日のひるすぎだ。

昨晩は銚子のきちん宿に泊まり、けさは大海と大河の波濤相うつ犬吠埼の壮観をながめ、海沿いに西へ。――

これが高さ二百尺という断崖が二、三里つづく。いわゆる屏風ケ浦の奇勝で、その見物客をあてにして、三軒ばかり茶屋やら一膳飯屋がならんでいる。

その飯屋で、おりんは崖のほうを見ていた。

さっきからその遠い崖の上で、龍次と草堂万千代が、白刃と青竹で相対している。もう何十回か見た例の稽古で、怒濤を眼下にしてたかぶった龍次が、また草堂に請求したと見える。

「へえ、あれが国定忠治のせがれか」

「そうよ、相手はその用心棒とかいうことだ」

ふと、そんな話し声に、おりんは箸をとめて、そっとふりかえった。

そこの飯台に、三人の男が酒をのみながら、これも縄のれんごしにそちらを見ている。上半身裸のやつあり、「大漁」と染めたはんてんだけをひっかけたやつあり――やくざとも漁師ともつかない風態の男たちであった。

「一方が竹のところを見ると、本気の斬り合いじゃねえらしいな」

「教えてるんだ。あの用心棒はめっぽう強えっていうぜ」

「これからあいつら、飯岡へゆくんだろ？　もし親分のところへきたらどうするんだ。飯岡一家にとって、国定ってえ名は禁句だぜ」

一人がすっとんきょうな声をあげた。

「あっ、きょうはちょうど飯岡で、先代の法事の精進落としの大花会がある日じゃあねえか」

「それじゃあ助五郎親分は、もうだれかからきいていなさるかも知れねえぜ」

「そうかも知れねえが……あいつら、ここで長脇差のふりだめしをやってるのがくせえ」

「そんなやつに、突然乗りこまれちゃ、泡食わあな。こりゃやっぱり前もって注進しておいたほうがいいぜ」

「そうだ、そうだ」

男たちは急に騒々しく立ちあがり、銭をおくのもそこそこに飛び出していった。

いまの話はなんだろ？

どうやら彼らの中のだれかが、利根川沿いに仁義を切りながら旅をしてきた龍次と用心棒の噂をきいての話にちがいない――と、おりんは判断した。

おりんはしばらく考えていたが、これも飯代を払って外へ出た。

崖の上では、稽古を終わって。――

「いや、は、腹がへっちゃあいくさはできねえ。ともかく、ひる飯にしよう」

と、龍次が息絶えだえに長脇差をさやにおさめ、

「うまい具合にあそこに飯屋があらあ」
と、汗をふきながら指さした。ヒゲ万先生が憮然たる顔をした。
「ところがな、親分、銭がなか」
「――えっ、ぜ、銭がねえ？」
龍次は口をアングリあけた。
「けさ、銚子ではたご代を払ったところで、ひとまず終わりでごわす」
実は、両人の旅の経済は、ヒゲ万先生一人にかかっている。
元来一宿一飯のわらじ銭だけでは、とうてい龍次一人の旺盛な食欲を満たすにも足らず、ただヒゲ万先生があちこちで剣術を教えるために少しおまけがついて、それで何とかしのいできたのだ。
ときどき龍次が、その貸元たちのところでやる手なぐさみに顔を出したこともあるが、さてこの若者は、ばくちは好きなのだが、例の昂奮熱中症で、すぐにのぼせあがってしまうので、あまりうまくない。うまくいかないどころか、まずたいていは負ける。
で、金のことは気にかかりつつ、
「いや、そのほうはおいにまかせておいて下され」
など、ヒゲ万先生が胸をたたいていうものだから、何となく大船にのったような気で旅をしてきたのだ。これでこの先生が用心棒になってくれていなかったら、どうしたろうと自分でも思う。

で、いま、金がないときいても、とうてい文句のいえた義理ではないが。――
「そ、そうと知ってりゃあ、こんなところで剣術の稽古に汗をながすんじゃなかったよ！」
龍次は悲鳴をあげた。
「タハハ、飯食う銭がねえときいて、いっそう腹がへってきやがった！」
「とにかく、きょうのところは、飯岡の助五郎親分のところへゆきもそ。それしか法はなか」
と、ヒゲ万先生はけろりといった。

四

――飯岡についたのは、その日の夕暮れ近いころであった。
このあたりから渺茫（びょうぼう）たる九十九里浜が南へつづく。
飯岡はその北端の大きな漁村であった。村というより町といったほうがいい。
ここに住む飯岡の助五郎は、博徒の親分であると同時に、漁師の網元でもあった。
ただし、例の笹川の繁蔵とやりあったのは初代の助五郎で、いまは二代目だ。
天保十五年夏の大利根河原の大デイリでは、笹川方は用心棒の平手造酒（みき）が斬死（きりじに）しただけで、飯岡方は多数の死傷者を出して潰走したのだが、助五郎はお上の十手をあずかるいわゆる二足のわらじをはいていたので、結局繁蔵のほうがゆくえをくらまさないわけにはゆかなくなった。
そして三年後、笹川に舞いもどったところを、飯岡方の乾分（こぶん）に闇討ちされて殺された。繁蔵の一の乾分勢力の富五郎も、その二年後、飯岡方に山狩りされて、みずから鉄砲をのどにあてて

死んだ。

そして、その初代助五郎は、六年ほど前にたたみの上で大往生をとげたときいている。

大利根河原のケンカといっても、龍次の生まれたころの話で、漠然と知っているにすぎない。それでも繁蔵が闇討ちされたこと、助五郎が二足のわらじをはいていたこと、などから、なんとなく笹川方を善玉、飯岡方を悪玉のように感じていたが、なにしろそれは先代のことだ。

カンカン照りの崖道を、休み休み三里近く歩いてフラフラになり、その飯岡一家に仁義を切りにゆくことは、もう文字通り背に腹はかえられない。

近づいてみると、博徒の親分のくせに、豪壮な、まっ黒な冠木門さえあり、そのあたりを十何人という男たちが、波に碇を染めたそろいのはっぴを着てウロウロしている。また、旅の渡世人らしい連中もいる。

何かあるな、と思ったが、もうがまんできない。

二人はその冠木門をはいっていった。

「やいやい、てめえたちゃ何だ」

中のひろい前庭で、乾分たちが立ちふさがった。予定外の人間だということに気がついたらしい。

「きょうは飯岡一家で行事があるんだ。呼ばれたお客以外は、はいっちゃいけねえ」

「へえ？」

龍次はキョトンとしたが、ここで放り出されては一大事と、作法通り、腰をかがめ、掌を上

に片腕をつき出し、脳天から出るような声でやりはじめた。

「おひけえなすって、おひけえなすって……」

みんな、かけ集まってきたが、こっちもとっさにキョトンとしている。

家の中から親分衆らしい連中がぞろりと出てきたのは、龍次が、

「手前生国、上州は国定村……国定龍次と申す、お見かけ通りのしがねえ若年者にござんす。以後お見知りおかれて、ごじっこんにお願えつかまつります」

と、切ない声をはりあげているときであった。

前に立った、三十なかばの角張った顔の男がふりむいた。これが二代目飯岡の助五郎であった。

「……ほんものかい？」

うしろの老親分がうなずいた。

「うん、昔おらの見た忠治にそっくりだ」

と、助五郎が首をもとにもどしてきいた。

「上州国定村の龍次っていやあ、国定忠治どんの息子かい？」

「へえ、不肖ながらせがれでござんす」

「それじゃあ、おやじの七回忌にきてくれたんだね？　かたじけねえ」

「へ？」

龍次は狐につままれたような顔をした。

「おれが二代目助五郎だが……先代の七回忌をやったのがちょうどきのうだ。で、見る通り、

関八州の親分衆がみな集まっておくんなすった。ところで毎年、おやじの法事をやった翌日の夜、精進落としの酒盛りと大花会をやることになってるんだ。つまり、きょうだね」

助五郎はへんな笑いを頰にきざんで、

「むろん、おめえさんにも出てもれえてえが、ま、飛び入りのひとだ。飛び入り衆の扱いは、まことにいいにくいが、法事に頂戴した御香料によってきめることになってるんだ。申しわけねえが、そいつを先にもらおうか」

うそっぱちだ。

しかし、毎年先代の法事の翌日に、大花会をもよおすのはほんとであった。法事に客を集める手段でもある。ただし、関八州の親分衆が勢ぞろいなんてうそだ。せいぜい下総（しもうさ）の、それも飯岡かいわいの小親分連中にすぎない。

が、二代目助五郎がこんなとっぴなことをいい出したのにはわけがある。

例の大デイリの二年前――笹川の繁蔵が大花会をもよおしたとき、それこそ関八州から奥州、東海の大親分衆が集まった。そのとき初代助五郎が虚勢を張って名代（みょうだい）をよこしたのを、来会していた国定忠治が、

「助ァどうした。いいか、大前田のとっつぁんでさえ何十里のさきから、わざわざお出ましになってるんだ。目と鼻のさきにいる助ァどうしてこねえ。……ここに名代をよこすたァ、助ァ病気か、くたばったのか。病気なら見舞い、死んだならおくやみ、ついでだから忠治が飯岡にいってやるから案内しろ」

と、面罵した。

忠治の口の悪いのはだれにも知られたことだが、このとき彼がここまで罵ったのは、飯岡の助五郎の不義理もさることながら、彼が二足のわらじをはいていることが気にくわなかったからだ。

関八州の親分衆の満座の中で、あかっ恥をかかされて帰ってきた名代の乾分からこのことをきいて、助五郎は卒中を起こしそうなほど怒った。

二年後に飯岡一家と笹川一家が大デイリをはじめたのは、この大花会に大親分衆を集めた繁蔵の声望に助五郎がおそれをなしたせいもあるが、このときの忠治の悪態への怒りが繁蔵にもむけられたものだ。

以来、飯岡一家では、国定忠治の名はタブーであった。

のちに忠治がはりつけになったとき、助五郎が「ザマみやがれ」と快哉（かいさい）をさけんだのはいうまでもないが、それでもなお忠治に対する不快感は消えない。そして、この初代が死んだあと、いまもこの一家ではその名は禁句になっていたほどだ。

ところで龍次は、そんな話を知らなかった。

そこへ、ノコノコと、その忠治のせがれがやってきた。――

赤城山や関所破りなどは知っているけれど、自分が忠治の子だなんてことを知ったのも、去年の暮のことなのである。おやじの一生の言行録などすべてを知るわけがない。常時殺気をあふれさせていた忠治のことだから、いたるところで右と大同小異の悪たれ口をきいたろうし、

だいいち彼自身がそんなことは忘れていただろう。
　龍次はぽかんと口をあけていた。
　助五郎はいった。
「評判の国定忠治どんのあととりとありゃあ、まず上座に坐っていただかねえと恰好がつくめえ。一つ、張りこんでもらいやしょうか」
　自分の言葉につりこまれて、手を出した。
「無え」
　と、龍次は答えた。
　顔がまっ赤になった。何が何だかわからないが、相手が悪意を持って、愚弄していることだけはわかった。
「そ、それが飯岡一家の作法か。そんな意地きたねえ、欲深の野郎にやる金は無え！」
「何を――それじゃあてめえは、飯岡一家の法事をからかいにきやがったのか！」
　あごをしゃくられて、どっと乾分たちがとりまき、龍次も反射的に長脇差のつかに手をかけたとき――そばの草堂が耳もとでささやいた。
「いかんいかん、親分、このすきっ腹で、これだけの人数を相手にあばれられるものか、おいも自信なか」
　そういわれて、龍次はさっきからへたへた崩折れそうなほどの空腹を思い出した。
「やい、国定忠治のせがれが、飯岡一家の法事に香料をといわれて立往生するのか」

昔かかされた恥の意趣返しだとみんな知っているはずだから、助五郎はわざと芝居がかった憎ていな顔をして、あこぎな口をきく。
　乾分たちが、どっと笑った。
「いや、お見それしもした」
　と、草堂が助五郎にむきなおって、一礼した。
「いずれ、御香料を持って、出なおして参る」
「いずれ？　精進落としの花会はきょうなんだぞ！」
　と、わめいた助五郎がふと門のほうを見て、ふしぎそうな顔をした。みんな、そっちをふりむいた。

五

　朱塗りのひらたい大桶を三つかさねて、片手を高くさしあげた向こうはちまきの男たちがはいってきたのだ。行列を作って五人。
「へい、お待ちどお――ごひいきの鮨松でございます。おあつらえの品をこちらに持って参りました」
　と、おじぎして、台所のあるほうへゆこうとする。鮨松は町の鮨屋だ。
「なんだと？　鮨を持ってきた？」
　助五郎は狐につままれたように、

「ま、待て、そんなものを注文したおぼえはねえぞ。おや、何か書いた紙がのっかってるじゃあねえか」
「へえ、注文になすったお方が、そう紙に書いてのせてってくれってんで――」
鮨屋の男は、三つがさねのひら桶を地に下ろした。そのいちばん上に日覆いのように、なるほど奉書紙がかぶせてある。それに、墨痕りんりと、
「飯岡の助五郎親分江　上州　国定一家」
「わっ」
と、さけんで飛びあがったのは龍次だ。
それくらいは龍次にも読める。が、彼の眼玉を射たのは、その紙の下からのぞいたもので――彼はその紙をはねのけた。
さしわたし三尺くらいありそうな朱塗りのひら桶に、ギッシリならべてあるのは、マグロ、鯛、エビ、イカ、赤貝、アナゴ、コハダなどの、色鮮やかなにぎり鮨で。――
「ま、まずおいらが、ど、毒味してやる」
と、ふるえ声でいって、龍次は二ついっぺんにつまんで、醤油もつけずに口にほうりこんだ。
「おや」
と、草堂（そうどう）が妙な声をあげた。
龍次のとった鮨のあとに、一両小判が金色にひかっているのに気がついたのだ。いそいで、別の二つの鮨をつまむと、その下にもまた一両小判が。――

草堂はつまんだ鮨を、これまた口にほうりこんだ。
どうやら桶の底には小判がしきつめられて、その上に鮨がならべてあるらしい。
「うん、こりゃ、なんちゅうこっちゃ。……うん、こりゃ、なんちゅうこっちゃ」
ヒゲ万先生はうなり声をたてながら、次から次へと猛烈なスピードで鮨を口にはこんだ。
そして、ほかの鮨桶――ぜんぶで十五個あるのを地面にならべさせた。そのどれもが、鮨の下からたしかに金色のひかりを見せていた。
「あつらえた人間はどげな人じゃ」
草堂は、鮨屋の一人の耳に口をよせた。
「へえ、若い娘さんでござんした。そのお方がこうしろと――」
「勘定はもらったか」
「へえ、たっぷり頂戴いたしました」
「ふうむ？」
そうきいただけで、ヒゲ万先生はまた鮨にとりかかる。龍次のほうはものもいわない。
二人とも大あぐらをかいて、二本の腕を使ってむさぼり食う。桶から口へ、まるで四本のピストンが回転しているようだ。
直径三尺はある大桶だから、百個くらいははいっていたろう。それを二人はみるみるほとんど食いつくして――
「親分、そげに食っていいおか」

と、やっとヒゲ万先生が顔をそっちにむけた。

「いいのかったって、こう腹が、す、す、すけ五郎じゃどうにもならねえ」

二人とも、だじゃれが出るまでに肉体状態が――従って精神状態が回復したのである。

この間、飯岡の助五郎も乾分（こぶん）も客人たちも、みな息をのみ、かっと眼をむいて、この豪華きわまる鮨と黄金と――二人の大食漢の饗宴ぶりを見下ろしたまま、声もない。

それをヒゲ万先生はちらっと見上げて、

「親分、ひとまずあっちにごあいさつされては、いかがかな」

と、注意を喚起した。

「ああ、そうだ」

龍次は正気にもどって、ぬうと立ちあがり、

「さあ、こ、これが国定一家からの先代飯岡の助五郎どんへの供養代だ。受けとれ」

全身、別人のように精気にあふれてどなったが、すぐににっこりして、

「いや、受けとっておくんなせえ。おうい、乾分衆、ごらんの通りのおてんとうさまの下の鮨だ。せっかくだから、一刻も早く食っておくんなせえ」

と、十四個ならんだ鮨桶にあごをしゃくった。

実は、この鮨の海と、いましがたの二人の食いっぷりのみごとさに、さっきから乾分たちは飛びつくような眼をして、生つばをのんでいたのだ。

「お、それじゃあいただけ」

「だれか醤油と皿を持ってこい」

「お茶もいるぜ！」

蛙の大群みたいに騒ぎ出して、てんでに鮨に手をのばす。法事にきていた親分衆までが鮨桶にくらいつく。まだ醤油がこないうちから口にほうりこみ、もう収拾がつかない。いや、それよりも。――

茫然と、ただひとり棒立ちになっていた二代目助五郎がやっとわれにかえって、この場合に、

「こらっ、鮨はともかく金をとったら承知しねえぞ！　金は香典だ。金はこっちによこせ！」

と、わめいたのは可笑（おか）しい。

龍次はどなりつけた。

「このけちんぼの、ごうつくばりの大べらぼうの、とうへんぼくのひょうろくだま野郎、それでも下総（しもうさ）で名高え飯岡一家の親分か！」

そっくりかえって高笑いしながら立ち去ろうとする龍次に、

「やい、ま、待て、このままでゆくってえ法が――」

と、手をさしのべる助五郎の口へ、鮨が一つ飛びこんだ。わっとさけんだ口へまた一つ――一間も離れたところで投げたヒゲ万先生の海苔巻だ。助五郎は眼を白黒させて棒立ちになった。

六

しばらくののち、龍次とヒゲ万先生は、たったと砂浜を歩いていた。南へ。――

西の平野の向こうの山影はもう夕映えに染まっているが、東のほうの海はまだ碧(あお)い。海の果ては巨大な円弧をえがいている。

犬吠埼で生まれてはじめて大海原を見て、龍次は眼をまろくして何時間も立ちつくしたが、ここで見る海はさらに大きいような気がする。その大海原のかなたから、かぎりもなく寄せてくる白い波の帯の、眼路の果てはかすむばかりの長大さ——ここは名にし負う九十九里浜であった。

白い海鳥が何十羽か飛んでいる。

「九十九里どころか、く、九百九十里あったって大丈夫だい」

龍次はそういって、懐中から小判を出した。

「は、腹もそうだが、路銀(ろぎん)もこの通り——あんな野郎にあれだけ香典をやるこたァねえから、五両とってきやした」

「そうか。おいは十両とってきた」

と、ヒゲ万先生も、三、四枚の小判を見せた。豪快な風貌に似合わず、ぬけめのない先生だ。

「それにしても、いよいよもってふしぎじゃて」

と、しげしげとその小判を見ながら、

「どうやらあの鮨はおりん坊のしわざらしかが……あれだけの金をどげんして所持しちょるのか？」

「打出の小槌でも……あ」

突然、龍次がさけんだ。

「あ、あそこをゆくのは、おりん坊じゃあねえか？」

あんまり雄大な風景の中なので、まばらにしか見えないが、旅人や、漁師らしい姿や、ゆきかう人影はけっこうある。

その中に、遠くトボトボと歩いてゆくのは、たしかにすげ笠をかぶり、風呂敷づつみをななめにしょったおりんらしかった。

二人はかけ出した。

追いついて、龍次は呼んだ。

「おりん坊！」

おりんはふりむいて、けげんな表情をした。

「おや、あにさん、飯岡に泊まるんじゃあないの？」

「いや、そのつもりで仁義を切ったんだが……妙なことになっちゃった」

「とにかく、おはんのおかげで助かった。かたじけなか」

ヒゲ万先生が頭を下げた。

「助け役の用心棒が、婦人に助けられちゃ面目なかことでごわす」

が、おりんはなおキョトンとしている。

実はおりんとしても——助五郎があんなふるまいに出ようとは想像のしようがない。また龍次と草堂用心棒が、金はあまりないらしいとは見ていたが、まさか一文なしの腹ペコのフラフ

ラだとまでは知らなかった。
　ただ屏風ケ浦の一膳飯屋できいた土地のごろつきの問答から、ここらで名高い飯岡一家でどうやら大花会がひらかれるらしいこと、その一家がどういうわけか国定忠治という名にあまりよくない感情をいだいているらしいこと、などを知って、そこへ龍次たちが乗りこんでいったらどうなるか――とにかく龍次たちに恥をかかせないように、という一念から町の鮨屋に飛びこんで、とっさにあんなはからいをしたにすぎない。
　おりんは、てっきり龍次たちはきょうは飯岡に泊まるものと考えていたのだが、そうでなかったところを見ると何が起こったのか。――
　それを問いただすより、おりんはなおとぼけとおす心理状態にあった。
「なんのことだか、あたいにゃわからないよ」
　と、おりんはいった。
「とにかく旅はべつべつの約束なんだから、あたいにかまわないで、さきへいって！」
　と、白いあごをつんとあげた。
　また、やってやがる、強情なやつだな――と、龍次がしかめっつらをしたとき、こんどは草堂がいまきた方角をふりむいて、
「や、追っかけてきおった！」
　と、さけんだ。
　なるほど北のほうから何十人か、砂けむりをあげてかけてくるむれがある。それが手に手に、

刀や櫂や竹槍をふりかざしている。
「いや、これはいかん、三十六計、逃げるとしよう」
　と、ヒゲ万先生がいった。
　さっき飯岡の助五郎のところをいい気持ちで立ち去ったのだが――一同餓鬼のように鮨を食いまくったあと、やっと馬鹿にされたことを思い出して、怒り狂った助五郎が追手をかけたものにちがいない。とにかく、大変な人数だ。
「おりん、ゆこう、ゆくぜ！」
　龍次はそう声をかけて、砂を蹴った。
　百歩ばかり走って、気がつくと、おりんがついて来ていない。
　ふりかえると、追ってきたやくざのむれの半分がおりんをとりまき、あと半分はさらにこっちに殺到してくる。
「せ、先生、どうしよう、おりんが――」
「いまの立ち話の姿を見て、こっちと仲間じゃと見たんじゃろうな。こりゃ、逃げるわけにゃゆかんな」
「に、逃げることァねえ。それじゃ、ひとつ、やるかね？」
　二人は仁王立ちになった。
「野郎、待ちゃがれ」
「親分をこけにしやがって！」

「もいちど飯岡にひきもどして土下座してあやまらせずにおくものか」
「それとも、ここでくたばるかっ」
もみあいながら、口々にわめくむれに、
「ゆうどう……」
と、龍次がうめいた。腹は満ち、全身殺気にふくれあがり、
「からくっ」
おたけぶと、敵に突入した。
小松五郎義兼（よしかね）はすでにぬきはらわれている。
たちまち血の風の中に、生腕が飛ぶ。臓腑が砂にぶちまかれる。つんのめっていったやつの首が砂をかむ。
まるで竜巻のような砂けむりを巻いて、大チャンバラがはじまった。返り血で龍次は燃える赤不動みたいになった。
ヒゲ万先生にかかっては犬の子あつかいだが、この程度のやつらが相手では、龍次甚だ快調である。
一方のヒゲ万先生は、波打ちよせるみぎわで、あっという間に七、八人を宙返りさせている。ただし、こちらは返り血一滴も浴びない。
——というのは、あとでわかったことだが、これはすべてみね打ちであった。が、やられたほうはそうは思わず、苦鳴をあげつつ、波がしらの中へしぶきをあげて泳いでゆく。みね打ち

にはちがいないが、悶絶するのが水の中では、いのちのほうは保証できたものではない。
「おういっ」
うしろで地だんだふんでいた飯岡の助五郎が、狼狽（ろうばい）の顔をねじまわして、
「こっちへこい！　こっちがてえへんだっ」
と、絶叫した。
と、彼の眼はかっとむき出された。——半分残って、娘をとりまいていた連中が、こはそも何が起こったのか、みな算をみだして向こうへ逃げてゆくではないか。……
「いけねえ、逃げろっ」
恐怖の突風に吹かれて、助五郎もそっちへ逃げ出した。それと見て、あと残った数人もこけつまろびつそのあとを追う。むろんその娘にかかわりあう余裕などない。
「はて、面妖な」
砂にまみれ、波にただよっているおびただしい屍骸や悶絶者の中に立って、ヒゲ万先生は小手をかざして首をひねった。
「こっちはええとして、あっちにかかった連中が、どげんして逃げ出したんじゃ。まさか短銃を持ってるわけでもなかろうが？」
おりんはこちらをむいた。別に短銃なんか持っているようすはない。何事もなかったかのように海風に吹かれて立って、ただ笠の下で花が咲いたようににっとした。

七

外房から内房にまわり、国定龍次と草堂万千代が江戸に帰ってきたのは初秋の風の吹くころであった。

新門辰五郎はあのあとまもなく娘を送って京へ上ったきりだということで、龍次は浅草のはたごに二晩泊っただけだ。

草堂万千代はその一夜、知人があるといってどこかへ出かけていった。まさか青木弥太郎のところじゃあるまいと思っていると、翌朝もどってきて、思いがけない話を伝えた。

あの悪旗本青木弥太郎は、あのあととうとう御用になったというのである。青木が怪我をしていたせいで逮捕できたのだが、それでも数十人の捕方が包囲しての大捕物であったという。

その青木の怪我というのは龍次の一撃によるものであったというから、おはんも青木が年貢を納めるのに一役買ったことになる、と草堂はいった。

ただし罪名は一橋家お部屋さま誘拐事件ではなくそれ以外の犯行で、これが十や二十にとどまらない。しかるにさすがは青木弥太郎で、十三貫の石を九枚抱かされるという大拷問を受けても、一切知らぬ存ぜぬでおし通していまに至っているという。

――これは後年の余談になるが、青木はついに完黙でおし通し、三年後の明治元年、幕府が倒れてはじめて釈放され、以来この実歴を箔にして女郎屋や料理屋、寄席を経営し「青木弥太郎懺悔録」などいう悪の回想録をものして悠々たる余生をすごすのである。

それはそれとして、龍次の頭にふっとあの河合宗之助のことが浮かんだ。

あのひとは、惚れた女を命がけで助けて、やっぱり殿さまにとられっぱなしになっちまったんだが、あれからどうしたろう？　これからどうして生きてゆくつもりだろう？

が、その思いも、ただ走馬灯のように頭の中を通りすぎただけだ。

それより龍次は、草堂がわざわざまた自分のところへもどってきたのがふしぎであった。

夜明け前に、また江戸からの旅のわらじを踏み出しながら、龍次がいった。

「先生、や、やっぱりおいらといっしょにゆくのかい？」

「ゆきもすよ。そげにウンザリした顔をすることはなか」

「ウンザリはしねえが……な、何ともハヤ物好きな人だと思ってよ」

「いや、まったく物好きじゃ。天下はいよいよ騒然として、侍たちゃみんな足を空にしてかけまわっちょるっちゅう時勢なのにのう」

と、ヒゲ万はからからと笑い、

「いま日本は夜明け前じゃ。きょう一日のことじゃなかぞ、時勢のことじゃ」

「へえ？」

「ところがおはんたちやくざは、まだ夜の世界に住んじょる。……そこが面白か」

何をいっているのかわからない。まして、何が面白いのかわからない。

龍次たちの足は、甲州へ向かっていた。

甲州

一

「さあ、どっちへゆきもそか」
と、草堂万千代がふりかえってきく。
秋草のみだれる路傍に、石の道標が立っていた。
「西、甲府まで一里十九丁、南、御坂峠まで六里」
とある。甲州街道石和の宿の手前であった。
「うん、やっぱり甲府の、二足のわらじが、き、気にくわねえ」
と、龍次は答えた。
「ひとまず、く、黒駒のほうへ仁義を切ろう」
いままでちょっと迷ってきたことだ。
甲府には有名な三井の卯吉という大親分がいるときいている。が、これがいわゆる二足のわらじをはいた貸元なのだ。
「黒駒村にゃ、黒駒の勝蔵ってえ若え貸元がいて、このごろ売り出し中ってきいたぜ。そっち

へいって見よう」
「御坂峠の方向でごわすな」
と、ヒゲ万先生はうなずいた。
三度笠と深編笠は、石和から笛吹川をわたって南東への道をたどってゆく。遠くびょうぶのようにつらなる御坂山脈の上から、白雪をかぶった富士のてっぺんが、ちょっぴり見えつかくれつする。
江戸を出たのは初秋のころであったが、途中あちこちにわらじをぬいだので、もう吹く風は晩秋のものといっていい。大盆地とはいえ、山国甲斐の風は、午後のお日さまはあかあかと照っているのに、どこかうすら寒い。
まわりはぶどう畑で、棚の葉はみんな茜色になって、カサカサと鳴っている。あちこち柿の実が赤くかがやいている。
「やはり、二足のわらじはきらいでごわすか」
歩きながら、草堂がきく。
「それをいうと、諸国の大親分の半分くらいは二足のわらじをはいておりもすが」
「そりゃわかってるけど、さ」
「ありゃ、公儀のほうも、実にうまかことを考えたもんじゃと、おいは感心しちょりもす。やくざにやくざを取り締まらせる——馬鹿とハサミは使いよう、っちゅうか、毒をもって毒を制す、っちゅうか。——」

「そ、そいつが気にいらねえんだよ」
龍次はぎろっと見あげて、
「先生、やっぱり、と、渡世人は馬鹿か毒かと思ってるのかね」
「ああいや、そ、それはひとによりもすな」
ヒゲ万先生はあわてて、
「三井の卯吉っちゅうのは、そげに評判が悪かごわすか」
「そ、そういうわけじゃあねえ。大前田のいろり話じゃ、評判はいいようだ」
龍次は憮然として、
「しかし、おいらのおやじはお上に刃向かい、捕り方に追いまくられ、あげくのはてに、は、はりつけになった男だからなあ。どうも、じ、十手捕縄（とりなわ）をあずかってる貸元ってえのは気にくわねえのさ」
「黒駒の勝蔵親分っちゅうのは、よかひとでごわすか」
「そいつァどうだか知らねえがな。なんでもその三井の親分に張り合ってる、い、い、威勢のいい男だときいたが――くわしいことァ知らねえ」
石和から、かれこれ一里ほど歩いたあたりで、
「腹がへったな」
と、龍次がいった。
まわりを見まわしても、両側はぶどう畑ばかりで茶屋など見あたらない。そのぶどうもみな

採りつくされている。――と、
「やあ、あそこに採り残されちょるところがありもすで」
草堂が指さした。
なるほど、棚がつづく下、三、四間さきに、まだ赤紫の房を垂れた一画がある。
「ぶ、ぶどうじゃ腹のたしにならねえが」
「しかし、無いよりゃましでごわすで」
で、二人が、棚をくぐってそこにゆき、ぶどうをつまんでいると、いま歩いていた街道の反対の方角から、ただならぬ足音がひびいてきた。
まず、かごが二挺、けんめいに走ってきたかと思うと、そのうしろから、六、七人の男が追いすがった。
「やい、待て」
「かごを出ろい」
追いつくと、かごから二人の男をひきずり出し、ぽかぽかなぐり出した。
「ここはだれの縄張りだと思ってるんだ」
「こっちにことわりもなく、甲府のぜげんにウロウロされちゃあかんべんならねえ」
「黒駒一家をなめやがると、こういう目にあうってえことを思い知らせてやる」
足蹴にする。持っていた棒っきれで乱打する。
はじめ悲鳴をあげ、手を合わせていた町人風の二人の男は、とうとう路上に蛙みたいにのび

てしまった。
「おい、殺しちゃ、三井の卯吉の縄にかかる。生かして帰せ」
と、やっととめたのは、やくざ風の六、七人の中で、きりっとしまった顔をした三十なかばの男であった。
「二度ときやがると、こんどは命がねえぞ。——かごや、ひろってゆけ」
あごをしゃくられて、四人のかごかきは、半死半生の二人の怪我人をそれぞれのかごにかつぎこみ、死に物狂いに北へかけていった。
ほんの眼の前のこの騒ぎを、龍次と草堂はあっけにとられて見ていたが、やがて草堂がささやいた。
「あれが黒駒の勝蔵親分かも知れもさんぞ」
「そ、そうらしいな」
とどかないはずの声であったのに、その親分らしい男の眼が、敏感にきらっとひかってこっちを見た。
ぶどう棚の下で、国定龍次は笠をふりおとして足をひろげ、右手をつき出して、
「おひけえなすって、おひけえなすって」
と、声をはりあげた。
「こ、これは黒駒の親分さんにござんすか」
と、まず尋ね、こっちがうなずくと、

「早速おひけえ下すってありがとうござんす。向かいまする親分とはお初にござんす。手前発しまするところは上州にござんす。……」
ぶどう棚をもれるまばらな光の下で、仁義を切りはじめた。
いちどゆきかかった黒駒の乾分たちは、めんくらった顔でこれをきいていたが、年長のその一人が、やおら、
「旅にんのお方、せっかくの仁義だが、いま黒駒一家にはごたごたがあって、とうてい旅にんさんのお世話ができねえ。悪いがかんべんしてくんねえ。——そうでしょう、親分？」
と、ふりかえった。
「さ、ひきあげるとしやしょう」
「待て、ちょっと考えたことがある」
と、黒駒の勝蔵はとめた。そっちをのぞきこんで、
「いま、国定龍次とかいったが、おめえさん、国定忠治どんの何かかい？」
「へえ、せがれでござんす」
「ほんとかね。こりゃ驚いた。ぶどう棚の下で仁義を切られたのもはじめてだが……そんなうす暗いところにいちゃ、顔もよくわからねえ。ま、とにかく出てきねえ」
二人はぶどう棚の下から出てきた。
「このお侍さんは？」
きかれて、草堂は、

「おいは、この国定龍次親分の用心棒でごわす」
と、まじめくさってあいさつした。
「用心棒？……いや、なるほど強そうだが」
「事実、強うごわす。天下無敵でごわす」
勝蔵はしげしげと二人を見あげ、見下ろしていたが、やがて乾分に目くばせして、
「よし、きいてえことがある。二人ともうちに泊まっていって下せえ」
と、いった。

二

黒駒の勝蔵、このとし三十五歳。
いい男ぶりだが、凄味がある。やくざには珍しい知能的俊敏さと、負けずぎらいの猛気がおもてにあらわれた面がまえであった。
やがて連れてゆかれたほど近い黒駒村の村はずれの勝蔵の家は、家そのものはがっしりした造作なのに、何となく物を売りはらったあとのようにがらんとした感じであった。
夜になると、山国ではもういろりがなくてはいられない季節だ。そのいろりに大鍋がかけられ、酒も出た。六、七人の乾分をふくめて、みんなそのまわりにあぐらをかく。
旅にんに対して、こういう接待は珍しい。
「いやなに、こいつァこうして食うのがいちばんなんだ」

と、勝蔵はいった。
大鍋にぐらぐら煮えているのは、「ほうとう」と称する甲州名物の煮こみうどんであった。うどんをあらかじめゆでないで、かぼちゃ、里芋、大根、にんじん、ねぎ、きのこ、あぶらあげなどをいれた味噌汁の中にぶちこんで、ふうふういいながら食う。漢字でかけば難しい字で「餺飩」と書く。
酒のサカナにもなり、飯の代わりにもなる。
飲みながら、食いながら、勝蔵はあらためて、龍次がほんとうに忠治の息子か、草堂万千代がどうして用心棒になったのか、等々についてきく。
龍次が、ほうとうの大鍋に首をつっこまんばかりにして夢中で食っているので、主として草堂が答えたが、これがほとんどデタラメな返答なのに、相手が信用せずにはいられないようなふしぎなムードを持つ人物である。
それで気をゆるしたのか、勝蔵は次のような打ちあけ話をしはじめた。
「きょうの騒ぎか。ありゃ甲府のぜげんだ」
ぜげんとは、女郎にするために女を買う商売だ。
「その買いにきた女ってえのが、この村の神主さまの娘さんだから、おれァ怒ったんだ」
「ほう、神主さまの娘――」
と、草堂が首をかしげる。
「それが、ただ同じ村の神社というだけじゃあねえ。そこの娘さんがそういうことになったに

ついちゃあ、実はおれにとんでもねえ負い目がある」

「——ちゅうと？」

「旅にんのおめえさん方は知るめえが、甲府はおろか甲州一円は、甲府の三井の卯吉親分におさえられている。昔はそうじゃなかったんだが、いまはそうなんだ。そいつが気にくわなくてここ何年かおれはケンカしてきたんだが、このごろどこで盆ゴザを開帳しても、きっと手入れになる。その三井の親分ってえのが、実は二足のわらじで十手もあずかってるんだ」

「おう」

と、龍次が声をあげた。

三井の卯吉が甲州一の親分であることも、二足のわらじをはいていることも、それに新興の黒駒の勝蔵が果敢にケンカを挑んでいることも、いつか大前田村できいた話だからだ。

「どんなにないしょで賭場をひらいても、どうしてかぎつけやがるのかふしぎ千万だが、きっとその場へ十手に踏みこまれるか、あとでお客があげられる」

「そいつァいけねえ」

と、龍次が思わず口を出した。

十手捕縄（とりなわ）をあずかるといっても、ごろつきが素人衆にしかける無法な悪事を取り締まるのが目的で、素人同士、遊侠同士のいざこざに十手風を吹かせることはないのが二足のわらじの習いだ。

「いくら二足のわらじでも、御同業の賭場をあげるなんて、ばくち打ちの風上におけねえ」

「だから、おれには手を出さねえ」

と、勝蔵はにが笑いをした。

「おれには手を出さねえが——とにかくしめつけがだんだんきびしくなって、それじゃ客が集まらねえ。とどのつまり、情けねえが、こっちは乾分もみんな離散して、いまいるのァここにいる連中だけになっちまった」

では、これが黒駒一家の総勢なのか。上州大前田村までその名がつたわってきた黒駒の勝蔵はいまそんなありさまになっているのか。

「で、おれも弱ってよ、この春、村の山王神社にたのんで、そこで賭場をひらいた。寺や神社にゃお手入れはねえはずだ」

寺社の縁日・祭日に境内でばくちをやるのは公許されており、だから賭場の出来高の幾分かを貸元に納めるのをテラ銭と呼ぶくらいだ。

「——と思っていたところ、なんとそいつをやられた。もっとも縁日じゃあなかったが——踏みこんできたのァ、甲府の町奉行の与力じきじきの捕り方だ。そして、おいらたちは逃げたが、神主さまが甲府へしょっぴかれていっちまった。それっきり、いまも入牢中だ」

「ははあ」

「あとに残ったのァ、年よった奥さまと若いお嬢さまだ。……おれがむりにたのみこんだ一件がもとだから、申しわけねえどころか、おいら、村にもいられねえ始末だが、逃げ出すと、あと、いよいよどうなるかわからねえ」

いろりの焚火を受けて、いい男の勝蔵の顔を、ゆがんだ影がユラユラとくまどった。

「案の定、一と月ほど前のことだ。その神主さまのるす宅へ、三井の卯吉から使いのものが、金を出しゃァ牢から放免してもらえる手づるがある、それを周旋してやるがどうだといってきた」

「ほう」

「それが……三百両ってんだ」

「ふむ」

「そんな金はねえ。ところが、こんどは……十日ほど前、甲府からぜげんがきやがった。その娘さんに、三百五十両で身売りしねえかといってきたってんだ。こっちが金が欲しいことをどこからききつけやがったのか、三井のほうからもれた話にちげえねえ」

「ふむ、ふむ」

「女一人、高くったってせいぜい五十両、ふつうの玉なら五両十両のところへ、三百五十両たァとびきりだが、そのお雪さんってえ娘さんを一目見りゃあすぐにわかる。ありゃ千両ったって高えとは思わねえが、その三百五十両……おいらが何とかしなけりゃならねえ義理があるんだが、いまいったような事情で、それが何ともならねえ」

乾分たちは、「ほうとう」を食うのをやめている。みんな無念残念といった顔で、歯をくいしばっている。

「その話をきいて見張ってたところに、さっきまたぜげんがきたという知らせを受けて、もう

帰ったときいて追っかけて、みせしめのためにたたきのめしてやったのがごらんの騒ぎよ」

勝蔵はしかし嘆息した。

「が、これでおさまるはずはねえ。ことは何にも落着してねえんだから。……お雪さんは、どうやらかくごしていなさるらしい。しかし、おれはそれを見のがしちゃいられねえ。何としても、少なくとも神主さまを牢から出す三百両とかを工面しなけりゃ、黒駒の勝蔵の顔が立たねえ。しかも、ことは急ぐんだ」

彼はあらためて、龍次たちを見た。

「その金を作り出す法がただ一つある。……それについて、おめえさんたちに御助勢ねげえてえんだ」

「……ちゅうと？」

三

「賭場荒らしよ」

「ほほう？」

「甲州じゃあねえ、となりの駿河の岩淵ってえところだが、そこの陀経寺ってえ寺で、この十一月七日にちょっと大きい賭場がひらかれる。ここを荒らしゃァ、三百両はおろか、千両二千両だって軽いものさ」

「岩淵っちゅうと、富士川の河口にちかい——東海道の宿場町じゃごわせんか」

と、草堂は首をひねった。
「七日といや、三日のち、ここから歩いて間に合いもすか」
「なに、ここから同じ甲州の鰍沢まで歩きゃ、あとは富士川の早瀬を十八里、いっきに船下りよ」
「ああ、なるほど」
と、うなずいたが、草堂はまた眼を見ひらいて、
「しかし、黒駒の親分、東海道筋の賭場っちゅうと、あそこらあたりは、例の――清水の次郎長ってえ大親分の縄張りじゃごわせんか」
「まさにその通りだ」
勝蔵は不敵にニンガリした。
「清水のとァ、ここ数年悶着つづきさ。――それというのも、三井の卯吉のおかげよ。そのしめつけで甲州じゃ何とも身動きがつかねえから、ちょいちょい駿河のほうへ出張ってあちこち賭場荒らしをやったからな」
「へへえ」
龍次も眼をむいた。彼もまた清水の次郎長の雷名はきいていたからだ。
とにかくそういうことがあったから、勝蔵が岩淵の賭場のことを知っていたのだろう。
「しかし、こんどの岩淵の賭場荒らしにゃ、恰好な理由がある。そいつァ、富士川下りの船宿や船主の旦那方を客にするんだが、いちどその仲間にいれてもらってのぞいたことがある。胴

元の清水一家、こんどは何てえやつが顔を出すか知らねえが、おれの見るところじゃあ、たしかにイカサマ・サイを使ってやがった」
「イ、イカサマ・サイ?」
「何てえたって、旦那衆相手の賭場だからな、いいようにカモにしてやがるんだ。そのときは黙っていてやったがね」
「ふうむ。……」
「こんどその証拠をつかんで見せつけてやりゃ、その賭場の客はおろか、富士川一円の旦那衆はもう清水一家を相手にすめえ。うまくゆきゃ、岩淵の縄張りはこっちのものになる。――そこまで望まなくっても、いまのいま、三百両、五百両の金を手に入れるにゃ、岩淵の賭場荒らしより法はねえ」
「なるほど」
「ところが――」
勝蔵はぎらっと龍次を見て、
「あいにく、いまいったようなわけで、おれをはじめ黒駒一家のつらァみんな知られてる。その賭場にならぶわけにゃゆかねえ。その役を国定のにおたのみしてえんだが、どうだい?」
「と、いうと?」
龍次がひざをのり出した。
「おめえさんだけが岩淵の賭場に出てもらう。おれがその賭場に出る鰍沢の客を知ってるから、

そいつにたのむ。そして、清水のイカサマ・サイをとっちめて騒ぎを起こす。騒ぎが起こったら外に待ってるおれたちがなだれこんで、テラ銭箱をひったくって逃げる。くわしいことはあとで相談するが、ええ、用心棒の先生、腕が立つなら、そのとき助っ人をしておくんなせえ」

「龍次親分……こりゃ、江戸の料亭での賭場荒らしと、まるきり立場は正反対でごわすな」

と、草堂が龍次のほうをふりかえった。

「きょうは勤王、あしたは佐幕、とはこのことで、アハハ」

「何のことよ？」

勝蔵がけげんな眼をする。

「いやなに、こっちのことでごわす」

「そういや、そうだな」

龍次は自分のほっぺたをピシャリとたたいた。

「お、面白えな」

その頬は、茶わん酒で真っ赤にひかっている。一杯のむかのまないかだが、まだはたちで、しかもばくち打ちとはいえ酔っぱらいにきびしい大前田の栄五郎に育てられただけに、それほど酒に馴れず、もう半分恍惚状態なのだ。おまけに、酒以上に、熱いほうとうが効く。

「せ、正反対の立場ったって……ありゃ新門への義理、こりゃ黒駒一家への義理……い、一宿一飯のやくざの義理ができちゃったからね」

「一宿一ほうとうの義理でごわすか。少々ゴロが悪いか」

ヒゲ万先生は一笑した。

「それにその神主さまの、む、む、娘さんを助けるとありゃァ、こりゃ、お、男伊達の仕事だい」

と、龍次は声をはりあげた。

もともと頭が単純な上に、酒がはいってメートルがあがっているが、江戸の場合と、似ていて、こんど立場が正反対なことに、彼はヒゲ万先生ほど滑稽さを感じない。

そもそも賭場荒らしというのは、ばくち打ちの世界では犯罪ではないのだ。賭場をひらくということが、御政道にそむいた行為だからである。

その賭場でいかさまばくちをやっていれば騒動を起こす口実にはなるが、いかさまでなくったって、ムチャクチャないいがかりをつけてケンカを吹っかけ、その賭場を荒らす。

目的は力のデモンストレーションだ。その示威によってその場を制圧すれば、あとその賭場は自分の縄張りとなる。あらゆる新興の遊侠が、こうしてその土地の親分になりあがってゆくのだ。

むろん、それまでそこを縄張りとしていたほうは、死力をつくしてこれをふせごうとする。実際にはこれをふせぎ切る場合のほうが多い。

何にせよ、ここに長脇差の死闘がまき起こる。それが遊侠の世界の常道なのであった。

「しかし、親分、清水一家がイカサマ・サイを使うっちゅうのは、まちがいなか話でごわすか」

「いつか、おれの見たときはそうだった。こんどもやるにちげえねえ。九分九厘。……」
そんな会話をききながら、
「なんだっていい、とにかく賭場荒らしは面白え。国定龍次、こ、こ、小松五郎にかけてひき受けたぜ！」
と、わめく龍次は、赤ん坊みたいにごろんとあおむけにころがって、そのまま大きないびきをたてはじめた。……

四

それから、どれほどのときがたったか。——
龍次は、ぽかっと眼をあけた。うつ伏せになっていたので、ごろんと反転する。
まだまわりは暗いが、格子窓の小障子が蒼白く浮かんで見える。
自分が柏にしたふとんにくるまって寝ているのに、はじめて気がついた。
「起きなされたかね、親分」
となりのうす闇の底から声がした。ヒゲ万先生だ。
「お、おりゃ、どうしたんだ？」
「ひっくりかえって寝ちまったのを、何人がかりかで運んだのでごわすが、鼻からちょうちんを出しておったが、赤ん坊とちがってイヤ重かには往生しもした。ははは、しかし、あれだけ酔っぱらっても、ふとんは旅にんの作法通りに柏にして、うつ伏せに寝たには感心しもした

よ」
「や、しまった！」
龍次は頭をかかえた。
「こいつァとんでもねえしくじりだ。一宿一飯が酔っぱらってかつがれて寝るとァ、何てえことを！　めんぼくねえ、めんぼくねえ！」
「ま、そげなことはどうでもよか。例の、ここの親分の話した賭場荒らしの件はおぼえていなさるか」
「賭場荒らしの件——うん、あれか——おぼえてらい」
「それなら、けっこう。あれからしばらくこの一家の衆と話したんじゃが、いや、いまさらのことではなかが、ばくち打ちの世界も大変でごわすなあ。親分は、甲州のやくざのここ数年のいくさを御存知かな？」
「いや、そいつは……よくは知らねえ」
大前田村のいろり話で、諸国の親分の品定めはきいたが、むろんいちいち、それほど詳しい知識を持っているわけではない。
その甲州のばくちの争いについていろいろきいたといって、ヒゲ万先生はぼそぼそ語り出した。
なんでも黒駒の勝蔵は、この黒駒村の名主の末っ子だが、生まれついてのあばれん坊で、はたち前に、当時このあたりを縄張りとしていた武居の吃安（どもやす）という侠客の弟分となった。この吃

安が八年ほど伊豆の新島に島流しになると、勝蔵は江戸に出て、読み書きもならい、剣術の修行などしたこともあったらしい。が、吃安が島ぬけをして帰ってくると、勝蔵もまた江戸から戻って、ふたたびやくざになった。

そのるすの間に、甲府で三井の卯吉がめきめきと勢力をのばしてきた。軍師格に祐天仙之助という弟分がおり、用心棒に犬神軍次郎という浪人がいる。

で、この吃安対卯吉の間に、数年にわたって抗争がつづいたが、三年ほど前、吃安が祐天と犬神にだまされておびき出されてつかまり、卯吉の手で甲府の牢にほうりこまれ、すぐに牢死してしまった。一服盛られたという話もある。

その後も、三井の卯吉対勝蔵の抗争はつづき、勝蔵もいちじは八十人前後の乾分を擁したこともあったが、戦局は日に日に非となった。何回かの乾分同士のデイリは必ずしも負けてはいないのだが、なにしろ祐天仙之助と犬神軍次郎は強敵で、しかも三井の卯吉が親分としてはなはだ人心掌握にたけ、具合が悪くなると十手風を吹かせるのだから、いかんともしがたい。

で、勝蔵のほうも渡世人として生存する必要から、やむなく駿河方面へ出ようとしたが、ここには清水一家がいて、これと衝突しないわけにはゆかない。

みずから好んで、前門の虎、後門の狼を作ってしまった按配だ。

こんなことをくりかえしているうち、とうとう黒駒一家は、いまのような乾分六、七人という悲壮な状態にたちいたった。——

「もっとゴチャゴチャしたいきさつがあり、それをみんながてんでにしゃべるので、よくわか

らんふしもごわすが、つづめていえばまずこんなことでごわす」

と、ヒゲ万先生はいう。

「どうやら、ここ数年、甲州には血みどろのケンカがつづいてきたようで」

「ははあ、そのケンカで黒駒の勝蔵ってえ名が、じょ、上州まできこえてきたんだな」

「清水一家との悶着も、勝蔵親分はかるく賭場荒らしくらいの話をしもしたが、実はそんな程度じゃなく、乾分がうっかりしゃべりもしたが、こっちの勢いの盛んだったころ、富士川をはさんであわや大デイリとなりかかったこともあったそうで。……なるほどそれじゃ、黒駒一家のものが清水一家の賭場にちょいと顔を出せないのもむりはなか」

「ふうん」

「それを承知で、親分、岩淵の賭場荒らしにゆきもすか」

龍次はちょっとたじろいだ顔をしたが、

「そ、そうときいちゃ、いよいよあとにはひけねえ」

と、りきんだ。

「三井一家、清水一家に威勢よく刃向かって、あげくのはてに、こ、こんな哀れなざまになってる黒駒一家から助っ人をたのまれるなんて、と、渡世人みょうりにつきるじゃあねえか」

「そう、思いもすか」

「ただ、甲州の次にゃ駿河へ出て、いずれ清水一家にもわらじをぬごうと思ってたんで、いま、

し、清水一家とケンカするのがちっと困るが……しかし、むこうがイカサマ・サイの鉄火場をひらくたァ、きき捨てにできねえ」

「そう、思いもすか」

「それにだいいち、例の神主さまの娘さんを助けるにゃ、さ、さ、さしあたって賭場荒らしをするよりほかに法はねえじゃあねえか」

「親分がそう思われるなら、やりもすか。わははは」

小障子はすっかり明るくなっていた。

龍次はぱっとはね起きて、その障子をあけ、格子ごしに外を見て、

「おてんとさまの方角からみると、こっちが南側らしいが、富士が見えねえ。甲州でありながら富士山が見えねえたァ、じれってえところに住んでるもんだなあ」

と、大声でいった。

その日の朝、二人は黒駒一家のヤットコの又九郎という男につれられて、村はずれの山王神社をのぞきにいった。小さいが、おそろしく古い——ゆいしょありげな神社だ。

それでも、渡り廊下らしいものがある。その渡り廊下を、拝殿へ、柿を盛った三方をささげてゆく若い巫女（みこ）を見た。

「おやじさんが入牢中でも、おつとめはかかさねえ。感心なもんでさ」

と、杉の木のかげで、又九郎はささやいた。

二人は眼をまるくしてながめた。昼もうす暗い杉木立の中に、その渡り廊下に楚々とした歩

をはこんでゆく巫女の、白い光がともっているような清麗さに眼を見張ったのだ。

「親分がホの字なのもむりねえでしょう」

と、又九郎は鼻の穴をひろげた。

龍次はふりかえった。

「な、なんだって？」

「いや、なに」

又九郎はうっかり口走ったらしい。その口に手をやって、

「親分は、ここんところ姐御なしだからね」

「あ、そういえば……勝蔵親分は独り身か」

と、草堂（そうどう）がきく。

「あったんだが、去年逃げていっちまったんで」

龍次は、巫女の消えた拝殿のほうを見つめて、

「何にしても、あれを女郎にするなんて、とんでもねえこった！」

と、頰に血をのぼして、武者ぶるいした。

その朝のうちに、黒駒一家とともに龍次と草堂は、西の鰍沢（かじかざわ）にむけて出立した。一家といっても、ヤットコの又九郎とあと二人を、

「いいか、甲府からのぜげんがまたきやがったら、こんどはかまわねえから殺（や）っちまえ」

勝蔵が命じてあとに残したので、同行した乾分は四人だ。

五

笛吹川に沿って、いわゆる身延（みのぶ）山道を五里ばかり、船宿が数十軒ならぶ鰍沢から富士川を十八里、それをいっきに下って、その日の夕方には彼らはもう駿河の岩淵にいた。

鰍沢が富士川の発着地なら、河口にちかいこの岩淵は南端の発着地で、ここにも数十軒の船宿がある。おまけに東海道の一駅でもあるので、その繁栄ぶりはいうまでもない。

ここにある陀経寺という大きな寺で、富士川の船問屋や船宿の旦那衆たちの大がかりな手なぐさみがもよおされたのは、二日のちの午後であった。

あいにくの雨であったが、ばくちとは関係ない。

紅葉した裏山が池にうつるけっこう風趣のある庭があるのに、それを見る客など一人もなく、その寺の裏座敷三つばかりをぶちぬいて、富士川旦那衆のばくちがひろげられた。

もっとも、集まったのは旦那衆ばかりではない。清水一家の連中はむろんいるし、旦那衆といっても、もともとが荒っぽい稼業で、彼らと親しい船頭や仲仕や、それに川沿いの小親分たちも加わっている。もっともみんな、「清水」と焼き印つけられた木札を、見張りの清水一家の若い者から点検された上、はいってきたのだ。

ただし、とりしきるのは清水一家といっても、親分の次郎長は来ていないようだ。

長脇差（ながどす）のたぐいは、みんな座敷の入り口であずかる。

ばくちは花札でなく、本格的な丁半のサイコロ・バクチであった。

「さあ、張ったり、張ったり！」

バリトンの声で呼ばわっているのは、鉄火場の支配人ともいうべき「中盆」で、相撲取りみたいに肥満した大男だ。

中央に、さらにたたみを三枚のせてつらね、白布をしき、両側に丁方、半方、と分けて、十人ずつくらい客が相対する。

まんなかに、いれずみをいれた――十一月というのに、ふんどしだけの裸の男が、つぼざるを持ってひかえている。これが「つぼ振り」だ。

「勝負っ」

中盆がわめくと同時に、つぼ振りが、がらがらっと、つぼざるをふって、ぱっと白布の上に伏せる。

つぼをあけると、サイコロが二個あらわれる。その目を合わせたものが偶数なら丁、奇数なら半だ。

「丁だ！」

あるいは、

「半だ！」

そのたびに、どーっとひくいどよめきが起こる。

丁、半、双方とも前に積んだ賭け金の額は自由だが、丁方と半方のそれぞれの合計は同額でなければならない。負けたほうの金はただちにかき集められて、勝ったほうに移る。この日の

陀経寺の賭場に動く金はさすがに息をのまずにはいられない大金であった。
　床の間には千両箱が、いくつか山型につみあげてある。
　とび出すような眼、のぼせあがった顔、蒼ざめた顔、この季節に汗の玉をひからせた肌。――ころがるサイコロ二つを追って、単純無比のこのくりかえしが、飲む、買う以上に人間を燃やす魔力を持っていて、ひるすぎにはじまった鉄火場は、時とともに高潮して、やがて座敷に燭台がつらなり出したのも、みな気がつかないほどであった。
　じかに勝負を争う連中ばかりではない。見物にまわったほうも、それに劣らず夢中になった顔をひしめかせている中に――ひときわまっかな、若い、まんまるい顔があった。
　いまいったように、旦那衆ばかりでなく、船頭や渡世人もまじっているが――その顔に何か異様さをおぼえたらしく、中盆がいちどそばにきた三下に、
「おい、ありゃどこの何者だい？」
　と、あごでさして、小声できいた。
「へえ、ありゃ鰍沢の青柳屋の旦那がつれておいでなすったんで――」
　青柳屋は船宿の一つだ。
「そうかい、それならいいが。……」
　というような問答をかわしたこともあるその対象の若い男が、
「こ、こんどはおいらも一つ、お、お仲間にいれておくんなせえ」
　と、声をかけたのは、灯がともされてまもないころであった。

「お前さん、ここじゃ初顔だね、何といいなさる？」
　と、中盆がきいた。
「へえ、く、国定龍次と申しやす」
　どこの一家だときく前に、
「なに、国定――」
　みんな、いっせいにそっちを見た。
「何だか気になる名前だが――いまは、これ以上きくめえ、いくら賭けなさる？」
「な、長脇差一本。――あそこにあずかっていただいておりやす」
　白い歯を見せていう。
「備前長船（おさふね）の――こ、小松五郎義兼（よしかね）ってえ刀でござんすが」
　みな、どよめき立った。
　その袖をうしろからひいて――
「おい、お前さん、何をいい出すんだ」と青くなっているのは、彼をつれてきた青柳屋の旦那であったが――まわりはしらけ、それどころか、あちこちで世話をやいていた清水方は、いっせいに険悪な目くばせをした。
「……面白え」
　それを眼でおさえつけた大男の中盆は、
「おい、そいつの刀を持ってきな」

と、ふりかえった。
どうやらケンカを吹っかけにきたらしいと見える男の長脇差を、わざわざ持ってこさせると
は、身体も大きいが、この中盆の男もいい度胸だ。年は三十なかばだろう。
龍次がそれを前の白布の上においたのを見て、
「刀といっても銭に見つもらなきゃ、盆ゴザの上の勝負はできねえ。それをいくらに賭け
る？」
「さ、三百両じゃどうでござんしょう」
「ふうん。……ま、よかろう」
中盆はうなずいて、
「それじゃ、勝負の衆、場についておくんなせえまし。――」
「待った！」
と、龍次は片手をあげた。
「なんだ？」
「サイコロを変えておくんなせえ」
「な、な、なんだと？」
騒然としたのは、中盆の背後の清水一家のめんめんであった。
もともとがかんしゃく持ちらしいつぼ振りが、血相変えて、
「何をいやがる。このサイに不審があるというのか。清水一家が仕切る賭場のサイコロに、イ

カサマがあるというのか！」
と、わめき出した。
「きき捨てならねえことをぬかしゃがる。それじゃこのサイコロを、旦那衆に調べていただこ
うじゃあねえか！」
「待て、桶屋の――」
と、中盆がとめた。
「ここへきて、そんなとんでもねえいちゃもんをつけやがるたァ……すッとんきょうなやつだ。
おい、サイコロをどうしろってんだ？」
「お、おれのサイコロに変えて下せえ」
と、たもとから二個のサイコロをとり出して、つき出した。
桶屋と呼ばれたつぼ振りは、身体をのばしてひったくり、しばらくためつすがめつして見て
いたが、ふいに何とも言えない表情になって、立っていって、中盆にそれをわたした。
中盆は掌の上でそれをころがして見ていたが、すぐにニタリとして、
「それじゃ、こいつでやらしてもらうとするか」
と、つぼ振りに返し、
「よしっ、それじゃあ、国定の――おめえさんは、丁か、半か」
「こっちはちょうど丁方だ。ちょ、丁だ！」
すると、ふしぎなことに中盆は、実にめんくらった顔をした。

「なに、丁？」
「おう、丁だ。な、なにがおかしい？」
「おかしいか、おかしかねえか、勝負を見りゃわかる。それじゃ丁でゆきな。——さあ、やるぜ！」
中盆は大声をはりあげた。
「勝負っ」
つぼ振りは、龍次の出したサイコロをいれたつぼざるを、ぱっと伏せて、あけて、
「半だ！」
と、さけんだ。
「おい、国定の——半だぜ」
「ううん」
と、龍次はうなっている。
「いや、けったいな野郎だ。……いまの勝負は終わったからいうが、旦那方の前で、清水一家が使うサイコロがイカサマといわれちゃかんべんならねえ。イカサマ・サイはこっちのほうだ」
と、中盆は盆ゴザの上のサイにあごをしゃくって、
「鬼吉、もういちど振って見ろ」
「合点(がってん)だ！　みなの衆、よっく見ていておくんなせえよ。……半が出るぜ！」

つぼ振りの桶屋の鬼吉が、またつぼざるを振って、伏せて、あけた。
「三と四！　半だ！」
みな、いっせいにうなり声をあげた。
「一目見ただけじゃあわからねえが、このサイは四角がすこしゆがんでる。振りゃ必ず半と出るイカサマ・サイだ」
と、中盆がいった。
「そいつを、この野郎、何をトチ狂ったか、自分で丁を張りゃがった。わけのわからねえとんま野郎だが、とにかくその長脇差はもらう」
「いいや、長脇差だけじゃすまねえ、清水一家の賭場にいちゃもんをつけるのァおろか、イカサマ・サイを使おうとしたとんでもねえひょうろくだまめ、簀巻(すま)きにして富士川へほうりこんでやる。……かくごしろい」
と、桶屋の鬼吉がわめいた。
「おれにもわけがわからねえ」
龍次は首をふった。
「そ、そ、そんなはずはねえ。いま、そっちでサイコロをスリ変えやがったんだろう」
「何をぬかしゃがる。みんな、眼を皿にして見てたじゃあねえか。……おい、やれっ」
声とともに、七、八人の清水の乾分たちが龍次のほうへ殺到した。
「ま、待ってくれ！　お、おれもこのわけを知りてえんだ！」

と、龍次は悲鳴のような声をあげたが、
「いや、きょうのところは、まずあれをもらってゆく」
眼の前の長脇差をひっつかむと、たちまち抜きはらい、盆ゴザをおどり越えて、床の間に走った。

六

「野郎、やっぱり、賭場荒らしだ！」
「殺っちまえ！」
怒号の旋風の中に、みな総立ちになる。入り口にならべられている長脇差のほうへかけ出すやつもある。
走りながら龍次は、鞘を腰にぶちこみ、床の間の千両箱をひとつ小脇にかかえると、縁側のほうへかけた。
「待ちゃがれ」
「ゆうどう……からくっ」
声と身体がもつれ合うと、ばさ！　と、ぬれ手拭いをはたくような音とともに、血しぶきたてて清水の乾分が一人のけぞっていって、障子を破ってあおのけにころがった。
龍次は雨戸を蹴破って、庭へ飛び下り、片手にかかえた千両箱の重みに、足がぬかるみにすべってよろめいた。

「野郎、くたばれっ」
わめきながら、つづいて飛び下りた桶屋の鬼吉が、長脇差をなぐり落とす。
ふんどし一本のその身体が、棒をたおすように庭の闇に沈んだ。
「親分、大丈夫でごわすか」
深編笠の影がそばに立って、片手で龍次をひき起こした。座敷からもれる燭台の光に、もう一方の手にさげた大刀が赤くかがやいて見えた。
外ははげしい雨になっていた。
と、暗闇のかなた――裏山のほうから、燃える火が三つ、四つ、宙をただよってきた。千両箱をかかえて起きあがった龍次と、深編笠がのがれてゆくのを追おうとした清水一家のめんめんは、それがたいまつを持った三度笠の男たちだと知って、一瞬たたらをふんだ。
「火をつけろ」
「寺に火をつけろ！」
闇の中で声がした。
かけてきたその一人が、たいまつをこちらに投げてきた。それは清水方の頭上を越えて、火の粉をちらしつつ雨戸の間から縁側に落ちて燃えころがった。
そこらにいた連中が、あわててこれを踏み消すのにかかる――。
「これを受けとれ。おれはひとあばれする」
龍次はその男に千両箱を手わたした。

受けとった男が、それをかかえて裏山のほうへ逃げようとして、凄まじい悲鳴をあげて千両箱をほうり出し、つんのめった。その背中に、槍が一本つき刺さっていた。座敷のほうから槍を投げた者があるのだ。

「火をつけろ、寺に火をつけろ！」

笠を伏せているが、さけんでいるのは黒駒の勝蔵であった。

「そりゃいかん、寺に火をつけるのはいかん！」

制止したのは、草堂万千代だ。

「たいまつを消せ、そげなものを持ってくるから自分が見えて、それ、いま一人投げ槍を受けたじゃなかか！」

叱咤したのみならず、白刃がひらめくと、黒駒一家がふりかざしていた三、四本のたいまつが、あっというまに手と火の間を切り飛ばされて、炎が音をたてて地上をころがりまわった。

「あとはおいがふせぐ！」

「おれもやる。……逃げろ」

と、龍次がさけんだ。

そこは、乱闘の場であった。

「だれか、千両箱をひろってゆけ！」

たいまつはあぶらがあるので、雨の中でもなかなか消えない。地上でなおめらめらと燃えあがる光の中で、巨大な夜がらすがはばたくように、いくつかの影がもつれ合う。

四、五人の清水方が、もんどり打って、動かなくなった。

「みなどけ、おれがやる」

ふとい声をかけたのは、例の中盆の男であった。彼は、さっき自分が投げた槍につらぬかれた男の身体からそれをぬきとって、深編笠の前へすすんだ。

「いい腕だのう。やい、清水の大政が相手になってやる。こい！」

槍をかまえた。

いま、もう一人を斬った龍次が、猛然と向きなおると、

「待て、おはんはいかん」

と、草堂がとめた。

剣と槍は相対した。

地上の火は消えかかり――その両人の姿はもうろうとしか見えないのに、異様な空気に緊縛されて、まわりの者みな、数瞬、しいんとした。

「おどれえーっ」

槍が電光のごとくのびた。

かっと音がして、その穂先が赤くきらめき飛んだ。槍は切断されたのである。大政は二、三度回転して、泥しぶきをあげて尻もちをついた。

「そっちもよか腕じゃ」

笑いをおびた声がした。

「やくざにゃ惜しか。……もとは侍と見たはひが目か、清水の大政親分」
いうと、深編笠は龍次をふりかえり、
「ここらへんで、逃げるとするぞ。——ええか？」
と闇の中へ身をひるがえした。龍次もそれを追う。
なお一息か二息、金縛りになっていた清水方が、われにかえって、どっと追った。闇中にふりそぐ大雨が彼らを目かくしした。
あとになって気がついたことだが、たおされた清水一家の乾分の中で、その深編笠にやられた者はみなみね打ちであった。桶屋の鬼吉もその一人であった。

七

闇と雨にまぎれてのがれた草堂万千代と龍次は、かねての手配通り、岩淵の船着場からやや下った岩かげに待たせてあった小舟にたどりついた。
そこには、先に逃げた黒駒の勝蔵と三人の乾分が待っていたが、これがみな気ぬけしたように舟の中に坐っていた。
「先生、しまった」
と、勝蔵がため息をついた。
「どげんした？」
「かんじんの千両箱を忘れた！」

「な、なんだって？」
龍次は口をアングリあけた。
「寺の庭を逃げ出してからすぐに気がついたんだが……だれか拾ったろうと思ってた千両箱を、だれも拾っていねえ」
しばらく沈黙したのち、
「わはははは、わはははははは！」
と、ヒゲ万先生がそりかえって、笑い出した。
「あれだけ大あばれして、ムダ働きか。こりゃ可笑しか、こりゃ可笑しか。わはははははは！」
唖然としていた龍次が、
「わ、笑いごとじゃねえ」
と、歯をかみ鳴らして、
「よし、もういちどとりにゆく」
と、足をひるがえしかけた。
「いや、いくらなんでももういかん」
ヒゲ万先生は首をふった。
遠く背後から、わあああん、という追手の叫喚が流れてくる。それは右往左往しつつ、こっちへ近づいてくるようだ。
「とにかく、舟を出せ」

ヒゲ万先生の下知に、八代（やつしろ）の玉五郎という勝蔵の弟分が、櫓をとり、舟は川を下り出した。富士川を海へ出て、沼津あたりに舟を着け、富士山の東をまわって甲州へひきあげる、というのが最初からの兵法であった。

夜の冷雨に打たれつつ、いくつかの濡れぼとけをのせたような舟の上で。——

「とにかく先生が、たいまつを消しちまったのがまずいんだ」

と、勝蔵は口をとがらせた。

「いや、たいまつを振りたててりゃ、こっちの人数も動きもあきらかになる」

「ありゃ寺に火をつけるために持ってったんだ。火でもつけなきゃ、逃げられねえ」

「火つけはいかん」

ヒゲ万先生は、ちらっと龍次を見やって、

「どうもやくざっちゅうのは、むやみやたらに火をつけたがっていかん」

と、いい、

「それにしても、攻守ところを変えても、賭場荒らしっちゅうのはなかなかうまくゆかんもんじゃのう」

と、また笑った。

江戸の蔵前の水月（すいげつ）での賭場荒らしや、入谷の小倉庵への火つけのことをいっているのだろう、とは推察できたが、龍次はがっくりきて、とっさに腹を立てる元気もない。

——いや、腹を立てることは、ほかにある。

「黒駒の親分、ちょ、ちょっとおうかがいしてえことがござんすが」

「なんだえ？」

「親分は、し、清水一家がイカサマ・サイを使うといって、おいらに別のサイコロを使うように渡しておくんなすったが……そ、そ、そいつのほうがイカサマ・サイだった。ありゃ、どういうわけでござんすえ？」

「あれか」

黒駒の勝蔵は、河明かりにも、ちょっと間の悪い顔をした。

「ありゃな、きょうのばくちに清水方が、きっとイカサマ・サイを使うかどうか請け合えねえ。万一使わなかったらケンカのきっかけがねえから、こっちで使ったんだ」

「そ、そりゃひでえや、そりゃひでえ」

龍次は勃然とした。

「ど、道理でおいらの出したサイコロを見て、あっちのつぼ振りも中盆も変な顔をしやがった。あいつら、すぐにイカサマ・サイだと見ぬいたにちげえねえ。しかも必ず半と出るサイコロに、おいら、丁、丁と張った。むこうはこっちを、ば、馬鹿かきちげえと思ったにきまってら。ど、どうしてはじめからそのことをおいらに教えてくれなかったんでござんす？」

——さっきのばくちの際、サイコロが半と出て、そんなはずはねえ、と龍次がさけんだのは、丁と出るはずだったという意味ではない。自分の出したのがイカサマ・サイなんかであるはずがない、という驚きであった。

彼は、どうやら勝蔵に弱味をにぎられて脅迫されたらしい鰍沢の青柳屋という船問屋の手引きによってあの賭場にもぐりこんだのであった。

「すまねえ、すまねえ。が、こっちがイカサマ・サイを持ち出して賭場荒らしをやるったら、おめえが承知してくれめえと思ってよ。……」

「それにしたって、ひでえや。そ、それじゃあ、おいらの面目玉はまるつぶれだ」

勝蔵はペコペコ頭を下げた。

「かんべんしてくんねえ。それも、どうしても賭場で騒動を起こして、千両箱をひったくらなきゃ、あの神主さまの娘さんを助けられねえと思やこそだ」

龍次はふくれあがったまま、沈黙した。

見ていたヒゲ万先生が笑い出した。

「その千両箱をまんまとひったくりそこねたんじゃからな。神主さまの娘を助けるのが目的じゃったのに、バチはこっちにあたったと見える」

「さ、その善後策を立てなきゃならねえ。このまま、手をつかねちゃあいられねえ」

「親分。……殺された尻たたきの久七を残してきたんですぜ」

と、八代の玉五郎がいった。陀経寺で清水方に槍で串刺しになった仲間のことだ。

「あいつァ、清水一家に顔を知られてる。きょうの賭場荒らしは黒駒一家だと知られやしたぜ。清水一家がこのまま黙っちゃいますめえ」

「そりゃそうだ」

勝蔵はうめいた。

「が、お雪さんを何とかしなけりゃならねえ。村にゃ帰らなきゃならねえ。待ってろ、なんとか智恵をしぼり出す」

黒駒の勝蔵が、神主の娘の難儀を救う、という目的をとげるのにしくじった上、こんどはそのために清水一家の仕返しの可能性をみずから招いたことはあきらかだ。

身を切るような風をおして、舟は海を渡って夜のうちに沼津に着いた。

暗い浜辺で、ちょっと黒駒一家と離れたとき、ヒゲ万先生がささやいた。

「親分、このまま黒駒村へゆきもすか」

「なぜ？」

「あの勝蔵親分、どうも、ゆだんもすきもならん人物でごわすが」

「うん、ひ、ひとをコケにしやがって！」

半と出るイカサマ・サイをこっちから出して、丁と張った自分を思い出して、龍次はまた息をあらくしたが、

「しかし、一宿一飯の恩義を受けて、弱っている黒駒一家から逃げ出すわけにゃゆかねえ。それに、やはりあの娘さんを、み、み、見すてちゃおけねえよ」

「龍次親分。……あんたはよかひとでごわすな」

ヒゲ万先生は、夜目にも白い歯を見せた。

「親分がそげに思われるなら、おいもつき合いもそう」

二人が、勝蔵たちのところに近づいてゆくと、勝蔵は不安そうな眼で迎えて、

「おや、いっしょに甲州へ、助ッ人にまたきてくれるかね」

と、いった。

龍次が、なぎさにゆれている舟に眼をやって、

「ゆきまさ、のりかかった舟だ」

と笑うと、ぱっと明るい顔になって、

「ありがてえ！　手勢のねえところだ。恩にきるぜ！」

と、さけんだ。

沼津から御殿場へ、富士の裾野の東をまわって山中湖、富士吉田を通って御坂峠を越え、黒駒村へ帰ったのは五日ののちであった。

山坂越えて、寒風の中の強行軍だが、龍次ははじめて全貌を見る雪の富士の絶景に魂を奪われて、寒さも強行軍も意識しないほどであった。

——と、黒駒村に帰ると、驚倒すべき事態が待っていた。

八

村に残していったヤットコの又九郎以下三人の乾分たちは惨殺され、お雪は甲府につれてゆかれていたのである。

しかも、それがおとといの午後だったという。——

勝蔵たちが留守なので、どうしていいのかわからない三人の屍骸は、山王神社の境内の杉の木の下に、むしろをかけてならべてあった。

むしろをとって、三つの屍骸をのぞきこんで、

「よか腕じゃ」

と、ヒゲ万先生は首をふった。

「又九郎どんはムチャ斬りじゃが、あと二人はきれいに一太刀ずつでやられちょる」

とり残された老母は、泣きながら勝蔵にすがりついた。

その話によると。——

おとといの午後、甲府から二人のぜげんがまたやってきた。何度か、お雪に身売りをすすめにきたぜげんだが、それに二人の男がついてきた。一人は頬に虫のような茶いろのあざのある渡世人風で、もう一人は怖ろしく大きな浪人風であった。

お雪は、甲府にゆくという。父親の赦免に必要な三百両を作るためには、身売りしてもしかたがない、とは彼女が以前から母にいっていたことだ。

で、お雪が支度しているところへ、急をきいて黒駒一家の三人の衆がかけつけてきた。

すぐに境内で乱闘となり、又九郎は渡世人に、あと二人は浪人に斬り殺された。

ぜげんは三百五十両をおき、自分たちののってきたかごの一つにお雪をのせて、大急ぎで立ち去ったという。

「そいつあ、三井一家の祐天仙之助と用心棒の犬神軍次郎にちげえねえ！」

と、勝蔵はさけんだ。
「きゃつら、ぜげんにやとわれやがったな」
「黒駒一家のほうから断ってかかったから断った、と申していました」
と、老母は、こんにゃくみたいにふるえながらいった。
ここを出るとき、勝蔵がヤットコの又九郎たちに、「甲府からぜげんがまたきたら、こんどは殺っちまえ」といいおいたから、そのこと自体はほんとだろう。
「それでぜげんたちは、お嬢さんをどこの見世に売るとか何とかいってませんでしたかい」
「あの猿屋楼へ……ゆくゆくは松の位で出すつもりだから心配するなって、笑いながら申しておりました」
「やっぱり猿屋楼か」
勝蔵はうめいた。
「そりゃ、妓楼でごわすか」
ヒゲ万がきく。
「甲府第一の女郎屋でさあ」
「猿屋楼とはまた妙な名でごわすな」
「亭主が猿屋の勘助という男でね。これがえたいの知れねえ、ふだんひとに顔も見せねえ変なやつなんだが……」
「ほう？」

「もともとが三井の卯吉は猿屋楼と親しいんだが、いまの話で双方がいよいよ組んでることがわかった。三井が助ッ人をしているとありゃ、こりゃお嬢さんをとり返すのも容易じゃあねえ」
「ええと、三百五十両おいてったってんだから」
と、龍次が口を出した。
「そ、それを持って買い戻しにゆきゃいいでしょう」
「それを持ってゆきゃ、神主さまを牢から出せねえ。そのためにお嬢さんは身売りしたんじゃあねえか」
「あ、なるほど」
龍次は頭をたたいた。
「ところで、お雪さんを松の位で出すって、何です？」
「松の位たあ、いちばん上等の太夫ってえことだ」
「へへえ」
「こりゃ、ひと通りじゃあねえ工夫がいる。……おい、仏たちをお寺に運んでゆきな」
黒駒の勝蔵は乾分たちにあごをしゃくり、しかし心ここにないといった表情で腕ぐみをした。

九

その晩、いろりでまた「ほうとう」を食いながら、勝蔵はこんな話をした。

　ぜげんは、お雪さんをゆく松の位の太夫で出すといったという。ぜげんの話なんてあてにならねえが、あれほどのたまを、きょうあす見世に出すことはねえだろう。しかし、ことは急がなけりゃあならねえことはいうまでもねえ。

　ことに猿屋楼は甲府第一の遊女屋だとはいうものの、亭主の勘助がきみの悪いやつだから、一日だってほうっておけねえ気持ちだ。

　きみが悪いというのは、きゃつ、ひとに顔を見せねえのだ。人にめったに会わねえが、よんどころなく会うときも、眼のあたりだけのぞいた頭巾をかぶり、その眼のあたりも紗の布をかけている。

　なぜそんなことをしてるかってえと、二十何年か前、押し込みに襲われて、勘助だけをのぞいて一家みな殺しになり、そのとき勘助も、もともとが猿みてえな顔に、さらに怖ろしい傷を受けたのでそれをかくすためだともいうし、また声も気味悪いフガフガ声を出すそうだが、梅毒で鼻が落ちているからだともいう。

　おれもなんどか猿屋楼にゃあがったが、勘助に会ったことはいちどもねえ。

　何にしても、そんなところにお雪さんを、一日もおいとけねえことはこれでわかるだろう。

　ここにのりこんでお雪さんをとりもどす工夫が何とかついたよ。

　ただ、こんどのことに三井の卯吉自身がどこまでかんでるか、まだよくわからねえ。いや、うしろにその影があることはまちげえねえが、この勝蔵を相手に本気でやり合うかくごをきめてのことか、それによってこっちもやりようがある。

　それに、いまいったように猿屋楼のお雪さんもしんぺえだ。それで猿屋楼にいってようすを探りてえが、こちとらはみんな顔を知られているからだめだ。そこで。——

「お前さん、国定のにそれをやってもれえてえ」

「おいらが、じょ、女郎屋に？」

　龍次はすっとんきょうな声をあげた。

「お前さんなら、顔を知られてねえ」

「しかし、三井一家にのりこんだり、女郎屋へいったり、そ、そんな二足のわらじはいちどにはけませんよ。渡世人がわらじをぬいだ親分の家から女郎屋にかようなんて、きいたことがねえ」

「それが、甲府じゃ、あるんだ」

　勝蔵はいった。

「旅にんが三井一家にわらじをぬぎゃあ、必ず一晩は猿屋楼で遊ばせてくれることになってるんだ」

「へえーっ、旅にんが、女郎屋に」

「だから三井の卯吉の評判がよくって、甲州一の親分なんていわれるようになったのよ」

　勝蔵は、無念の苦笑、といった表情をした。

「それで諸国から旅にんが集まる。集まりゃその女郎のあげ代もばかにならねえと思うが、そんな費用をどこからひねり出すのか、よくわからねえんだがね」

「親分、おいにもその役、務めさせて下さらんか」
と、ヒゲ万先生がひざをのり出した。
「むろん、二人いっしょでごわしょうな」
「いや、先生はだめだ」
「どげんして？」
「先生にゃ、べつにたのみてえ用がある。……こりゃ、先生みてえなりっぱな顔じゃあねえと、うまくゆかねえ仕事なんだ」
「おいが、りっぱな顔？　はは、親分におだてられると、あとがこわか。――その仕事っちゅうのは何じゃね」
「それはこれからの談合だ」
その夜、柏もちのふとんを二つならべて、まっくら闇の中で、ヒゲ万先生が龍次に話しかけた。
「いや、一宿一飯の恩義は山岳より重か。野天ばくちの見張りやばくち代の取り立てもことわれんっちゅうことは知っちょったが、女郎屋を詐欺にかけてユスリをかける役を仰せつかるとは、驚いたもんじゃな」
「しかし、あの黒駒の勝蔵ってえひとは、たいした智恵者だなあ、おいらなんか、とてもあの半分も智恵はまわらねえ」
「半分どころか、十分の一もまわるわけがなか。それはともかく、わらじをぬいだ先次第で、

賭場荒らしをやったり、それをふせぐ助ッ人(すけっと)にまわったり、はてはユスリの片棒までかつがんけりゃならん。渡世人とは、つくづくおかしな稼業でごわすな」
「まともな稼業じゃあねえ、おてんとうさまにゃ申しわけねえ無職渡世よ」
これが、恥じている声ではない。いばっている声だ。
「ただ仁侠の道は踏む。こいつァ黒駒を助けるためだけじゃあねえ、あのお雪さんを助けるためだ……」
「親分」
ヒゲ万は声をひそめた。
「なんだ？」
「女郎屋へ密偵にはいられるっちゅうことじゃが」
「うん」
「女郎屋は、御経験がごわすか？」
ひと息おいて、
「あらい！　しかも、お江戸、花の吉原でな」
「ほほっ、こりゃたのもしい」
「新門へゆく前にな、松の位と遊んだ」
ヒゲ万先生が笑い出した。
「それで大散財したおかげで破産して、腹ペコの果てがあのうなぎ飯五杯でごわしたか、わは

ははは」

　またひと息おいて、

「まあ、そういうことよ、ガハハハハ！」

　ヒゲ万先生をまねた豪傑笑いであった。

　——それが、ふととまると、

「しかしね、先生、女を助けるためだから今回はしかたがねえが、ひとをだますってのァ、おいらはあんまり好きじゃあねえな」

　と、つぶやいた。

「それに何より、味方までひっかけるってのァ、渡世人の仁義にはずれらあ」

「まだ、あのイカサマ・サイに怒っちょられるのか」

「あの娘さんを助け出したら、おいら黒駒を一つぶんなぐっておさらばするかも知れねえぜ」

「その娘さんを助ける件じゃが、さて勝蔵どんの軍略通りにうまくゆくかのう。おいは少々心ぼそか」

　龍次も不安そうな声を出した。

「そういわれると、おいらの役目も自信がねえが。……」

　屋根の上を、ぐおうという風とともに、バラバラと枯れ葉が鳴ってゆく音がした。

十

　そのあくる日の夕方だ。

　甲府の山田町の貸元、三井の卯吉の土間で、

「おひけえなすって、おひけえなすって」

　と、龍次はしかし、例の通り威勢よく仁義を切っていた。

　早速わらじをぬいで、座敷に通される。若い者が案内するのだが、何だか宿屋のようだ、と龍次は思った。

　家のたたずまいもりっぱだが、内部の木口、建具なども豪勢なものだ。ちょっと江戸の新門辰五郎の家を思わせるが、むろんあれほどあかぬけはしていない。

　通された座敷の正面には、人の背たけより高い六曲のびょうぶがたててあった。

　その手前に、三つのからかねの大火鉢をかこんで、渡世人たちがざわめき合っていた。二十人近くもいたろうか。

「さ、さ、あそこにでも坐っておくんなせえ」

　と、世話役らしい三下奴に掌でさされて、龍次はその火鉢をかこむ一団に、あいさつして加わった。

　火鉢には大やかんがかかり、そばには茶と茶わん、まんじゅうをならべた盆などがおいてある。むこう二つは、ほうとう鍋に一升徳利という組らしい。

　どうも、ふつうの旅にんを泊めるばくち打ちの貸元の様式ではない。修行とは縁が遠い。

　しかし、一座の旅にんたちは、むろん大満悦の顔、顔、顔であった。

「評判はきいてたが、なるほど三井の親分はてえしたもんだなあ」
「これで、二度三度、いや、なんべんわらじをぬいだって、ついぞいやな顔一つしねえっていうぜ」
「盛り切りの冷や飯にたくわんひときれなんてえ貸元もあるってえのによ」
「この食いほうだい飲みほうだい」
「甲州なんかにおいとくのは惜しいや」
「日本一だ」
こんな声の果てに、
「上州の大前田一家もこれほどじゃあねえ。栄五郎親分もでえぶもうろくしたし、いまじゃ日本一の親分はこの三井の卯吉親分だろう」
と、いったやつがあって、
「おい」
と龍次は声をかけた。
「おめえさん、お、大前田の栄五郎親分を見たことがあんのか」
「おや、てめえ、おれに文句をつけるのか。いま来たばかりの若僧のくせに」
と、相手は眼玉をむいた。
「これほど旅にんをでえじに扱っておくんなさる三井の親分を、日本一じゃあねえってえのか！」

「こ、こんな扱いは旅にんの扱いじゃあねえ。と、渡世人にとっちゃ外道(げどう)だ」
「な、な、なにを――」
相手が腕まくりしようとしたとき、むこうのほうとうのほうでも騒ぎがはじまった。
「やい、表へ出ろ、しんげんがけんしんに負けたとァ、ここをどこだと思ってやがるんだ」
「けんど、けんしんがしんげんに負けたとァ、きいたことがねえ」
「うるせえ、しんげんが強えかけんしんが強えか、表へ出て勝負をつけようじゃあねえか」
二人の渡世人が血相変えて立ちあがったとき、ふすまがひらいて、三人の男がはいってきた。
みんな顔をそっちにむけて、半分くらいはあわててひざっ小僧をそろえたが、のぼせあがった二人はそれにも気づかず、
「しんげん勝つか、けんしん勝つか――」
「おう、しんげんか、けんしんか、やるかっ」
と、長脇差(ながどす)に手をかけた。
すると、はいってきた三人のうち、めだって大兵の浪人風が、
「しずかにしろ、親分の御入来だぞ！」
と、わめいた。
凄まじい大声であるのみならず、腹までひびく一喝だ。
「なんの騒ぎだ？」
われにかえった二人は、首をちぢめて、

「へえ、こいつが、そこのびょうぶの絵に文句をつけやがるんで――」

「いえなに、たかが絵のことでござんす。それをこいつが、いきなり青筋たててどなりつけるもんで、つい売り言葉に買い言葉で――」

みんな、あらためてびょうぶのほうを見た。

びょうぶには、絵がかいてある。もうあちこち剝げ、変色しているが、どうやら武者絵らしい。へたくそで、田舎絵師がかいたものだろうが、しょうぎに腰打ちかけ、軍配をつき出した武将と、馬に打ちのり、太刀をふりかざした武将のようだ。

あ、川中島だ、と龍次も気づいた。その軍談は、いつか旅まわりの講談師からきいたことがあったのだ。

そして、二人の旅にんのケンカの意味がやっとわかった。その絵の馬の首は、信玄とは反対の方角をむいている。つまり、謙信が逃げかかっているのだ。わざとそういう絵にしてあるのだ。

――なるほど、ここは甲州だ、と心中にひざをたたいたとき、

「まあまあ、ここでケンカはおやめ、おやめ」

と、もう一人の福ぶくしい男が、ゆったりとした調子でいった。

「この三井の卯吉の家にこられた衆は、みんな兄弟だで。……よくうちを頼ってきておくんなすった。さむい、ひもじい股旅の苦労を、せめてこの一晩だけでもサラリと流してくんな。たいしたことはできんけどな」

これだけの言葉で、ぐしゅっと鼻を鳴らした男たちが何人かあった。龍次も、思わず眼が熱くなる思いがした。

十一

これが三井の卯吉か。――年は五十なかばだろう。中肉中背だが物腰がやわらかく、ばくち打ちの親分というより大町人みたいな感じがあって、一見しただけで、

――こりゃ、黒駒なんかとカンロクがちがう。

と、龍次も認めないわけにはゆかない。

ついで、もう一人の、右頰に虫のような茶色のあざのある男が、

「そういう親分の御意向で、うちへきて下すった旅にん衆にゃ、もしお望みなら、一夜の極楽を味わわしてあげてえ、とおっしゃる。猿屋楼という甲府一番の遊女屋へ御案内するんだ。なに、いやなおひとは、こっちでこのまま寝て下すってもかまわねえが。……」

「そ、そんな馬鹿野郎は一匹もいませんよ！」

と、笑いながらいうと、たちまち、

「是非、その極楽を味わわしていただきてえもんで――」

「なんてえ御慈悲のある親分か――御当家にデイリがあるときいたときは、日本の果てからだってすッ飛んできますぜ！」

「神さま仏さま！　三井の親分さま！」

と、満座、蛙みたいにさわぎたてた。
「ただ――」
と、あざの男はつづけて、
「相手のお女郎えらびに、いままで何度かケンカが起こったので、そいつァこっちにまかせてもれえてえ。承知してくれるかい？　もっとも甲府一の遊女屋だ。ヘンなたまは一人もおいてねえはずだが」
「そ、そんなぜいたくはいいませんや、女なら、だれでもいい！　なあ、みんな？」
「女の道具さえ持ってりゃ、不服はいわねえ！」
あざの男はうなずいた。
「それじゃあ、これから飯にしよう。すんだらおれが猿屋楼に案内する」
そのとき、三井の卯吉親分がぐるっと見まわして、
「ところで、いまきいたんだが、国定忠治どんの息子さんとかの、龍次ってえおひとがいなさるって？」
「へえ、お、おいらでござんす」
龍次がおじぎをした。――さっき、入り口で仁義を切ったとき、問われて答えたことだ。
みんな、どよめいた。
「ははあ、お前さんか」
卯吉はうなずいた。

「そのむかし忠治どんが甲州へきて、武居の吃安（どもやす）親分のところにわらじをぬぎなすったとき、いちど顔を見たことがある。なるほど、そっくりだ」
「へえ、へえ、三井の親分が、おやじに――」
それだけで、龍次の眼はまたうるみかけた。父に会ったというひとは、みななつかしい。
――武居の吃安親分が、三井の卯吉の手で牢死させられたということを思い出したのは、あとになってのことだ。
「おやじさんのことをおぼえてるかね？」
「いえ、なんにも。――なにしろ、おやじが死んだとき、おいらまだ四つで。――」
「ああ、そうか。ま、その忠治どんの息子さんがおれんとこにわらじをぬいでくれたんだが、どうだね、気にいってくれたかい？」
にこやかにいう。龍次は首をふって、
「いや、き、気にいらねえです」
と、いいはなった。
「なに、気にいらねえ？　どこが？」
龍次はちょっと黙りこんだ。返事に困ったわけではない。単純な彼にしては、珍しく複雑な心情に困ってのことだ。
この三井の卯吉ってえひとは、どうも評判通り大親分らしい。その上、おれのおやじも知ってるらしい。しかし、おれは黒駒の勝蔵の諜者としてのりこんできたんだ。それがまるきり惚

れちまったんじゃあしょうがねえ。それに、気にくわねえことは気にくわねえんだ。……

「こいつァね、御当家のこの御接待ぶりが」

と、龍次と口ゲンカしていたやつが、口を出した。

「渡世人にとっちゃ修行にならねえ、外道の扱いだ、なんていってましたよ」

「ははははは！」

卯吉は哄笑した。

「そういうことか。わかる、わかる。国定の息子なら、さぞ気にくわねえだろう。しかしな、つれえ、切ねえ股旅に、せめてここだけいい目にあわせてやろうという、こりゃまあ、おれだけの老婆心からだ。どうか大目に見てくんねえ」

あざの男が口をとがらせていった。

「それじゃあ何かい、おめえさんは女郎屋はやめか」

「いや、そ、そりゃゆきまっさ」

龍次はあわてていった。

「そこへゆかなきゃ、ここにわらじをぬいだ、か、甲斐がねえ」

猿屋楼へいって、その後の神官の娘の安否をうかがう、というのが彼に与えられた使命の一つなのだから、思わず正直にそう口走ったのだが、そうとは知らず、みんなどっと笑い出した。

「いや、こんな虫のいいやつは、はじめて見たわ」

と、あざの男が口をゆがめて、

「うちの接待を気にくわねえだの、外道の扱いだの、いいてえ放題のことをぬかしゃがって、女郎屋にゃゆくとぬけぬけいいやがる。おやじの顔を見てえとはこのことだ」

と、にくにくしげにいった。

こっちからすればあたりまえのせりふだろうが、おやじを持ち出されて、龍次はかっとして、

「お前さんが女郎屋につれてって下さるんだってね。お前さん、猿屋楼の用心棒もやっていなさるのかい」

と、やり返した。

この男が、黒駒村にぜげんといっしょにやってきて、ヤットコの又九郎を斬り殺した祐天仙之助という男にちがいない。――龍次としては、ただ頭にきて、この家に諜者にきたということも忘れたにくまれ口であったが、その言葉をどうとったか、

「なにっ？　おれが猿屋楼の用心棒？」

祐天仙之助は、一瞬、ちらっと大男の浪人風のほうを見た。これが犬神軍次郎だろう。

「てめえは、まさか、黒駒村から……？」

地を這うような声でいって、犬神も龍次をにらんだ。

「まあまあ」

と、三井の卯吉が声を出したが、その一瞬前まで、彼もまた別人のような凄味のある眼で自分を見つめていたのを、龍次は見た。

卯吉はまた笑顔になっていう。

「旅にん衆の前で、みっともねえいざこざはよした、よした。今夜のところは、ともかくも楽しく猿屋楼で遊んできな。それじゃあ、みなの衆、ごきげんで。――犬神先生、祐天、きな」

まだ険悪な顔をしている祐天仙之助と犬神軍次郎を眼でうながして、そのまま座敷を出ていった。

やがて、あらためて酒と飯が運ばれる。まさに至れりつくせりだ。

が、大飯ぐらいの龍次も、今夜ばかりは飯がのどに通りにくい。

さっき祐天に、虫がよすぎる、と罵(ののし)られたからではない。

また、いま自分が祐天に猿屋楼の用心棒か、ときいたときに相手が見せたただならぬ反応は、ただ侮辱されたという怒りばかりではなく、その言葉が、ぜげんと同行して黒駒一家の三人を斬り殺したことをほのめかされたのか、と、とった驚きのためらしい。そして、それは三井の卯吉も承知の上らしい。

単純な龍次も、単純なだけにそのことは直感した。

卯吉親分がどこまであの事件にからんでいるか、探ってくれ――という黒駒の勝蔵の依頼に、お安い御用だとひき受け、あとになって、いや、そんなことがおいらにできるかな、と心細くなったけれど、彼はまんまとその目的を達したのである。

もっとも、その目的を達するために相手を挑発したのではない。売り言葉に買い言葉のはずみでそうなっただけで、おかげで相手方の疑惑をまっこうから受けることになってしまった。

これはもう諜者のやりかたではない。勝蔵がどう見たか知らず、およそ諜者の役ほど龍次に

合わない仕事はないのだ。

さすがに三井の卯吉はその場をおさめて立ち去ったが、これがこのまま無事にすむとは思われない。

ところが――いま龍次の食欲をなえさせているのは、実はそのことでもないのだ。

女郎屋ゆきなのだ。

勝蔵からたのまれたのはもう一つ――こっちのほうが主眼なのだが、三井の卯吉のところにわらじをぬげば、必ず旅にんを猿屋楼に招待してくれる。それに応じて猿屋楼にゆき、売られたお雪がどうしているか探ってくれ――という願いで、さあこれからその猿屋楼へゆくことになったのだが、それが彼にとって一つの恐慌である。

女郎屋にゆけば、女郎と寝なけりゃならねえだろう。

それは大いに興味があるが、やっぱりいやだ。女がいやなのじゃあなく、旅にん修行に出て、こんな「外道の接待」ではじめて女を抱くってえだんどりが気色(きしょく)が悪い。

二十歳の国定龍次はまだ童貞なのであった。

しかし、お雪さんの安否を探るためには、猿屋楼へゆかなけりゃならねえ。――この大矛盾の中に、彼の胃袋はなえて、せっかくの山盛りの飯にも一箸か二箸をつけたばかりであった。

やがて、祐天仙之助がまた出てきた。

そして、一行を引率して、夕暮れの往来を柳町の猿屋楼へ向かう。いちど、ちらっといやな眼で龍次を見たが、何もいわない。

いましがた、卯吉親分と相談した。卯吉は、あの場で、神官の娘の身売りのことや黒駒一家の斬殺のことなどを旅にんたちに知られるのはまずい、と考えて、仙之助や犬神を制してひきあげたのだ。

すぐひっくくって、音(ね)を吐かせやしょうか、と、いきごむ祐天に、卯吉は思案ののち、

「とにかく国定忠治のせがれってんだ。そいつが黒駒一家のまわし者になったとしても、いってえ何しにきたかわからねえ。しばらくようすを見よう」

と首をふった。

十二

で、甲府の町を、遊女屋めざして、渡世人のむれがゆく。

わけを知らなかったらなぐりこみかとも思い、わけを知ったら笑い出すだろうが、毎度のことなので町の人々はみんな知らない顔をしている。

遊女屋めざして——といっても、山田町から柳町まではほんの一足だ。

ゆくさきは猿屋楼だが、ゆく連中も道中猿のごとくさわぎたてて——口からもれるのは、ただ三井の大親分への讃歌だ。実際旅にんにこんなプレゼントをしては、卯吉親分の評判がいいのもむりはない。

ひとり龍次は、浮かない顔で歩いている。

気前のいい大親分に、あんな大それたいやみをいって、彼だけ旅にん仲間からいささかハチ

ブにされている気味があるが、彼を困惑させているのはむろんそんなことではない。

と、一団は、ちょっとした蜃気楼みたいな灯の世界にはいっていた。

この甲府を支配するのは、江戸からきた旗本のいわゆる甲府勤番衆で、彼らはこの山国へ飛ばされることをいやがって、「山流し」と呼んでいる。が、何といっても甲州街道のかなめで、かつては信玄の牙城、また徳川大納言忠長や柳沢吉保が城府とした町だ。

全国二十五カ所といわれる公許の傾城町ではないが、右のごとく勤番侍の歎きをしずめるためもあり、かつまた何もかもルーズになった幕末期のことで、いまはこの柳町は、いわゆる飯(めし)盛(もり)女郎の範囲を超えた相当大規模な遊女町となっている。

その中で、ひときわ豪勢の景観を誇っているのが猿屋楼であった。

往来に面した紅格子の中に、灯を受けてならんでいる遊女たちの姿が浮かんで見える。前にはひやかしの客たちが、ぞめき歩いている。

そこへ近づいて——ふいに、

「あにさん！」

という声をかけられて、龍次は飛びあがった。

葉の落ちた柳のかげに、笠をかぶった旅姿の女がひとり立っていた。——おりんだ。

一息のんだのち、龍次はそっちへかけ寄った。

紅格子へ突進してゆく旅にんたちに注意を奪われて、祐天仙之助はそれに気がつかなかったようだ。

それどころか、彼らを追って、うしろから、
「やいやい、そっちはお門ちげえだ。勝手にえらんじゃいけねえって、さっきいったじゃあねえか。申しわけねえが、向こうのほうにしてもれえてえ」
と、少し離れた、うす暗い格子のほうへみんなを追い立てていった。そっちが安女郎のならんでいる場所らしい。
「あにさん、どこへゆくのさ」
龍次が何かきく前に、おりんがいった。遠い灯を受けて、黒い眼がひかっている。
「お女郎屋へはいるつもりかい？」
龍次はヘドモドして、しばらく猿屋楼とおりんに眼をさまよわせていたが、やおら、
「これにゃ、ふ、深えしさいがあるんだ」
と、いった。
「わけあって、ひ、一人の女を、あの女郎屋から助け出さなきゃならねえ。そうしてやらなきゃ、と、渡世人としておいらの顔が立たねえ。そ、そのために、あそこへはいって、ようすを探らなきゃならねえんだ。……」
「黒駒村のお雪ってえ女のひとでしょ？」
おりんはいった。
「や、おめえ、知ってるのか」
「だいたいは、知ってるよ。黒駒一家の衆が殺されて、お雪さんが連れてゆかれるのも見ていたよ」
龍次は眼をむいた。
「だけど、あにさんがあそこへいって、どうしようってのさ？　助けるったって、お雪さんがどこにいるのかわかりゃしないだろうし……」
「だ、だからようすを探りにゆくんだ」
「どうして探るの？」
「ね、ね、寝物語にお女郎にきくんだ」
「ねものがたり？」
おりんはふと笑いかけ、すぐにきっと怒った眼になって、
「そんなことはさせないよ！」
と、さけんだ。
「そんな旅にん修行があるもんか。だいいちそんな器用なこと、お前さんにゃできゃしないよ」
「実はおいらも、こ、心細いんだが、それよりほかに法はねえ。と、とにかく、一宿一飯の仁義で、その役を引き受けちまったんだから……」
「へんな役……」
おりんは、イイーダ、という顔をして、
「いえ、その役、あたいがやったげる」

「なに、おめえが……で、どうやって？」
「とにかくあたいを、あの見世に身売りさせるといって売りこんで。——それをあたいがいやだといい、お前さんが、いいきかせるということにして……今夜二人であそこに泊まろうよ」
「ギョギョ、二人で女郎屋に泊まる？　は、はたごじゃねえんだぜ、こ、子供みてえなことをいうない」
「とにかくお前さん一人を、お女郎屋には泊まらせないよ。——あ、探しにきたよ、やってみな！」
　と、おりんは龍次をおしやった。
　なるほど祐天が、龍次のいないのに気がついたのだろう。見世の前をキョロキョロしながら戻ってくるのが見えた。
　すぐこっちに、ぎょろっとした眼をむけて、へんな表情をした。もうしかたがない。龍次はかけ出した。
「どうしたんだ？」
「へ、へえ、へんな女につかまっちゃってね」
「へんな女？」
「くにの上州国定村の娘でござんすが、お、おいらを追っかけて歩いてる女なんで……いまおいらを見つけて、そこの見世にいっしょに泊まろう、なんていうんでさあ。じょ、女郎屋とはたごのちげえもわからねえ女なんです」

「ほほう？」
「め、めんどくせえから、あいつをここにたたき売って逃げようと思うんだが、そうするにゃ、やっぱり説得しなけりゃならねえ。ひ、ひと晩、女郎屋の一部屋に、いっしょに泊まらせてくれませんか？」
「……？」
　祐天はいよいよ狐につままれたような顔をした。
　ものもいわずに、柳のかげに立っているおりんのほうへ歩いてきた。
　うしろからついてきた龍次が、のみこみ顔でいう。
「おい、あそこに泊まらせて下さるそうだ。そこで、こ、これから話をしよう」
　祐天は、娘のかぶっている笠を、腕をのばしてちょいとあげて、
「ううむ。……」
　と、うなり、
「こいつァ……山王神社のお雪よりまだ上玉だぜ。……松の位だ！」
　と、思わず嘆息を発した。
「そうか、それじゃあ、いっしょにゆこう」
　この奇妙奇天烈な話に、一も二もなく彼がそううなずいていったのは、安女郎の格子の前に旅にんたちを待たせてあることもあるが、何よりその娘の匂い立つような野性と可愛らしさが、彼の疑惑やためらいを吹きとばしてしまったからだ。

龍次をうながして歩き出すと、娘は四、五歩おくれてトコトコくっついてくる。
「おい、あんな娘に追っかけられて、お前、どうして逃げ……女郎にたたき売ろう、なんていうんだ」
と、祐天は龍次の耳に口をよせた。不審は吹きとばされたといっても、やっぱりきかずにはいられない。
「そ、それがね。……ここが、これで」
と、龍次は頭に一本指をあてて、クルクルまわした。
「なに、あれが？　そうは見えんが」
「いや、おやじも兄弟もそうなんで……あれはまだ、マ、マトモなほうでござんすが、やっぱり少しおかしいところがある。そ、そのうち、まるきりクルクルパーになるにちげえねえ。そいつがこわくって、おいら逃げまわってるんで」
「へへえ、そうか。……そうだとすると、松の位もむずかしいことになるが」
祐天は少し動揺したようだが、
「とにかく、こい」
と、また猿屋楼に近づいた。

十三

あらためて、渡世人も集めて、見世（みせ）にはいる。

はいると、迎えに出た女郎屋の若い衆に、
「例の通り、合部屋に配ってくれ」
と、渡世人たちをあごでさし、龍次とおりんを、いぶかしげな表情で見ている別の若い衆に耳打ちし、さて長い廊下をいく曲がりかして、奥へつれていった。
江戸の吉原にくらべれば、万事泥くささのきわみだが、吉原を知らない龍次には、まるで話にきいた竜宮城の中みたいに見える。
長火鉢がおいてある六帖ばかりの部屋に通された。何に使う部屋か、ここは女郎用らしくない。
「ここでしばらく待っててくれ。おれは、連れてきた野郎どもの始末を見とどけなきゃならねえ」
祐天仙之助があわただしく立ち去ったあと――龍次はおりんに、あらためて今夜のいきさつと、さっきの祐天との会話を説明して、
「と、とにかく、おめえは少しクルクルパーってえことになってるんだから、そのつもりでいてくれ」
「どっちがクルクルパーだかわかりゃしない」
と、おりんはふき出したが、すぐまたつんとして、
「いったいこれが、旅にんの修行になるの？」
龍次は頭をかいた。

「そ、そういわれりゃ、おいらも何してるんだかわからねえ」
「だからクルクルパーっていうんだよ」
おりんはまじめな顔になって、
「それで、これからどうするのさ？」
「だからさ、お、お雪さんがもう女郎に出されちまったのか、まだなら、いまどうしてるか調べるんだ」
「どういう風に調べるの？」
「この見世の中を、おめえにあちこち探してもらうのよ。おれがやるつもりだったんだが、なるほどおめえのほうがいいかも知れねえ」
「それから？」
「そのようすを、あしたのひるごろ外でブラブラしているヒゲ万先生に知らせる。そ、それによってヒゲ万先生がこの猿屋楼に仕掛けをする」
「仕掛け？　どんな仕掛け？」
「と、とにかくおいらがお雪さんを連れ出してさ、た、ただ連れ出したところであと追っかけられるにきまってるから、そんなことのねえようにヒゲ万先生がユスリをかける——ってえ手はずになってるんだが。……」
それについて龍次が話していると、やがて祐天仙之助がもどってきた。
眼で龍次を廊下へ呼び出して、

「国定の、どういうことになった？」
と、ささやく。
「娘さん、ここにいてくれる気になったかい」
「それが……じょ、女郎屋って何するところか話してやったんだが、まだよくわからねえらしい」
と、龍次がヘドモドしながらいった。
「と、当分、ここでおいらといっしょに泊まることにしよう、なんていいやがるんでさあ」
「当分？」
「もうちょっと……も、もう二、三日待っておくんなさい」
祐天は首をひねり、ふと龍次に眼をすえて、
「おい、あの娘はオボコかえ？」
と、きいた。
「へ、そ、そのはずで……」
龍次はちょっと赤い顔をして、相手の問いをそれ以上さえぎるように、
「な、何にしても、いちど、この見世の大将にお会いしなけりゃならねえんだが……」
というと、祐天は少しあわてた表情になって、
「今夜、ここの亭主は留守だってよ。おっても、めったに人に会わねえが……」
と、首をふった。

「もっとも女郎屋の亭主が客をとるわけじゃあねえから、いてもいなくっても、かまわねえようなもんだが」
「えっ、ひ、人に会わねえ？」
と龍次はききかえしたが、きのう黒駒の勝蔵から、猿屋楼の勘助はめったに人に会わない、よんどころなく会うときは、頭巾に目かくしして会う、と、きいた話を思い出した。
「それじゃあ、お、女を売るにも買うにも……」
と、いいかけたとき、おりんが顔をのぞかせた。
「あにさん、お女郎屋ってどんなとこか、いっしょに見てまわろうよ」
愛くるしい顔でいう。
「ばか」
「なら、あたいお女郎になるの、やめるよ。見て、面白そうだったら、なってもいいけど」
お芝居にはちがいないけれど、それにしてもなんと応答していいのか、眼を白黒させている龍次を見て、祐天はニヤリと笑った。
「なに、見たいか、それじゃ見せてやろう。見りゃわかるが、きれいなおべべきて、うめえものを食って、これ以上たのしいことァねえ暮らしだ。アハハ、いや、なまじな説得より、一見のほうが効き目があるかも知れん」
「そ、そりゃ祐天のあにい……」
「ただし、おめえといっしょに、というのはだめだ。だいいち間取りもわかるめえ。おれが案

内してやる。……おめえはここで待ってな」
龍次は狼狽（ろうばい）し、おりんも戸惑った顔になったが、すぐ決然として、
「いいわ。あたいだけ――このひととといっしょにゆく」
と、あごをあげた。
祐天は声を出して若い衆を呼び、
「おい、このひとがここを出ねえように見張ってろ。遊び客じゃあねえ男に、見世の中をウロウロされちゃあ目ざわりだ」
と、命じた。
やがて祐天仙之助のあとにくっついて、おりんは軽やかに廊下を遠ざかっていった。
龍次はとり残され、ひとり座敷に、石ぼとけみたいに坐っていた。
気がつくと、もうあっちこっちで三味線の音がかしましい。それに男の酔った声と女の嬌声がまじる。
その中で。――
「あっ、あれ、何してるのさ？」
すっとんきょうなおりんのさけび声がきこえた。
祐天が何か叱っているような声がしたが、それには平気で、
「まあ、おかしい、おかしいわねえ。アハハハハ！」
というおりんの高笑いがながれてきた。

何が見えたのか、何がおかしいのか、わからない。が、龍次はギョクンと立ちあがり、おちつかない眼を声のほうへさまよわせ、柱にもたれかかっている若い衆のうす笑いした眼と合うと、口をへの字にしてまた坐った。

しばらくして、

「面白い、面白いよ、もっと見せて——」

というおりんの声が、こんどはずっと遠くできこえた。

立ったり、坐ったり、龍次としては水中に浮かびつ沈みつしているような息苦しい一刻ほどが過ぎて。——

二人がもどってきた。

おかしいことに、おりんをつれていばって出かけたはずの祐天仙之助がヘトヘトになった顔つきになって、おりんのほうが颯爽(さっそう)としている。

まるで燃える花のような感じで——イライラして、どなりつけてやろう、と待ちかまえていた龍次のほうが気圧(けお)されて、口をポカンとあけて迎えるよりほかはなかった。

「いやあ、参った、参った」

と、祐天がニガ笑いして、また眼で龍次を廊下へ呼び出し、

「なるほどおめえさんが逃げる通り、あれを女房にしちゃてえへんだ。が、女郎にするなら——ありゃ天下一面白い女郎になるぜ」

と、ささやいた。

「な、何が参ったんです？」

「ま、それはあとで話すとして、国定の、あの娘、是非この見世の女郎に欲しい」

「へ、やっぱり祐天のあにいは、さ、猿屋楼のぜげんで？」

祐天はうろたえたが、すぐに威嚇的な眼になって、

「とにかく、おめえと約束したんだ。女郎になるように説得してくれ」

と、いったあと、

「さて、今夜これからどうするね？」

「ど、どうするって……」

「こういう話じゃ、おめえ、まさかあの娘といっしょに寝るわけにもゆくめえ。……別の部屋へゆくか」

「そりゃ、ど、どうでも」

龍次はうなるようにいった。

さっきから彼は赤くなったり青くなったりしている。この不愉快な問答の間、祐天をぶんなぐりたくって、それを抑えるために必死の力をふりしぼっていたのだ。

「この件は親分に注進しておかなきゃならねえ。おれは山田町に帰るが、あしたまたくる。——おい、この部屋に娘さんのふとんだけしいて、このひとは別の部屋に寝させてやってくれ」

と、祐天は若い衆に命じて、立ち去っていった。

で、若い衆がその通り、一人前の夜具だけしき、龍次をうながすと、

「いっちゃあ、ダメ」
と、ふいにおりんがいった。
「こんな家で、ほかへいって何をするのか——あたいから、離れちゃダメ」
龍次は混乱しながら、
「そ、それじゃあ、おめえさん、いってくれ」
と、若い衆にいい、モジモジしている相手に大目玉をむいて、
「ゆかねえか！」
と、どなりつけた。

十四

——さて、二人だけが残った。
あらためて、顔見合わせて——ふいにおりんが飛びかかってきた。と見るや、いきなり龍次のほっぺたをピシャピシャひっぱたいた。
「ひどい！　ひどい！」
泣きながら、さけぶ。
「あたいを、あんな目にあわせて！」
実は、龍次のほうこそおりんをはりとばしたいくらいに腹をたてて待ちかまえていたのだが、機先を制され、毒気をぬかれて、

「な、なに、おめえ、どんな目に合わされたんだ？」
「あんなもの見せて——」
「へ、何を見せられたんだ？」
「ばか？」
と、いって、またおりんは龍次をひっぱたいた。龍次は頰をおさえて、
「だ、だって、おめえ……なんか、うれしそうな声を出してたじゃあねえか」
「クルクルパーのまねしてたってこと、わからないの？　……ひどい、ひどいわ、あにさんのためにこんなところへ連れこまれて……」
泣きじゃくっているうちに、おりんはつっ伏してしまった。波打つその背中をながめながら、ここにはいるといったのはおめえのほうじゃあねえか、と龍次は思ったが、それを口に出せる状態ではない。
それよりおりんは何を見たのだろう？　女郎屋といったって、まさか何もかも「見学」できるようになってはいないだろうが、祐天仙之助がついていたから——いや、その祐天もあとで悲鳴をあげていたくらいだが、とにかく見るべからざるものをおりんは見たにちがいない。
「あ、そうだ、あにさん」
おりんは顔をあげた。眼は涙にぬれているが、案外けろっとしている。
「あのお嬢さんのいるところ、つきとめたよ」
「えっ、ど、どこに？」

「もっと奥のほう……そっちへゆきかけたら、あのあざのある男が、そっちへいっちゃあいけねえ、あそこには松の位の修行中の女がいる、と、いいかけて、あたいを見て、そうだ、おめえもあしたからあそこへ行って修行するか、むかし江戸の吉原にいた女がやりてばばあになって、みっちり仕込むんだ、といったよ」

「へへえ。……」

「あしたにでも、あたい、もいちどのぞいてくるよ。今夜はもう寝ちまおう」

といって、ふと夜具のほうを見て、おりんはふいにぱっと頬を染めた。

そこにしいてある夜具は一組しかない。

「お、おいらはどこか、よその部屋にいって寝る」

龍次もうろたえた眼になって、立ちあがろうとした。

「いっちゃあいけない。ここにいて」

おりんがまたいった。

「だ、だって……今夜、おめえと一つぶとんに寝るわけにゃゆかねえ。こ、こんなところで、おめえといっしょに寝るなんていやなんだ」

「あたいもいやだよ。……でも、お前さんをほかへやるのはもっといやだよ」

と、おりんは当惑のあまり身をよじらせた。

実際おりんがここへついてきた最大の理由は、龍次への監視のためであったのだ。とくにたったいま「見学」してきたばかりなのだから、とうてい龍次をここから出すわけにはゆかない。

といって、一方でおりんは、祝言（しゅうげん）は国へ帰ってからと、おとっつぁんの大前田の栄五郎に誓っている。——

——で、結局その夜、おりんだけがそのふとんに寝て、遠く近く潮騒のように嬌声のきこえる中に、龍次は冷えこむような愛刀小松五郎を抱いて、壁にもたれて眼をつぶった。

なんだか、ひどく馬鹿々々しいようでもある。

——と、真夜中ごろであったろうか。彼はふっと夜風を感じて、半醒の眼をあけた。すると、向こうのふすまが二寸ほどひらいていた。

だれかのぞきこんでいるようだ。頭巾をかぶった人間らしいが、眼のあたりも黒くて、何だかぼやけている。

「……だれだ？」

一、二分後、ぱっと彼は立ちあがって、そのふすまをあけにいった。

が、そこにはだれの影もなく、網あんどんのかかった長い廊下のむこうに、パタリ、パタリと女郎のぞうりの音がきこえてくるばかりであった。

龍次は夢をみているような気がした。

——あくる日のおひる前、朝帰りの客や、若い衆の掃除などでざわめいている猿屋楼の中を、それにまぎれておりんは、とうとう神官の娘お雪に会ってきた。

やりてばばあのいない間の、ほんのみじかい探索であったが、それによるとお雪は、まだ客をとらされていないが、父が牢から釈放されない以上、ここを出るわけにはゆかない。また父

が釈放されても、自分は身売りしたのだから、その代金を返しでもしない以上、やっぱり出るわけにはゆかない、と覚悟をきめているという。

「ふうむ。……」

龍次は考えこんだ。

「と、ともかく、そ、そのことを、ヒゲ万先生に知らせておかなきゃならねえが。……」

「どこにいるのさ？」

「この猿屋楼の前の往来を、おひるごろ、ブラブラしてるはずなんだが……」

「それじゃあ、あたいがちょいといってくる」

おりんは、その通りにした。

十五

その日の午後だ。山田町の三井の卯吉の家を訪れた男があった。りっぱな口ひげをはやし、羽織はかまに威儀を正し、

「拙者は上州赤城神社の禰宜、厚井宝塔と申すものでごわすが、ちょっと三井の親分に御謁見を願いたく存ずる」

と、荘重にいった。左わきに、あきらかに切餅と見える白い紙包みを盛った三方をかかえこんでいる。

卯吉の家では、昨晩柳町の遊廓へいった連中が――国定龍次を除いて――みな猿野郎みたい

になって帰ってきて、ひとしきりの騒ぎがおさまったあとであった。

「ひや――御謁見ときやがった」

ばくち打ちの家には珍しい――というより、はじめてのおごそかな客だから、乾分たちもめんくらって注進した。

卯吉がいぶかしげな表情で出てきて、ともかくも座敷に通した。神官にしてはいかめしい大刀をさげて通る。

禰宜厚井宝塔は、自分は黒駒村の山王神社と知り合いで、一年にいちどくらいはむこうを赤城へ招いたり、こちらから甲州を訪れたりしているが、こんどやってきて、はじめて山王神社の神主どのがこの春から入牢していることを知って驚きいった。そして、三百両を出せば御放免になるとこちらの御主人が仰せられた由で、その通りここに三百両持参つかまつった。なにとぞよろしくお願い申す、といって、十二個の切餅ののった三方を押し出した。

「何、どういうものか、あっしのような至らねえ人間に、お上が十手捕縄をあずからせて下すったんでね。牢屋のほうにもちっと顔がききやすんで」

と、卯吉が弁解がましくいうと、

「いや、三井の親分は実に寛仁大度の大親分だと承わっちょりもす」

と、厚井宝塔は誠実に答えた。

「とにかく、その件は承知いたしやした」

「で、放免はいつでごわしょう？」

「あした――いや、お望みなら、きょうじゅうにも」
「そりゃ早かほうがよか。なにとぞ、なにとぞ」
この件よりも、卯吉は相手の素性がいぶかしいらしく、
「あなたさま、上州の赤城神社の禰宜とやら承わりやしたが……いま、おききしていると、どうやら薩摩のおかたらしゅうござんすが」
「さよう、おいどんは薩摩の人間でごわす」
「その薩摩のおかたが、どうしてまた上州の赤城神社の禰宜などやっていらっしゃるんで？」
「いや、そりゃな、上州にゃ大前田の栄五郎っちゅう遊侠の大親分がおられることは御承知かな」
「えっ、大前田の栄五郎親分……知ってるどころじゃあねえ」
思わずさけんだが、三井の卯吉は大前田の栄五郎に、いままで会ったことがない。これまで卯吉がひたすら甲州一円を制圧するのにけんめいで、甲州の外へ出なかったからだが、しかしその名は、まさに知ってるどころではない。
実は卯吉の最高理想は大前田の栄五郎なのだ。その人柄ではない。日本じゅうのやくざから捧げられるその人望ぶりに対してである。――彼が、自分の家にわらじをぬいだ旅にんを、みんな女郎屋に招待するなどという大サービスをやるのも、実は三井の卯吉という名を大前田の栄五郎にならべたいという野心からであったのだ。
「その大前田の親分がどうなすったんで？」

「栄五郎親分の縄張りが薩摩にごわす」
「へえ？　薩摩に？」
卯吉は奇声を発した。これはあんまり奇天烈すぎる。
が、すぐに、そうだ、そういえば大前田の栄五郎の縄張りは六十四州に二百何十かあるとかきいた。薩摩とはとっぴだが、しかし計算上あるかも知れない、いや、あるにちがいない、と思いなおした。
「それが栄五郎親分がいつか薩摩においでになったとき、ふとした御縁で知り合って、それで薩摩で元神官であったおいどんが、赤城神社の禰宜として呼ばれたっちゅうことでごわす。大前田村は、赤城神社のふもとのほうで――」
「ははん、それじゃあなたさまは、大前田の栄五郎親分とお知り合いでござんすかい」
さしもの三井の卯吉も、やや恐慌をきたした顔で、
「ところで、あなたさまは黒駒村の山王神社におゆきだそうで、それじゃあそこの娘さんのことについて、何かおききでござんすね」
と、上眼づかいできいた。
「承わった。まことに驚きいった話で」
と、厚井宝塔はうなずいた。
自分のところの祐天仙之助や犬神軍次郎が、そのとき黒駒一家の三人ばかりを斬殺したことを知ってるか、どうか――それをききただすべきか、どうか、卯吉がとっさに迷っていると、

「そのことにつき、これから柳町の猿屋楼とやらへかけ合いに参るつもりで」
と、宝塔はいった。
「へ、かけ合い？　どうかけ合いなさるんで？」
「ま、お雪どのを返してくれるように、と談じこむつもりでごわす」
彼は一礼して、
「では、お願いの件はよろしく頼みいる」
と、立ちあがった。

十六

しばらくののち、厚井宝塔は猿屋楼で、そこの亭主猿屋勘助と会っていた。
昼日中、遊客でもない人間が女郎屋を訪れて亭主に面談するなど珍しいが、ここでも彼の、上州赤城神社の禰宜という思いがけない名乗りと、何よりもその威儀荘重な風貌がものをいったと見える。
それ以上に、猿屋の勘助が人前に姿をあらわすとは。——
宝塔は知るまいが、黒駒の勝蔵が龍次やヒゲ万先生に対して、勘助がよんどころなく人に会うときは、眼のあたりだけのぞいた頭巾をかぶり、その眼のあたりも紗の布をかけている、といったが、その通りの姿であった。
厚井宝塔はあらためて名乗り、こちらに身売りした黒駒村山王神社の娘御をなにとぞお返し

下されたい、と申しいれた。
「ははは、そりゃ困ります」
と、頭巾の中で、勘助は笑った。
きみの悪いフガフガ声だ。勝蔵は、梅毒で鼻が落ちてるってえ話もあるといったが、鼻ばかりではなく、心臓も悪いのか、はあはあと息を切らしている。
「いま、あなたさまのおっしゃったように、お雪さまはこちらに身売りなすったんで……代金はちゃんとお支払いしてありますのでな。とびきり三百五十両。……それをまさか、タダで返せとはおっしゃりますまい」
「その代金はお返しするつもりでおりもすが」
「いや、代金を返して下されば、お身柄をお返しするというわけにはゆかない」
頭巾の首が、ユラユラと左右にゆれた。
「ほかのたまなら知らず、あの娘御にかぎってはな。あなたさまはまじめなおかたらしゅうございますから、ここで申しますが実はあの娘御、まだ見世には出してない。……その水あげは、甲府のお城の御身分あるさるお武家さまにしていただくことになっておりますんで」
「ほ？」
「目下、そのためにいろいろ作法を教えておりますようなわけで」
厚井宝塔は眼をむき出して、
「そりゃ、いつごろのことになりもすか」

「さよう、きょうから数えて、……七日あとのお約束になっておりますが」
宝塔は眼をつぶり、ややあって、
「三千両……いや、身代金の十倍、三千五百両なら、どうでごわしょう？」
と、切り出した。
「なに、三千五百両！」
こんどは、勘助が眼をむいた。――いや、その眼は見えないが、そうとしか見えない声であった。いくら身売りの女を買いもどすとはいえ、これはまさに眼の玉のとび出るような値段だ。
「そ、それだけ出されるというなら……ひとつ、考えさせてもらってもよろしゅうございますが」
と勘助はうなって、
「しかし――」
と、問い返した。
「ほんとうに三千五百両おそろえか。実際それだけ御用意できますか」
「いや、すぐにはないが、さるところに急行して工面いたす」
勘助は、なあんだ、という顔になった。
「お雪さまの水あげは、七日のちでございますぜ、七日で上州まで往復できますか？」
「いや、上州ではない。実は拙者、赤城神社のふもとにあたる大前田村の栄五郎親分と親交がごわしてな」

勘助は黙っている。これは女郎屋の亭主だから、大前田の栄五郎といっても通じないかも知れない。
「その大前田の親分の縄張りが、甲州との国ざかいに近い相州のさるところにある。そこへいって調達してこようと思いもす。それまでお待ち願えんでごわしょうか？」
「しかし、七日たたぬうちでないと困りますが……」
「いや五日お待ち下されば」
と、厚井宝塔は胸をたたいた。
猿屋勘助はとうとう、うなずいた。
「それならば……五日のちまでに三千五百両おそろえ下さるなら、お雪さまはお返しいたしましょう。お城のお武家さまにはおことわりしましょう」
「ありがとうごわす」
宝塔は頭を下げて、それから、ふと聞いた。
「ところでお雪どのを花魁になされたあかつきは――何ちゅう源氏名で出されるはずでごわしたか」
「さよう、薄雪、と呼ぼうと考えておりましたが」
「薄雪太夫、でごわすか。そりゃあの娘さんにいかにもふさわしか」
宝塔は感嘆にたえず、といった顔で、
「その花魁姿の薄雪太夫をいちど拝見したかもの……」

と、いって、あわてて首をふり、
「いや、いや、とんでもなか。そげなものを見るようなことがあっては一大事、そうはさせんつもりでごわす」
と、いった。
――と、そのとき、
「あっ……この見世の旦那さんて、このひと？」
というすっとんきょうな女の声がして、バタバタと走りこんできた者がある。
「いちどごあいさつしなくちゃと思ってたんだ。あのう……あたい、この見世にごやっかいになっている女です。はじめまして。はじめまして」
おりんだ。
彼女は朝からとびはねている。
はじめ、「なんだ、あの娘は？」と不審な眼をむけていた妓楼の連中も、その野の蝶のような愛くるしさとひとなつこい天衣無縫ぶりに、しだいに笑顔を見せるようになり、それにだれいうともなく、「あれも女郎にするのだ。しばらく好きなように遊ばせておけ」というのが御亭主の意見らしい、と伝えられて、なすがままになっていたのであった。
そのおりんが――横からおじぎして、
「あらっ……ふくめんなんかして、どうしたのよ？　――ちょっと顔みせて」
と、そばによって、なれなれしく手をかける。

「何をする」
猿屋の勘助は狼狽(ろうばい)して、頭巾をおさえ、
「おいっ、この女、連れてってくれっ」
と、悲鳴をあげて、逃げ出した。
あわてて、二、三人の女郎屋者がかけこんできて、この奇態な女を連れ出す。
厚井宝塔は、キョトンとしてこの騒ぎを見ていた。
――さて、五日目の午後だ。
赤城神社の神官厚井宝塔がまた猿屋楼にあらわれた。
それが、ふしぎなものを同伴している。荷車に美しい覆いをかけた夜具を積み、それに、
「猿屋楼松の位・薄雪太夫さん江　上州大前田の栄五郎」
と、墨くろぐろと大書した白い布が垂らしてあった。
さて、これを伴ってきた宝塔は、猿屋の勘助にやや悄然としていった。
「申しわけごわせん。例のお約束、果たせぬことに相成りもした」
「――と、いうと？」
「三千五百両、どうしても都合がつきもさん」
そりゃそうだろう、いくら大前田の栄五郎の縄張りだって、それをあずかってる相州あたりの親分が、ちょっくらと三千五百両そろえられるわけがない。上州の本家へいったって、むりだろう。

「拙者の話をきいて、相手は笑って、神主さんが女郎の身請けなんて、そんなまねはよしたがいいだろう、といいもしたが」
「なるほど」
「しかし、赤城神社の禰宜さんから頼まれて、まるきり袖というわけにもゆくまい。五十両だけ用立てる。ただし、それも自分の金じゃない、大前田の親分に代わって義理を果たすんだ、といって五十両よこしもした」
「ふんふん」
「そこで拙者、身請けの件はあきらめることにいたしもしたが……三千五百両のお約束に五十両とはあんまりひどか、よか、どうせのがれられぬ運命ならば、せめてお雪どのがりっぱな花魁になられるように、そのはなむけとして、ちりめんの積夜具ひとかさね、あつらえてきもした。どうぞ、受けとって下され」
「それはそれは。いや、そんなことだろうと思っておりましたよ」
猿屋の勘助はフガフガ声で笑った。
「ありがとうございます。お志のほどは、あれによく申しつたえますすで」
「それから……山王神社の父御のほうは、先日ぶじ御放免になりましたようで、そのこともおつたえ下され」
「はあ、そりゃ」
勘助はうなずいたが、眼まで黒い紗で覆っているので、どういう表情でいるのかわからない。

「では、あさってごろ、薄雪太夫の花魁姿を一目拝観させていただきに参る。よろしゅうごわしょうか？」
この場合、いやだともいいかねて黙っていると、厚井宝塔は人の善意を疑わない顔で、ていちょうにおじぎして去っていった。

十七

——七日目の朝だ。
例によって朝帰りの客がひきあげる騒々しさの中で、突然、けたたましい声が走った。
「お雪がいない！　どこへいった？」
むかし吉原の女で、いまこの猿屋楼でやりてばばあをやっている女であった。
「だれか——お雪がどこへいったか知らないかえ？」
その娘を住まわせていたのは、病気した女郎などを寝かせる部屋で、逃亡などしないように外からかきがねがかかるようになっている。その部屋で、ここ数日、花魁の特訓をほどこしていたのだ。そして昨夜もかきがねを下ろしてばばあは立ち去ったのだが、けさその戸をあけてみると、中のお雪は煙のように消え失せていたのである。ほかに逃げる口はない。
「どう考えたって、外からかきがねをはずしてあけ、あとでまたかきがねをかけて逃げたやつがいるにちげえねえ」
すぐに、そういい出したのは、祐天仙之助であった。前夜も股旅者を引率してやってきて、

ついでに彼も泊まりこんでいたのだ。
そして、ふいにはっとしたように、
「おい、あのクルクルパーを調べてみろ」
と、いい出し、自分からその娘を泊めてある部屋のほうへかけていった。そのあとを、騒いでいた若い衆たちが追う。
すると、そこには国定龍次だけが、長脇差（ながどす）を抱き、ひざをかかえて、ぽつんとひとり坐っていた。
「おい、娘はどこにいった？」
「し、知りませんねえ」
龍次はそらうそぶいた。
「知らねえ？」
仙之助は、じいっとにらみつけて、
「てめえ、お雪を逃がしたな？」
と、さけんだ。
「お、お雪さんって、だ、だれですかい」
またそらとぼけたが、とぼけ切るようなお芝居のできる若者ではない。それが相手から見ると、いっそうふてぶてしく見える。
祐天はふりむいて、

「おい、犬神先生を呼んでこい」
と、ささやいた。
お雪がいない、ときいて、とっさに祐天がおりんのことを思い浮かべたのは、あの女をここに泊めて以来、見世の中をあちこちはね歩いて、何かのはずみにお雪のいる部屋をのぞいていたこともある、と、やりてばばあからきかされていたからだ。だいいち、最初の夜、お雪のいる部屋を教えたのは自分だ。
こいつら、はじめから、お雪を連れ出すためにここにはいりこんだのじゃあねえか？
そういえばこの国定龍次という若僧が、自分に「お前は猿屋楼の用心棒か」などぬかしたときから、こいつ黒駒村からきたんじゃあねえか、と疑ったことがある。が、勝蔵からの回し者にしてはあんまり大胆で、かつ八方破れにも見えるので、もう少しようすを見ようと放っておいてるうち、思わず知らず十日近くこの猿屋楼に泊めてしまった。
というのも、突拍子もなくあらわれたあのおりんという娘が、おつむはともかくあんまり上玉で、あとで検分した亭主の猿屋の勘助もぞっこん気にいったようで、そいつを女郎にするために説得するというこいつの口ぐるまに、ついつい乗ってしまったからだが。——
——事実その通りであった。
けさ未明、おりんがお雪の部屋にいって、「御放免になったお父さまが、何よりあなたにお会いになりたがっていらっしゃいます」と告げ、一方、覚悟しているとはいうものの、きょうからいよいよ花魁（おいらん）になることにおびえていたお雪は、とうとう説得に応じて、暗いうちにおり

んの手引きで逃げ出したのであった。

龍次の当面の役目は「ある時」まで、できるだけ猿屋楼の追手をふせいでやることだ。

しかし、糾問にきたのは三井一家の祐天仙之助であった。

「野郎、あかん坊みてえなつらしやがって、よくも、よくも――」

と、祐天は歯をかみ鳴らした。

「てめえ、やっぱり黒駒のさしずできたやつか。もしそうなら、黒駒一家もただじゃあおかねえが、それより前にてめえを……」

と、いったとき、背後でひしめいている若い衆や朝帰りしかけていた旅にんたちをかきわけて、猿屋勘助が姿をあらわした。

「やっ……これがここの御亭主か、と、十日近く居候させてもらって、はじめてごあいさつするたァ申しわけねえ」

と、龍次はさけんだ。

「なるほどヘンな頭巾をかぶっていなさる。……いや、はじめてじゃあねえ、い、いつか真夜中にお会いしたことがござんすねえ」

勘助が祐天から報告をきいているところへ、

「なんだ、なんだ、祐天の」

と、またひとり、浪人風の男があらわれた。

さっき呼ばれた三井一家の用心棒、犬神軍次郎であった。この柳町と山田町はほんの一足だ

が、急いできたと見えて、大兵の身体にはあはあと息を切らしている。

仙之助が、亭主への報告につづけて話した。みなまできかず、

「黒駒からの回し者かどうか――あの面がまえじゃ、たやすく白状はすめえ、事は急ぐ。よし、すこし痛い目にあわせてやろう」

と、いうや、ふとい朱鞘から大刀をひっこぬいて、

「おい、出てこい」

と、あごでさしまねいた。

龍次はぱっと身を起こした。

「なに、おいらを斬る気か」

「怖がるな、殺しはせん」

「や、野郎！」

これも一刀ひきぬいて、躍り出した龍次から、そこにいたむれは二つに裂けて、どどっととびのいた。

そこは、一方は石灯籠などおいた中庭に面し、安っぽいが朱塗りのらんかんをめぐらした廊下であった。反対側の障子があっちこっちひらいて、しどけない長じゅばん姿で女郎たちがおびえた顔をつき出している。

刀を向かい合わせて――一息、二息。

「おや、お前、ちょっとした腕じゃのう」
と、犬神軍次郎がいった。
「やくざ剣法とは思えん。だれにならった？」
龍次は声も出ない。
彼はこの甲州の貸元の用心棒に、ちょうどヒゲ万先生と相対したときと同じような、怖ろしい緊縛感をおぼえたのだ。
それも当然、この犬神軍次郎は元館林藩の剣術師範役までやった人間なのであった。が、酒癖、女癖が悪く、妾が姦通したといって、その女はおろか、生まれた子供まで自分の子ではないといって投げ殺し、藩の牢にいれられたが、破牢して放浪し、ついに甲州三井一家の用心棒になったという人物だ。
身体も大きいが、大力無双、長年にわたって三井の卯吉と抗争した黒駒の勝蔵の親分武居の吃安（どもやす）と格闘して、これをねじ伏せ、牢にほうりこんで牢死させ、ついにその決着をつけたのはこの犬神軍次郎であった。
その凶暴さ、大力に加えて、剣のほうも一藩の師範まで務めた男だ。——龍次が、なまじ剣法の手ほどきを受けただけに、全身の毛穴はおろか、長脇差をにぎった両手までしめつけられたようになったのもむりはない。
「それ——よいか、右手首を打ち落とすぞ！」
わめいて、犬神の刀身がぴいっと動きかけた刹那（せつな）、

「薄雪太夫——」
うしろから、大きな声がかかった。

十八

「なに、薄雪太夫だと？」
これには猿屋の勘助をはじめ、一同はっとしてふりかえる。
「薄雪太夫はどこにおる？」
こっちのいいたいことを、とぼけた胴間声をはりあげながら、入り口の方角から大股に歩いてきたのはあの赤城神社の禰宜（ねぎ）厚井宝塔であった。
「や、御亭主——いまあそこで、御亭主はこっちだときいて推参いたしもしたが——何でごわすと？　薄雪太夫の姿がけさから見えんと？　そりゃ一大事じゃごわせんか？」
「何のこったい」
祐天が舌打ちして、
「一大事とはこっちのことだが、おめえさんなんかの知ったことじゃあねえ」
祐天も、この神官のことは知っているのだ。
「知ったことじゃなか、じゃなか。おいは花魁（おいらん）姿の薄雪太夫が見たか。きょうそれを見にくると約束してある」
と、宝塔はいった。

「そのために五十両もするちりめんの夜具一式を贈った。パンヤがはいって、一枚でも二尺の厚さがあるっちゅうやつを、三枚」

「なんだあんなもの、そんなことをいうなら、つっかえしてやらあ」

「そげなわけにゃゆかん。ありゃおいの祝儀じゃなか。上州の大親分、大前田の栄五郎親分からのハナムケじゃ！」

「なにい？」

うめいたのは祐天だけではない。――

　そこにいた、油さし、寝ずの番などの女郎屋者の中には、むろんそれまで二度訪れたこの上州の神官をかいま見た者は何人かいたが、まるで別人のような迫力と執拗さに眼を見張った。顔は見えないけれど、おそらく猿屋の勘助も同様だったのではあるまいか。

　龍次と相対していた犬神軍次郎も、ぐるっと首をねじむけたが、龍次はそのすきをつかんで斬りかかることを忘れている。彼もびっくり仰天したのだ。

　厚井宝塔はむろんヒゲ万先生である。龍次が待っていた「ある時」とは、ヒゲ万先生のきょうの到来であった。

　――そもそも黒駒の勝蔵が、二人に託した軍略とはこうだ。

　三井の卯吉が旅にんを猿屋楼に招待するという妙な習慣を持っているのにつけこみ、龍次が猿屋楼にはいりこみ、お雪の消息をうかがう。その結果お雪がまだ女郎にされていないなら、ヒゲ万先生がお雪の知人に化けて身請けを申しこみ、次にこれをあきらめたかに見せて、祝儀

の夜具を贈る。そして一夜、龍次がお雪を誘い出し、そのあとヒゲ万先生がのりこんで、お雪の消失をタネに因縁を吹っかける。目的は当面お雪の追及をあきらめさせることだ。

　この作戦をさずけられて、ヒゲ万先生が「さて勝蔵どんの軍略通りうまくゆくかのう。おいは心ぼそか」と首をひねり、龍次も、「そういわれると、おいらの役目も自信がねえが……」と弱音をもらしたのは前にのべた通りだが、両人ののんきと無鉄砲、それに何より一宿一飯の恩義でこの仕事をひき受けた。

　これに、はからずもおりんという飛び入りが加わったが、そのおりんが望外にうまく働いてくれ、ヒゲ万先生もお雪への祝儀に大前田の栄五郎の名をからませて、その圧力におまけをつけた。

　山王神社神主の放免費用三百両と、祝儀のふとん代五十両は、ぜげんからもらった三百五十両をちゃっかりあてた。

　さて、そのだんどりの最後の仕上げとなるヒゲ万先生の威嚇は予定通りだが――いや、予定以上だ。剣をとったときの怖さはべつとして、それ以外のときのヒゲ万先生の凄味をはじめて見て、龍次はびっくり仰天した。

　厚井宝塔は、ノシリと猿屋の勘助の前に出てきて、

「しかも……あの積夜具は大前田の栄五郎親分からのお祝いだと、はれがましゅう書いた布を貼りつけたことは、御当家も御存知でごわしょう。それなのに、めあての太夫が、初見世の前夜にどろんをきめこむとはどげなわけじゃ。施主大前田の栄五郎に恥をかかせるつもりと見た

はひがめか。いやさ、そのあっせんをした厚井宝塔の面目玉はいずこにある？」
いっていることの内容は、筋が通っているようで、通っていないような恫喝だが、その顔つき、口ぶりに地を這う蛇のような凄味がある。
相手がふつうの人間なら、理非を問う前にふるえあがったろう。ユスリ、タカリに馴れた遊女屋なら、一応下手に出て、相手のほんとに要求するものは何だとききただす手に出たろう。そう出たら、結局、薄雪太夫というものはこの世に存在しなかった、という話にして、向こうをあきらめさせるのだ。
ところが。――
このときは、相手の中に、祐天仙之助がいた。犬神軍次郎がいた。
「てめえ……ただの社家じゃあねえな？」
と、祐天がいった。宝塔はひげの下でニタリとした。
「されば……社家は社家でも塩ジャケかも知れもさん」
「はじめからユスリをたくらみやがったな」
祐天はいって、はっとしたように、
「そうだ、その野郎とグルだ！」
と、龍次を指さした。
「てめえら、黒駒一家の回し者にちげえねえ！」
「こいつか！」

犬神は吼えた。
その大刀が、龍次めがけて走ると見えて、反転して厚井宝塔のほうへ一閃した。
かわしもぬきもならず、宝塔は左手で鞘のまま腰からぬきあげている。神主にしては面妖だ、と見ていた大刀であった。
凄まじい音とともに青い火花が散った。犬神の刀を、つか向きに鍔で受けたのだ。
そのまま宝塔は犬神の手許にはいって、その右腕をひっつかみ、かいこんだ。と見るや、ぶきみなひびきが鳴って、刀は落ち、苦鳴とともにその腕はダラリとたれた。骨を折られたのだ。
そのまま、つきとばされて、犬神軍次郎はあおのけさまに、朱塗りのらんかん越しに庭へ落ちていった。
剣と大刀、この甲府で、犬神どころか鬼神と怖れられていた男を、それこそまるで犬か猫みたいに片づけてしまったのに、
「……しまったわい」
と、なぜか、厚井宝塔は舌打ちした。
ヒゲ万先生としては、こんなつもりじゃなかったのだ。
実は、犬神軍次郎の一刀をふせぐのが精一杯で、あとは意図の外の反射行為であったからだが。――
そうはいったものの、もはや騎虎の勢いで、ズカズカと猿屋の勘助のほうへ歩みよる。
「前から気になっておった。おはん、どげな顔をしちょるんじゃ？」

ヒゲ万先生は、片腕をのばして、相手の頭巾をはねのけ、ついで、紗の眼帯をむしりとった。
「あーっ」
そこにいた旅にんたちはもとより、女郎屋者たちの中から、どよめきがあがった。
彼らのみならず、国定龍次も、ヒゲ万先生もロアングリとあけている。
そこにあらわれいでたのは、三井の卯吉親分の顔であった。
甲府一の大妓楼の亭主猿屋の勘助の正体は、甲州一の大親分三井の卯吉であったのだ。
数瞬ののち、このなりゆきに魂をぬかれたようになっていた龍次が、
「野郎……フガフガ声まで出しやがって」
と、うめいた。
その顔が、まっかになり、全身がふくれあがった。
「こら、殺すな！」
と、ヒゲ万先生が制した声も耳にはいらぬ風で、
「二足のわらじも気にくわねえが、そりゃまだほかに例がある。が、さ、三足のわらじはかんべんできねえ！」
ひっ裂けるように、
「ゆうどう……からくっ」
わめくと、小松五郎義兼(よしかね)が燃えかがやき、丸太ン棒のように立っていた猿屋の勘助、すなわち三井の卯吉はけさがけに斬られ、背後の障子に凄まじい血しぶきの音を散らしつつ、どうと

崩折れた。
そのあとで、その障子も倒れてきて、中の座敷のふとんの上で、坐ったまま抱き合っている客と遊女の姿が見えた。いままで、すぐ前の廊下でのやりとりに、ふるえあがっていたらしい。
「殺しちゃまずかが……しかたなか」
ヒゲ万先生はつぶやいたが、
「とにかく、ひきあげるとしよう」
と、眼でうながし、背をかえして歩き出す。
「お、お、親分を――」
やっと悲鳴をあげたのは祐天仙之助だが、これがいきなりぱっと逃げ出すと、あとの連中もみんなこけつまろびつ逃げた。
ヒゲ万先生と龍次は、無人の境をゆくように猿屋楼を出る。

十九

そして、早足だが、逃げるでもなく、甲府の町をスタスタ歩きながら、
「お、驚きやしたね、先生」
と、溜息ついて、龍次がいった。
「驚いた」
と、うなずき、ヒゲ万先生はくすっと笑って、

「先日な、山田町の三井の卯吉に会って、その足で柳町へいって猿屋の勘助に会ったことがあったが。——そのとき勘助が馬鹿にはあはあいっておったが、ありゃおいに先回りしようと、一目散に駈けていったせいに相違なか。一人二役もラクな務めじゃなかな」

「そ、その一人二役を、三井の乾分(こぶん)も猿屋楼の奉公人も、み、みんな知らなかったんでござんしょうか？」

「さっき、勘助の覆面をひっぺがしたとき、みんな驚きの声をあげたところを見ると、知らなんだらしか。——もっとも、あの祐天とか用心棒なんかは知ってたろう。それから、貸元、女郎屋双方をとりしまる町奉行所も、まるで知らなかじゃすまんこっちゃ」

ヒゲ万先生は歩きながらひざをたたいて、

「ふむ、勘助は、薄雪太夫はまずお城のえらかひとに捧げるといったが、ありゃデタラメでもなくほんとの話じゃったかも知れんぞ。ひょっとしたら町奉行所の——与力級の相手じゃったかも知れん。何しろ甲府勤番の侍どもの堕落ぶりは有名じゃからの」

龍次の顔を見て、

「さ、そうなると、このあと少し厄介なことになる。何しろその息のかかった三井の卯吉を斬っちまったんじゃからね」

「そりゃしかたがねえ。十手捕縄(とりなわ)をあずかる一方で、女郎屋もやってるなんてえ野郎は、ば、ば、ばくち打ちの風上にもおけねえ」

龍次は、まだ憤慨の鼻嵐を吹いた。

「あの野郎、旅にんに女郎の大盤ぶるまいなどしやがって、な、なんてえこった、その女郎はみんな自分の商売道具じゃあねえか！」

「そいつを知られちゃ、甲州一の親分の評判なんぞ消しとぶから、じゃから隠さぬわけにゃゆかなかったんじゃろ」

「な、なにが大前田栄五郎以上だい。栄五郎親分の名を出すだけでも、へそどころか尻の穴が茶を沸かさあ」

「そもそもいつごろから、そげな役を務めたものか。おう、いつぞや勝蔵親分が、猿屋が二十年ほど前、強盗に襲われて一家みな殺しになり、勘助だけが生き残ったが、顔に怖ろしい傷を受けたのであげな覆面をしとるっちゅう話もあるといったが、ひょっとするとその強盗が三井の卯吉じゃったかも知れんぞ。そのとき勘助は殺されていて、以来卯吉が勘助にもなり代わったんじゃ。おそらくそうにちがいなか。——」

「やっぱり、あの三足野郎をたたッ斬ったのァ正当だった！　そ、そうは思わねえかね。先生——」

「そうかも知れんな」

「先生だって、あの用心棒の片腕をへシ折ったじゃあねえか。あ、あれが黒駒一家の二人を一太刀ずつで仕止めた犬神軍次郎ってえやつだね。おいら、あの野郎とすんでのことでやりかけたが、あ、あいつにゃァかなわねえことがすぐにわかった。そ、そいつの腕を、まるで木切れみてえに、へ、へ、へシ折っちまうんだから、先生って化物だねえ」

「いや、ありゃもののハズミでな。しかしあの男、あれで当分刀は持てまい」
「当分どころか、一生持てねえや。それに、あのオドシをかけるときの先生の顔つきの凄さ――まったくの悪党づらでよ――先生にゃ、もひとりべつの、そ、そ、草堂万千代ってえ顔があるんじゃあねえか」
ヒゲ万先生は、ちらっと龍次を眺めて、
「もひとり、べつの草堂万千代がおる、か。なるほど、おるかも知れんぞ、あ、は、は、は」
と、のどをあげて笑った。
「それにしても先生、厚井宝塔とは考えたねえ。おいら、羽織はかまで熱いほうとうがのりこんできたときいて、思わず笑っちゃったよ」
甲府の町のはずれだ。ヒゲ万先生はうしろをふり向いて、
「追ってくる者はなかかな」
「え？　ま、親分を殺され、用心棒の腕をヘシ折られちまっちゃあ、あとはメチャクチャだい。追っかけるどころの騒ぎじゃあねえでしょう」
「いや、しかし思いがけなく荒っぽい始末になった。勝蔵親分がどげんいうか――」
猿屋の勘助と談判の結果、どうなるかわからないところがあり、たとえお雪を何とか連れ出しても、ゆくさきは黒駒村にちがいないと、すぐ追っかけられるおそれは充分あったから、一応お雪は、勝蔵の指定した石和の農家の納屋にかくしてあるはずであった。

そこへゆくと、お雪はいた。もとよりおりんもいた。
追手がこない、と見て、二人を連れて、あらためて黒駒村に帰る。
――その途中で、最大の殊勲者おりんの姿が、ふっと消えてしまった。
勝蔵たちはただならぬ顔色で待っていたが、ぶじに帰ってきたお雪を見て、小躍りせんばかりによろこんだ。
「いや、これァお前さんたちに頼んだ甲斐があった。ありがとうよ、ありがとうよ」
と、ペコペコと頭を下げて、
「それで猿屋楼をおどして……向こうは黙っちまったかね」
「黙っちまったでごわす。猿屋の勘助をホトケにしちまったんで」
ヒゲ万先生がそのいきさつを述べると、勝蔵たちはむろん驚倒した。
なかんずく、猿屋の勘助が三井の卯吉と同一人だったという件には気絶しそうになった。
が、ややあって勝蔵は長嘆していった。
「そ、それじゃあこっちは、甲州からわらじをはかなきゃあならねえね」
「やっぱり、そうなりもすか。申しわけごわせん」
勝蔵はしかし、べつに狼狽のていは見せなかった。
「実はね。こっちにもちょっとした大ごとが持ちあがった」
龍次が眼をパチクリさせて、
「何が？」

「駿河の清水の次郎長から、ケンカ状をもらった！」

二十

「なに、清水の次郎長からのケンカ状？」
「うん、きのうの夕方のことよ、清水一家の小政、大瀬の半五郎、増川の仙右衛門という三人がきやがってよ、こいつをおいてゆきやがった」
と、黒駒の勝蔵は、ふところから白い封書をとり出した。
「左封じのケンカ状だ！」
「な、何がかいてあるんで？」
「去る七日の岩淵、陀経寺の賭場荒らしは黒駒一家だと見きわめをつけた。黒駒一家とは長年いろいろイザコザをつづけてきたが、もうかんべんならねえ。ここらで総決着をつけよう。ついてはきたる十一月二十二日八ツ半（午後三時ごろ）、駿河と甲斐の国ざかい、籠坂(かごさか)峠を越えた富士の裾野まで出張ってこい。こっちは清水三十六人衆が相手をする。そっちも同じ人数そろえてこい、と――」
「へへえ！」
龍次はしばし絶句していたが、やがてひざをたたいて、
「そりゃ、むこうとしちゃむりもないやね。こっちがあれだけのことをやったんだから――ええと、十一月二十二日ってえと？」

「あしただ、きょうにも立たなきゃならねえ。――このケンカ状に応ずるつもりなら」
と、勝蔵はいった。
「応ずるつもりったって、お、応じなきゃしようがねえでしょう」
「だから、そのつもりだっていってるじゃあねえか」
「えらい！　さ、さすがは黒駒の勝蔵親分だ！」
「おだてるな。そうはいっても――」
勝蔵は口をゆがめて、
「こっちはとうてい三十六人衆なんてそろえられねえ。いるのァここにいる三人だけよ」
と、そばにつくねんと立っている八代(やつしろ)の玉五郎以下三人の乾分(こぶん)をあごでさした。
龍次はちょっとひるんだ顔をしたが、
「なに、おいらがいまさ」
と、肩をそびやかした。
「それにこのヒゲ万先生がついてらあ。この先生がいりゃ、一人で、し、清水三十六人衆なんて屁のカッパだ」
「おいはそれほど強かなか」
と、ヒゲ万先生はひげをなでた。
「こないだ、ちょっと相手になったが、あの大政っちゅう男の槍はなかなかのものでごわすぞ」

「しかし、み、三井の卯吉の用心棒、犬神軍次郎を子供あつかいにして、その腕をヘシ折ったんだからな」
「いや、えれえもんだ。あの犬神は鬼神ともいわれてた男なんだから——なるほど、最初に逢ったとき、自分で天下無敵といいなすったが、ほんとうだね」
勝蔵は、ヒゲ万先生の背中をどやして、
「どうか、よろしくお頼ン申しやす」
と、頭を下げた。
「何にしても、甲府からの追手にスカをくわせるためにも、すぐに出立しなけりゃならねえが」
勝蔵はふりむいて、
「さて、お前さまだが」
と、お雪を見やり、
「お前さまもいっしょにゆきやしょう」
「えっ？」
お雪は立ちすくんだ。
「私が？　どこへ？」
「お嬢さんを、は、果たし合いの場へ連れてくのかね？」
と、龍次も狐につままれたような顔をした。

「いや、連れてってどうしようという算段はおれにもいまつかねえが、甲府からの追手のことを考えると、ここにおいとくわけにゃゆかねえ」
「私——お父さまにお会いしなけりゃ——」
「そりゃ、会っておいでなせえ。しかし、そのあとお前さまはおれたちといっしょにゆくんだ」
「甲府からの追手はわかりもしたが、神主さまのほうは大丈夫かな」
と、ヒゲ万先生が口を出した。
「ま、そのほうは大丈夫だと思う」
「私——甲府に帰って、もういちどお女郎になります。そのほうが——」
お雪は身もだえした。
「勝蔵親分といっしょにゆくよりゃええか？」
と、ヒゲ万先生が笑った。
「なんだって？　もいちど女郎になる？　これほどまでにして助け出したみんなの苦労を知りなさらねえのか。いやさ、もいちど猿屋楼に帰って、ぶじに女郎が勤められると考えていなさるのかね」
勝蔵はいらだった顔で、八代の玉五郎を見、
「おい、お嬢さんを神主さまに会わせ、しばらくお別れのあいさつをさせてきな。そしてすぐ連れてくるんだ。お前ら、かごと、それをかつぐ村の男二人ほど探してこい」

と、他の二人の乾分に命じた。
「とにかく、腹がへった。何かねえか？」
龍次がきくと、勝蔵はうしろのいろりをふりかえって、
「ほうとうが煮えてら、あれを食ってくんな」
「わっ、また熱いほうとうか！」
と、厚井宝塔先生が悲鳴をあげた。

二十一

黒駒一家の四人、龍次、ヒゲ万先生、それにお雪をかごにのせた一行が、黒駒村を出立したのは、それから一刻ばかりのちであった。
お雪はなかば喪神したように見えた。この娘をばくち打ち同士の決闘の場へ連れていって、いったいどうしようというのか、龍次たちは首をひねらざるを得ないが、甲府からの追手云々といわれては口の出しようがない。
十日ばかり前に北へ歩いた道を、ふたたび南へいそぐことになる。今夜の泊まりはとりあえず富士吉田だと勝蔵がいう。
御坂峠（みさか）を越えると富士がまた大きく浮かびあがり、いただきを覆う白雪はもう夕映えに染まっていた。
若い龍次の足が、いちばん早い。息せき切って、それを追うヒゲ万先生が、太古の蒼さをひ

ろげている河口湖畔でやっとつかまえて、しばし声もなくその湖と、それに影をおとす富士の絶景に眼を吸われていると、
「おおいっ、てえへんだっ」
と、背後から呼ばわるただならぬ声がした。八代（やつしろ）の玉五郎であった。
「ど、どうしたんだあい」
「お雪さんが逃げた！　親分が追っかけてった！　ちょっと、そこで待ってて下せえよっ」
そして玉五郎は背を見せて、もときた道を走っていった。
龍次とヒゲ万先生も、めんくらってそちらへ急ぎ足で戻ってみた。
カラかごを道において、二人の人足がボンヤリ息杖をついている。いま異変を知らせた玉五郎の姿は見えない。
ここで人足から、さっきお雪が、ちょっとかごを下ろしてといい、かごから出て草むらのむこうへ消えてゆくのを、小用のためかと見送っていたら、突然森のほうへかけ去る姿が見え、少し離れて待っていた勝蔵と二人の乾分（こぶん）――やがて、もう一人の玉五郎まで、それを追って森のほうへかけていった――という話をきいた。
「ありゃ青木ケ原といって、果てなしの森じゃて」
「いったん迷うと、もう出てこられねえ。……だいぶたつが、大丈夫じゃろか？」
と、二人の人足は不安げにいった。晩秋というより初冬ともいうべき富士山麓の森で、葉のおちた樹々が多いが、それでもなおかつ奥底の知れないぶきみさをたたえた大樹海であった。

小半刻待った。

が、だれも帰ってこない。富士を染めていた朱色が、残照といった色合いになった。

「いや、やられたかも知れもさんぞ」

と、やがてヒゲ万先生がつぶやいた。

龍次がふりむいて、

「やられたって、何をさ？」

「勝蔵親分は三十六計をきめこんだのじゃなかか？」

「えっ、に、逃げたってえことか！」

「左様。それが勝蔵親分のはじめからの予定じゃごわせんかったかな。——勝蔵親分のやりかたを見ちょると、どうもな、自分はうしろにひかえちょって、だれかほかの人間を前に出して使うのがうまか。それが、こんど清水方のケンカ状を受けて、大人数の敵にばかに威勢よくかけ向かうと見えたのは——こりゃ、はじめから逃げる気じゃごわせんかったかな」

「ば、ばかな！　と、渡世人の親分がケンカ状をもらって逃げ出すたァ……そりゃ、そんなやつもあろうが、その代わり、そいつの名は、ど、ど、泥まみれになっちまうじゃあねえか！」

「だから、恩義ある人の娘さんを追う、という口実を作った。——」

ヒゲ万先生は、考え考えいった。

「いまいろいろ思い出せば、勝蔵はあの娘さんに思いをかけておったが、娘さんのほうじゃいやがっておったようすでごわしたぞ。それで同行の途中で逃げ出すのを見越しておったか、いやいや、勝蔵のほうで、逃げ出すようにとりはからったにちがいなか」

「え、それじゃあ、ケンカから逃げ出す口実にお嬢さんを連れてきたってえのか」

「いや、口実に使うばかりじゃなか、あの娘さんを連れてかけおちするっちゅうのも、勝蔵親分の本心であったのじゃごわせんか。……何ともハヤ煮ても焼いても食えなか人物で、やくざの親分にゃもったいなか。——いっときの汚名はさておき、ありゃ必ずまた生き返ってきもすぞ」

ヒゲ万先生は、二人の人足に顔をむけて、

「おい、待ってても黒駒の親分たちは帰ってこんぞ。夜にならんうちにひきあげたほうがよか」

と、声をかけた。

まだしばらく待っていた人足が、青木ケ原の大樹海が黒ずんでくるのを見て、たぬきに化かされたような顔で北へ帰ってゆくのを見送って、

「どうも、また、こっちも一杯食わされたらしかな。わはははは！」

と、ヒゲ万先生は笑った。

呆然と、まだ森のほうを見ていた龍次が、

「すると、あのケンカ状もうそっぱちかね？」

と、つぶやくと、

「あ、いや」

ヒゲ万先生は虚をつかれたていで、
「まさか、それまでの細工はせんでごわしょう。ここまできて、果て知らずの森へ逃げこむのもラクじゃなか。清水方のケンカ状は充分あり得ることでごわす。――が」
と、うなずき、
「しかし、ケンカ状はむろん黒駒相手で、おいたちじゃごわせん。……と、なると、おいたちが駿河へゆくのはもとより、これから富士吉田へゆくのも無用でごわすが」
龍次は黙って、赤い残照がうすれてくる富士を見あげていたが、
「いや、やっぱりゆこう」
と、いった。
「清水一家とのケンカ場へでごわすか」
「うん」
龍次はうなるように、
「旅にんといったって、わらじをぬぎゃ、ケンカのときはその一家とおんなじだい。せっかく清水一家が出張ってくるのに、だれもそこへ出向かねえたァ、と、渡世人の道にはずれらあ。それによ、そもそもそのケンカ状にある岩淵の賭場荒らしをやったのァおいらだからな。まったく知らねえ顔はできねえ。先生、ば、馬鹿々々しいと思うならやめときな。おいらは一人でもゆくぜ！」
ヒゲ万先生は、まじまじと龍次を眺めていたが、

「えらい！」
と、大声をあげた。
「さすがは国定忠治の息子どんでごわすな」
首をひねって、
「それにしても、親分、あれだけ黒駒一家のために働いてやって、一文にもならんどころか、逆に一杯はめられて、大敵に立ち向かう羽目となる。――いや、馬鹿々々しかというんじゃごわせんぞ。なんとも面白か、と、おいは感心しちょるのでごわすぞ」
そして、カラカラと笑った。
「それじゃ、ゆきもそ。お供つかまつる！」
――夜ふけて、富士吉田の山宿に一泊し、明くれば十一月二十二日。
宿を出た龍次の髪をそそけ立たせているのは、凛冽（りんれつ）たる朝風だけではない。ゆく手に待ち受けているはずの次郎長と清水三十六人衆とやらへの闘志からだ。
「お、おれは真一文字に大将の次郎長だけにかかる。先生はあとを頼む」
「あとを頼むといわれても……三十六人おるのでごわすぞ」
「さ、三十六人だろうが三百六十人だろうが、先生にかかっちゃあ、こ、木ッ葉みてえなもんだろう」
「そげなわけにはゆきもさん。例の大政、あれの槍だけでもおいの手に余りもすよ」
ヒゲ万先生は苦笑して、

「龍次親分、渡世人修行の途中、ここで死にもすぞ。よろしいか？」

と、いった。龍次は肩をそびやかして、

「し、死ぬことも、渡世人修行の一つだい！」

「ほほっ」

ヒゲ万先生はちょっと眼をまろくした。

「それは、よか言葉じゃな」

「音にきこえた清水の次郎長とやり合って死ねりゃ、と、渡世人の本望だ。それによ、あの富士の下で――」

ふりあおぐ空に彫り出された富士の雪は、紫のひだひだをかげらせて、ばら色に染まっている。

「それよか――先生」

龍次はふりむいて、

「へたすると、先生も、し、死ぬぜ」

「いや、用心棒で死ぬのも面白か」

と、ヒゲ万先生は笑った。

「お、おいらはいいとして、まったく変な先生だなあ」

と、いったが、龍次の眼には讃嘆の色があった。

歩くにつれて、富士の頂上にひらいていた巨大な光の花は、しだいに裾へひろがってくる。

ひるごろ山中湖畔を通りすぎたころから、富士は南から西へ移った。この道を鎌倉往還という。

ケンカ状には果たし合いの時刻を、きょうの八ツ半と指定してあった。空のお日さまを眺めつつ、八ツごろ、籠坂峠を越えた。

駿・遠・参

一

ここから駿河だ。
道は裾野へ下り、やがて渺茫と起伏しつつひろがる大草原となる。遠く南に浮かんでいる紫色の山影は箱根の山々か。
枯れすすきの吹きなびく寒風の中で、龍次は歩きながら十文字になわだすきをかけた。
「先生、かれこれ八ツ半じゃあねえかね」
と、龍次がつぶやいたとき、
「やはり、きもしたぞ」
と、ヒゲ万先生が小手をかざした。
と、見よ――裾野の枯草の黄色い波濤の果てから、まるでキノコの大群のように、三度笠をかぶった姿があらわれた。それがほとんど一列横隊になって近づいてくる。
そして、向こうもこっちを見つけたらしく、いっせいに走り出したが、まだやっと声がとどくかとどかないかの距離で、ふいに乱れつつ停止した。

「おおいっ」
と、さけぶ声がながれてきた。
「そこにきたのァ黒駒一家かあ」
「――そうよっ」
と、龍次がどなりかえした。
「たった、二人かあ――」
「そうよっ」
「黒駒の勝蔵はそこにおるのか。――」
「いねえ、代人だ。ケンカは買ったぞっ」
向こうは、いよいよ混乱したようだ。ひとかたまりができて、何やら話し合っている風で、やがてその一団だけが早足でやってきた。
「やい、勝蔵はどうした？」
きいてきたのは、まんなかの大柄な、いかつい顔をした四十半ばの男であった。
「勝蔵は、都合があってこられねえ。代わりに、おれがきた」
「代人でデイリはできねえ。ケンカ状の相手は黒駒の勝蔵だ。勝蔵はなぜこねえ」
「なぜこねえか、おいらも知らねえ。が、あのケンカ状は、岩淵の賭場荒らしがもとだろう。あの賭場荒らしをやったのァおいらだ。おいらが相手になってもおかしかねえ。おれが相手だ！」

その前から、こちらを指さしてざわめいていたむれの中から、

「やあ、てめえは、イカサマ・サイを使ったあの野郎だな？　国定の何とかいいやがった――」

と、さけんだのは、あの賭場でつぼ振りをやっていた――桶屋の鬼吉であった。

「そうだ、国定龍次ってんだ。やい、そこの大男、て、てめえが清水の次郎長か？」

まんなかの男が、じいっとこちらをにらんだまま、うなずいて、

「国定龍次――それじゃあおめえは、忠治どんの伜（せがれ）か？」

「そ、そうよ、相手にとって不足はなかろう。次郎長、抜けっ」

さけぶと龍次は、腰の小松五郎をひきぬいて、次郎長めがけて突進した。――

「待てえっ」

富士から山彦がかえってくるほどの大声を発して、飛び出した男がある。

槍を持った大男だ。龍次に向かってではなく、いっせいに殺到しようとする味方を制したものらしく、そちらに向けて槍を横たえてそうさけんだが、すぐにこちらにその槍をまわして、

「若僧、相変わらずいい度胸だな」

と、いった。

次郎長も大きいが、この男はさらに大きい。あの陀経寺の賭場で中盆をやっていた男――いうまでもなく、清水の大政だ。

あのとき槍をヒゲ万先生に切りとばされたはずだが、むろん新しい槍を持ってきたと見える。

「賭場荒らしにイカサマ・サイを使ったのァ気にいらねえが、そいつを恥じて代人としてこのケンカ場へ出向いてきたのァあっぱれだ。ゆきがかり上、清水の大政が相手になってやる」

龍次は顔をまっかにして、

「あ、あれがイカサマ・サイたァ、おいらも知らなかったんだ」

「なんだと？」

大政はふりむいて、桶屋の鬼吉と顔見合わせて、

「そういや、てめえ、自分のサイコロで負けやがったな。どうもおかしな野郎だと思ってたんだ。……ははあ、勝蔵にだまされやがったな」

うなずいて、

「それで、どうして黒駒の代人としてこのケンカ場へきた？」

「あの賭場荒らしもこのケンカも、一宿一飯の恩義ってやつからだい。さあ、ゆくぞっ」

「待て待て」

大政はにが笑いして、

「そうときいちゃ、おめえと勝負はできねえ。それとは別に、そこのお侍、お前さんは何だね？」

と、ヒゲ万に声をかけた。

「おいは、この国定の親分の用心棒じゃ」

と、ヒゲ万は答えた。

「ははあ、こないだおれは、お前さんに槍を切り飛ばされた。お前とは、もういちどやってみてえ気はあるが……親分、どうしましょう？」
と、次郎長のほうを見た。
「そうだなあ」
次郎長は首をかしげて、
「ま、それじゃあ黒駒一家へのケンカ状はひっこめるとしよう。しかし……大政の槍をよ、苦もなく切ったという腕のお侍と、おれがいちばんやってみてえ気もする」
「えっ、親分が？」
大政は眼をまろくし、あとの連中は騒然とした。が、すぐに大政はにやっとして、
「それじゃあ、ひとつやってごらんなせえ。……おい、用心棒の先生、承知かね？」
と、いった。

二

キョトンとしていた龍次が、何かさけび出そうとするのを制して、ヒゲ万先生がいった。
「清水の次郎長親分が、ここで一代を終えられるのをお覚悟なら」
「けっ、なにをえらそうなことをいやがる」
さけんで、次郎長は長脇差(ながどす)をぬいた。
ヒゲ万も鞘(さや)をはらった。

雪をかぶった大富士を背に、二人は相対し——はじめ二間も離れていたのが、徐々に、徐々に接近した。
大デイリを予想してやってきた龍次も、清水一家も、あまり思いがけないなりゆきなので、あっけにとられていた風であったが、たちまち寒風以外の冷気が裾野の一面を凍結させるのを感じた。
二つの剣尖が相ふれた。氷のような音が相ついで発した。
次郎長の刀が、かろくゆれて、相手のきっさきをたたいている。
ヒゲ万先生の姿に、眼には何も見えなかったが——斬る！　と龍次が見た刹那(せつな)、次郎長はのけぞるように、また二間もうしろへ飛びずさって、
「——ま、参ったっ」
と、さけんだ。
「やっぱり、いけねえ、降参しやした！」
肩で息をしながら、白い歯をむき出していう。
「なんのことでごわす？」
狐につままれたような表情をして立っているヒゲ万先生に、
「いやね、おりゃいちども正規の剣術なんて習ったことァねえが、これまで何十回か、斬っつ張っつのケンカをして、まだ負けたことがねえ。なに、身体は刀の傷だらけだが、とにかくこうして生きている」

と、次郎長はいった。
「強いんじゃあねえ、かなわねえときゃ、逃げるんでさあ。その、相手が強えか強くねえか、見きわめるのはね、こう、刀の先で相手の刀の先をたたいてみて、そのあたりかげんが柔らかけりゃ逃げる。堅けりゃ、斬る！　その小手調べが、ついぞまちがったことァねえ」
龍次は、心中にうなった。
「こないだ大政から、岩淵の陀経寺で凄え腕の侍に会ったという話をきいて――あんただよ――そのひとといちばんやって、いや、これをいい機会にこの小手調べだけやってみてえと、いまふっと思い立ったんだが――おれの知るかぎり、こんな柔らけえ、こんなおっかねえ相手はねえ、ということがわかりやしたよ」
ヒゲ万先生は破顔した。
「次郎長親分は、剣の神髄に達しておられるな」
「先生、これから清水にきて、おれの師匠になっておくんなさらねえか」
「いや、おいはこの国定の親分の用心棒でごわすから、そげなわけにゃゆきもさんが」
「おう、国定の――その名をきいたときから、おれはお前さんとやる気はなかったよ。おれァ、若えころ、おめえのおやじの忠治どんとァ、二、三度会ったことがある」
と、次郎長は笑いながら近づいてきた。頬骨が張り、口大きく、岩をたたんだような――獰猛（どうもう）、と評してもいい次郎長の容貌だが、笑うとあかん坊みたいな顔になる。
ことは、いよいよ思いがけない結果になった。

あらためて龍次とヒゲ万先生が、いままでの黒駒一家での次第を説明し、次郎長や、大政、鬼吉らも釈然とし、三十六人衆のめんめんを紹介する。
そして、蒼空にそびえる富士をあおいで、
「それじゃあ、いっしょにゆこう。いっておくんなせえ」
と、次郎長がいった。
「清水港（みなと）へ――」

三

――それから三日目の午後、龍次とヒゲ万先生は、次郎長一家と東海道を西へ、三島から沼津へかけて歩いていた。
道々、次郎長は、龍次と、特にヒゲ万先生と語り合った。会って三日目になるが、話はつきない。
次郎長は何度か龍次の度胸に感心の声をもらし、またおやじの忠治の思い出を語り――龍次のほうも、あやうく大前田の栄五郎のことをしゃべるところであった。ヒゲ万先生も、自分の素性や龍次との出会いについて話した。半分はデタラメだが、例によって重々しい口調で、相手にデタラメとは思わせない。だいいち、この人物の素性については、実は龍次にもよくわからないところがある。
ところで、冬の東海道には砂塵があがっていた。

彼らと前後して、侍たちの大群が行軍していたのだ。

次郎長の話によると、これは十日ぐらい前から断続しているもので、どうやら長州征伐にゆく江戸の旗本や御家人、関東諸藩の侍たちらしい。

それが、威風堂々、軍規凜然の気に甚だ乏しい。その正反対である。

まれによろいかぶと、騎馬の将もあるが、大半は陣笠姿、中には着流しに雪駄をはいたやつもある。身支度もバラバラ、長州へゆくというのに、もうこのあたりでくたびれきった行列という印象だ。

「去年の長州征伐じゃ、とにかく長州を降参させたように見えたが、その降参のさせかたが足りなかったんじゃな」

と、ヒゲ万先生がつぶやく。

「で、二番目の出動となったものと見えるが、あのていたらくで、いくさがやれるもんかな」

「これじゃ、おはんらも幕軍の一部隊に見えるかも知れんぞ」

と、ヒゲ万先生は笑い、

次郎長以下は、全然興味のない顔をしている。

「いや、おはんらのほうが、はるかに颯爽としちょる」

こんどは龍次のほうをかえりみて、話しかけた。

「しかし、龍次親分、この地上は面白いな」

「な、何がでござんす」

「いま見る幕軍は少々だらしなかが、とにかく戦争にゆこうとしちょる。敵は長州じゃが、そのほかにおいの生国薩摩藩やらその他諸藩、京のお公卿さまに異国の軍艦までからんで、世情騒然、混沌としちょる。これは昼の世界の戦いじゃて。――ところが、一方じゃ、甲州でも見た通り、おはんたち遊侠の徒も、だましっこしたり、なぐりこみをかけたり、死に物狂いのいくさをやっちょる。これは夜の世界の争いじゃて。――慶応元年、同じ地上でな、虚々実々、似たようなことをやって、しかも両者まったく関係なかところが面白か。――」

なんだか、いつかも同じようなことをヒゲ万先生はいったようだ。龍次は面白くも何ともない。

夜の世界、夜の世界って、まるでひとをモグラかフクロウみてえにいうけれど、こっちはこう、まひるのおてんとうさまの下を、大手をふって歩いてるじゃあねえか。

昼の世界の戦いったって、あのヘナヘナ侍ども、あれでいくさをやろうってえつもりか。あの天狗党も京へゆこうとしての騒ぎだった。ずいぶん前から京あたりじゃ侍どもが斬っつ張っつの修羅場をくりひろげてるってえ話だが、それで農民が米の一升もラクになったわけじゃあねえ、いってえ侍ども、何やってんだ。

龍次にかぎらず、次郎長たちも、ヒゲ万先生の哲学的感懐には馬の耳に念仏といったていであったが――その次郎長がふいに、

「お！」

と、立ちどまって、前方を見た。

東海道にはいってから、清水一家は一団となって歩いていたわけではない。幕軍がこれもバラバラの状態で、四半刻、また半刻の間隔をおいて牛のよだれみたいにだらしなくつづいているので、その間を、幾人ずつかのかたまりで歩いていたのだが、さきにいったはずの蒲原の孫太という男が、

「てえへんだっ」

と、両手をふりながらかけてきた。

「袋井のちょん五郎が斬られたっ」

やはり、三十六人衆の一人だ。

「なに？　だれにだ？」

「お上の軍勢にでござんす！　いま、小政のあにいらが、お侍衆とにらみ合ってるところで――」

孫太は息せき切っていう。

沼津へはいろうとするところに天神さまがあって、ちょうど二十五日の縁日らしく、境内から往来へかけて屋台店が出て、ならんでいた。そこで自分たちが、婆さんの売っている甘酒をのんでいると、通りかかった行軍の侍たちが四、五人立ちより、これも甘酒をのんだが、銭もはらわないで立ち去ろうとする。

自分らがそれをとがめたところ、相手はあばれ出して、その屋台をひっくり返した。で、袋井のちょん五郎が怒ってそいつを張りたおしたら、いきなり別の一人がちょん五郎を斬ったと

いう。

「さあ、そこで小政のあにい連がそいつをつかまえたが、敵はかぎりもねえ。――親分、早くきておくんなせえ！」

「おおっ」

次郎長をはじめ、そこにいた乾分たちは――十人ほどであったが――おどりあがって、かけ出した。龍次たちもあとを追った。

四

さわぎをききつけたらしく、前方でも幕兵たちが走ってゆく。それをすりぬけ、追いぬいて、彼らはそこへかけつけた。

と、なるほど大変だ。

幕兵がなおあばれたと見えて、露店が三、四軒メチャメチャにこわされて、売り物の焼き芋、飴細工、下駄ぞうりなどが散乱した往来に、袋井のちょん五郎が血まみれになってたおれて、あきらかにもういのちはないようすだ。

そこに、小政をはじめ、七、八人の清水一家の連中が刀をぬいてひとかたまりになっていた。どうやら幕兵の一人を羽がいじめにして、とりこにしているようだ。そのまわりを、幕兵たちがとりかこんで、ひしめいているのであった。

そこへ、どうして次郎長たちがわりこむことができたのか、あとで考えてもよくわからない。

次郎長たちの姿を見ると、

「親分！」

小政が白い歯をむき出して、

「ちょん五郎を斬ったのはこいつだ。どうしましょう」

と、とりこのほうへ、あごをしゃくった。

大瀬の半五郎と増川の仙右衛門に両腕とられ、それを背にねじまげられた幕兵は、痛みのためにのけぞってもがいていた。

次郎長は向こうを見た。向こう側では、鉄砲を持った十人ほどの幕兵が、肩に銃をあててこちらを狙っている。やっとその態勢をととのえたらしいあんばいであったが、ためらっているのは、その人質のせいにちがいない。

「おう、ちょん五郎」

次郎長は片ひざついて、死んだ乾分(こぶん)をのぞきこんだが、すぐ立ちあがって、

「たたッ斬れ！」

と、どなった。怒りのために、顔が朱色に染まり、湯気をたてていた。

「よしきた、手を離せ」

と、小政がさけび、その長脇差(ながどす)がひらめくと、白日に血けむりが立って、陣羽織はくずおれた。

それはいいが、たんなる無謀。――次郎長はせっかくの人質をこっちから失ってしまったのだ。

次郎長は、二、三歩すすみ出て、胸をどんとたたいて、

「やいっ、おれをだれだと思う。渡世人だが海道一といわれる清水の次郎長だぞ。いくら公儀のお侍だって、このあたりで弱いものいじめの無法は許せねえ。いいや、このあたりだけじゃねえ、おれのあごのふりかた次第で、東海道五十三次、このままぶじにゃ通さねえぞ。それをかくごなら、さあ、撃ちやがれ！」

と、吼えた。

たちまち銃声があがるかと思ったら、あがらなかった。それどころか、一帯、しいんとした。あきらかに、圧倒されたのだ。一人の男が、ほんとうに怒って、雲霞のような敵とその銃口を前に胸をさらしてタンカをきった凄まじい気力に、だれしも心胆を奪われたのである。

顔見合わせている銃隊のうしろへ、もう一人陣羽織の侍が近づいて何かいい、それからこちらに声をかけてきた。

「わかった。こちらの者に落ち度があった。われらは公命によって西上するもの、ここでいらざる騒ぎを起こすのは本意ではない。あやまる、このまま無事に通してくれ」

そして彼は、蒼い顔をして陣笠の頭を下げた。

「公儀のお侍さまがそうおっしゃるなら、ようがす、こっちもこれ以上文句はつけねえ」

と、次郎長はうなずいた。

まもなく黒山はくずれ、幕兵はまた西へ流れはじめた。

どこへ運ぶつもりか、陣羽織を着た仏は幕兵が馬の鞍にのせていったが、あとには袋井のちょん五郎の屍骸が残された。
それを抱きあげて、
「ちょん五郎……やい、ちょん五郎！」
と、次郎長は、牛のほえるような声をあげて号泣した。
まわりをとりかこんだ乾分たちも、腕を眼にあてているが、これはちょっと親分につりこまれたようだ。
次郎長の哀傷ぶりのオーバーなのに、龍次もヒゲ万先生も少々毒気をぬかれた顔をしていた。
そこに、投頭巾をかぶった一人の小柄な老人が近づいて、次郎長にペコペコおじぎして、おくやみをいいはじめた。どうやら、さっき幕兵に狼藉された露店商人の親方らしい。
「ああ、道八爺さんか」
次郎長は顔見知りらしく、
「すまねえが、戸板を一つ用意してくれ」
と、頼んだ。
やがて、袋井のちょん五郎の屍骸を戸板にのせ、むしろで覆って、彼らはまた東海道を西へ急ぎ出した。
「いや、感心しもした」
と、ヒゲ万先生が次郎長に話しかけた。

「幕軍を相手に、あげないのち知らずのタンカを切るとは」
「お前さんたちだって、おれたち清水一家に立ち向かってきたじゃあねえか」
「あれとこれとは、規模がちがいもす。なにしろ数百、数千とも見える相手でごわすからな。——しかも、せっかくつかまえた人質を斬っての上のことじゃから」
「なに、ありゃのぼせあがったんだ」
と、次郎長は照れ笑いをした。
「可愛い乾分を殺されてよ、怒るとあとさきの見さかいのつかなくなるのがおれの悪いところだ。——よく大政に叱られるが」
「いや、それにも感心しもしたよ。家来を殺されたからとて、いのちを平気で投げ出すほど情の濃い殿さまは、侍の世界にゃなか」
龍次は黙って歩いていたが、それは感動のあまり口もきけなかったからであった。清水の次郎長が海道一の親分と呼ばれるに至ったのは——さっき、自分でもそういっていばったが——あたりまえだ、と考えた。

五

東海道江尻から南へ折れて、清水港（みなと）に帰ってきたのが翌日の午後だ。
次郎長の家は、仲町という、日蓮宗のうちわ太鼓の音が聞こえる妙慶寺の門前にあり、これもなかなか豪勢なものであった。三十間ほど歩けば蒼い海に出、眼をあければ駿河灘をへだて

て富士が浮かんで見える。

清水港は次郎長の生まれ故郷だが、実は彼がここに落ち着いたのは、六、七年前からのことで、それまでは一人で、あるいは乾分（こぶん）たちを連れて、わらじをはいているほうが多い半生をすごした。

その間、帆げたの久六、伊豆の赤鬼の金平、遠州の都田の吉兵衛、三河の雲風の亀吉、甲州の黒駒の勝蔵その他海道一円の親分たちと、なぐりこみをかけたり、かけられたり、手打ちをしたり、十手に追われたりする殺伐な暮らしをつづけ、それぞれの親分をあるいは殺し、あるいは和睦し、いまは名実ともに海道一の大親分の名を得つつあった。

この慶応元年、次郎長数えで四十六歳。

姐さんのお蝶に紹介される。これは二代目で、最初の女房はもう七年ほど前、次郎長と漂泊中の旅先で病死し、この女房は去年もらったばかりだが、旅で死んだ前の女房をふびんがり、そのお蝶という名を新しい女房にもつけた――ということを、まもなく龍次は知る。

ついで、「清水港は鬼よりこわい、大政小政の声がする」と歌われる、元尾張藩の侍で槍術の名人大政、また浜松生まれの、蒼い顔をしていつも咳をしているが、せいかん無比の小政、以下、増川の仙右衛門、桶屋の鬼吉、大瀬の半五郎、法印の大五郎、相撲常、島小僧の喜代蔵、追分の三五郎――など、一騎当千の乾分たちの一人一人を見分けられるようになる。

荒っぽいが、作法はきびしい清水一家であった。

「こりゃ、修行になるぜ」

と、龍次がいえば、

「魚もうまか。景色もよか」

と、ヒゲ万先生も、別見地からの相槌を打つ。

そして、清水一家のほうも――むろん龍次が国定忠治の息子、またヒゲ万という用心棒を従えていたとはいえ、ただ一人でこちらの三十六人衆との果たし合いに出向いてきた度胸に敬意を表していたが、

「ありゃ、石松に似てるなあ」

という声が出た。

二、三度、そんな声をきいて、

「石松って、だれですかい？」

と、龍次がきくと、

「いや、以前、おれたちの兄弟分に森の石松ってえやつがいてね」

と、小政が話し出した。

――かつて清水一家に、森の石松という、左眼がつぶれているが怖ろしくケンカっぱやい名物男がいた。

さてそのころ、昔次郎長がいろいろ面倒を見てやった帆げたの久六という貸元が、その後次郎長が十手に追われて旅先で窮迫しているとき恩知らずの仕打ちに出たので、そのために先代の女房お蝶も死ぬ羽目になった。これに怒った次郎長は、やがてなぐりこみをかけて久六をた

たッ斬った。

そのあと次郎長が、かねて信心している讃岐の金毘羅さまへ、お蝶の菩提を弔うために、久六を斬った刀を奉納すべく、石松を代参にやった。

その帰り、石松は近江のある貸元のところにわらじをぬいだとき、お蝶の香典として二十五両をあずかって、さらに三河の横須賀の貸元、都田の吉兵衛の家に立ち寄った。

このとき、持っていた二十五両の金に目をつけられてばくちにひきずりこまれ、いんねんを吹っかけられてケンカとなり、あとで吉兵衛とその弟の常吉らに闇討ちされた。

そのときは深傷を受けたものの、いったん石松はのがれたのだが、知り合いのばくち打ちの家にころがりこんで手当てを受けると、よせばいいのに、怖ろしくまけぬ気性で、わざわざひき返していって、街道筋のエンマ堂の前で返り討ちにあってしまった。

このことを知った次郎長は、都田の吉兵衛と弟常吉をつけ狙い、やがて吉兵衛らを打ち果たして石松のかたきをとった。——

「石松が殺されたのが、たしか江戸で御大老が殺された年——もう、五、六年も前の話だがね」

「へへえ、そ、そのひとに、おいらが似てるんですか」

と、龍次はいった。

「ですが、いま、その石松ってえひとは、か、片目がつぶれてたとききましたが、お、おいら片目じゃありませんぜ」

「いや、片目どころか顔だって、おめえさんのほうがうんと可愛らしいけどよ」

と、桶屋の鬼吉がいった。可愛らしい、といわれて、まるい龍次の顔がいよいよふくれあがった。

「おめえさん、ズングリムックリした身体つきがよく似てる上——黒駒の勝蔵にイカサマ・サイをつかまされて岩淵の賭場荒らしにやってきたろ、その智恵の少し足りねえところがよ」

「智恵の足りねえところ——ド、ド、ド」

「それからまた、その勝蔵の代人として、富士のケンカ場へ出てきたろ、そのケンカっぱやいところがよ」

「それに、そのド、ド、ドとやるところも石松そっくりさ」

と、法印の大五郎が笑った。元法印——山伏だったそうで、いまも頭はイガグリの大五郎だ。

六

月を越えて、師走の半ばであった。次郎長が、袋井のちょん五郎の骨を、生まれ在所の袋井へ持っていって埋めてやりてえ、といい出した。

そのついでに、秋葉山の祭りのタカマチへ顔を出したいという。——遠州秋葉山の祭りは十二月十五日、十六日で、タカマチとは高市と書き、神社や寺の祭りや縁日に出る香具師の店や、ばくち打ちの賭場のことだ。

そして、龍次やヒゲ万先生にもいって見ないか、と、すすめる。

秋葉山のタカマチは有名で、むろん龍次はよろこんでお供をするといった。

で、次郎長が、大政、小政をはじめ五、六人の乾分と、龍次たちをつれて清水を出たのが、十二月十三日のこと。

袋井へ寄って、ちょん五郎の生まれた農家の墓へその骨を埋め、親が眼をまるくするほどのくやみ料を与え、ついでに北方の森村にまわって、そこにある石松の生家に立ち寄る。墓にいってお線香をささげ、ここでも老いた百姓の両親にも少なからぬ回向代をわたして去る。

「次郎長どんが、東海一の大親分になったわけがわかりもしたよ」

と、ヒゲ万先生が龍次にささやいた。

「あれじゃ乾分が、死んでも次郎長親分のためにつくすのはあたりまえじゃて」

そこから北方の秋葉山へは、六里十五丁の道だ。

道はしだいに山にかかる。

清水を出てから、在所の貸元のところに二泊したので、彼らが秋葉山のふもとにたどりついたのは、十二月十五日の昼過ぎであった。

そこにつながるもう一つの道——浜松のほうから上ってくる道は、人の行列でいっぱいであった。秋葉山のお祭りとタカマチは、遠州はおろか東海道でも名高いものだからだ。

「秋葉大権現」と染めた無数の幟がはためいている。

秋葉山は火伏せの神を祭り、きょう十五日には火渡りの行事が行われ、あした十六日には弓の舞い、剣の舞い、火の舞いの神事芸能がもよおされる。

祭り見物もさることながら、その見物人をあてにして、路傍や境内のはずれに、いわゆる香具師たちの店が盛大にならび、それがまた見物人を吸いよせる。

「さあてお立ち合い、御用とお急ぎのないかたは……」

「まず第一に用いまするはゴマ、ゴマは精根気根をまし、髪の毛のツヤを出し、シラガをふせぐ……」

「いたずらものはいないかな、天井と縁の下、いたずらものはいないかな、石見銀山ねずみとり……」

からあんと晴れた冬の蒼空へ、無数の物売りの声が、もつれあい、たちのぼり、はねかえる。

一ノ鳥居から二ノ鳥居へ。——

その両側の空地という空地に、ガマの油、七味トウガラシ、石見銀山ねずみとり、飴売り、ういろう売り、孫太郎虫売り、毒消し売り、瀬戸物のたたき売りなどが、限りもなく、あるいは台をならべ、あるいはむしろをひろげている。

ちょっとした広場があると、そこには獅子舞い、だいかぐら、あやつり人形、独楽まわし、居合いぬき、砂絵、易者などの大道芸人が客をあつめている。

雑踏にもまれて、次郎長たちはゆく。龍次は、面白さと好奇心に、少年みたいにほっぺたをまっかにし、眼をかがやかせて、右を見、左を見て歩いていた。

すると、二ノ鳥居のうしろあたりにいた、きものの裾を片方だけ帯にはさんだ男が、こちらを見て、

「や！」
と、ただならぬ声をあげた。片頬に、虫のようなあざがある。
「きゃつだ！」
「あの国定龍次ってえやつだな？」
と、相手の浪人風の大男も眼をひからせた。
これは甲府の親分三井の卯吉の一の乾分、祐天仙之助と、用心棒の犬神軍次郎であった。
猿屋楼で卯吉が龍次に斬られてから二十何日か——その乾分と用心棒の祐天と犬神が、こんなところに姿をあらわした。ヒゲ万先生に右腕を折られた犬神は、まだその腕を白い布で首に吊っている。
「国定龍次って、何者ですかい」
と、そばにいたもう一人の男がきいた。
投頭巾、袖なし羽織にたっつけばかま、大道芸人らしい風態で、年は三十前後、背は高いがヒョロリとやせて、蠟のような顔色をした、凄みのある容貌の男であった。
「国定忠治のせがれだってえことだが……ほら、三井の親分を手にかけたやつだ」
「あの厚井宝塔とかいうやつもおるな」
と、祐天と犬神は、うわごとのようにつぶやいた。
「次郎長もいるね」
と、投頭巾の男がいった。これも、ふいに眼が、熱病やみのようなひかりをおびてきた。

「大政小政、桶屋の鬼吉、法印の大五郎、大瀬の半五郎もいるぜ」
「あの若僧とニセ神主、きゃつらを追ってわれわれは甲府を出てきたのだ。が、こんなに早く、こんなところで見つかるとは思わなんだ」
と、犬神軍次郎は巨体を胴ぶるいさせた。
「いまは、まだこの腕が……」
首から吊った腕が、カタカタ鳴ったようだ。
「黒駒の勝蔵はどうしやがったか。……」
と、祐天がうめいた。
祐天仙之助は、三井の卯吉が殺された混乱のあと、黒駒村へ三井一家をあげておしよせたが、勝蔵たちはその前に、風をくらって姿を消したことを知り、そのゆくえを求めて「かたき討ち」の旅に出てきたのだ。
「かたきは討たなきゃならねえが、犬神先生の腕がまだきかねえ上に、むこうに清水一家がついているとありゃ、一工夫しなけりゃならねえ」
「おれも、春にならなけりゃ、どうにもならねえ」
と、投頭巾の男が苦笑を浮かべて妙なことをつぶやき、
「待て待て、ひとつ手がある。耳をかせ」
と、いった。
三人は、鳥居のかげでヒソヒソ密語し、やがて人混みの中へそそくさと姿を消していった。

——

七

次郎長たちは、そんなことにだれも気がつかない。

龍次は、大道芸の一つ、居合いぬきに興味を吸いつけられて、ふとほかのめんめんからとり残された。

緋もうせんの上で、はちまきに紅だすき、五寸はありそうな高下駄をはいた浪人風の男が、

「居合いは鞍馬八双、ぬけば玉ちる氷のやいば、とはいえど刀は五尺、刀は長し腕はみじかし、抜くのは腕ではない、腰でござる！」

と、なめらかに口上をのべている居合いぬきの前で足を釘づけされていたのだ。

居合い師の腰にさしているのは、たしかに五尺もある長刀だ。それをどうして抜くのだろう？　と、口上につられて見まもっていたのだが、ふと——その眼が、居合い師の向こうの見物人の中から、じいっとこちらを見ている男の眼に気がついて、はっとした。

祐天仙之助だ！

と、知ったとたん、祐天はぱっと逃げ出した。

「待ちゃがれ」

反射的に躍りあがり、その場をまわって追うには見物人がじゃまになると見て、彼は居合いぬきの緋もうせんの上を飛んで走った。

それが、ちょうどいばってグイとあげた居合い師の長い鞘（さや）のこじりにふれたか、ふれないか——どうとばかり居合いぬきの浪人は、高い下駄の足を宙にあげてあおむけにころがっていた。

ふりかえって、

「す、すまねえ、あとで、あやまる！」

さけんで、またかけ出そうとする龍次の前に、

「なんだなんだ」

「何しやがる」

と、三人の男が立ちふさがった。

居合いぬきといっても、結局は薬を売るのだが、その売り方の香具師（やし）たちであった。

「なんでふいにひとをつきとばしゃがるんだ」

「いや、あるやつをつかまえようとして——」

と、答えたが、いきなり相手の二人に両腕つかまれ、もう一人から二つ三つぶんなぐられて、

「やったな、香具師野郎！」

逆上して龍次は三人の男をふりはなした。

男たちははねとばされて、その一人が近くの屋台店にぶつかり、屋台は崩れて散乱した。

「おういっ、きてくれ、タカマチ荒らしだ！」

声は別のところからあがった。さけんでいるのは、いま逃げた祐天仙之助であった。

と、一息おいて、近くから遠くから、地鳴りのような喚声がわいて、みるみる香具師たちが

はせ集まってきた。
さすがの龍次も狼狽した。が、
「タカマチ荒らしだ！　やくざが香具師にケンカを売ってきたぞ！」
と、自分はやくざじゃないような顔をして、向こうでわめきたてている祐天をみると、またかっと逆上して、
「野郎、待て！」
と、思わず知らず長脇差をひっこぬいて、そのほうへかけ出そうとする。
「あっ、抜いた！」
香具師たちはいちどは飛びのいたが、
「やくざがあばれるぞ！」
「みんなこい！　みんなきてくれっ」
と、さけびたて、なお集まってくる仲間たちに力を得て——ふだんは刃物沙汰など起こさないはずの連中だが、その輪の中に、四、五本、きらっきらっと匕首のひかりがきらめいた。
龍次は立ちすくんだ。
香具師とケンカする気はないが、しかしこうなったら血の雨をふらせてもしょうがねえ、と覚悟した。
——と、そのとき、その香具師たちをかきわけてはいってきたのは、次郎長たちであった。
彼らは少し先を歩いていたのだが、この騒ぎをきき、龍次がそばにいないのに気がついて、さてはと色めいてもどってきたのだ。

やくざの助ッ人があらわれた、と、どよめきたつ香具師のむれに——しかし次郎長は、龍次に何かきく前に、いきなりそこの地面にピタリと坐って、
「こいつが何をしたか存じませんが、ここはひとつ、かんべんしておくんなせえ、香具師の衆」
と、両手をついた。
「街道筋で商売なすってる衆なら御存知でござんしょうが、おれァ清水港のばくち打ちの次郎長と申すものでござんす。御判行の裏をゆく人間で、まともに商売なすっている香具師の衆とケンカする気はござんせん。ゆるしてやっておくんなせえまし」
そして次郎長は、ひたいを地面にすりつけた。
「国定の——おめえもあやまるんだ、坐ってくれ」
龍次は眼をむいたきりだ。
反射的に頭にひらめいたのは、先日東海道沼津での騒ぎであった。あのときは幕府の兵隊が露店に乱暴し、きょうは、あれれ、おいらがそれをやったかたちになってらあ。
それがもとの争いで、あの日、数千人の侍を前にタンカを切った次郎長親分が、きょうは香具師の前で土下座をしている！
「坐らねえか！」
一喝されてあわてて龍次は、尻もちをつくように坐った。

まわりは数瞬、しいんとした。

やがて香具師たちは顔見合わせ、ガヤガヤと話し出したが、あきらかにそれまで彼らをつつんでいた凶暴の気はうすれたかに見えた。

すると、背後で、

「その若僧は次郎長一家のもんじゃあねえぞ。やいっ、次郎長、そいつが甲州で何やったか知ってるのか！」

と、祐天仙之助がさけんだ。

「三井の卯吉を殺(や)ったというんだろう」

次郎長が顔をあげて答えた。

「そ、それを知ってて、な、なぜそいつをかばいやがる」

次郎長はぬうと立ちあがった。香具師の輪の間からのぞいて、

「おう、おめえさんは三井一家の祐天仙之助だな。三井の卯吉どんは、二足のわらじのほかに女郎屋もやってたってな。甲府の猿屋楼の亭主が卯吉どんだったときいて、おりゃ呆れけえってヘドをつきたくなったよ。けっ、渡世人の面よごしだ、それじゃ、ぶった斬られたってしょうがねえ」

いままで香具師たちに土下座していたのとは、別人のような凄まじい形相だ。

「それに何だ、この国定のに、親分を殺されたかたき討ちをやるなら、なぜ堂々と立ちむかってこねえ。この騒ぎは、いきさつは知らねえがだいたい想像はつく。てめえの煽(あお)った細工だな、

どこまで卑怯なやつなんだか――おいっ」

と、ふりかえって、

「あの野郎、つかまえてこい」

と、あごをしゃくるより早く、

「よしきたっ」

さけんで、小政と桶屋の鬼吉がおどりあがって、かけ出した。

と見るや、祐天は顔色を変え、一目散に近くの人混みの中へ逃げ失せていった。

八

そこへ、三人連れの渡世人が急ぎ足でやってきて、その一人が、

「やあ、清水の親分、これはよくこそ御入来で――」

と、顔をかがやかせて声をかけた。

ふりむいて、

「おう、吉良のに――こっちは神戸(かんべ)の」

と、次郎長も笑顔になった。

この秋葉山の賭場を縄張りとする吉良の貸元仁吉と、一方は伊勢に縄張りを持つ神戸の長吉だ。もう一人は、これも顔見知りで、仁吉の乾分(こぶん)でこの秋葉山のふもとの犬居村に住むやくざ、堀ノ内の可助であった。

「ことしの祭りに、親分がきて下さるなら、なぜ前もってお知らせ下さらねえんです」
「いや、すまねえ、そのつもりじゃあなかったんだが、ちょいと袋井のほうへ用があって出かけたついでにこっちをのぞいて見る気になったのよ」
「そうですか。何にしても、こりゃ賭場が豪勢なものになった。……それより、この騒ぎは何です」
「なに、こいつがひっかけられて、香具師に袋だたきになりかけたんだが」
龍次のほうへ眼をやって、
「それというのも、あるやつの仕掛けに煽られたんだが、詳しいことはあとで話す」
と、次郎長はいい、あらためて仁吉に国定龍次を紹介した。
吉良の仁吉たちは、いま山上の秋葉神社のほうから下りてきて、ふもとの堀ノ内の可助の家に帰るところだが、どうぞそっちへいっしょにいっておくんなせえ、そこに泊まって、神社にゃあしたお詣りすればいい、と、仁吉はいった。
仁吉はむろん、今夜可助の家でひらかれるタカマチの大賭場を仕切るために、吉良から出張してきたものだ。
吉良は三河湾に面する土地で、もとはその近くの大親分寺津の間之助の乾分だったが、その後一家をかまえた。寺津の間之助が次郎長と仲がよかったので、仁吉も以前から次郎長に可愛がられている。
特にこの秋葉山のタカマチは、もと三河横須賀に住む都田の吉兵衛の縄張りだったものを、

五、六年前吉兵衛が次郎長に殺されてから、間之助と次郎長の話し合いで仁吉がもらったものなので、その次郎長がきたとあれば、床の間にもあげなければならない義理だ。
吉良の仁吉はことし二十七歳。もともと土地の草相撲をやったというだけあって、肉づきのいい大男だが、色白で、うすあばたはあるが、にが味走ったいい男だ。
これに対して、伊勢の神戸（いまの鈴鹿市）の貸元長吉は、五十過ぎの、本名は吉五郎だが顔が長いのでいつのまにか長吉と呼ばれている男だが、次郎長とは顔見知りといった程度のつき合いで、いまもどこかよそよそしい顔をしていた。
祐天を追っていった小政と鬼吉を待って、増川の仙右衛門だけがそこに残り、仁吉らと次郎長らは、参道をふもとへ下っていった。
「実は神戸のァ、この秋から吉良のあっしのところへわらじをぬいでるんで」
と、仁吉がいった。
「ほう？」
「ちょうどいいところだった。それについて次郎長親分に御相談申してえことが――」
と、仁吉がいいかけると、
「よしてくんな」
と、神戸の長吉が首をふった。
「おりゃ、おめえを頼って吉良へいったんで、ほかのお方の助ッ人はごめんこうむりてえ」
「助ッ人？　助ッ人が要るようなことでもあるのか」

と、次郎長がきいたが、
「いや、まあ」
と長吉がそっけなく横をむいたので、次郎長もしらけた顔をした。
龍次は、そんな問答に興味はない。それより彼の心を悩ませていたのは、さっきの香具師に対する次郎長のあんまりな低姿勢であった。天下の次郎長がぶざまに頭を地べたにこすりつけるとは、何てこったい。
で、話がちょっととだえたらしいので、きいてみた。
「親分、香具師って、そ、それほど怖えもんですかい？」
「ああ、あれか」
次郎長はにが笑いした。
「ここは吉良のの縄張りだからな。無用な騒ぎは起こしたくねえ」
「それだけでごわすか」
ヒゲ万先生も口を出した。
「おいもふしぎでならんかった。その、吉良の親分の縄張りじゃから、あげにペコつく必要はなかではごわせんか」
「いや、やくざの縄張りと香具師の縄張りたァちがうでござんす」
と、こんどは大政が説明した。
「香具師の場合は、縄張りとはいわねえ、庭場と申しやすが」

「同じ秋葉山で、でごわすか」
「へえ、そうなんで。――が、こういうお祭りや縁日にひらく、やくざの大ばくちや香具師の出見世のことァ、どっちもタカマチと呼んでおりやす。漢字なら高市と書くそうで――市というんだから、香具師のほうが早えかも知れません」
言葉はやくざ言葉ながら、さすがは元侍だけあって、大政が学のあるところを見せる。
「うんにゃ、それどころか、親分乾分、仁義、襲名作法、旅にん作法、破門、指ツメなど、渡世人の世界も香具師の世界もそっくり同じだが、渡世人なんてここ四、五十年のことでござんしょうが、香具師は千年の昔からあったそうで、こりゃどう考えても渡世人のほうが、古来からの香具師の掟をまねしたにちげえねえんでさ」
「ほほう、あっちにも親分乾分がごわすか」
「そりゃござんすとも。香具師はあっちこっち土地をわたり歩く。早い話がその土地土地で、むしろをひろげるにも大道芸をやるにも、その場所割りをしてやるやつがいなくっちゃおさまりがつかねえ」
「なるほど」
「が、やるのは、ばくち打ちはばくち、あっちは物か芸を売る商売で」
「で、双方の仲はよかでごわすか、悪かでごわすか」
「さ、それがとにかく同じ場所で、一方は賭場をひらき、一方は商売をやるんだから、ケンカばかりしちゃいられねえ。それに香具師の中にもばくちの好きなやつもあり、ばくち打ちの中

にもあぶく銭欲しさに向こうの用心棒なんか相勤めるやつもおりやすしね。だからまあ、表立ってはほどよくつき合ってるが、内心はおたがいに見下してるようで——あっちはこっちを、御政道にそむいた無法者の集まりだと思い、こっちはあっちを、野天商人や辻芸人の集まりだと思っている」

龍次はふと、江戸の新門辰五郎が浅草で香具師たちからショバ代をとっていることや、また同じ浅草で大前田の栄五郎が香具師にいいがかりをつけられ、それが栄五郎だと知って香具師たちがひれ伏した、という話を思い出したが、あれは新門辰五郎、大前田の栄五郎ならではのことだろう。

「ケンカすりゃ、どっちが強かでごわすか」

「そりゃ長脇差(ながどす)を持ってるから、小せえかたまり同士ならこっちが勝つ。が、大ごとになりゃ、結局は負けまさあ」

と、次郎長がいった。

「やくざの世界は、本音を吐きゃ、貸元同士はみんな敵で、日本じゅうバラバラだが、向こうは神農皇帝とやらを先祖とする同じ兄弟だとかいって、日本じゅうの香具師が一つになる。あっちだって、大道見世やら辻芸人やら見世物やらいろいろあるから、内輪じゃそれなりにモメごともあるでしょうが、外に向かっちゃ怖ろしく結束が固え。とくに、袖のすれ合うばくち打ちにゃ、ともすりゃ逆毛(さかげ)を立ててるようでござんすね」

「さっきは、それか」

「さっきのは煽ったやつもあってのことでしょうが、とにかくあの連中とケンカするのはまずいや」

次郎長はぶるぶると首をふった。

「国定の、さっきおれがあやまったのァ、お芝居じゃあなくって、本気だよ。おりゃ、ばくち打ちの、どこの貸元より香具師とケンカするほうが怖え。乾分にも、香具師に売られたケンカは買っちゃあならねえと、かたくいいわたしてある。——」

「なるほど、それならばくち打ちの貸元同士のケンカに、香具師と組みゃ、天下無敵じゃごわせんか」

「あ！」

と、大政がさけんだ。

「そりゃそうだ。昔からの習いで、双方よそよそしいつき合いがあたりめえだと思っていたが、なるほどそんなことをするやつがありゃ、こりゃちょっとかなう貸元はありませんね」

「まあ、そんなことになりっこはねえよ」

と、次郎長が苦笑した。

「渡世人と香具師が組んでも、どっちにとってもトクはねえ。それどころか、それぞれの仲間うちから、風上におけねえと総スカンをくらうにきまってらあ」

「お、おいっ、神戸の——」

と、ふいに吉良の仁吉が、神戸の長吉のほうをふりむいてさけんだ。

「穴太のは、香具師のだれかと組んでるんじゃあねえか！」
もうふもとに下って、露店もとぎれ、犬居村に近い路地であった。
「蛇を使う香具師と、よ」
「ううん、そういわれてみりゃ、そうかも知れねえ」
と、長吉はうなった。

九

「何のこったい？」
次郎長がふりむいた。龍次たちも、いま仁吉が口ばしった言葉の意味がわからない。
「そうだとすると……こりゃ、やっぱり清水の親分に相談申しあげたほうがよかかねえか？」
「うん」
と、長吉は、どこか吹っきれない表情ながら、またうなずいた。
「親分、神戸のが、この秋からおれんとこへきたわけですがね」
仁吉は話し出した。
「御承知のように、伊勢の荒神山は桑名の黒田屋勇蔵親分のとっておきの縄張りだったが、三年ほど前、勇蔵親分が死んだとき、娘さんのお勢さんの後見をしてくれる約束で、荒神山の縄張りを乾分のこの神戸のあにいにゆずった。ところが、一の乾分といわれた穴太の徳次郎がそれに承服しねえ。で、それ以来のモメごとつづきだ。神戸一家と穴太一家に分かれ、なんどか

斬った張ったの騒ぎがありやした」
「うわさはきいたぜ」
「そのうちだんだん向こうの力が強くなって、神戸のほうは押されぎみになる。あげくの果てにこの秋、穴太から、お勢さんをよこしたら荒神山はきれいにわたしてやるが、という申し込みがきやした」
「おや、穴太のに女房はねえのか」
「ありまさあ」
「だから、お妾にしようってえのか」
と、龍次が鼻息をあらくした。
「と、とんでもねえ野郎だな」
「それで神戸のほうから、ケンカ状をたたきつけた。場所は荒神山。……むこうのほうが人数が多いだろうが、もう黙っちゃあいられねえ」
「そりゃ、あたりめえだ」
「いや、娘さんを人身御供にあげるわけにゃゆかねえ。ちょうどいい具合に、腕っぷしの強え侍を三人、用心棒にやとったこともあって――ケンカ状をたたきつけたんだが」
「どうした」
と、次郎長もせきこむ。
「ところが、です。果たし合いの前の夜――いや、夜明け前に、その三人の用心棒侍が急に苦

しみ出した。みんな、腕とか頸とかが腫れあがり、痛んで熱を出して、一人は朝のうちにもがき死をした。あと二人も、これは死にゃしなかったが、とうていケンカ場へゆける状態じゃあねえ」

「毒でも盛られたのか」

「その死んだ一人が、死ぬ前にいったのにゃァ、夜寝ててふいに手頸に痛みが走ったので夢中でもがいたら、その手にふれたのはたしか蛇だった。ところが、つかんだらこんどは頸をまた噛まれたようだ、といったそうですが、あとの二人は、噛まれた痛みは同じだが、何が何だかわからねえ、という。なにしろまっくら闇の中のことでさ」

「ほう」

「事情はその通りだが、さて向こうにゃ評判の使い手角井門之助ってえ浪人の用心棒がいるってえのに、こっちは頼りにした用心棒が三人ともそのざまじゃあ、これァとうてい勝負にならねえ。……で、神戸のは、とうとうその日のケンカはあきらめて、乾分たちを解散し、自分は以前からつき合いのあったあっしのところへ逃げてきたってえわけで」

「そりゃ」

と、大政がいいかけて、黙った。黙ったが、イクジがねえな、といいかけたんだろう、と龍次は推察した。

「そんなわけを、おれんとこにはともかく、勢州や尾張、三河の渡世人仲間にいちいち話して歩くわけにもゆかず、でえいち、話したってだれも信用してくれそうにねえ、神戸のはすっか

り面目だまを失ったかたちで……このごろあんまりサクサクしてるようだから、気ばらしにもと、こんどあっしがこの秋葉山へ連れてきたって次第でさあ」

「その娘さんはどうした」

「いっしょに連れてきやした。……いま、この堀ノ内の可助の家にいます」

といって、なぜか仁吉はちょっと赤い顔をした。

「さあ、その話をきいて、はて面妖なとあっしゃあ首をひねるばかりでわけがわからなかったんだが、いまやっと、その蛇の件は、穴太徳が香具師を使ってやらせたんじゃあねえか、と思いあたりやしたが――どうでござんしょう？」

「そういや、香具師の中にゃ、蛇の芸当を見せて薬を売るのがいるな」

と、次郎長がいった。

「だとすると、しかし香具師がやくざの手先になったことになるが……」

「それに、闇の中で、めざす人間だけにかみつく毒蛇が、この世におるもんでごわしょうか」

と、ヒゲ万先生が首をひねった。

「もしそげな芸当ができるなら、蛇ならどんなすきまからでも忍びこんでこれようし、夜、それをやられると、ちょっとふせぎようがごわせんな」

「それがほんとうなら、穴太徳の野郎、渡世人の風上にもおけねえ卑怯なまねをしやがる」

と、法印の大五郎がうなった。

「こりゃ、伊勢の貸元同士のケンカだが、そうときいちゃ、渡世人としてこっちも黙っちゃあ

いられませんぜ」

「伊勢にいって、穴太徳の行状を探ってみなけりゃならねえと思いやすが、どうです、親分？」

と、大政もいった。

次郎長はしかし返事をしないで、ちらっと神戸の長吉を見ただけであった。長吉は不安そうな顔をしていた。

やがて犬居村にはいり、堀ノ内の可助の家に着く。

表のほうのざわめきは、この秋葉山のタカマチの賭場に集まってきた三河、遠州あたりの渡世人たちだろう。農家風だが、こういうときのための大きな家だ。

わざと裏手にまわり、可助は次郎長たちを、畑の中の離れに案内した。とりあえず、お茶を出す。

そして、可助ひとり母屋のほうへいったが、やがて戻ってきて仁吉にいった。

「親分、お勢さんがいませんぜ」

「はて、どうした？」

「ひとりで、秋葉山へ出かけたそうで――」

「祭りはいちおう見せたはずだが――それに、それならこっちとゆき合いそうなもんだ」

「いえ、もう一刻以上も前のことで、何か、裏山のほうを歩いてみたい、とかいってたそうで」

「ふうん、もの好きなひとだな」

仁吉はすこし気がかりな表情をした。

「母屋のほうにゃ、もうだいぶ旦那衆や親分衆がお集まりでござんすよ」

「そうか。清水の親分、いってごらんになりますかい」

次郎長はちょっと考えて、

「ま、もすこしここでお茶を頂戴していよう。朝からの山旅で少々くたびれたよ」

「おれも、あとにするよ」

と、神戸の長吉もいう。

仁吉と可助が去ったあと、次郎長は長吉に話しかけた。

「神戸の――それでおめえさんがいま吉良にわらじをぬいでることを、穴太のほうは知ってるんでござんすかい？」

「そりゃわからねえが……たぶん、知ってるでしょう」

「その娘さんを妾によこせという話はそれっきりでござんすか」

「いまのところ、それっきりでござんす」

次郎長は母屋のほうを見て、

「その、なんだ、仁吉はその娘さんに気があるんじゃねえですか。さっきから、どうもそんな気がする」

「わかりやしたか」

と、長吉は別人のようにうれしそうな——長い顔をますます長くして答えた。
「いや、来年の春ごろ祝言をあげようかという話になってるんで」
「そうか、そりゃけっこうなことだ」
と、次郎長も笑った。
「親分らしくもねえ、察しのいいことですね」
と、増川の仙右衛門が首をひねった。
「なに、さっきからその娘さんの話が出るたびに、仁吉が青くなったり赤くなったりしてるからよ」
「美人でござんすかい？」
と、大瀬の半五郎がきく。
「そりゃ、まあ……どころじゃねえ。おれがもうすこし若かったら、仁吉なんぞにわたしゃしねえんだが……」
と、長吉がいうと、
「そ、それじゃ穴太徳とおんなじだい」
と、龍次が口をとがらせ、みんな笑い出した。

十

遠州秋葉山は、のちのメートル法によれば八三五メートルで、そんなに高い山ではないが、

頂上に上るにつれて老杉おいしげって昼なお暗く、その間から、遠く南は遠州灘、西は奥三河の鳳来寺山まで見はるかせる。
参道をはずれた山道にまわると、その杉木立のせいか、祭りの笛太鼓の音が意外に遠くなり、深山の気をいよいよ深くする。
その西側の山道を、三人の男が歩いていた。
祐天仙之助と、犬神軍次郎と、そしてヒョロリと背の高い、蠟色の顔に投頭巾をかぶった香具師だ。
ときどき、キョロキョロとあとをふりかえる。——自分たちを追っかけてきた清水一家の連中を気にしているのだ。
「たしか、小政が追っかけてきたぜ」
と、祐天がいう。
「あいつ、気ちがい犬のようなやつだからかなわねえ」
「なに、おれの腕がきくなら、あれくらいのやつ、屁でもないが」
と、犬神が首に吊った右腕をふった。
「いや、あれでうまくゆくと思ったんだが……」
香具師が、顔をゆがめて苦笑した。
祐天仙之助に香具師たちを煽動させて大騒ぎを起こさせる。あの居合いぬきの連中にも、あらかじめ頼んであった。ここに集まった香具師たちみんなをかりたてれば、相手が清水一家だ

って嵐の中の木の葉同然になる——と見こして一計を案じたのだが、次郎長が土下座までして香具師たちをなだめてしまおうとは予想のほかであったのだ。

「なにしろおれが、香具師の仲間にはいったとはいうものの、まだ東海一円の香具師に知られるほどの人間じゃあねえからな。おれが先に立って命令するわけにゃゆかねえ」

と投頭巾がいい、

「なに、おれ一人だって次郎長を仕止められるんだが、ただ春にならなけりゃな」

と、また妙なことをつぶやいた。

この男は、しゃべるあいだに、チロッ、チロッと舌を出すくせがある。

ふしぎそうに祐天がきく。

「ことし、あったけえうち、いけなかったのかい？」

「蛇をそこまで使いこなせるようになったのが、やっとこの秋のことだからな。そこではじめて、神戸（かんべ）一家の用心棒たちにためしてみて、うまくゆくことがわかったのさ」

「しかし、おめえさんを敵にまわしたやつは災難だな。闇夜に蛇を使われちゃかなわねえ。次郎長もお手あげだろう」

「そのほか、いろいろとたのしみもある。美しい女を蛇責めにするなんて……ね。これはと思った女を蛇責めにする光景を想像すると、それだけでワクワクする」

「それが、神戸の長吉のところにいるお勢ってえ娘かい？」

と、祐天がうす気味悪そうにきいたとき、

「あ！」

と、前方を見て、香具師が立ちどまってさけんだ。

「お勢だ。……その娘がきた」

「えっ？」

ちょうど折れまがった道で、くぼみをへだてて向こうにつき出したところを、なるほど一人の娘が下から上ってくる。

そこは、やがて天竜川にそそぐことになる気多川という渓流を見下ろせる場所なので、娘はそのほうに顔をむけていて、こっちには気がつかないらしい。

「どうやら一人だ」

と、香具師がうめいた。

「神戸のといっしょに秋葉山にきたことは承知していたが、なにしにあんなところを一人で歩いてるんだろう？」

「それなら……」

祐天がふりむいて、

「いま、さらっちまえばいいじゃあねえか。手伝ってやるぜ」

「いや、一人のはずはねえ。あとに神戸か、吉良の連中がくっついてるにちげえねえ」

しばらく思案して、香具師はいった。

「それに、ここでさらったところで、伊勢までつれてゆくのがてえへんだ。どうせ来年の春に

や手にはいるんだ。惜しいが、きょうは見のがそう」
と、うなずき、
「それじゃ、ひき返すぜ」
山道をいまきた方へ足をひるがえした。
と、三人がしばらく歩いて、
「あ！」
と、こんどは祐天が驚きの声をあげた。
「あいつだ！」
こっちからも娘があらわれたのだ。香具師がきく。
「だれだ？」
「それ、きのう話した、甲府の猿屋楼でおれちに一杯食わせたふてえアマ——」
「ほう、あいつがそうか。なかなかべっぴんじゃあねえか」
「秋葉山にあの国定龍次ってえ若僧がきてるとすりゃ、あの娘もおるにふしぎはない。——あのうしろから、龍次も厚井宝塔もくるにきまっておるぞ」
と、犬神軍次郎はやや狼狽（ろうばい）のていだ。
彼らが、国定龍次とおりんがまったく行を一つにしていると考えていたのもむりはない。
「しかし……うしろにだれもいねえようだぜ」
一息ののち、祐天がいった。

「それに……猿屋楼じゃあ、まるきりこっちをコケにしやがって、あのアマだけは見すごしできねえ」
祐天は歯をキリキリ鳴らした。
そのとき、これも谷のほうへ顔をむけて歩いてきたその娘が、こちらを見て——はっとしたようだ。気がついたらしい。
「勝蔵のゆくえを知ってるかも知れねえ、つかまえて、吐かしてやる！」
さけぶと、祐天が走り出し、あとの二人もあとを追った。

十一

おりんは、自分めがけて土ぼこりをあげて殺到してきた男たちが、甲府の三井の卯吉の一の乾分（こぶん）祐天仙之助だということに気がついた。——
おりんは、龍次たちとつかず離れず旅をしていて、さっきも龍次たちより一足早く秋葉山神社に上った。会うつもりはないけれど、龍次たちがなかなか姿を見せないので、ひとまず自分は山を下りようと——すれちがうとまずいので、別の道をそこまで下りてきたのであった。
いちど、身をひるがえして逃げようとして、逃げられないと見るや——おりんはそのまま、スタスタとへいきで歩いた。
歩きながらふところから一枚の紙きれを出して、胸の前でひろげ、ハラリと垂らした。
「なんじゃ、あれは」

と、犬神軍次郎が眼をむき、

「おう！」

と、さけんだ。三人ともタタラをふんだ。

おりんが垂らした紙の文字が読めたのだ。

「これをもつものは
おれの娘おりん
よろしくたのむぜ
　　上州　大前田の栄五郎」

文字だけではない。そばに何やらベタリと大きな墨のかたちがひろがっている。——どうやら人間の足型のようだ。しかも、よくみると、第二指、第三指が欠けて、指は三本しかない。

「大前田の栄五郎親分の片足の指は三本しかない、ときいておる」

犬神がうめいた。これは諸国のやくざの大半が知っていることだ。

「あの娘は、それじゃ大前田の親分の娘か！」

と、祐天仙之助も眼をむいた。

大前田の栄五郎——その名は、日本じゅうの渡世人にとって、さあ、香具師（やし）の世界における

神農皇帝にもあたる威光をもつ名だ、といってよかろうか。三井の卯吉も、威名だけはそれにあやかりたいとあがきぬいていたのだ。

さしもの祐天も恐慌をきたし、犬神軍次郎もやくざの用心棒だけあって——特に同じ上州の館林から崩れてきた男だけあって、大前田の栄五郎の雷名はだれよりも知っている。

いや、例の厚井宝塔が大前田栄五郎の名を持ち出した。あのときもいちじびっくりしたけれど、結局あれはデタラメだったらしいと知って胸なで下ろしたものだが。——

あの猿屋楼の事件の背後には、大前田の栄五郎の眼がひかっていたのか——と考えると、あらためて背に冷たいものが走らざるを得ない。

「こいつァいけねえ」

あわてふためく二人に、

「な、なにをこわがる」

と、香具師が歯をむき出した。

「大前田の栄五郎がなんだ。おれは香具師だ。おれにまかせろ」

と、歩き出すと、

「ま、待ってくれ」

その腕を祐天がつかまえて、

「いま手を出すな。あとに、あれの一味がついてくるかも知れねえ。それに大前田の栄五郎はただのやくざの親分じゃあねえ、諸国に二百何十かの縄張りを持ち、どこの香具師もあれだけ

には頭があがらねえはずだ。――ここはひとまず、さわらぬ神にたたりなしだ」
惑乱した顔で、横のやや高い斜面の杉林をあおぎ、
「来い」
と、祐天は飛びはねて、そっちへ逃げのぼるのにかかった。それにつられて、犬神も香具師も、とにかく一応退避にかかる。
おりんは、このすばらしい護符をひるがえしつつ、澄ました顔で、その下の道を通りすぎていった。――
かつて九十九里浜で、飯岡一家をひれ伏させたお守りだ。ききめはあったらしい、と思ったが、この道に待つのがあの三人だけとはかぎらないし、かつ杉林の奥からなお凶念の風といったものが吹いてくるのが感じられたので、おりんは、息もつまる思いで、しばらくその魔よけの旗をかかげたまま歩いた。
――実際、杉林の奥で、
「なぜ逃げたんだ、祐天のあにい」
と、香具師が不服らしく眼をひからせ、
「あいつも蛇責めにしてやりてえ女だぜ。ふ、ふ。……そうだな、春になったら……」
と、ぶきみなつぶやきをもらしていたのだ。そして彼は、またチロッと赤い、細い舌を出した。
おりんは、崖をまわった。

と、向こうからやってくるのは、ただ一人の若い女だけであった。
それが、立ちどまって、ふしぎそうにおりんを眺め、おりんのほうも、
ああ、きれいなひと。――
と眼をとられ、数瞬のうちに、あわてていまの紙きれをしまいこもうとしたとき、その女がふいに両足踏みかえ、腰をかがめ、片手をさしのべて、口を切った。
「おひけえなすって、おひけえなすって」
おりんは、めんくらった。
凄艶きわまる相手の娘は、眼をかがやかせて、
「これは音にきこえた上州、大前田の親分の娘さんでござんすか。したがいまして手前、生国と発しまするは勢州にござんす。……勢州といっても広うござんす。勢州は桑名、黒田屋勇蔵の娘、ただいまゆえあって吉良の仁吉のもとに身をよせておりますお勢と申すふつつかものでござんす。以後お見知りおかれて、ごじっこんにお願えつかまつります」
みかけによらず度胸のいいおりんだが、これにはまったく胆をつぶして、とっさに声もない。
ピピピッと数羽の山鳥が、杉をかすめて羽ばたきすぎた。
やおら、
「まあ、はずかしい」
と、いいながらおりんは、顔をまっかにして、紙をふところにしまった。
しばらくののち、二人の娘は、親しげに語り合いながら山を下っていった。二人は意気投合

したのである。

お勢は、父黒田屋勇蔵が死んだあと、その縄張りをゆずられた神戸の長吉に身を寄せていたのだが、長吉が、荒神山の縄張りを狙うもう一人の乾分穴太の徳次郎に追われ、かねてから長吉と親しい三河の吉良の仁吉のもとにこの秋から世話になっていること、その仁吉に誘われて、この秋葉山の祭り見物にきたことを話した。

敬意にみちたお勢の眼につりこまれて——それはむろん自分より、自分が大前田の栄五郎の養女だというせいにきまっているが——おりんも、いいなずけの国定龍次という若い渡世人が修行の股旅に出て、それがほうっておくとどういう運命におちいるか心配な男なので、ひそかに自分が見張って歩いていることを話した。

が、やがてお勢が、いま泊まっている犬居村の堀ノ内の可助の家につき、その裏手のほうにまわると、

「あ、いけない」

と、おりんはそこの納屋の角から身をひいた。

離れの木戸の前で、一人の爺さんと話している清水の次郎長らといっしょの龍次、ヒゲ万先生の姿を見いだしたのである。

「その国定龍次という渡世人——あれがそれですよ」

と、おりんは小声でささやいた。

「あ、そうなんですか」

お勢は眼をまろくした。

「あたしがいま出かけてるあいだに、仁吉にいさんがつれてきたのかしら？」

吉良の仁吉も、神戸の長吉もむろんそこにいた。

「さっきお話したようなわけで、あたし、あのひとといっしょに泊まれないんです」

と、おりんは小声でいった。

「御親切はありがたく存じますけれど、きょうのところはこれでお別れいたします」

「まあ、あたし、あなたに御相談したいこともありましたのに」

お勢はため息をつき、

「あたし、お祭りが終わったら吉良に帰ります。ね、どうかいちどそっちへきて下さいね。ね、ね、おねがい——」

と、おりんの両手をとっていった。哀願にちかい調子であった。

「え、できたらね」

「いえ、できたら、なんていわないで」

「それじゃぁ、きっと。——それから、さっき申したようにあたしが大前田の栄五郎の娘であることや、あんなお守りを持ってることを——いえいえ、あたしが秋葉山にいたなんてことも、だれにもいわないで下さいね」

と、おりんのほうもおじぎして、すぐにハタハタとかけ去った。

十二

——こちらに清水の親分がござらっしゃるそうで。
と、さっき堀ノ内の可助の家を訪れたのは、香具師(やし)の老人であった。
——ちょっと大事な用を、いそぎ申しあげてえんで。
その顔色がただごとでないので、可助が離れのほうに連れてゆき、次郎長たちもふしんな表情で木戸まで出てきたのだが、一目見るなり、
「やあ、道八爺さんか」
と、声をかけた。
「こっちへ来ていなすったのか」
香具師が来た、ときいて、何となく気にかかり、ついて出た龍次もその顔を見て思い出した。
こないだ沼津で幕府の侍たちに香具師たちが乱暴されて、次郎長がそれを助けてやったとき、あとで礼にきた露店商人のかしらなのである。
この爺さんが秋葉山にあらわれてもふしぎではない。各地の祭りや縁日をわたり歩く香具師だから、
「それで、大事な用とは何だね？」
と、次郎長がたずねた。
「さっきお山で、香具師とひと騒ぎがありましたが」
道八老人はいった。

「うん、ありゃちょっとしたゆきちげえだ。こっちは香具師衆とケンカする気はねえが、香具師衆を煽(あお)ったやつがあったんだ」
「それも見ておりやす。あれは甲府の三井一家の祐天仙之助というおひとでござんすね」
それくらいのことは、香具師の古老なら知ってるだろう。
「その祐天とつれ立ってる一人の香具師がござんす」
「ほう、そうかい」
「マキスイの男で」
「マキスイ？」
これは次郎長にもわからなかったようだ。
「へえ、マキとはトグロを巻く意味で蛇のことでござんす。スイとは水、つまり薬のことで、蛇に芸当をやらかせてイカサマ薬を売る香具師で——あっしたち香具師仲間だけの言葉でござんす」
「ふうん？」
「それが……あっしが清水の親分に、是非お知らせしておきてえというのは」
道八老人は、おびえたような小声で、
「その男、赤蛙の凶兵衛と申し、ここ三、四年前から香具師の仲間にはいってきた人間でござんすが……以前は、都田の吉兵衛の弟、留吉ってえやつで——」
「なにっ？」

次郎長のみならずその乾分たち、それから吉良の仁吉まで驚きの声をあげた。
「おそらく凶兵衛なんて、うすッ気味の悪い名に改めたのも、ただのコケオドシじゃあなくって、兄の吉兵衛にちなんだものでござんしょうが……じっさい、あおい顔をして、ヒョロリと背が高く、チロッ、チロッと舌を出す、蛇みてえにきみの悪い男でござんす」
道八老は首をすくめて、
「その男が、秋葉山にあらわれたというのは……ひょっとしたら清水一家に何かアダをするんじゃあねえか、とも思いやして、おせっかいながらお知らせにきやした。ただ、このことをあいつに知られるとおっかねえ。ほんとうにおっかねえんでさ。どうか、御内聞にねがいますよ――」
「よし、わかった。よく知らせてくれた。ありがとうよ」
次郎長がうなずくと、道八老人はそそくさと立ち去った。
道八がそんなことを教えにきてくれたのは、先日の沼津の礼にちがいない。――次郎長たちはまだその赤蛙の凶兵衛という蛇使いの香具師を見かけたことはないが、何にしてもこれは驚くに足る話だ。
次郎長たちが、乾分の森の石松を闇討ちにした参州横須賀の都田の吉兵衛と、その弟常吉を殺したのは五、六年前のことだが、そういわれてみれば、吉兵衛にはもう一人、留吉という末弟がいたのである。そのころ、「都田の三兄弟」という呼び名もあった。
ただこの留吉は、やはりやくざ者ながら、病身でめったに人前に姿を見せず、また石松殺し

にも加わっていなかったので、兄たちが殺されたあと横須賀から姿を消したときいても、次郎長たちは気にもかけず、ついには忘れはてていた。――
それがいま、赤蛙の凶兵衛なんてまがまがしい名をつけて、蛇使いの香具師としてこの秋葉山にあらわれたとは？
そういえば、この秋葉山は、もともと都田一家の縄張りだったものだ。それが、吉兵衛が殺されたので、横須賀村の隣といっていい吉良の仁吉が、次郎長と、三河の大親分寺津の間之助の了解のもとに、そのあとをもらい受けることになったのである。この秋葉山は都田一家にとってそういう因縁がある。
さっき国定龍次に香具師たちをケシかけたのは祐天仙之助だが、その仙之助と凶兵衛が連れ立って歩いていたとは、あの騒ぎに凶兵衛も一枚かんでいたのか。
「その野郎が、清水一家にアダをしようと考えてもふしぎはねえな」
と、大政がつぶやくと、
「この秋葉山をとり返しにきたんじゃあねえかな？」
と、仁吉も気がかりそうにいう。
「やあ」
ふいにヒゲ万先生が、神戸(かんべ)の長吉を見ていった。
「神戸の親分、さっきおはん一家の用心棒が、毒蛇にやられたっちゅう話をきいたが、そりゃ、その蛇使いの香具師と関係あるんじゃごわせんか？」

「いや、知らねえ」
と、長吉は首をふって、
「荒神山のタカマチにも、蛇使いの香具師はくるが……赤蛙の凶兵衛なんてきいたこともねえし、いまきいたところじゃあ、ヒョロリと背の高いやつだってことだが、そんな蛇使いは見かけたことがねえね」
と、いったが、ふとおちつかない眼になって、
「ただ……荒神山のふもとに、赤蛙の池ってえ池があるが……」
「赤蛙の池？」
と、龍次が問い返した。
「そこの池に――その池だけに、イモリの腹みてえな色をした蛙がウジャウジャ棲んでるので、そんな名がついたらしいんだが」
「赤蛙の凶兵衛ってえ名は、それと関係あるのかな？」
次郎長は首をひねり、
「ともかく、そんなやつがまわりをウロウロしてるってえなら、これからさき用心しなくっちゃいけねえ」
と、いった。
そのとき、むこうの納屋をまわって、一人の娘があらわれた。
「やあ、お勢さん、お帰り。――」

と、吉良の仁吉がうれしそうにさけんだ。
清水一家の者も、龍次も、
「――ほ！」
と、いっせいに吐息の音をもらした。
それが、神戸の長吉が連れてきたという、桑名の故・黒田屋勇蔵親分の娘だとすぐに知ったが、その水ぎわ立った凄艶さに、一同思わず眼を見張ったのだ。
いましがた、ひき返しておりんを見送って、こちらを見はからってあらわれたお勢は、ここで仁吉から清水一家や龍次たちにひき合わされてあいさつしたが、さっき山でおりんに会ったこと――また彼女からきいた甲州の祐天仙之助たちとの一件は、おりんが黙っていてくれと頼んだので、このときはべつに口にしなかった。――
「あれじゃ穴太徳（あのとく）に狙われ、養い親の神戸のが、若けりゃ仁吉などにわたしゃしねえんだが、といったのもわかりますね」
と、龍次がヒゲ万先生にささやいていると、聞こえたはずはないのに、なぜかお勢が龍次を見て、にっこりしたので、龍次はドギマギして首をちぢめた。
なぜか？――龍次は知らないが、お勢のほうはおりんから龍次のことをきいているのだ。
「さて、そろそろ親分衆にあいさつにゆこうか」
と、次郎長がいった。

十三

その夜、堀ノ内の可助の家では大賭場が開帳された。胴元はむろん吉良の仁吉だが、そのさばきぶりは惚れ惚れするほど水ぎわだっていた。

龍次も仲間に加わって、珍しく、うまい具合に少々もうけさせてもらった。――ヒゲ万先生も出てきて、これはばくちはやらないが、いろりばたにひとりあぐらをかいて、チビリチビリと五合徳利をかたむけながら、たのしげに眺めていた。

翌日も賭場はひらかれたが、次郎長は加わらず、龍次とヒゲ万先生を連れて、秋葉神社の火祭りを見物した。

夕闇の中を神官が、神殿から燃えるたいまつを三方にのせて神楽殿に運ぶ。舞人がそれを受けとって舞いはじめる。やがて参詣人が殺到して、その火を奪いっこするという、神秘的で壮絶な祭りであった。

さて、祭りの終わったあくる日だ。

各地から集まってきた渡世人たちが去り、次郎長たちも旅支度して――そのあと、次郎長が、吉良の仁吉と神戸(かんべ)の長吉に、

「ところで、例の穴太徳(あのとく)の一件だがな」

と、話しかけた。

「あっちはこのまま放っておかねえだろう」

「こっちも放っておけませんや」

と、仁吉はいった。

「だいいち四月になりゃ、荒神山のタカマチがある。それを穴太徳にまかせちゃおけねえ。四月のタカマチを指をくわえて見ていちゃあ荒神山はほんとに穴太徳のものになっちまう」

「実は、荒神山をとりかえしたら、お勢さんと仁吉の祝言(しゅうげん)をあげるはずになっているんでござんす」

と、長吉もいった。

仁吉はまた赤い顔をしたが、お勢はきれいながの眼をひたと仁吉にすえている。

仁吉は、きっとした表情にもどっていい出した。

「それについて、清水の親分にお願いいたしてえことがありますんで」

「あっしはこの神戸のと兄弟分の盃を交わした仲なんで、是非とも助けてやりてえが、そうはいうものの、おれんとこは、恥ずかしながら一家を名乗ってまだ年が浅く、いまのところ穴太徳へなぐりこみをかける力はござんせん。そこで、何とかひとつ、清水の親分のお力をかりてえと――ここんところ、神戸のに相談してるんでござんすが」

と、仁吉は長吉をふりむき、

「どうも、神戸のがしぶる。――しかし、神戸の、荒神山をとり戻すにゃ、ほかに法はねえぜ。こんど、ここで次郎長親分にお会いしたのをいい機会に、おめえさんからもお願いしたらどうだい」

神戸の長吉は、しかし気の乗らない表情で、

「いや、おれとおめえは兄弟の盃を交わしたが――そしてまたおめえは、この秋葉山の縄張りを清水の親分のおゆるしをこうむって頂戴した、まあ半分清水一家みてえなもんだが――おれと清水の親分とは、失礼ながらなんのかかわりもねえ。そこまでお助けをたのんじゃあ、おれの名にかかわる。いまのところは、頼るのァおめえだけにしてえ」

と、いった。

先日、山を下りるときに交わした話のむし返しだ。

「ええ、むこうにゃ、どうやら蛇使いの香具師（やし）がくっついてるようですぜ。それを承知でござんすか」

と、大政が口を出した。

「その香具師が、都田の吉兵衛の弟だってえことがわかった。こっちの殺（や）った吉兵衛の弟なら、こっちをかたきと思ってるでしょう。そうなると、清水となんのかかわりもねえ、とはいえねえと思うんだが――万一、ケンカとなったら、清水一家が買って出てもいいぜ」

「よしてくんな」

と、神戸の長吉は首をふった。

「だいいち、穴太徳とその香具師が組んでるかどうか、まだわからねえ」

「よせよせ、大政」

と、次郎長がにが笑いしていった。

「ケンカの当人がいやがるのに、はたからおせっかいはするもんじゃあねえ。……それに、香具師を敵にまわすってのァ、どうもおれはしりごみしてえよ」

「……あの、仁吉にいさん」

と、突然、お勢が口を出した。

「それじゃあ、そこの国定ってえお方と、ごいっしょの御浪人を、当分の助（すけ）ッ人（と）に――ごめんなさい――しばらく吉良にいていただいたら、どうかしら？」

「な、なぜ？」

「そのお方たちは、清水一家の衆じゃないでしょう」

「そりゃそうだが……」

次郎長が笑った。

「なるほど、この衆はおれんとこにわらじをぬいだだけの旅にんだ。しかも、相当頼りになる旅にんだ。そりゃいいかも知れねえ」

次郎長は、むろん龍次が一宿一飯の恩義でケンカを買って富士の裾野へ出向いてきたことを思い出している。

「国定の――ゆくかね？」

「承知いたしましてござんす！」

と、龍次は大きく合点した。内心めんくらいつつ、さっきのお勢の不可解な笑顔を頭によみがえらしていた。あの女、おれが好きらしいや。

やがて、彼らは二つに分かれて、太古の静けさに戻った秋葉山をあとにした。

（上巻・了）

本作品は、講談社文庫（平成元年五月刊）を底本としました。

〔お断り〕

本作品中には、今日ではいささか不適当と思われる用語が使用されておりますが、作品が書かれた時代背景等を考慮し、概ね発表当時のままとしました。御理解頂きますようお願いいたします。(編集部)

特選時代小説

旅人(たびにん) 国定龍次(上)

著　者　山田風太郎
発行者　櫻井道弘
発行所　廣済堂出版
〒105　東京都港区芝3-4-12
電話　03(5445)1202(営業)
03(5445)1204(編集)
振替　00180-0-164137
印刷所　廣済堂印刷株式会社
〈編集担当〉伊藤秋夫

©1997　山田風太郎　Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-331-60607-4 C0193